熊本県文化財調査報告第168集

鶴羽田遺跡

（仮称）梶尾ニュータウン造成工事に伴う埋蔵文化財調査

1998

熊本県教育委員会

遺跡遠景航空写真

調査区　全体航空写真

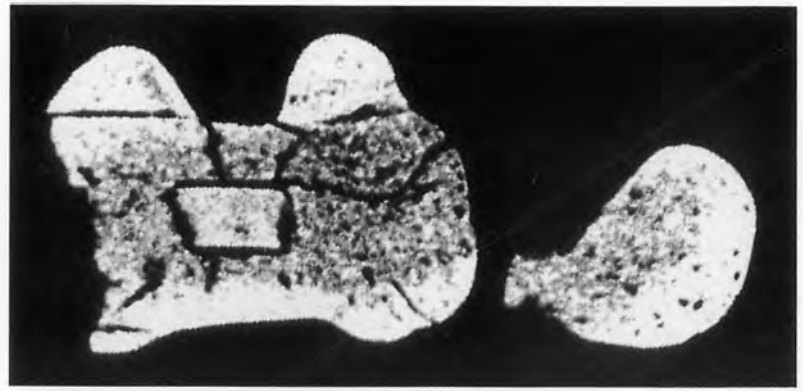
Ⅰ区　調査区　航空写真

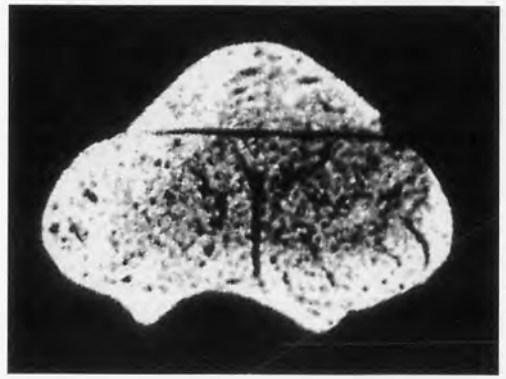
（前　面）

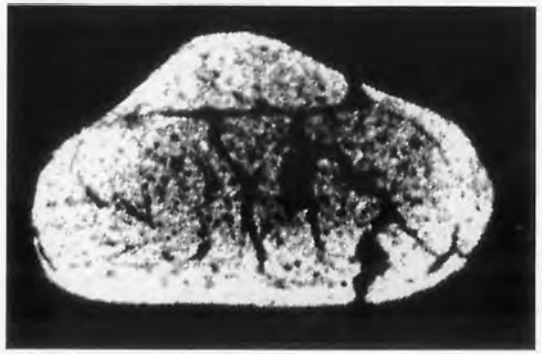
（側　面）

（背　面）

1　号　土　偶







（横　断）

（縦　断）

TOSCANERによる画像（１号土偶）

（前面）

（後面）

2　号　土　偶

石

棒

赤色顔料の付着した石器と土器

注　口　土　器

小型深鉢形土器

熊本県文化財調査報告第168集

鶴羽田遺跡

（仮称）梶尾ニュータウン造成工事に伴う埋蔵文化財調査

1998

熊本県教育委員会

序　　文

熊本県には豊かな自然や歴史的風土のなかで培われてきた多彩な地域文化が数多く残されています。埋蔵文化財もその中の一つです。大地のなかで悠久の時を経た遺構や遺物が現代の我々にその姿を現したとき、私たちは自分たちの過去の足跡を見いだします。さらに文化的な豊かさを求める私たち現代人にとって、多くの貴重な情報をもたらします。ただ、埋蔵文化財は開発に伴い発見され、調査される場合が多く、過去の文化遺産の保護と開発の関係をどのように円滑に調整していくのか、今後ますます議論が必要でしょう。

本書は熊本市梶尾町の（仮称）梶尾ニュータウン造成工事事業に先行して行った鶴羽田遺跡の発掘調査の報告です。遺跡のある地域は一般に植木台地と呼ばれる洪積世に形成された地帯ですが、ここにも太古からの人々の生活があったようです。

この鶴羽田遺跡は早くから遺跡と認識されていましたが、その詳細ははっきりとしていませんでした。今回の調査では10数軒に及ぶ住居跡が出土し、遺物の中には土偶、石棒など特殊なものも出土しました。このことによって、ここに縄文時代の後晩期の頃に暮らした人々の生活の一部を垣間見ることになりました。調査した箇所は遺跡のほんの一部にすぎませんでしたが、調査区外にも遺跡は広がっていくと予想されました。

ここは今また人々の生活の拠点となろうとしています。このことを考えるとき、何か歴史の妙味を感ぜずにはいられません。発掘調査によって遺跡はなくなりますが、多くの情報を後世に残しました。そして、この地には再び新たな歴史が刻まれようとしています。ここに住む人々にとって遺跡は過去のものとしてではなく、同じ大地に歴史を刻んでいくものとして一体感が生まれることを期待します。さらにこのことは、単にこの地域の住民にのみということではなく、広く県民にとっても重要なことだと思います。

この報告書は、この遺跡から得られた情報をいくらかでも後世に伝え、我が熊本県の歴史を学ぶ上で、また埋蔵文化財をより深く理解していただくために活用していただければ幸いです。

最後に、調査の円滑な実施に御理解と御協力をいただいた地元の方々、並びに関係機関、そして調査に対する指導、助言をいただいた諸先生方に対して厚くお礼申し上げます。

平成10年３月31日

熊本県教育長　　松 尾　隆 樹

例　言

1　本書は、1996年11月～1997年４月にかけて実施した、熊本県熊本市梶尾町に所在する鶴羽田遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、（仮称）梶尾ニュータウン造成工事に伴う緊急発掘調査として実施した。

3　調査は、熊本県住宅供給公社の依頼を受けて、熊本県教育庁文化課が受託事業として行った。

4　整理・報告は、平成９年度（1997年）に行った。

5　出土遺物は、熊本県文化財収蔵庫で整理作業を行った。

6　発掘調査現場での実測及び写真撮影は、坂田和弘、北原美和子、前川真由美が主に行い、一部阿南亨、荒木聖子も行った。

7　遺物の実測は、主に坂田、本松亜希子、水本佳子が行い、一部石器については埋蔵文化財サポートシステム株式会社（本山千絵、冨永圭子）に委託した。また、土器拓影は整理作業員４名で行った。遺構製図及び遺物製図は本松、水本、戸田紀美子が中心に行った。遺構写真撮影は、主に坂田、北原、前川が行った。遺物写真撮影は徳永琢磨（ジャッドスタジオ）が主に行い、一部坂田も行った。焼きつけは主に坂田が行った。

8　石器の石材は、本松及び坂田が肉眼で観察し、辞典等を参考にして判定した。結果は、遺物観察表に記載した。

9　遺構内出土の炭化物のＣ14年代測定は、古環境研究所に委託した。

10　遺物観察表は坂田、本松、水本が主に作成した。

11　本書の執筆は、坂田が行った。

12　本書の編集は、坂田があたり、本松、水本、戸田が補佐した。

13　出土遺物は熊本県文化財収蔵庫に保管している。

凡　例

1　本書に使用したレベル（Ｌ＝）は標高を表し、方位は磁北で示した。

2　遺構の深さは、特に断わりがないものは、検出面からの深さである。

3　遺構の図において、遺構番号は確認できた遺構から順に番号を振っていった。遺構の番号は頭に記号を付すことで表した。記号は以下の通りである。

　SI：竪穴住居跡　　SK：土坑　　SD：溝状遺構　　SR：道路状遺構　　SX：不明遺構

4　竪穴住居跡内の硬化面は、一点破線で表現した。道路状遺構の硬化面については網カケで表現した。

5　土器の図については、復元図及び完形の図については、中心線より右に断面及び内部を、左に表面を表現する。復元不可能なものは、断面及び拓本を添えた。

6　土器表面に赤色顔料の付着したものは　のスクリントーンで表現した。

7　石器の図については、基本的に第三角図法を使用した。石器の表現では、磨研された部分は　のスクリントーンで示した。特に、磨研方向がはっきりするものは、細線で表現した。顔料の付着した部分は　のスクリントーンで示した。

本文目次

巻頭カラー
序文
例言・凡例
第Ⅰ章　遺跡の位置と環境
　第1節　地理的環境……1
　第2節　歴史的環境……1
第Ⅱ章　調査に至る経緯
　第1節　調査に至る経緯……9
　第2節　調査の組織……10
第Ⅲ章　調査の方法と経過
　第1節　調査の方法……13
　第2節　調査の経過……13
第Ⅳ章　層序と遺構・遺物の検出状況
　第1節　層序……15
　第2節　遺構・遺物の検出状況……16
第Ⅴ章　調査の成果
　第1節　旧石器時代の遺物……17
　第2節　縄文時代の遺構と遺物
　　1　縄文時代の遺構
　　(1)竪穴遺構・土坑……17
　　2　縄文時代の遺物
　　(1)土器……45
　　(2)石器……72
　　(3)縄文時代の特殊遺物（土偶・石棒・双刃石斧）……101
　　(4)土製品・粘土塊・玉……104
　第3節　弥生時代以降の遺構と遺物
　　1　遺構……105
　　2　遺物……106
　第4節　第Ⅱ調査区の遺構と遺物……106
第Ⅵ章　調査のまとめ
　第1節　遺構について
　　1　竪穴遺構……109
　　2　土坑……109
　　3　道路状遺構・溝状遺構……109
　　4　焼土坑……109
　第2節　遺物について
　　1　土器……109
　　2　石器……110

3　特殊遺物（土偶・石棒・注口土器・双刃石斧）……110
4　赤色顔料……110
第Ⅶ章　考察
第１節　遺構と遺物について……111
第２節　特殊遺物について
1　土偶について……113
2　石棒について……114
3　双刃磨製石斧について……115
主要参考文献一覧……116
土器観察表・石器観察表……117
図版

表目次

表１　周辺遺跡地名表……7
表２　調査行程表……14
表３　土器観察表……117
表４　石器観察表……123

挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図……6
第２図　調査対象地周辺図……11
第３図　調査区グリッド図……12
第４図　遺跡層序模式図……15
第５図　石器実測図(1)……17
第６図　遺構配置図（Ⅰ区）……19
第７図　竪穴遺構実測図(1)……21
第８図　竪穴遺構実測図(2)……22
第９図　竪穴遺構実測図(3)……25
第10図　竪穴遺構実測図(4)……26
第11図　竪穴遺構実測図(5)……29
第12図　竪穴遺構実測図(6)……30
第13図　竪穴遺構実測図(7)……33
第14図　竪穴遺構実測図(8)……34
第15図　竪穴遺構実測図(9)……35
第16図　竪穴遺構実測図（10）……36
第17図　竪穴遺構実測図（11）……39
第18図　竪穴遺構実測図（12）……40
第19図　竪穴遺構実測図（13）……41

第20図　竪穴遺構実測図（14）……42
第21図　焼土坑実測図……44
第22図　縄文土器実測図(1)……46
第23図　縄文土器実測図(2)……51
第24図　縄文土器実測図(3)……57
第25図　縄文土器実測図(4)……58
第26図　縄文土器実測図(5)……59
第27図　縄文土器実測図(6)……60
第28図　縄文土器実測図(7)……61
第29図　縄文土器実測図(8)……62
第30図　縄文土器実測図(9)……63
第31図　縄文土器実測図（10）……64
第32図　縄文土器実測図（11）……65
第33図　縄文土器実測図（12）……66
第34図　縄文土器実測図（13）……67
第35図　縄文土器実測図（14）……68
第36図　縄文土器実測図（15）……69
第37図　縄文土器実測図（16）……70
第38図　縄文土器実測図（17）……71
第39図　石器実測図(2)……75
第40図　石器実測図(3)……76
第41図　石器実測図(4)……77
第42図　石器実測図(5)……78
第43図　石器実測図(6)……81
第44図　石器実測図(7)……82
第45図　石器実測図(8)……83
第46図　石器実測図(9)……84
第47図　石器実測図（10）……85
第48図　石器実測図（11）……86
第49図　石器実測図（12）……87
第50図　石器実測図（13）……88
第51図　石器実測図（14）……91
第52図　石器実測図（15）……92
第53図　石器実測図（16）……95
第54図　石器実測図（17）……96
第55図　石器実測図（18）……97
第56図　石器実測図（19）……98
第57図　石器実測図（20）……99
第58図　石器実測図（21）……100
第59図　土偶実測図……101

第60図　石器実測図（22）……103
第61図　土製品類実測図……104
第62図　玉実測図……105
第63図　道路状遺構実測図……105
第64図　土器実測図（18）……106
第65図　Ⅱ区全体遺構配置図……107
第66図　土坑実測図……108

図版目次

図版１　作業風景、調査風景
図版２　完掘状況（SI－07）、完掘状況（SI－08）
図版３　完掘状況（SI－10）、遺物出土状況（SI－14）
図版４　遺物出土状況（SI－14）、完掘状況（SI－14）
図版５　完掘状況（SI－17）、完掘状況（SK－18・28）
図版６　完掘状況（SK－18）、完掘状況（SI－19）
図版７　丸玉出土状況（SI－19）、完掘状況（SI－21）
図版８　完掘状況（SI－26）、完掘状況（SI－27）
図版９　完掘状況（SI－29）、完掘状況（SK－30）
図版10　完掘状況（SI－31）、完掘状況（SK－32）
図版11　完掘状況（SI－39）、土器出土状況（SI－39）
図版12　小型深鉢形土器出土状況（SI－39）、焼土集中（SI－39）
図版13　完掘状況（SI－40）、完掘状況（SI－41）
図版14　完掘状況（SK－33）、完掘状況（SK－35）
図版15　完掘状況（SK－37）、完掘状況（SK－38）
図版16　完掘状況（SX－42）、完掘状況（SX－43）
図版17　完掘状況（SK－45）、完掘状況（SK－46）
図版18　完掘状況（SR－02・03）、Ⅰ区完掘状況
図版19　Ⅰ区完掘状況、Ⅱ区完掘状況
図版20　Ⅱ区　検出状況（SK－201）、Ⅱ区　完掘状況（SK－201）
図版21　ナイフ形石器・細石器、縄文土器
図版22　縄文土器、縄文土器
図版23　縄文土器、縄文土器
図版24　縄文土器、縄文土器
図版25　縄文土器、縄文土器
図版26　縄文土器、縄文土器
図版27　縄文土器、縄文土器
図版28　縄文土器、縄文土器
図版29　縄文土器、縄文土器
図版30　石鏃、石匙・調整痕石器・削器・石核

図版31　十字形石器、磨製石斧
図版32　磨製石斧・打製石斧、打製石斧
図版33　打製石斧・小型打製石斧、小型打製石斧・円盤状石器
図版34　円盤状石器、磨石・凹石・礫器
図版35　敲石・磨石、磨石
図版36　石皿・砥石、土偶
図版37　２号土偶出土状況、１号土偶出土状況
図版38　注口土器出土状況、注口土器
図版39　石棒出土状況、石棒・双刃磨製石斧・双刃局部磨製石斧
図版40　丸玉（上面)、丸玉（下面)、小型深鉢形土器
図版41　粘土塊、弥生時代以降の土器

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

鶴羽田遺跡は、熊本市鶴羽田町から梶尾町にかけて鶴の原、羽田にかけての一帯に所在する。このうち今回調査対象地となったのは梶尾町の鶴の原温泉団地に隣接する地域である。国土地理院発行２万５千分の一の地形図「植木」の図幅では、西から東へ2.55㎝、南から北へ14.2㎝を計る地点にあり、北緯32度50分12秒、東経130度44分54秒を中心とする地域である。以下この遺跡を中心とした地理的な状況をみていきたい。

九州島は日本列島の南西部に位置し、温暖湿潤な気候に恵まれている。その九州島の西側中部域に熊本県は位置している。そのため、温暖湿潤にやや内陸的な気候も加わった風土でもある。

熊本市の中心地からみれば北方から東方にかけて広くひろがる台地を肥後台地または、熊本台地といい、熊本県における洪積台地の典型といわれる。肥後台地はいくつかに細分され、植木町一帯が植木台地、京町に近い地域が京町台地と呼ばれている。

鶴羽田遺跡は、この植木台地に位置する。この台地は、地質的には北部台地、さらに合志台地の西端になる。北方には肥後変成岩の山地、西方を金峰山地に接し、南方は細長くのびて京町台地へとつづく。この台地の地質史的な流れをみると、鮮新世から第四紀更新世のころ、金峰山外輪山が噴出し生成された。同一起源の火山岩は京町台地の基底部に局部的に露われるという。洪積世後期、最後の氷期（ヴュルム氷期）の影響をうけて海面低下により有明海が陸化し、その際に肥後台地、植木台地の形成がなされた。そして坪井・井芹両河川の初源形が形成され、流れ始めた。さらに沖積世になると、いわゆる縄文、弥生両海進によりそのつど海水面が上昇し、坪井・井芹両河川とも白川が運搬した火山灰により流れを変えてきたと推定されている。

この台地の表層地質は、ローム層と熔結凝灰岩よりなっている。軽石質熔結凝灰岩は新期のものであり、洪積世・阿蘇及び姶良カルデラ形成に伴う軽石流で、平坦地では非溶結、谷部では溶結となる。白色ないし暗灰色の軽石を暗灰色の火山灰で膠結したもので、小形の軽石及び安山岩礫を含むものである。またこの岩石は風化しやすく、上部はローム質凝灰岩に移化している。さらにこの岩石は著しい含水性のために、地下水の保存のよい点が特徴にあげられる。

本台地の土壌は表層が黒ボクとよばれる火山灰で厚く覆われている。そのなかでもこの一帯は淡色黒ボク土壌であり、肥後台地他に多く分布する厚層黒ボク土壌に比べ火山灰土壌としての性格がおとなしく、土壌の養分状態も比較的良好で生産力も幾分高いという。しかし、一般的には土が乾燥しやすく水もちが悪く、風化の作用も大きい。このような土地では従来桑畑としての利用が多かったが、近年開田工事が進められ、潅水施設が整えられてから野菜の栽培が拡充され、ハウス栽培も盛んである。

台地の端には湧水点がみられ、これが人々の水の供給地であった。調査地区の一部にはゆるやかな谷部がみられ、その延長線上では急激に落ち込んでおり、そこに池があったと古くからこの地に住んでいた人の話があり、ここに湧水点があったものと思われる。さらに台地を浸食して流れる坪井・井芹の両河川の流域には火山灰を母材とする水田土壌が堆積し、この地域に水田を形成し生産基盤の一部をになっていたのであろう。

第２節　歴史的環境

鶴羽田遺跡は、熊本市の遺跡地図によれば、先にも述べたように遺跡番号78として、鶴羽田町字鶴の原・垣の外・一の口に所在とある。ただ、実際の遺跡台帳における設定範囲は広く、今回調査した梶尾町付近も境界線内に入っている。調査地点はその北の外れ付近であった。この遺跡内からの黒色磨研系の土器の出土

は以前から知られていたが、遺跡・遺物ともに明確ではなかった。弥生時代の銅戈の出土した地点もこの遺跡内に含まれるという。遺物やこれまでの調査などから判断して、遺物台帳に記された鶴羽田遺跡の範囲内には、旧石器時代から縄文時代、さらには奈良平安時代まで含まれている可能性がある。従って、この遺跡は複合遺跡、もしくは遺跡群として捉えたほうがよいと思われる。

このようなことをふまえた上で鶴羽田遺跡を取り巻く周辺の歴史的環境について時代をおって概観していきたい。

○旧石器時代

まず、旧石器時代の遺跡は、本遺跡の周囲に近年の調査により次々と明らかにされつつある。それも徐々に時代を遡っていく傾向にあり、今後も大いに期待される状況にある。

遺跡の西側の台地に当たる金峰山系に連なる熊本市の北東部においても万楽寺遺跡の剥片尖頭器、五丁中原遺跡の三稜尖頭器、ナイフ形石器、剥片尖頭器、柿原・羽山尻遺跡のナイフ形石器なども出土している。

また、遺跡の南側に阿蘇山から伸びる丘陵地の一つ立田山の周辺にも、多くのこの時期の遺跡が確認されている。ナイフ形石器を出した清水町万石の谷口遺跡、天拝山Ａ遺跡の安山岩製石槍、竜田陳内遺跡の三稜尖頭器、庵ノ前遺跡の三稜尖頭器、台形様石器などがある。

熊本市の東部方面でも近年の調査によって、旧石器時代の遺物が知られるようになってきた。熊本市の石の本遺跡では、３万数千年前の石器が出土している。

○縄文時代

旧石器時代から縄文時代への変化は、地質学的には洪積世から沖積世への変化、気候的には氷期からの温暖期への変化に伴う植生の変化、それに伴う動物相の変化をもたらした。この大きな環境の変化は当然のことながら人間の暮らしにも変化をもたらしたと考えられる。ただ、一口に縄文時代といってもその内容を一様にはとらえられない。１万年近い時の流れの中でその内容を大まかに時期区分に沿ってみていく。

縄文時代早期は、まだ旧石器時代の余波が残っており、遺跡の立地も旧石器時代とそれほどの違いはないようである。鶴羽田遺跡の周辺で早期の土器が出土する遺跡としては、立福寺町今熊の妙見遺跡・大鳥居町小堂の本の大鳥居遺跡・和泉町川東屋敷の川東遺跡・太郎迫遺跡、五丁中原遺跡などの数か所が知られているにすぎない。そのうち五丁中原遺跡では早期の集石や連結土坑と思われる遺構も出土している。

北に隣接する植木町では、その南部だけでも10か所ちかくの早期に属する遺跡が発見されており、井芹川・坪井川上流域のこの台地上にも数多くの未発見遺跡が存在すると考えられる。

前期になると、これまでの丘陵地にのみ限られていた遺跡の分布状況が変化してくる。熊本県下では近年の調査事例の増加により、白川の沿岸付近の立田陳内遺跡などの低地域や阿蘇郡西原村の山地付近でも知られるようになる。これまで貝塚を中心とするとみられていた前期の様相が地域の拡大を展開し始めたことの証左であるのかもしれない。

縄文時代早期と前期を分ける層として、今から約6000年前の火砕流によって形成された火山灰土層で、アカホヤと呼ばれる黄褐色土層がある。また、このころは気候の温暖化によって内陸部へ海が侵出した、いわゆる縄文海進と呼ばれる時期にも当たっている。この海進期に鹿児島の鬼界カルデラ起源とされるアカホヤ火山灰の降下があったのである。この降灰は当時の人々の生活にかなりの影響を与えたと考えられる。しかし、熊本県の中部域にこの層がそのまま堆積し、現在の「アカホヤ」を含む層を形成した可能性は少なく、雨水やその流水により層は二次的な堆積の結果、その包含層を形成していると考えられている。ただその進行速度は自然条件により地域ごとに異なっているようである。そのアカホヤ層の堆積層及び二次堆積層をこの遺跡ではⅢ層としている。この層の上面がこの遺跡では一つの遺構確認面としている。

アカホヤ降下後を縄文時代前期にあてる考え方があり、その時期に轟式土器、曽畑式土器をもった人々の

文化が形成されたといわれている。鶴羽田遺跡ではこの時期の様子は不明である。周辺でもまだこの時期の状況はよくわかっていないようである。

さらに中期になると、阿高式土器をもつ人々が活動を始める。この阿高式土器の分布域は西九州沿岸の海辺部に集中する傾向があり、貝塚を形成するものが多い。また、朝鮮半島の沿岸部にも共通する文化要素があり、この土器を持った人々が海洋性の強い文化を形成した証ともなっている。しかし、近年の調査でこの土器を持った人々が内陸部にも進出していったことがわかってきている。鯨の椎間板の圧痕のついた阿高式土器の底部が球磨郡の山中で確認されたり、内陸部で土器が点々と出土したりと、その進出過程を窺わせる資料が増加してきている。そして、この阿高式系統の土器を持った人々が後期になると、大きく内陸部に進出し、遺跡を形成している。

その一方で、前期からみられた縄文を地文にする船元式土器の流れを受けた竹崎式土器を持った人々は、阿高式にやや先んじて山中に遺跡を残しているのがわかってきた。竹崎式土器の祖型とされる船元式土器は、瀬戸内地方で発達したものである。この流れを受けた竹崎式土器は、ワクド石遺跡・合志町御手洗遺跡、西原村桑鶴遺跡などから出土しており、近年調査された菊池平野の北辺にある七城町岡田遺跡では、この土器が大量に出土している。

このように縄文時代早期から中期にかけての時期には、南九州や海からの文化の伝播、瀬戸内などの東からの文化の伝播が複雑にからみあった状況があり、その中で人々のダイナミックな生活が展開されたことを推測させる。さらにこのことは、定住生活が行われる一方で、気候変動、生活環境の変化などによって、活動拠点を常に変動させていた当時の人々の生活状況を示しているのかもしれない。

後期後半になると磨消縄文文化の伝播と変移とともに遺跡数は爆発的に増加し、遺跡は内陸部の台地上にも広範囲に分布するようになる。北は菊池川沿岸部から、南は白川左岸の託磨原台地まで集中して分布している。

植木台地周辺に限って遺跡の立地をみると、台地に入り込む浸蝕谷に面して立地する場合が多く、台地の端や河岸段丘上に存在する場合もある。特に規模の大きい遺跡では、その背後に広い台地や平原をひかえているものが多いようである。出土する土器では太郎迫式・三万田式・鳥井原式・御領式・天城式・古閑式（上南部Ⅲ式）がある。この時期の遺跡は短期間に出現して姿を消す場合が多い。

鶴羽田遺跡の周辺では、太郎迫遺跡、四方寄遺跡、山海道遺跡、五丁中原遺跡などが早くからその存在を知られ、規模の大きいものも多い。

鶴羽田遺跡の主要な遺物はこの時期が中心であるので、より詳しく各遺跡について概要を述べておこう。

太郎迫遺跡は、熊本市太郎迫町字大原から本村屋敷にかけての一帯で、井芹川の支流である西谷川左岸の標高70～90mにかけてのゆるやかな傾斜をもった台地上に立地する。縄文時代後期から晩期にかけての代表的な集落遺跡である。戦後上野辰男氏により発見され、これまで数度の調査が行われている。特に1994年から1996年にかけて農村活性化住環境整備事業として圃場整備に際しては、熊本県と熊本市により発掘調査が行われた。太郎迫式土器を中心に、後期の辛川式から晩期の黒川式におよぶ土器群や石器、土偶など、縄文時代後期後半から晩期にかけての大量の遺物が出土し、土坑群や埋設土器、竪穴住居跡などの遺構が検出されている。

山海道遺跡は、熊本市万楽寺町字甲笹尾から植木町辺田野にかけての一帯で、井芹川上流と西田に川に挟まれた台地上の標高100～120mにかけてのゆるい傾斜地に位置する。出土遺物には三万田式から晩期初頭にかけての土器があり、土偶や玉類も豊富である。埋設土器などの遺構も多く検出されている。ほかに、縄文時代早期の土器や、集石遺構なども検出されている。ここも、圃場整備事業に際して発掘調査が行われている。

五丁中原遺跡群は、熊本市貢町・和泉町にまたがり、金峰山系からのびた高燥な台地上に立地しているが、台地裾部には湧水が多く、生活条件としては良好であったと思われ、縄文時代・弥生時代を中心とした遺跡として知られていた。昭和43年に熊本商科大学（現熊本学園大学）によって初めて発掘調査が行われ、縄文時代晩期の竪穴住居址などが発見されている。この遺跡の範囲内で工業団地の建設が計画され、熊本市教育委員会によって1994年から1995年にかけて約3万㎡の範囲が発掘調査された。調査の結果、農地の造成などで、かなり地形の削平や改変が行われているにもかかわらず、旧石器時代から中世に至る遺構・遺物が多量に出土している。その中で縄文時代早期の集石・後期の竪穴住居址が出土している。

四方寄遺跡は、四方寄町宇平畑に所在し、京町台地基部の台地上に立地する。国道３号線の両側に遺跡は広がり、以前は国道の西側の北部をＡ地点、南部をＢ地点とし、東側は御馬毛遺跡とよばれていた。現在遺跡は土取りなどにより旧地形はほとんど無く、遺跡もほぼ壊滅した。採集資料が多いが、一部調査されてはいる。それらの遺物や調査などによって、この遺跡をみると、Ａ地点では有力な遺物包含層が存在し、遺物は三万田式と太郎迫式土器が出土している。精製の浅鉢や粗製の深鉢形土器片、磨製や打製の石器、土偶が採集されている。Ｂ地点では国道３号線より西側の墓地にかけて、御領式土器がまとまって出土したという。土器は精製の浅鉢や深鉢、粗製の深鉢のほかに壺形らしい残欠もあり、偏平な打製石器や磨製石器が出土し、Ｂ地点の北寄りには三万田式土器も出土している。また、土偶や紡錘車形土製品なども採集されている。墓地の近くでは竪穴住居跡の断面２か所が確認されている。断面から採取した土器は御領式を主とし、他に横線文に押点を配した三万田式の精製浅鉢破片一点があったという。

鶴羽田遺跡からは、出土した安山岩製の石器が多く出土しており、その石材の供給地と考えられるのが二子山石器製作所遺跡である。この遺跡は、菊池郡西合志町に所在し、国指定史跡となり、保護地とされ整備されている。この遺跡は昭和６年、坂本経堯氏（肥後考古学会長）、故大塚了城氏によって注意されていたもので、昭和39年に遺跡分布調査で再発見され、西合志町教育委員会により昭和40年から46年の六年間、第四次調査まで実施されている。その結果、ここには金峰山系溶岩の玄武岩質安山岩の露頭があり、ここで石器の素材を露頭面からはぎ取り、打製石斧の製品や半製品を製作していることが明らかにされた。さらに主に偏平の打製石斧や十字形石器が製作されており、製作された石器は西合志町はもちろん、西は熊本市四方寄町、鹿本郡植木町亀甲西、同色出を結ぶ国道三号線を境とし、東は菊池郡旭志村岩本、湯舟、大津町鳥塚を結ぶ鞍岳山麓を限界とし、北は菊池郡七城町一本松、菊池市毛足から伊野遺跡へと伸び、菊池川水系を境とするおよそ半径15㎞に供給されていることがつきとめられている。旭志村ワクド石遺跡や泗水町三万田遺跡から二子山系の石器がおびただしく出土している。ところが、阿蘇郡西原村の各遺跡、熊本市新南部遺跡、太郎迫遺跡、健軍上ノ原遺跡等からも多くの打製石器が採集されているが、二子山系石器は見い出せないという。このことは、本遺跡の様相を探る上で興味深いことである。

鶴羽田遺跡を含めた熊本平野周辺における縄文時代後晩期の遺跡は、急激に遺跡が発展していくことや大規模な集落遺跡の展開、長期間にわたって遺跡が形成されている一方で、ある時期に途絶える時期があったりと一様ではないようである。さらに非常に広範囲にわたる斉一的な土器の分布など、伝播というだけにとどまらない遺跡間のつながり、移動を含めた定住の問題など今後考えられるべきことが多々あるようである。

○弥生時代

弥生時代になると、遺跡のあり方は大きく変化していくようである。縄文時代の晩期末になると、これまで台地上に多かった遺跡が低地に営まれ始める。一方、丘陵地にもその時期の遺跡が全くなくなるというわけではない。それは食料生産基盤が水稲に変化した弥生時代において、水田として利用できる土地が極めて限定されていた状況を考えれば当然であるのかもしれない。ただ、県内で縄文時代晩期から弥生時代前期へとつながる時期を明確に押さえた遺跡の調査がそれほどなされていないため、その間の事情を正確に知るこ

とはできない。

中期になると、徐々に遺跡の状況が明らかになり、低地から平野の奥まで遺跡の分布が広がるようである。さらに後期になると集落遺跡は急に増加してくる。近年の緊急調査においてかなりの後期集落遺跡が発掘されている。五丁中原遺跡の環濠集落などはこの時期の遺跡である。さらにこの遺跡では時期がやや不明確ながら大型の掘立柱建物も出土しており、いわゆる「倭国大乱」に関係する集落としていかなる役割を持っていたのであろうか。

鶴羽田遺跡では、わずかながら中期と後期の土器片が出土しており、さらに以前この遺跡台帳にいう「鶴羽田遺跡」の範囲内から銅戈が出土していることなどを考え併せると、この近くに弥生時代の遺構が存在する可能性は大きい。周辺の遺跡について具体的にみてみたい。

梶尾遺跡群は、熊本市梶尾町字中尾原一帯で、坪井川上流左岸に位置し、縄文早期から中世までの複合遺跡である。この遺跡群は今回調査した鶴羽田遺跡に近接するもので、梶尾遺跡、甲佐大明神遺跡を併せたものである。近年の発掘調査によって弥生時代を主体とする遺跡であることが明らかになった。遺跡南側の舌状台地上の調査では、弥生後期の環濠集落が確認され、環濠約100m、住居址９軒が出土している。出土した遺物は土器が中心であるが、住居址の中などから鉄鏃も出土している。石器類の出土は比較的少ない。

五丁中原遺跡では、弥生時代後期の環濠集落が出土している。環濠集落は、北西から南東へ緩やかに傾斜する台地の東側・南側を幅４ｍ、深さ2.5mのＶまたはＹ字型の条溝で囲んだもので、条溝は調査区内で約250mが検出されている。集落の範囲は少なくとも三万㎡を越し、熊本県下でも有数の規模である。竪穴住居址は約80軒出土し、遺物では、小形仿製鏡や銅鏃が出土している。弥生時代中期の甕棺群も出土している。清水町遺跡群には、楢山Ａ～Ｃ遺跡や八景水谷遺跡が入る。この二遺跡は坪井川を挟む谷を隔てて約500ｍしか離れていない。楢山Ａ遺跡は昭和33年に発見された甕棺遺跡で、尚絅高校考古学クラブや乙益重隆氏によって調査が行われ、100基以上の甕棺があったのではないかとされている。八景水谷遺跡では、昭和30年と43年に道路工事や側溝工事の際に甕棺が発見され、調査が行われている。最近では、平成４年に熊本市教育委員会によって２度発掘調査が行われ、弥生時代後期の竪穴住居址が数件検出され、同時期の集落の存在が明らかになった。

小形仿製鏡の出土で知られる徳王遺跡は、平成４年に熊本市教育委員会によって発掘調査が行われ、弥生時代後期の竪穴住居址を20数件検出しており、清水町遺跡群を併せて坪井川周辺の台地にはかなり大きな集落が存在していたと予想される。

○古墳時代

古墳時代では古墳がその時代を特徴づけるもので、この植木台地周辺でも多くの古墳が知られている。楠野かぶと塚古墳、羽山塚古墳、兜塚古墳などがある。このうち、羽山塚古墳は円墳で、昭和54年に周溝の確認調査がなされ、周溝の存在が確認されている。

また、植木台地の基盤層に阿蘇の溶結凝灰岩があり、そこの露頭面に多くの横穴群がみられる。梶尾横穴群、竹の下横穴群、辻横穴群などがある。改寄、明徳、小糸山、楠野地区も古墳と横穴群とからなる地域で井上横穴群、宮尾横穴群などがある。

JR鹿児島本線の線路に面する釜尾丘陵の末端には国指定史跡釜尾古墳をはじめとして、扇田横穴群、橋口古墳などがある。釜尾古墳は直径約18m、高さ６ｍ前後の円墳で、内部構造は羨道がいちじるしく長く、石室の平面形が三味線胴形の正方形を呈する横穴式石室である。装飾古墳で、石室内部には双脚輪状文、放射状の突起をつけた同心円文や三角文の彩色がみられる。

先に述べた五丁中原遺跡群でも墳丘を持つ古墳群が確認されており、方形周溝墓と円墳で構成され、計22基が出土している。中には周溝外径が45ｍに達する円墳もある。主体部はほとんどが農地造成で破壊され、

第１図　周辺遺跡分布図

表１　周辺遺跡地名表

番号	遺　跡　名	所　在　地	備　考
1	鶴羽田遺跡	熊本市鶴羽田町垣外～梶尾町鶴の原	鶴ノ原遺跡・垣ノ外遺跡も含む
2	梶尾立野遺跡	熊本市梶尾町立野	遺物包含地
3	梶尾古関原・古屋敷遺跡	熊本市梶尾町古関原・中尾原	遺物包含地
4	梶尾遺跡	熊本市梶尾町中尾原	弥生後期
5	竹の下横穴群	熊本市鶴羽田町竹ノ下	横穴群
6	辻横穴群	熊本市四方寄町長峯	横穴群
7	山際畑遺跡	熊本市鶴羽田町山際畑	遺物包含地
8	羽田遺跡	熊本市鶴羽田町羽田	土師器
9	清水町遺跡群	熊本市飛田町～清水町山室～八景水谷	遺物包含地
10	亀井遺跡	熊本市清水町亀井	土師器、瓦器など
11	徳王遺跡	熊本市徳王町・清水町山室・髙平・池田	溝１本、道路１本、土師器、須恵器
12	亀田遺跡群	熊本市四方寄町豆尾	遺物包含地
13	坂下遺跡群	熊本市下硯川町由留木田・楢山	甕棺・土師・須恵
14	白土遺跡	熊本市貢町白土	合口式甕棺
15	黒井横穴群	熊本市下硯川町	横穴群
16	豆尾横穴群	熊本市四方寄町豆尾	横穴群
17	四方寄御馬下遺跡	熊本市四方寄町平畑・上野	住居址２軒、土偶、紡錘形土製品、磨製石斧、打製石斧、後晩期（太郎迫式～御領式・晩期前半）
18	硯川遺跡群	熊本市鹿子木町～硯川町田畑	遺物包含地
19	一丁畑横穴群	熊本市下硯川町一丁畑	横穴群
20	柚ノ木遺跡	熊本市硯川町市迫	遺物包含地
21	北迫筒井横穴群	熊本市北迫町城原	横穴群
22	北迫川底遺跡群	熊本市北迫町岡の下	縄文後期（三万田）
23	妙見遺跡	熊本市熊立福寺町今熊	後晩期土器（太郎迫式・御領式・晩期中葉）
24	太郎迫遺跡	熊本市太郎迫町字大原・本村屋敷	住居址、埋甕、早期（円筒土器）、後期（辛川Ⅱ式～御領式）、晩期（晩期前半・山ノ寺式）
25	山海道遺跡	熊本市万楽寺町字甲笹尾	剥片尖頭器、後晩期土器（三万田式・鳥井原式・晩期前半）、土偶
26	川東遺跡	熊本市和泉町字川東屋敷	後晩期土器（三万田式中心）、紡錘形土製品、打製石斧、土偶？
27	皮篭石遺跡	熊本市和泉町皮篭石・川東・いわが谷	遺物包含地
28	中尾遺跡	熊本市花園４丁目（本妙寺墓地一帯）	後期中葉末の太郎迫式の口縁部破片
29	桑鶴・五丁中原遺跡	熊本市貢町字馬場・三つ塚・五丁中原～和泉町桑鶴	住居跡、埋甕、剥片尖頭器、ナイフ形石器、三稜尖頭器、後晩期(太郎迫式・三万田式・晩期前半)、土偶
30	惣門遺跡	熊本市立福寺町小原	遺物包含地
31	原口原横穴群	熊本市貢町小塚	古墳：横穴
32	扇田横穴群	熊本市貢町扇田	横穴群
33	梶尾横穴群	熊本市梶尾町宮の本	横穴群
34	大鳥居遺跡	熊本市大鳥居町小堂ノ本	土師器
35	宮ノ下横穴群	熊本市楠野町宮の下	横穴群
36	宮ノ前横穴群	熊本市楠野町	横穴群
37	射の馬場横穴群	熊本市大鳥居町的の馬場	横穴群
38	八幡谷横穴群	熊本市明徳町八幡谷	横穴群
39	楠野遺跡群	熊本市楠野町奥古閑	遺物包含地
40	小糸山遺跡	熊本市小糸山町中原、菊池郡西合志町小糸山・中原	遺物包含地
41	宮尾横穴群	熊本市明徳町宮尾	横穴群
42	井上横穴群	熊本市改寄町城が下	横穴群
43	宝出原遺跡	熊本市改寄町宝出原	遺物包含地
44	立石遺跡群	熊本市改寄町北の割・南の割	後期（鳥井原式・御領式）、磨製石斧、土師器
45	岩倉山中腹遺跡	熊本市清水町兎谷岩倉山	遺物包含地
46	岩倉山遺跡	熊本市清水町兎谷岩倉山	遺物包含地
47	岩倉山山頂遺跡	熊本市清水町兎谷	遺物包含地
48	宿の山遺跡	菊池郡西合志町須屋宿の山	縄文～古墳：合口甕棺、住居跡、遺物包含地
49	梨の木遺跡	菊池郡西合志町須屋梨の木	縄文～古墳：甕棺片、土師器片、遺物包含地
50	向島遺跡	菊池郡西合志町須屋向島	弥生：黒髪式甕棺
51	木原野遺跡Ａ・Ｂ	菊池郡西合志町野々島木原野ほか	縄文：石鏃、遺物包含地
52	丸の内遺跡	菊池郡西合志町野々島丸の内	遺物包含地
53	駄飼場遺跡	菊池郡西合志町野々島駄飼場	遺物包含地
54	野田原遺跡	菊池郡西合志町野々島野田原	遺物包含地
55	花園遺跡	菊池郡西合志町野々島花園	遺物包含地
56	若原石棺遺跡	菊池郡西合志町野々島	古墳：箱式石棺
57	西合志中学校敷地遺跡	菊池郡西合志町野々島中野	縄文～古墳：御領式土器・早期土器、勾玉・野辺田式・須恵器外
58	枇杷田遺跡	菊池郡西合志町野々島中原・枇杷田	縄文：早期、打製石斧
59	中原支石墓	菊池郡西合志町野々島中原	弥生：支石墓
60	二子塚古墳	菊池郡西合志町野々島天神免	円墳２基
61	二子山石器製作遺跡	菊池郡西合志町野々島天神免	縄文：石器製作跡、石器各種・原石
62	八反原遺跡	菊池郡西合志町野々島八反原	縄文～弥生土器散布地
63	沖田遺跡	菊池郡西合志町野々島沖田	丸木舟、御領式・野辺田式・土師器土器・石器
64	中尾遺跡	菊池郡西合志町野々島天神島・中尾原	縄文・弥生・古墳期土器片
66	永田支石墓	菊池郡西合志町野々島永田	支石墓
67	永田遺跡	菊池郡西合志町野々島永田	丸木舟、御領式・野辺田式・土師器土器・石器
68	巡畑遺跡	菊池郡西合志町野々島巡畑	遺物包含地
69	永田遺跡	菊池郡西合志町野々島永田	縄文～古墳：打製・磨製石斧、石匙、石包丁他
71	瀬吐古墳	菊池郡西合志町野々島瀬吐	古墳
72	汐浸石棺	菊池郡西合志町上生汐浸	古墳
73	向原遺跡	菊池郡西合志町上生向原	遺物包含地
74	城敷古墳	菊池郡西合志町上生城敷	古墳
75	城敷遺跡	菊池郡西合志町上生城敷	弥生～古代、野辺田式土器、土師器・須恵器、溝遺構
76	古関原遺跡	菊池郡西合志町野々島古関	遺物包含地
77	アミダメ遺跡	菊池郡西合志町野々島前畑	土師器出土、遺物包含地
78	延寿寺遺跡	菊池郡西合志町野々島前畑	中世：地下式土壙、遺物包含地
79	野々島遺跡	菊池郡西合志町野々島前畑	弥生：野辺田式土器、古墳：土師器
80	石川遺跡	鹿本郡植木町石川小迫	弥生
81	白石遺跡	鹿本郡植木町有泉白石	遺物包含地
82	石川山古墳群	鹿本郡植木町石川塚山	前方後円墳１、円墳８以上
83	石川松葉遺跡	鹿本郡植木町石川松葉外	遺物包含地
84	横山古墳	鹿本郡植木町有泉横山	前方後円墳・装飾古墳・鹿央町県立装飾古墳館隣へ移設
85	鬼のしわや古墳	鹿本郡植木町小野横山	古墳
86	草葉遺跡	鹿本郡植木町広住字向原・経塚・屋敷	遺物包含地
87	広住遺跡	鹿本郡植木町広住向原・浦田	土師器壺
88	烏帽子遺跡	鹿本郡植木町小野烏帽子	弥生、土師器
89	小野箱式石棺	鹿本郡植木町小野１２９７地先	箱式石棺一基、断面に確認
90	塚園古墳群	鹿本郡植木町岩野塚園	前方後円墳１，円墳１
91	岩野山経塚古墳	鹿本郡植木町岩野・岩野山	横穴式石室墳；円墳
92	崩平横穴群	鹿本郡植木町山本字崩平	横穴
93	一木横穴群	鹿本郡植木町一木中尾	横穴
94	一木遺跡	鹿本郡植木町一木	縄文～弥生
95	古関遺跡	鹿本郡植木町鞍掛古関屋敷・辻畑	遺物包含地
96	鞍掛横穴群	鹿本郡植木町鞍掛古関屋敷	横穴４基
97	諏訪原石棺	鹿本郡植木町鞍掛諏訪原	組合箱式石棺１
98	諏訪遺跡	鹿本郡植木町鞍掛諏訪原	縄文
100	二藁パン工場遺跡	鹿本郡植木町舞尾西原・前畑	縄文後期・弥生後期
101	蟲遺跡	鹿本郡植木町蟲今古閑	銅鉾４・鉄斧１
102	今古閑・久保遺跡	鹿本郡植木町蟲今古閑・久保	遺物包含地
103	滴水遺跡	鹿本郡植木町滴水（通称大道端）西原	甕棺・土師
105	東原遺跡	鹿本郡植木町平野東原	甕棺２
106	四ツ塚古墳群	鹿本郡植木町荻迫四ツ塚・居屋敷	いずれも小円墳,4基
107	荻迫遺跡	鹿本郡植木町荻迫表畑・萩原・亀甲・前畑	縄文後期土師器片・須恵器・石鏃・石斧
108	鬼のかま古墳	鹿本郡植木町荻迫萩原	古墳２基、石材露出
109	ヲスギ遺跡	鹿本郡植木町滴水ヲスギ・二本木・濁香原・西の谷	縄文晩期・弥生・須恵器

その際に人骨や刀剣類が出土したという。

この古墳を残した人々の集落跡はいまのところはっきりしていないが、近辺に存在しているものと思われる。

○歴史時代

近年の調査によって、徐々に律令時代以降の歴史時代の遺跡も姿を現し始めた。

太郎迫遺跡では、先の縄文時代の遺構に加えて、奈良・平安時代及び鎌倉時代から室町時代にかけての遺物も出土しており、掘立柱建物群や土壌墓などが検出されている。

五丁中原遺跡では、８世紀のカマド付き竪穴住居址群、中世の掘立柱建物群などが検出されている。

八景水谷遺跡では、奈良・平安時代の遺物・遺構が検出されており、特に遺物はヘラ描きの土師器や回転ヘラミガキの土師器、金属器を模倣した須恵器がみられるなど、当時この地域が単なる集落でなく官的な施設の存在した地域ではなかったかと推測されている。

第Ⅱ章　調査に至る経緯

第１節　調査に至る経緯

鶴羽田遺跡は、県の遺跡台帳および熊本市の遺跡地図によれば、熊本市（旧北部町）梶尾町から鶴羽田町にかけて広がる遺跡として範囲が設定されていた。一方菊池郡西合志町では遺跡との認識はなされていなかった。この付近では、早くから地元の人々により遺物の採集などが行われていた。

熊本県住宅供給公社は、熊本市梶尾町鶴の原から西合志町須屋字梶尾原の畑地において分譲住宅地の造成事業を計画した。このことについて西合志町に打診したところ西合志町教育委員会の浦田信智氏により当概地が熊本市の遺跡内に入るのではないかという指摘があった。そこで公社は、熊本市に遺跡の有無を確認したところ、鶴羽田遺跡の範囲に入ることがわかった。また、熊本県の方にも連絡が入り、遺跡の確認調査が指導された。確認調査は県が行うこととし、遺跡の広がりが両市町にまたがる事が予想されたため、本調査については出土状況に鑑み当該教育委員会と協議することとなった。

確認調査は、西合志町教育委員会浦田信智氏、熊本市教育委員会松村真紀子氏及び竹田宏司氏の立ち会いのもと、坂田が平成８年４月22日～25日に行った。

調査は、調査対象地に対して任意に確認坑（以下トレンチ）を設定し、重機を使用して掘削し、更に作業員により精査を行った。トレンチは畑の大きさにより２か所から４か所程度設定した。遺物や遺構の確認できた地点については、より密接にトレンチを設定した。

調査対象区に42か所のトレンチ（付図を参照）を設定し掘削したところ、次のような結果を得た。以下に報告文から抜粋して記す。

まず、確認トレンチの掘削深度は、基本的に明褐色粘質土層（Ⅷ層）が確認できるまでとした。確認トレンチからわかった基本層序は、次の通りである。

Ⅰ層　　表土（耕作土）。並びに／若しくは客土。

Ⅱa層　　黒色土（黒ボク）。軟らかく粒子が細かい。

Ⅱb層　　暗褐色土。やや粘性を帯び赤みがある。ここでは、縄文時代晩期の遺物を多く含む。

Ⅲ層　　暗褐色土。Ⅱb層よりも明るい。アカホヤの二次堆積層。

Ⅳa層　　暗褐色土。部分的に確認できるもので、アカホヤの染み込みとⅣb層への漸移層。

Ⅳb層　　黒褐色土。粘性強くよく締まった層。

Ⅴa層　　暗褐色土。粘性強い。

Ⅴb層　　黒褐色土。粒子の細かい土でややクラックが入る。

Ⅴc層　　暗褐色～灰褐色砂質土。よく締まり、細砂粒子を多量に含む。ATを含む。

Ⅵ層　　黒褐色～暗褐色土。場所によって色が若干異なり、この層の判別が不可能な場所もある。クラックが入る。

Ⅶ層　　暗褐色粘質土。よく締まり、場所によっては上層と一体となる。

Ⅷ層　　明褐色粘質土。よく締まり、わずかに砂礫を含む。

これらのトレンチのうち、遺構若しくは遺物の出土を21カ所で確認した。このうち、多量の縄文時代後晩期の土器片などの出土があったのは、工事対象区の西側に予定されていた貯水槽の部分であった。その付近のトレンチでは表土面から15㎝～20㎝ほどの深さで遺物が出土する面となる。これらのトレンチの一帯は、西方向に伸びた丘陵部が南側にやや傾斜する地点であり、これより更に南に遺跡の範囲が広がっていくと予想された。

一方、道を挟んで一段降りた場所の各トレンチでも遺物がⅡb層の上面に集中する傾向で、わずかながら

出土した。ここにも遺物が出土することは、東から西に入り込む開析谷の地形に周辺から遺物が流れ込んだものと判断され、遺物の入り込み方から、この調査区よりも更に北東側あるいは北側に、周知の鶴羽田遺跡とは別に遺跡のある可能性もでてきた。

以上のことから開発予定域の遺跡の広がりは熊本市側でのみ確認され、西合志町側まで及んでおらず、工事対象区のうち約6,000㎡に遺跡が残っていることがわかった。そこで、遺跡の現地保存を協議したが、工事の工程上どうしても計画変更が不可能な部分である約4,000㎡については最終的には本調査が必要となった。

その後、調査の工程について熊本市と県は協議を行い、県で本調査をする事となった。

県は平成８年10月１日付けで住宅供給公社と調査の委託契約を結び、11月より本調査に着手した。

第２節　調査の組織

調査主体	熊本県教育委員会	
調査責任者	文化課長	桑山裕好
	教育審議員	丸山秀人
	教育審議員	淵上重喜
発掘総括	主幹	松本健郎
試掘担当	文化財保護主事	坂田和弘
本調査担当	文化財保護主事	坂田和弘
	嘱　託	北原美和子
	嘱　託	前川真由美
	嘱　託	阿南　亨
	嘱　託	荒木聖子
調査事務担当	経理係長	江尻靖子
	参事	高宮優美
	主事	岸本誠司
	主事	東　修
発掘作業	青木立子　麻生昭子　上田寿美子　梅原美奈子　江崎栄子	
	江崎和義　材津幾代　関原真弓　高宮淳子　田中裕子	
	莟ヨシメ　福山須美子　本田チズ子　本田睦男　山口奈緒美	
	山口弓子　中村有里　江崎謙二郎　佐藤良子　下塩久美子	
	高本智子　塚本万里子　岩下武子　鍬永伸子　和田照美	
	藤本圭司　江島賢一　緒方　隆　松隈セキ子　穴見頼架	
	中本崇義	
報告書責任者	文化課長	豊田貞二
	教育審議員	丸山秀人
	課長補佐	石原昭宏
報告書事務担当	経理係長	江尻靖子
	主事	岸本誠司
	主事	東　修
	主事	川口久司

第２図　調査対象地周辺図

報告書総括　主幹　島津義昭

報告書担当　文化財保護主事　坂田和弘

嘱　託　本松亜希子

臨時職員　戸田紀美子

臨時職員　水本佳子

整理作業員　江島園子　山元友子　浦田和恵　橋本由美子

指導助言及び協力者

富田紘一（熊本市立博物館副館長）

浦田信智（西合志町教育委員会）

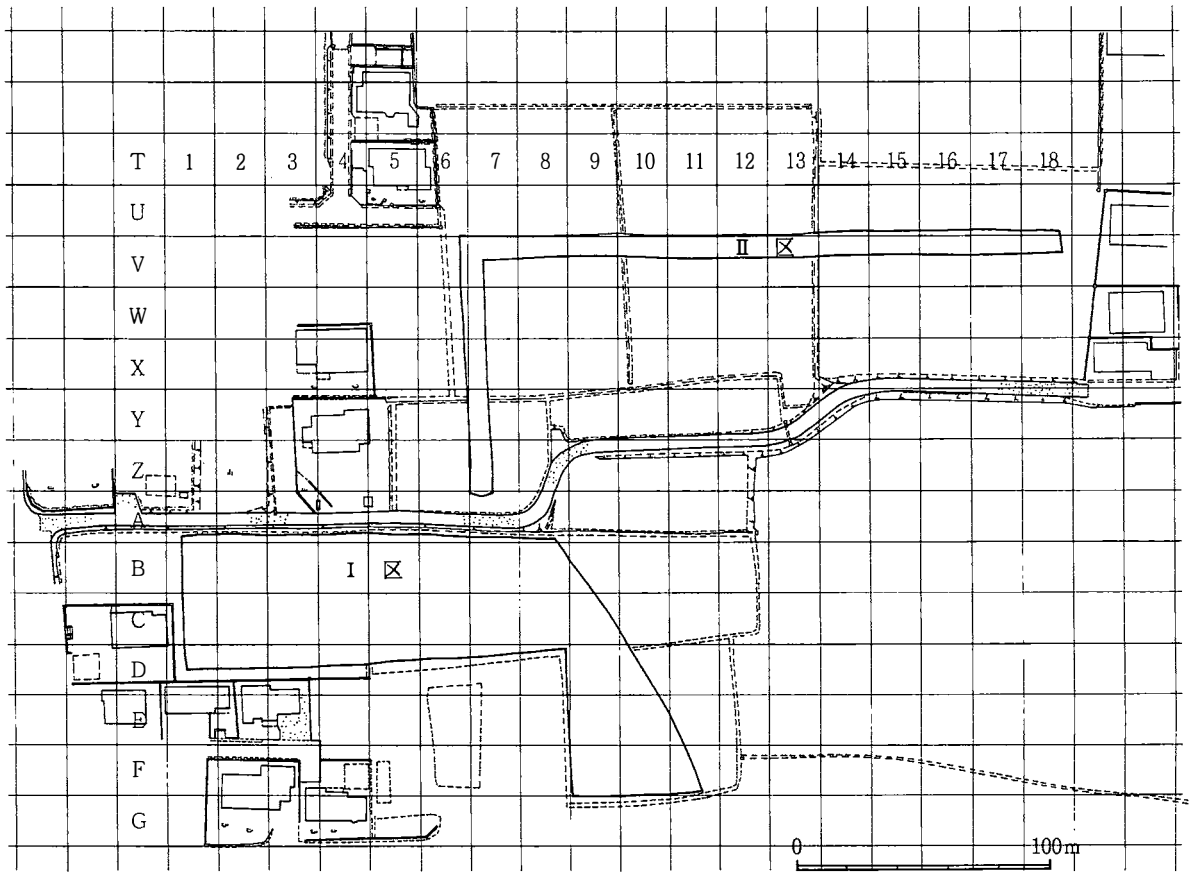
竹田宏司、松村真紀子、金田精一（熊本市教育委員会）

熊本県住宅供給公社、大政建設

徳永琢磨（ジャッドスタジオ）

尾原祐三、菅原勝彦（熊本大学工学部）

㈱古環境研究所



第３図　調査区グリッド図

第Ⅲ章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法

調査の開始に際して、主たる調査対象区は２区に分かれ、大きくⅠ区、Ⅱ区と命名した。以下に次の方法で調査を行った。

１　表土剥ぎ

調査区が２つに分けられるため、表土剥ぎ作業も２度に分けて行った。最初にⅠ区を重機で遺構の確認層であるⅢ層上面よりやや上まで剥いだ。Ⅰ区の調査がある程度進展した後に、Ⅱ区の表土剥ぎを行った。

２　調査区の設定

調査区は、Ⅰ区を基準として設定した。Ⅰ区は当初から遺構と遺物の多く出土した西側の一帯である。Ⅰ区については調査区の範囲は確認調査によって設定した。

Ⅱ区は、北側の部分は、大部分が１メートル以上の客土をのせて造成するということで、道路予定地のうち地下に埋設物が予定されている部分についてのみ調査を行った。

Ⅰ区を中心に各グリッドに名称を付けた。まず、Ⅰ区の東の端より西へ番号を１・２・３…とふり、Ⅰ区の北から南へＡ・Ｂ・Ｃ…と記号をふり、その組み合わせで、グリッド名を設定した。ところが、Ⅱ区の調査のことを十分考えずに記号をふってしまったため、Ⅱ区はⅠ区の北側に位置し、アルファベットでは設定ができなくなった。しかし、アルファベットで通すことにしていたので、あえて今度は南北方向でＡから北側に向けてＺ・Ｙ・Ｘ…と逆に降ることとした。これは先を見越さずに設定した調査者の誤りである。（第３図）

３　実測の方法

遺構の実測図は、遺構と認識した段階で行った。ただ、遺物だけの出土状況も図化した場合もある。遺構図は原則的にＡ２の方眼紙に20分の１で描くこととし、特に細かく図をとる必要があるときは、10分の１、５分の１なども採用している。基本的にグリッドごとにメッシュを水糸で張り、実測した。基本的に遺構ごとに実測するようにしているが、遺構同士の切り合い関係を示すため、複数の遺構を一枚の図面に表現したものもある。埋土の堆積状況は基本的に遺構ごととし、遺構の切り合いがある場合、一つにまとめたものもある。

４　遺構の調査方法

遺構は基本的に確認した面で遺構の確認線を引き、遺構全体を十字に分割し、その十字線に沿って幅20㎝の土層確認のベルトを設定し、ベルトを残しながら遺構内部の掘削を行った。掘削に際しては、移植ゴテを使用して遺物を残しながら掘り下げを行い、さらに土器片の集中部分では竹ベラや竹串などを利用し慎重に調査を進めた。

住居跡での床面の検出は、硬化面が確認できたところはその面で整え、床面直上の遺物は残し、遺構の平面図に描きこんでいる。炉穴もしくは焼土坑が確認された場合はさらに十字に分割し、やはりベルトを残し掘り下げた。その時点で平面図と断面図を描き、ベルトをはずした後に、柱穴の確認を行った。

図化した遺物は番号をふり、一点ごとにすべて光波測距儀を利用したトータルステーションによって取り上げ、遺物の三次元処理を行えるようにした。

これらの作業を終えた後に、完掘状況の写真を撮影し一遺構についての一連の作業を終わった。

第２節　調査の経過

本調査は、平成８年11月20日からⅠ区の表土剥ぎ作業によって始まった。

調査員は坂田・北原・前川が中心となったが、途中北原が他の現場に移動したり、臨時的に荒木・阿南が加わったりした。

作業では最初の表土剥ぎを行ったⅠ区の方からグリッド単位に精査を行い遺構確認作業を進めた。

ここでは、多くの竪穴遺構が出土し、しかも切り合い関係になるものが多かったため、その関係をつかむのに多くの時間と労力を要した。その結果、竪穴住居跡と思われる竪穴遺構をかなり確認でき、集落の一部の可能性がでてきた。

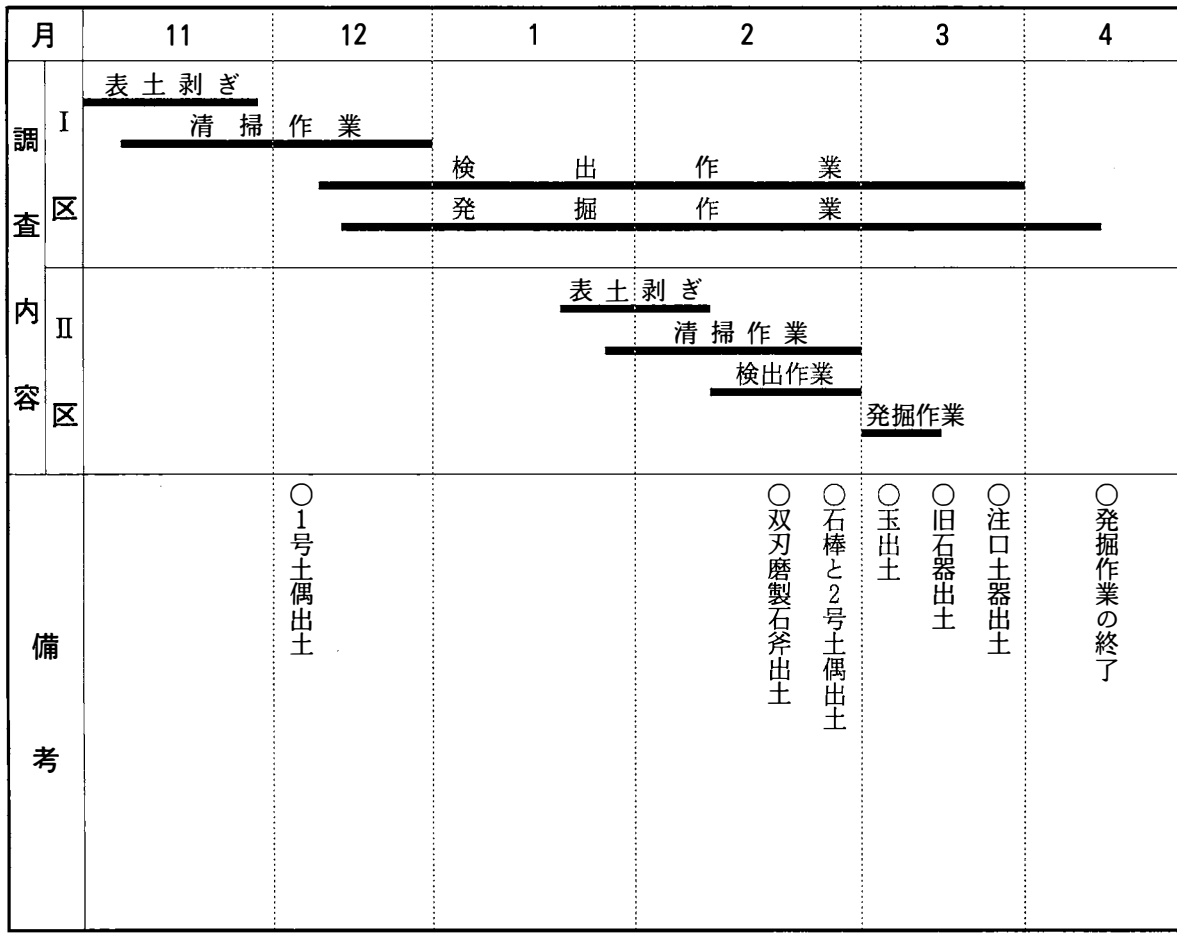
また、その遺構に伴う土器も多数出土した。調査当初に土偶が出土し、その後の作業の励みとなった。石棒やもう一点の土偶の出土など、かなり内容的には重要であった。

Ⅱ区については、Ⅰ区の作業の合間をぬって表土剥ぎ作業を行った。その後、Ⅰ区の作業が一段落付いた時点で精査作業に入った。Ⅱ区の遺構密度が薄かったため、調査の中心をⅠ区に置き、Ⅱ区はⅠ区の作業の間で調査を進めることとした。

最終的には、平成9年4月16日に調査は完了した。

調査の行程は下図の通りである。

表2　調査行程表



第Ⅳ章　層序と遺構・遺物の検出状況

第１節　層序

１　層序区分

すでに調査にいたる経過でも述べたように、この調査区の層序は大きく、Ⅰ層・Ⅱa層・Ⅱb層・Ⅲ層・Ⅳa層・Ⅳb層・Ⅴa層・Ⅴb層・Ⅴc層・Ⅵ層・Ⅶ層・Ⅷ層までを試掘段階で確認している。

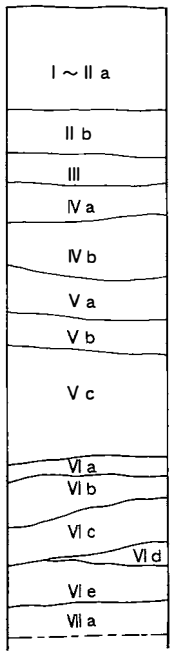
今回の調査において、遺構などの確認を行ったのは、Ⅲ層の上面である。

２　基本層序（第４図）

確認調査で得られた資料と調査終盤に以前の確認トレンチ３ヵ所を精査して得られた層序の情報から遺跡全体を見通した基本層序を設定した。（第４図）

これらの基本層序は、確認調査に際しての資料と調査区全域の状況を見通し決定したものであるが、地形的な変化や人為的な改変によって欠如したり、付け加わる層もある。以下各時代ごとにそのあり方を見ていくことにする。

鶴羽田遺跡の調査区の大部分は、縄文時代の後晩期の確認面であるⅢ層から遺物が含まれている。遺物だけではあるが、旧石器時代のナイフ形石器や早期の土器片も出土しているのでⅣ層にも遺物の存在が有る可能性はあるが、確認トレンチによれば、Ａ、Ｂ－１，２グリッド付近で早期の遺物が出土している。しかし、今回の調査ではその層までは時間的な制約によりできなかった。したがって、この鶴羽田遺跡には、少なくとも早期の段階で人々の生活が営まれた可能性は大きい。その後、縄文時代の中期に一時人々が通過した可能性が一画から出土した阿高式土器から窺うことができる。しかし、遺跡の中心時期はⅢ層に遺構を記した縄文時代後期末の御領式土器を持った人々であろう。



Ⅰ　層：表土層；耕作土。灰褐色をしており、小石まじりのいわゆる耕作土である。部分的には客土もみられる。厚さは５～10cm前後を測る。
Ⅱa層：黒褐色土層；いわゆる黒ボク層で、軟らかく粒子が細かい。Ⅰ層と分離できないところもあり、約10～30cmを測る。第Ⅱ調査区の堆積の厚いところでは、50cmほどのところもある。
Ⅱb層：黒褐色土層；Ⅱa層と同じく黒ボク層であるが、やや粘性を帯び赤みがある。第Ⅰ調査区、第Ⅱ調査区ともに、縄文時代後・晩期の遺物を含む層であるが、第Ⅱ調査区では量的に少ない。
Ⅲ　層：暗褐色土層；やや黄色みを帯びた層で、乾くと更々したアカホヤ包含層である。遺構確認面をこの層の上面としたが、遺構はⅡb層の途中から掘り込まれているようである。厚さは10cmを測る。この中にもわずかながら遺物が混入している。
Ⅳa層：暗褐色粘質土層；アカホヤの染み込みがあるが、上層よりもしまりが強い土層でⅣb層への漸移層である。ここには縄文時代早期の押型文土器や塞ノ神式土器が本来包含されると思われる。厚さは５～10cmほどである。
Ⅳb層：黒褐色粘質土層；しまりが上層よりさらに強くなり、乾くと堅く締まり亀裂が入る。無遺物層。この層からⅥ層までがいわゆる「苦土」と呼ばれる。厚さは10～15cmほどである。
Ⅴa層：暗褐色土層；粘性があり、よく締まったブロック状の土を含む。厚さは10cmほどである。
Ⅴb層：黒褐色土層；白色砂粒をわずかに含み、所々にブロック状の土を含む。上層よりも粘質が強く、いわゆる暗色帯と呼ばれる層であろうか。厚さ5～15cmを測る。
Ⅴc層：暗褐色土層；よく締まり、クラックが入り、0.05mm大の白色の細砂粒子を多量に含み、ガラガラしている。黄色パミスの細粒子と火山ガラスが大量に含まれており、AT包含層か。厚さは約20～25cmほどを測る。
Ⅵa層：暗褐色土層；上層よりやや暗い。クラックが入り、上層と性質は似るが、上層の白色砂粒状の火山灰は含まれていない。厚さは５～10cmを測る。
Ⅵb層：黒褐色土層；粒子が細かく、乾くとサラっとしている。厚さは10cm前後を測る。
Ⅵc層：暗褐色土層；暗褐色土層：ややクラックが入り、粘性がでている。厚さは10cmほどを測る。
Ⅵd層：暗褐色粘質土；粘性がやや強い。部分的にみられ、厚さ５～10cmを測る。
Ⅵe層：暗褐色粘質土；粘性が強くクラックが入る。厚さは5～10cmを測る。
Ⅶa層：明褐色粘質土層；赤色粘性ローム層。よく締まり、わずかに砂礫を含む黄褐色ローム層である。

第４図　遺跡層序模式図

その後、第Ⅱ層の黒ボク層の形成された時期にはあまり目立った遺構は検出されていないが、一人が歩ける程度の道は形成されたようである。ただ、この層は第Ⅱ調査区の堆積に比べて、非常に薄くなっている。これは、第Ⅰ調査区自体が畑として利用されるうちに耕作や削平などの地形的改変を受けたものと思われる。そのため、本来Ⅱ層の下部にはよく見られる包含層がほとんど残っていなかった状況を示すようになったのであろう。

第２節　遺構・遺物の検出状況

遺構の検出は、本来はそれぞれの時代ごとに当時の地表面で確認すべきである。しかし、この作業は非常に困難な場合も多い。今回の調査では期間の制約があったこともあり、確認調査において遺物が出土し、焼土もみられたⅢ層上面を第一の遺構確認面としてそのやや上まで重機によって上土を除去してから確認を行い始めている。そのため、Ⅱ層より上にあったと思われる近世以降の遺構は完全に無視している。また、縄文時代早期の遺構検出は時間不足で不十分に終わった。これは、確認調査段階で早期の土器の出土を確認できなかったことにより、調査期間の設定をしていなかったことによるものである。

縄文後期以降の遺構の検出に関しては、第Ⅲ層上面で行い、ほぼ確認できる限りは把握したものと思っている。遺構を検出するに際しては、包含層がほとんど無くなってしまっていることに追うところが大きい。すなわち、遺物が集中する部分と焼土のある部分が遺構の可能性があるということで精査していくと、果たして遺構が確認できるわけである。しかし、いつもそううまくいったわけではない。単に地形的な落ち込みに遺物が堆積している場合もあるからである。そのようなことを考慮しながら慎重に調査を進めた。

遺物は、先に述べたように地形的な落ち込みの場合にも出土するが、遺構の場合の出土する率が高かった。出土した遺物はほとんどが破片で、意図的に捨てられたようなところは少なかったようである。ただ、いくつかの住居跡ではどうしても意図的な配置がなされたものと思われるものがあった。これについては遺構のところで詳述する。

また、遺構の深いところでは遺物の堆積状況によっては層的に分離できそうなところもあった。ただ、現場での詳細な検討は行えなかった。

第Ⅴ章　調査の成果

第１節　旧石器時代の遺物（第５図）

本遺跡では、明らかに旧石器時代のものと考えられる遺物は１点のみである。もう１点この時期の遺物としてもよかろうと思われるものがあり、共に記述する。

まずＳ－001は、Ｃ－２グリッドから出土したナイフ形石器である。出土した層は、縄文時代後期の包含層にあたるⅡｂ～Ⅲ層上面付近であった。安山岩製で、長さ4.6㎝、幅1.7㎝、厚さ1.1㎝を計る。横長の剥片を利用し、右側縁下半部には裏面から、左側縁には裏面に加えて、稜上からも刃潰し加工を施している。先端部は欠損している。裏面は剥離面をそのまま残している。

もう１点のS－002は、Ｂ－２グリッドの後世に掘られたイモ穴中から出土した黒曜石の剥片である。長さ2.05㎝、幅1.25㎝、厚さ0.4㎝を計る。両端は欠損しているため本来の長さは不明である。両側縁には使用痕と思われる微細な剥離痕が顕著に認められる。何か付着しているため、器表面の様子が不明確であるが、細石刃の可能性が考えられる。幅が細石刃としてはやや広すぎるきらいはあるが、この側縁についた使用痕は縄紋時代後期のものに比べて細かく、旧石器的な特徴を持つためここで取り上げた。

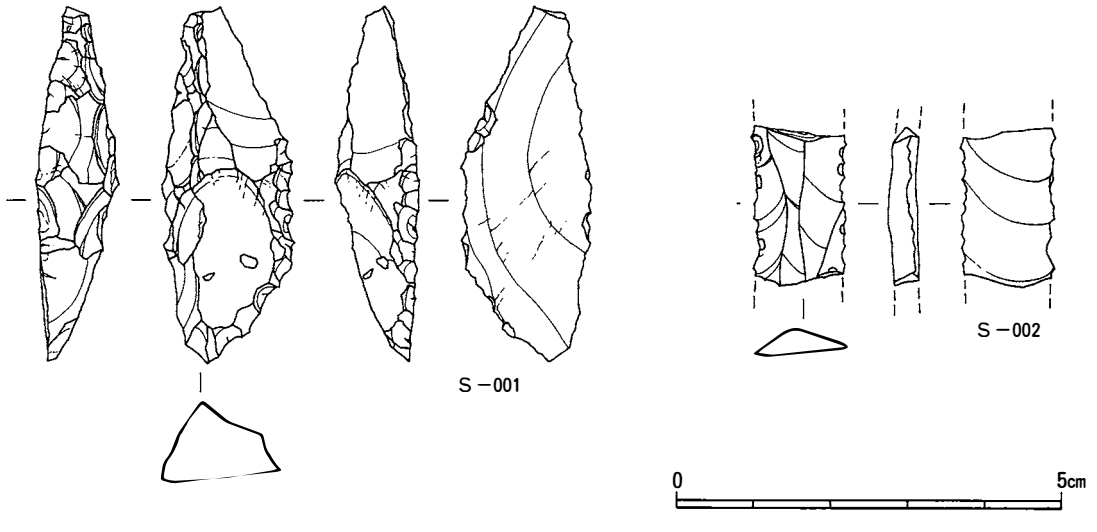
この調査区内には複数の確認トレンチをあけているが、他にこの時期にともなうような遺物は出土していない。層序のところでも触れたが、この遺物の含まれると思われる層はⅣ層からⅤ層にかけてであり、かなり良好に層序は残されている。今回の調査域に近接して遺跡の存在する可能性は大きい。さらに今後の調査状況によってはさらに類例は増え、本来の遺跡が確認されるのではないかと思われる。

第２節　縄文時代の遺構と遺物

１　縄文時代の遺構

(1

本遺跡では、縄文時代後期末の御領式土器の時代を中心として、それ以前の早期の押型文土器や塞ノ神式土器、前期の轟式土器、後期の三万田式、太郎迫式、御領式土器、晩期の天城式土器などが出土した。その分布域は、いくつかに分けられる。その中で、遺構との関係でとらえられるのは、御領式土器の時期以降である。



第５図　石器実測図(1

早期から前期の土器は、主に調査区の西側の地域に集中する傾向がある。また、後期後半の土器もその傾向に似通っている。

後期後半の土器（三万田式、太郎迫式）は第Ｉ調査区の西側であるＡ－１・２，Ｂ－１・２，Ｃ－１・２グリッドなどに限られる。また、この付近は調査の当初住居跡を想定した場所であり、遺物がやや集中する場所もあり、何らかの遺構があった可能性はあるが、検出することができなかった。

縄文時代後期末（御領式）の遺構は主にＡ・Ｂ・Ｃ－３～５、Ａ・Ｂ・Ｃ－７～９に集中し、多くの住居跡と土坑が確認された。ただ、その分布域が大きく２箇所に分かれるが、それぞれ若干の時期差もしくは遺構の性格差があるようである。以下にそれらのことを踏まえて詳述する。

まず、遺構番号に関して、調査区全体での凡例を大まかに述べておく。遺構番号は確認できた遺構から順に番号を振っていったために位置や遺構の種類に統一性がない。また、当初遺構としてとらえていたものの調査を進めるうちに地形的な落ち込みに過ぎなかったとして削除したもの、調査途中に確認できなくなったものなどがある。それらの遺構の番号は消滅した状態になり、遺構番号が飛ぶ結果になった。これはすべての時代に渡っている。

縄文時代の竪穴遺構がＩ区から多く出土している。これらの竪穴遺構は、住居跡と考えられるものとその他の土坑と考えられるものに大きく分けられる。調査時には竪穴遺構のうちいくつかの条件を備えたものを竪穴住居跡ととらえた。その条件とは、炉跡の有無・掘り込み・床面の状況・柱跡の有無や状態などによって竪穴住居跡とそれ以外とに分けた。遺構の名称としては、住居跡を「SI－」の記号を付した番号とし、それ以外を「SK－」の記号に番号を付した。また、焼土を伴う土坑が出土したが、これは性格がはっきりしなかったため「SX－」の記号を付した。

遺構の配置は偏りがあり、大まかに２つのブロックに分けられる。Ａ・Ｂ・Ｃの２・３グリッドとＡ・Ｂ・Ｃの５・６・７の部分である。この２つのブロックに含まれる遺構にも若干の違いがみられる。それは西側の遺構群が東側の遺構群に比較して大きいということである。これは遺構の認識状況の差による可能性もあるが、見掛け上は差があるものと思われる。

ただ、調査した部分が限られていたため、南側の調査区外に遺構が延びている可能性が大きく、みてくれの偏りには修正を加える必要があろう。

では以下に順を追って遺構の状況を述べる。

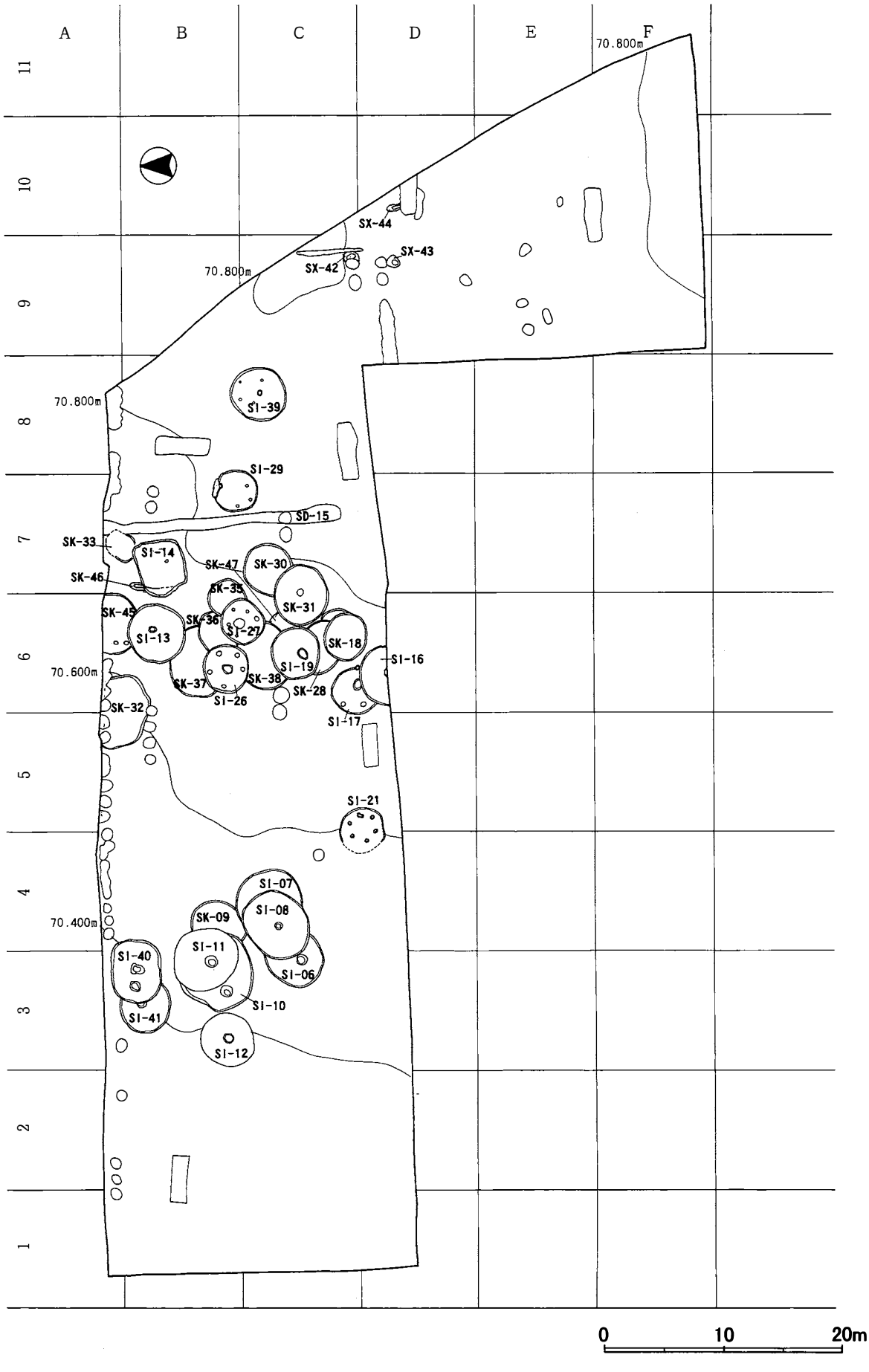
○SI－05

当初、Ｂ－１グリッドからＣ－１グリッドにかけて楕円形の遺構らしき輪郭を確認していた。しかし、ごぼう作付けによる細長い溝が走る旧畑地のため旧地形が畝状に残り、さらに遺構の確認層も削平されているようであった。このため、確認作業を続けても充分に遺構の確認ができなかった。ただ、硬化面と思われる面は一部確認できた。この一帯には遺物が集中する傾向があり、しかも炉かと思われる焼土の集中する一帯もあった。しかし、遺構として明確に輪郭は引けないままであった。また、柱跡なども確認できなかった。このため図を記載していない。

○SI－06（第７図上）

この遺構は調査区の西側に位置し、Ｃ－６グリッドからＣ－４グリッドにかけて検出した。平面形は長径が5.2m、短径が4.6mを計る南西から北東に延びた楕円形を呈している。遺構検出面からの深さは約２～３㎝でかなり浅く、ほとんど床面ばかりが残る状況であった。埋土も薄く残るだけであったが、焼土粒子と炭化物粒子を多量に含む明褐色土で、あまりしまっていなかった。

硬化面は炉の周りに部分的にみられたが、あまりはっきりはしていない。南西から北東に延びた楕円形を呈している。遺構内にいくつかの浅い落ち込みはあったが、いずれも５㎝前後とごく浅く柱跡ではないと判


A
B
C
D
E
F
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
70.800m
70.800m
70.800m
70.600m
70.400m
SX-44
SX-43
SX-42
SI-39
SI-29
SD-15
SK-33
SI-14
SK-46
SK-47
SK-30
SK-35
SK-31
SK-45
SK-36
SI-27
SI-13
SK-18
SI-16
SI-19
SK-37
SK-38
SK-28
SI-26
SK-32
SI-17
SI-21
SI-07
SI-08
SK-09
SI-11
SI-40
SI-06
SI-10
SI-41
SI-12
0
10
20m

第６図　遺構配置図（Ⅰ区）

断した。しかし、並び方からこのくらいの深さでも柱としてよいのかもしれない。

炉跡は中央よりやや南に位置し、径が約１ｍの円形を呈する地床炉である。床面からの深さは20㎝ほどである。埋土の上面には焼土の粒子が厚く堆積し、その下面には焼土と灰を含む堅く締まった面を形成しており、よく火を受けていたことが窺われる。

○SI－07（第７図下）

この遺構は調査区の西側に位置し、Ｃ－７グリッドを中心に一部Ｂ－４グリッドにかかる位置にある。SI－06、SI－08と切り合い関係にあり、断面観察によりSI－06に切られているが、SI－08には後続すると判断した。

平面形はNNW～SSE方向にやや延びた楕円形を呈し、長径が5.7ｍ、短径が5.1ｍを計る。

遺構検出面から床面までの深さは、約６～８㎝ほどでごく浅い。これも本来の遺構の掘り方ではなく削平された結果であろう。柱跡は一本だけ確認した。径が15㎝程で深さが25㎝ほどの円形の浅いものである。他にも柱跡の可能性のあるものがあったが、充分に確証が得られなかった。

床の硬化面は炉の東側に幅1.5ｍほどの範囲に広く広がる。一部は東側の壁の方向に延びており、入り口の可能性もある。

炉跡は中央よりやや西にあり、長径が110㎝、短径が90㎝の楕円気味の落ち込みで、深さは30㎝ほどでありやや大きめの地床炉である。炉の埋土は３層に分かれ、①層は明褐色の土で焼土粒子と炭化物を含み、しまりがない。②層は焼土層の中心で焼土のブロックを多く含みやや締まっている。③層は焼土粒子をわずかに含みよく締まっており、熱により焼きしめられた部分と思われる。

遺構全体の埋土は細かい焼土粒子と炭化物をわずかに含んだやや堅めの土である。分層はできなかった。

SI－08は本遺構の西側を切っている。

○SI－08（第８図上）

この遺構は調査区の西側に位置し、Ｃ－３グリッドからＣ－４グリッドにかけて検出した。SI－07、SI－06と切り合い関係にある。断面観察によりSI－07に切られていると判断した。

平面形は長径が6.2ｍ、短径が5.2ｍを測り、南西から北東に延びる楕円形を呈している。遺構検出面からの深さは約12㎝前後と浅い。全体的に大型のものである。

埋土は焼土粒子と炭化物の粒子を多く含む土で明褐色を呈す、あまり締まりのない土である。炉跡は遺構のほぼ中心に位置し、直径が約70㎝の円形を呈する地床炉だる。床面からの深さは、約12㎝を計る。炉の埋土は焼土粒子と炭化物の粒子を多量に含んでいる。また、砂粒もかなり含まれている。最下面はよく焼けて締まり硬化している。

柱跡は５本確認した。径が30～40㎝程で、深さが床面から16～20㎝ほどのものである。柱自体の痕跡は得られなかったが、底面に径12㎝ほどの落ち込みのあるものもあり、柱の痕跡の可能性を示唆している。

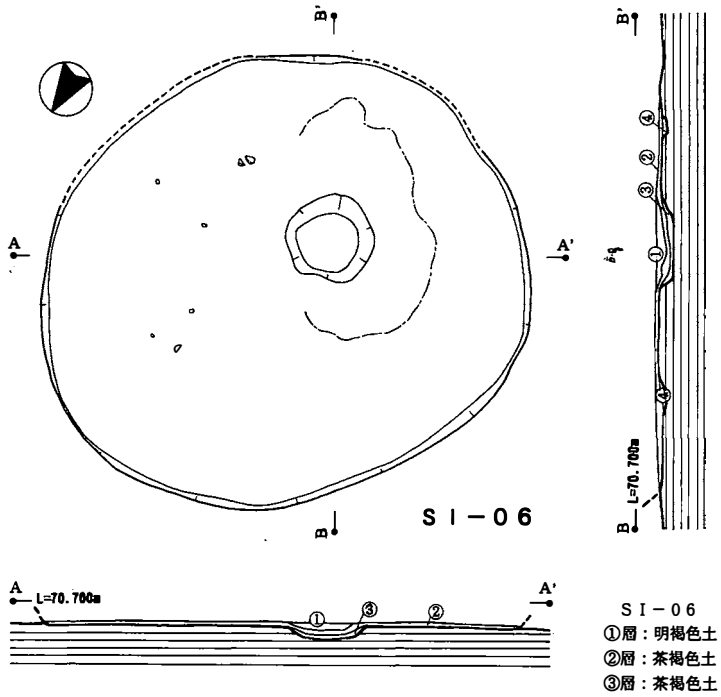
遺物の出土は残存する壁面が浅いため、床直の遺物は非常に少ない。しかも遺構内での接合関係は少なく、僅かな個数に過ぎなかった。

○SI－10（第８図下）

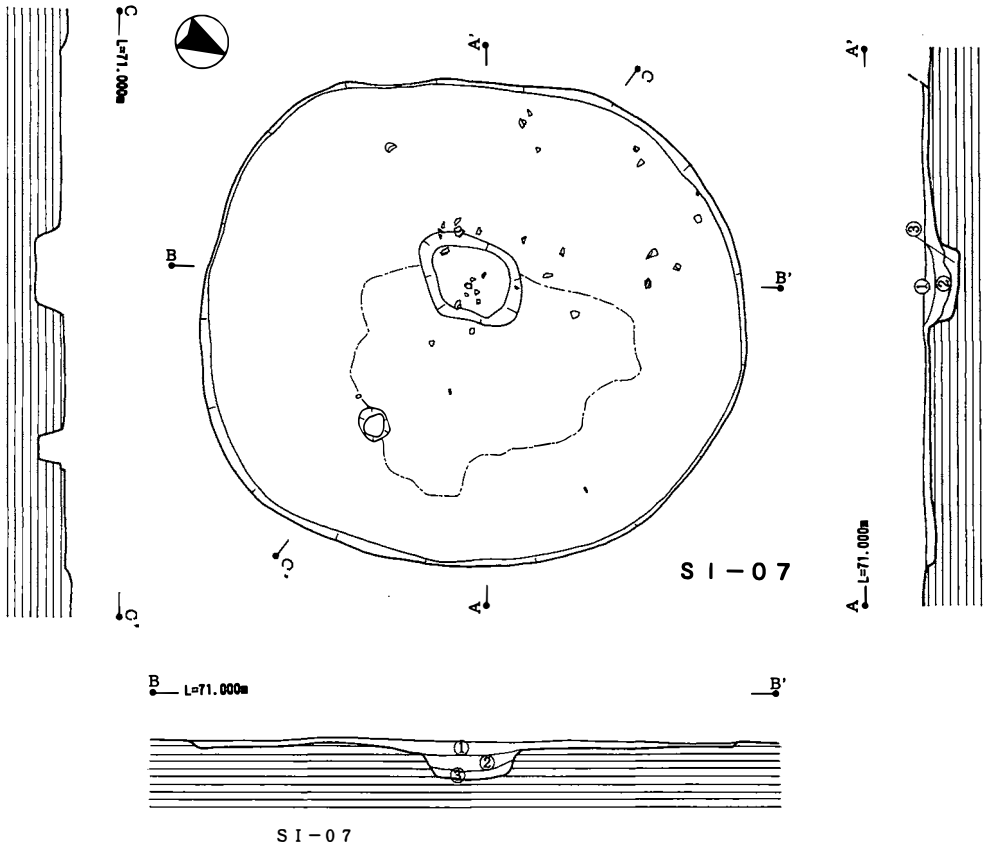
この遺構は調査区の西側に位置し、Ｂ－３・Ｂ－４グリッドを中心に一部Ｃ－３グリッドにもかかる。SI－11と切り合い関係にある。

直径は6.0ｍ～6.4ｍを計り、やや不正形である。確認するのがかなり困難を極め、一度掘り下げたラインが間違っており、再度土層断面や床面などの状態から確認したところ、図の長波線のようになった。本来の形は直径6.0ｍほどの円形である。

SI－11との切り合いを確認できず、北西側に若干掘り込みを大きくしてしまった。遺構検出面からの深さ



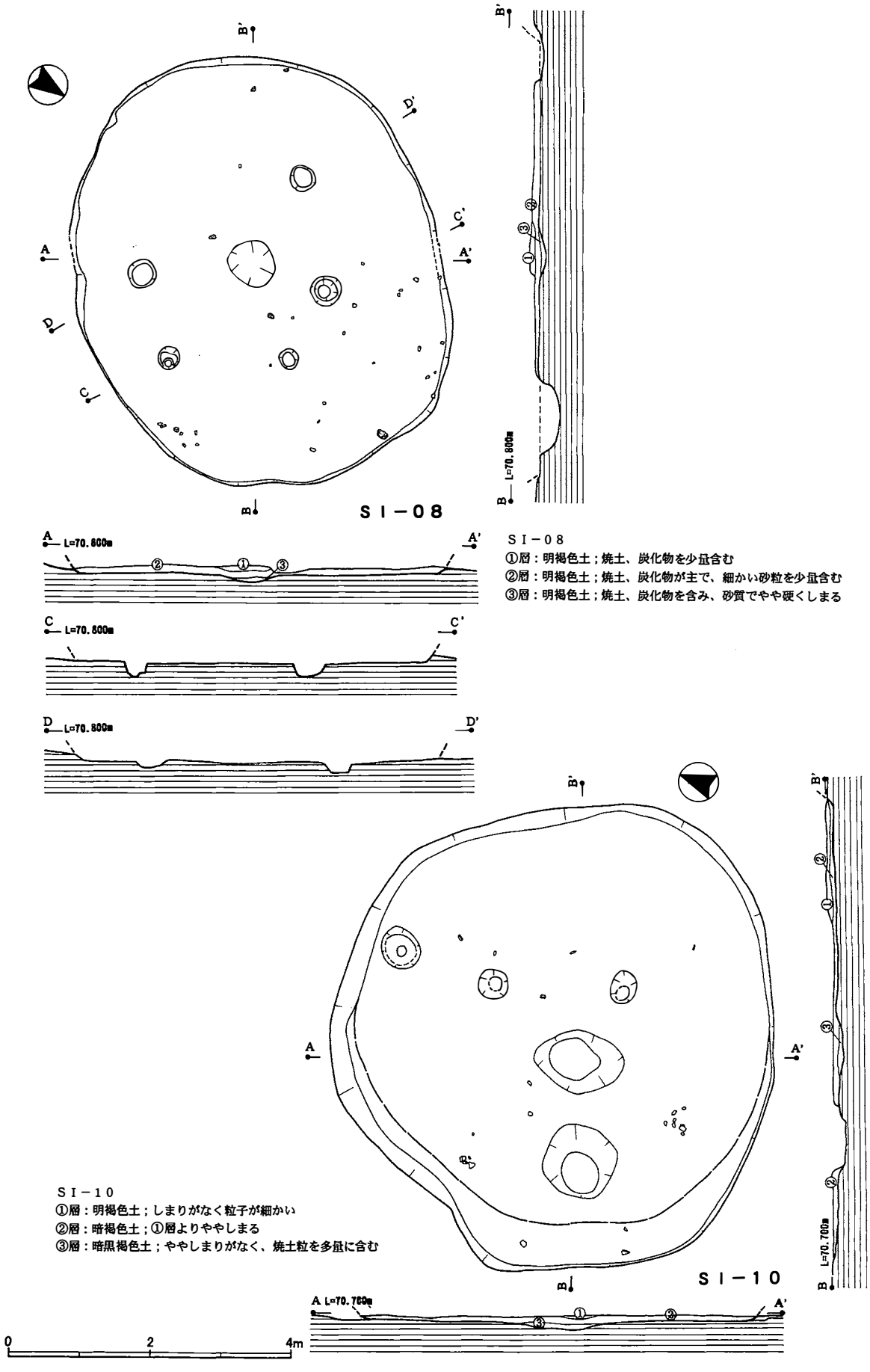
SI－06
①層：明褐色土；粒子が粗く、焼土粒を多く含む
②層：茶褐色土；ややしまっており、焼土粒を少し含む
③層：茶褐色土；硬くしまっており、焼土粒を微量含む
④層：明褐色土；硬くしまり、砂粒と微量の焼土を含む



SI－07
①層：明褐色土；ややしまりがなく、焼土と炭化物を含む
②層：明褐色土；粒子は細かいが、炉部分には焼土のブロックを多く含む
③層：明褐色土；焼土が混入し、砂粒が多く硬くしまる

0　2　4m

第７図　竪穴遺構実測図(



第８図　竪穴遺構実測図(2)

は10cmから20cm程である。埋土もSI－11との関係からわかりにくかったが、焼土と炭化物の粒子が混じった締まりのない明褐色土とその下層の暗褐色土である。

床面も硬化面が確認できず、やや掘り過ぎた可能性がある。柱穴と思われるピットは３つ確認したが、はたしてこれで建つのか疑問である。

炉は２つ確認したが、いずれも中心より南西に偏っている。中心により近い方がSI－10の炉跡であり、長径130cm、短径80cmの楕円形を呈している。床面からの深さは８～10cmほどあり、埋土は２層に分かれる。上層はこの遺構全体の埋土であり、この部分ではより焼土粒子の量が多い。その下層は暗黒褐色を呈するが、焼土粒子も多く含む。その下部は堅く焼けて締まっていた。これらの炉も地床炉である。

出土遺物は少なく接合資料も少なかった。

○SI－11（第９図上）

この遺構はSI－10と切り合い関係になるもので、Ｂ－３グリッドを中心にＣ－３、Ｂ－４グリッドにも入る。確認するのが非常に困難で、土層断面のためのベルトと床面と思われる部分に残る焼土と炭化物の細粒子によりかろうじてSI－10との関係をとらえ、遺構の範囲を推定することができた。その結果SI－10が新しくSI－11を切っていると判断される。

部分的に壁面が残るものの、大部分は床面の痕跡が確認された。痕跡と残された部分を基にして輪郭を想定すると、直径が5.3mのほぼ円形を呈している。

残りのよい部分では、床面までの深さは8cmほどを測るが、かなりの部分は削平によって壁がほとんど消失しているか、床面までも消失している部分もあった。遺構と想定した範囲は焼土粒子と炭化物粒子が含まれていることと、若干の土の柔らかさによったものである。

炉跡は中心よりやや南西に偏り、長径102cm、短径92cmを計る東西に延びた楕円形を呈する地床炉である。埋土は二層に分かれ、上層の焼土と炭化物を多量に含む明褐色土とその下の焼土と炭化物を僅かに含む砂粒の多い層である。深さは確認面から約22cmで、床面からは12cmを計る。

床面の硬化面と思われる部分が僅かに炉の周りにあるようであったが、それほど明確ではなかったので図化していない。

柱穴は確認できなかった。

○SI－12（第９図下）

Ｂ－３グリッドを中心に一部Ｃ－３グリッドにもかかる。SI－11と一部接する。ゴボウ穴による攪乱のため非常に遺構の確認ができにくかった。したがって、床面近くでの確認となり、一部残りのよい部分などで輪郭を補った部分もある。

直径が4.4m～4.6mのほぼ円形を想定することができた。かなり残りは悪く床面でどうにか検出でき、そこからさらに残していた土層観察用のベルトによって遺構の埋土を再確認した状態であった。

埋土はほぼ一層で微量の焼土と炭化物を含む明褐色の土である。炉の付近では、この層も焼土粒子が多くなり、締まりもない。炉の下層では含まれる焼土と炭化物は少なく堅く締まるようになり、炉の床面となる。

炉跡は中心よりやや南東に偏り、長径86cm、短径74cmの楕円形を呈する地床炉である。

柱跡かと想定したものがいくつかあったが、掘り下げるとごくわずかの深さしかなく柱跡としては不適切として図化していない。

○SI－13（第10図上）

Ｂ－６グリッドでは遺物がかなり多く集中している部分があり、出土していた遺物を取り上げながら輪郭を検出した。

検出した遺構は直径が4.7～4.9mのほぼ円形で、検出面からの深さが12cm程である。埋土はほぼ２層に分

層でき、①層は焼土と炭化物を含み、柔らかい赤橙色土である。②層は焼土と炭化物を含み、よく締まった暗褐色土である。

硬化面は検出できなかった。また、柱跡も検出できなかった。

炉跡は中心部よりやや北東方向に偏った地床炉である。形は当初考えていたよりも広がり、長軸方向が1.3m、短軸方向が1.14mのやや方形ぎみの楕円形である。掘り込みは床面より24cmを計り、かなり大きめである。埋土は遺構の埋土の範囲で捉えられるが、②層は焼土と炭化物を多量に含み、よく締まった赤褐色土である。その最下部は焼土粒と炭化物を僅かに含み、さらさらした砂粒状の土となっている。床面は堅くよく締まった土である。

遺物の数量は本遺跡中でもかなり多く、①層と②層の途中でやや遺物の出土に間層が入りそうである。また、床面近くに台石や石皿が出土している。石皿にはやや壁に接近したＳ－118があり、火を受けている。この遺構で出土した石器は火を受けたものが多く、特徴的なこととして付記しておく。

○SI－14（第10図下）

Ｂ－５グリッドにあり、SI－13と東西に並ぶように検出された。この遺構はやや不成形の方形のもので、本遺跡では唯一のものである。確認した当初は円形の土坑と誤認していたために、遺物を取り上げ、輪郭を確認しながら掘り進めるうちに方形の竪穴遺構であることがわかった。南北約4.0m、東西約4.0ｍを計るが、北東～南西方向に歪み、ひしゃげた菱形を呈している。

埋土は大きく３層に分けられる。①層は茶褐色のやや締まりのある土で、遺物をかなり含む。②層は①層よりも締まっており、茶褐色を呈する土である。焼土や炭化物の含有量は少ない。③層はよく締まった暗褐色の土で焼土をわずかに含む。この上層まで遺物が入っている。

遺構検出面から床面までの深さは約30cmほどである。

床面の中央部付近には、約1.8m四方に渡って非常に堅く締まった硬化面が検出された。

この中央部付近には炉跡と思われる掘り込みもあり、焼土もわずかに残っていた。ただ、床面から僅かに５cmないほどであるため、はたして炉跡といえるか不明確であった。

そのやや南側には径25cmほどの円形の柱跡がある。床面からの深さが10cmほどであり、かなり浅めのものである。

調査中は上で確認した円形という形に囚われ、途中まで円形をもとにして掘り下げていたため、壁を掘り過ぎてやや不正形になった部分もある。

この遺構からは多量の遺物が出土したが、大きく上層と下層の２面に分かれる。上層は①層から②層の上面にあたり、当初埋設土器ではないかと考えた深鉢がある（第29図Ｐ－138・139)。この遺構のほぼ中心部にあり、横転した状態で出土した。ただ、口縁部まではなかった。下層は③層の上面付近である。

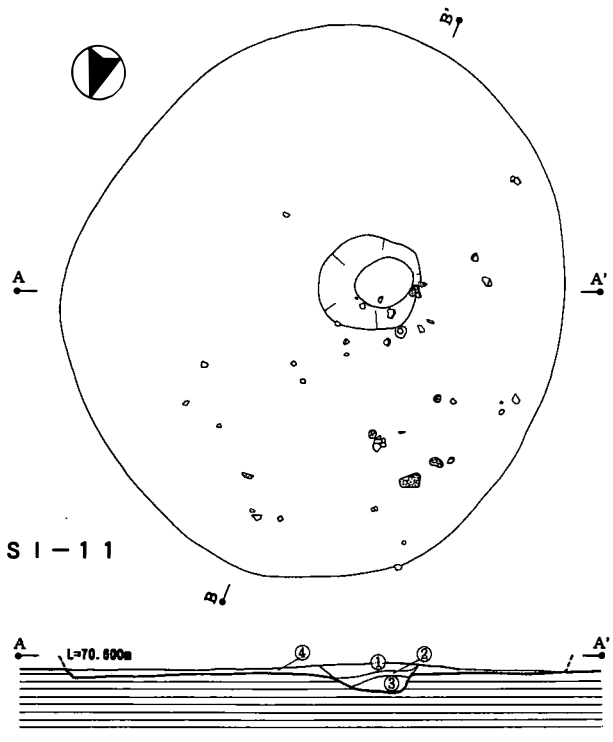
多くの遺物が出土している割には接合できる資料が少ない。まとめて廃棄したものか、寄せ集められたものであろう。

下層の遺物では、石棒と土偶の頭部、双刃の磨製石斧の出土がある。石棒と磨製石斧はかなり近接して出土しており、出土高もほぼ等しい。石棒は一方の側が石斧状を呈するもので、北方向に頭部を向け、刃部の方がややレベル的に下がった状態で出土している。このため、その付近に立てられていたものが倒れた可能性もある。

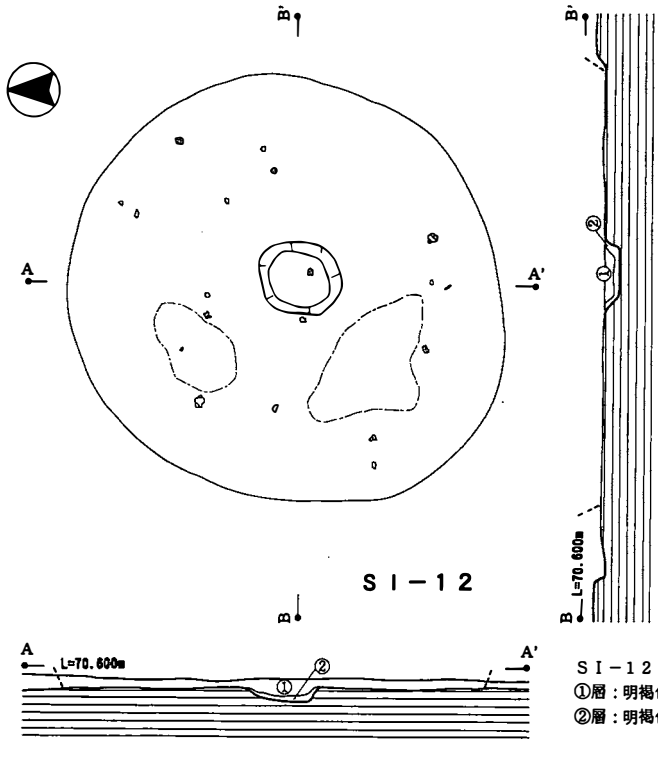
土偶の頭部は石棒より北方向に１ｍほど離れた位置で、顔面を下にした状態で出土した。この遺構内に胴体部以下は出土せず、調査区内でもこれにつながるものは出土しなかった。

○SI－16（第11図上）

Ｄ－６グリッドで検出したものであるが、遺構の南半分は調査区外であるため全体像は不明である。



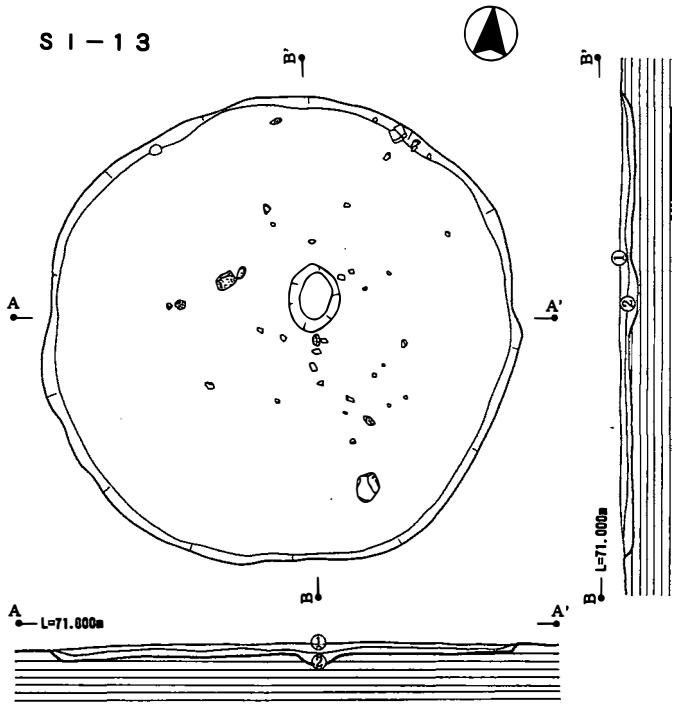
SI－11
①層：茶褐色土；やや硬くしまり、焼土粒を含む
②層：茶褐色土；①層よりしまりがなく、焼土を多く含む
③層：茶褐色土；しまりがなく、焼土、炭化物を含む
④層：茶褐色土；硬くしまり、細砂粒を含む



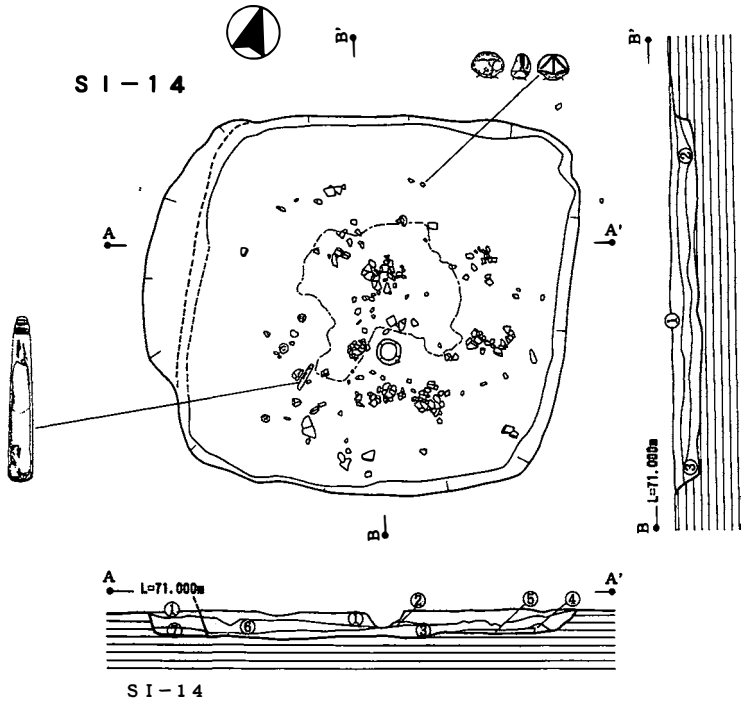
SI－12
①層：明褐色土；しまりがなく、焼土粒を多く含む
②層：明褐色土；焼土粒を少量含み、①層よりもしまりがない

0　2　4m

第９図　竪穴遺構実測図(3)



ＳＩ－１３
①層：明褐色土；焼土、炭化物を多く含み、しまりがない
②層：明褐色土；よくしまり、焼土、炭化物を多量に含む



ＳＩ－１４
①層：茶褐色土；焼土を含み、ややしまりがある
②層：暗茶褐色土；焼土、炭化物を含み、ややしまりがある
③層：暗褐色土；焼土、炭化物をわずかに含み、よくしまる
④層：暗茶褐色土；焼土、炭化物をわずかに含み、ややしまる
⑤層：暗茶褐色土；焼土、炭化物を含み、ややしまる
⑥層：茶褐色土；焼土、炭化物を含み、②層に比べるとやや暗い

0　2　4m

第10図　竪穴遺構実測図(4)

推定であるが、直径が4.9mでその中心部に炉跡を有する。検出面からの深さは10cmであり、浅い方である。この遺構は調査区の端にあることにより調査区の壁面で掘り込みの状況がわかるかと思われたが、畑地の耕作によって表土層の10cmが攪乱を受けていたため結局は先の深さしかわからなかった。

埋土の土層は大きく２層ほどに分けられる。上層が焼土と炭化物を含む明褐色土である。下層もよく似るが、やや締まった状態の明褐色土である。

床面には硬化面と確認できるような部分はなかった。

炉跡は壁にかかる部分で検出されたが、確認できた範囲では直径が70cmほどの円形と推定され、床面からの掘り込みは浅く、５cm程しかなかった。これも地床炉であろうか。炉内の焼土はよく締まった赤褐色土で、その最下層は堅く締まって砂粒が含まれる暗褐色土である。

出土遺物は割と少ない。

○SI－17（第11図中）

SI－16と切り合い関係にあり、SI－16によって切られている。遺構はＣ－６グリッドとＤ－６グリッドにかかる。

平面形は長軸が推定で4.04m、短軸が3.84mを計り、南北方向にやや延びる。

検出面からの深さは10cm前後を計る。埋土は大きく２層に分かれ、上層は暗褐色の柔らかい土で焼土と炭化物の粒子を含む。下層は暗褐色土で上層よりやや締まっている。

中心部よりやや南西の位置に炉跡がある。長径1.2m、短径0.74mの楕円形を呈しており、南東～北西方向に長く延びる地床炉である。床面からの深さは６cmほどであった。埋土は二層に分かれる。上層は③層で、遺構の埋土層である。

柱跡かと思われるものを３～４つ確認したが、発掘するといずれも径が40cm内外で、深さが４cm前後と浅く柱跡とするには難があった。

○SI－19（第11図下）

Ｃ－６グリッドで検出した。SK－28と切りあい関係にあり、土層観察によりSK－28をSI－19が切っている。

平面形は長軸方向が4.6m、短軸方向が4.2mを計り、南北方向にやや長い楕円形を呈する。

検出面からの深さは12cmほどである。埋土は大きく2層に分かれ、上層は炭化物や焼土の粒子を微量含む明褐色土である。締まりはさほどなく柔らかい方である。その下層は上層に比べ炭化物や焼土粒子の量が多くなり、やや堅く締まっている明褐色土である。

明確な硬化面は検出できなかったが、炉跡の周囲にやや硬い部分があった。

柱跡として不規則ながら５つのピットを確認した。いずれも直径が30cm前後を計り、床面からの深さが20cmほどであった。埋土は柔らかい茶褐色土で、焼土や炭化物の粒子を少量含む。

炉跡は遺構の中心部よりやや西によった場所にあり、長軸が1.04m、短軸が0.78mを計る北西～南東に延びた楕円形を呈する地床炉である。床面からの深さは32cmほどで
炭化物の量が多く、下面は堅く締まっていて炉底を呈している。

出土遺物のうち特に顕著なものとして双刃磨製石斧がある。これは炉に近接した柱穴の付近から出土した。

○SI－21（第12図上）

Ｃ、Ｄ－４、５グリッドの４つのグリッドにまたがり検出された。残念ながらこの遺構の検出されたところは南北に以前の畑の区画があった場所で、遺構全体の西側３分の１が削平されてしまっていた。

当初遺構として認識することができず、遺物が多量に集中することから住居跡の可能性を想定して、大まかに掘り込みラインを設定した。掘り進める中でやや想定ラインが西側にずれていたため修正を加えた。中

心付近を先行して掘り下げ、床面に至り硬化面を確認した。そこから床面を広げていって壁の立ち上がりを出した。

最終的に確定した遺構の平面形は一部推定ながら、3.9mの円形である。

掘り込みは遺構検出面から東側で20cmほどの深さである。埋土は大きく２層に分かれ、上層は焼土や炭化物の細かい粒子を含む柔らかい暗褐色土である。この土の色調や硬さなどは地山とあまり変わらず、確認に際して周囲の土との差が不明瞭で遺構のラインに誤りが生じた。その下層は炭化物や焼土粒子のあり方、色調などが上層と似通っているが、締まり具合が強く硬い。

硬化面は遺構の中心部に広くしかも明確に分布し、約２m四方に広がる。

柱跡は６個所検出した。遺構の中心から１m～1.2mの範囲にほぼ等間隔で配置されていた。一部不正形のものもあるが径が約30cmほどで、床面からの深さが12～20cmを計る。埋土はやや締まった暗褐色の土であった。柱痕跡は確認できなかった。

この住居跡には炉跡は検出されず、焼土の集中域もなかった。

○SI－26（第12図下）

Ｂ－６グリッドを中心に一部Ｃ－６グリッドにかかる位置で検出した。

平面形は長軸が4.2m、短軸が3.8mを計り、南北にやや長い楕円形を呈する。

遺構検出面から14～16cmほどの深さであった。埋土は大きく２層に分かれ、上層が焼土粒子と炭化物を含む締まりの弱い土で明褐色を呈する。

床面には炉跡を中心に弱いながらも硬化面が形成されている。硬化面の広がりはやや南西方向にずれる傾向があり、その方向に入り口などの施設があった可能性がある。

柱跡は５個所確認した。炉の周りに1.4m～1.8mの間隔で分布する。一個所2.2mとかなり離れた部分もあるが、これも確認できなかっただけでその間に存在した可能性が高い。柱の穴は直径が40cm前後で、床面からの深さが10～12cmほどでやや深い。

炉跡は遺構のほぼ中心部にあり、掘り方により図上では不正形になったが、本来は径が80cm程の円形であったと思われる。これも地床炉である。床面からの深さは10cmとやや浅く、焼土の多く含まれる上層と、堅く締まり炭化物と焼土粒子をわずかに含む下層に分けられる。

○SI－27（第13図上）

Ｂ－６グリッドとＣ－６グリッドにまたがって検出された。

平面形は直径が3.7m～3.5mを計り、北東～南西方向にやや延びた楕円形を呈している。

遺構検出面から床面までの深さは8cm～10cmを計りかなり浅めである。埋土はほぼ１層で焼土と炭化物の細粒子を含みよく締まった土である。

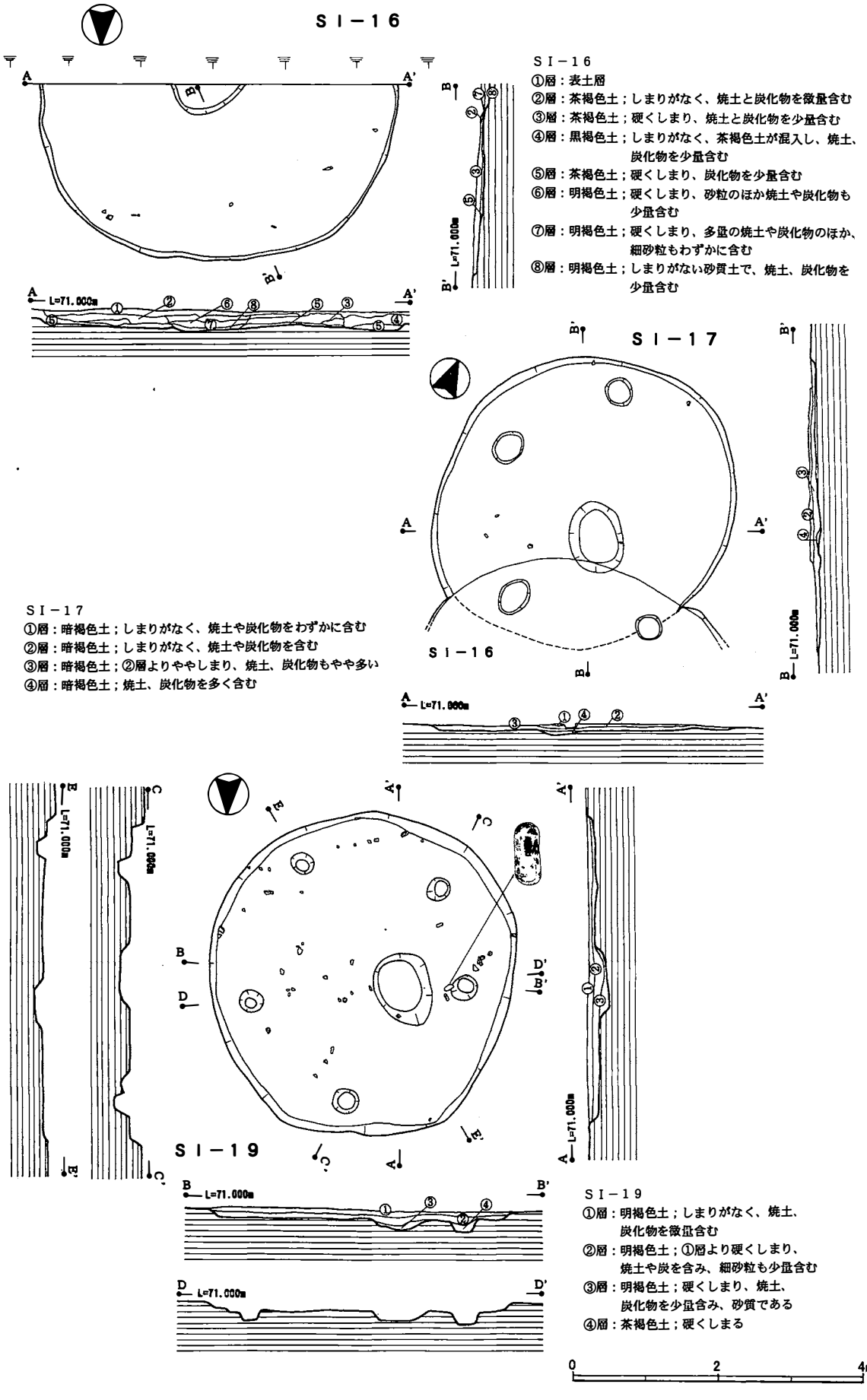
床面に硬化面は確認できなかった。柱穴は6個所確認した。大きさは22cm～32cmまでと、かなりばらつきがあるが、配置の仕方は１m～1.6mほどで割と規則性がある。床面からの深さは８cmほどで浅い。

炉跡は遺構の中心よりやや南東に偏る位置にある地床炉である。平面形はやや南に広がった円に近い楕円形を呈している。断面の形状はすり鉢状を呈している。

炉の埋土は２層に分けられ、上層は焼土粒を多量に含み締まった明褐色土である。下層は焼土粒を多く含みきめが細かく柔らかい暗褐色土である。

○SI－29（第13図下）

Ｂ－７グリッドを中心に一部Ｃ－７グリッド、Ｂ－８グリッドにもかかっている。遺構の集中部からは離れた位置にあり、何らかの特殊性があるのかもしれない。遺構の北側の一郭は電柱工事により１m×0.7mほどの広さで１mほど掘削されていた。

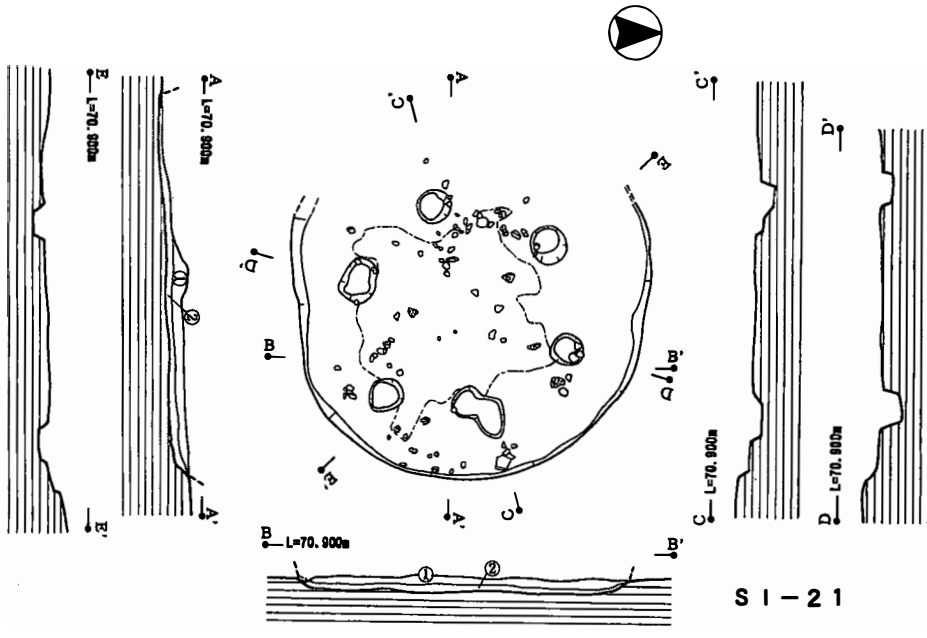


SI－16
①層：表土層
②層：茶褐色土；しまりがなく、焼土と炭化物を微量含む
③層：茶褐色土；硬くしまり、焼土と炭化物を少量含む
④層：黒褐色土；しまりがなく、茶褐色土が混入し、焼土、炭化物を少量含む
⑤層：茶褐色土；硬くしまり、炭化物を少量含む
⑥層：明褐色土；硬くしまり、砂粒のほか焼土や炭化物も少量含む
⑦層：明褐色土；硬くしまり、多量の焼土や炭化物のほか、細砂粒もわずかに含む
⑧層：明褐色土；しまりがない砂質土で、焼土、炭化物を少量含む

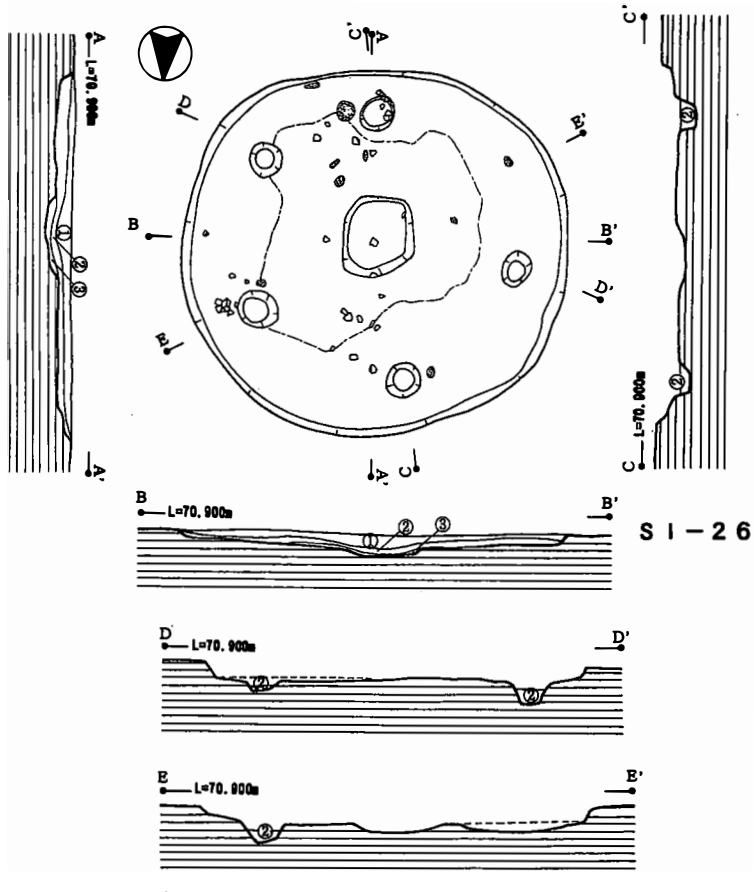
SI－17
①層：暗褐色土；しまりがなく、焼土や炭化物をわずかに含む
②層：暗褐色土；しまりがなく、焼土や炭化物を含む
③層：暗褐色土；②層よりややしまり、焼土、炭化物もやや多い
④層：暗褐色土；焼土、炭化物を多く含む

SI－19
①層：明褐色土；しまりがなく、焼土、炭化物を微量含む
②層：明褐色土；①層より硬くしまり、焼土や炭を含み、細砂粒も少量含む
③層：明褐色土；硬くしまり、焼土、炭化物を少量含み、砂質である
④層：茶褐色土；硬くしまる

第11図　竪穴遺構実測図(



ＳＩ－２１
①層：暗褐色土；しまりがなく、焼土、炭化物の細粒子を含む
②層：暗褐色土；よくしまっており、焼土や炭化物を含む



ＳＩ－２６
①層：明褐色土；しまりがなく、焼土粒を含む
②層：明褐色土；①層よりやや硬く、焼土粒と少量の砂粒を含む
③層：明褐色土；硬くしまり、砂粒や少量の焼土と炭化物を含む

0　2　4m

第12図　竪穴遺構実測図(6)

遺構の平面形は、径が3.6～3.5mのほぼ円形である。遺構検出面から床面までの深さは10cmほどでかなり浅い。床面には確実な硬化面が顕著に認められ、一部東側では壁近くまで延びている。また、柱からの穴も検出できなかったのでここに出入り口があった可能性がある。

柱穴は5個所検出した。5つの穴は1個所を除き1.1m～1.3mほどの間隔でほぼ等しい。1個所は先に述べた理由から検出できなかった。床面からの深さは10～12cmと浅い。

炉跡や焼土の集中などは一切検出できなかった。炉を伴わない住居跡と考えられる。この遺構を確認した当初は、遺物はさほど出土してはいなかったが、少し掘り下げるとかなり大型の破片まで出土した。しかし、接合作業においては接合する資料は少なかった。

○SI－31（第17図下）

C－6グリッドとC－7グリッドにまたがって検出された。遺構の北東側でSK－30と切りあい関係にある。土層観察によれば、SK－30によって切られている。

直径は4.6m～4.8mほどでやや東西方向に延びた楕円形状の平面形である。遺構検出面からの深さは、約14cmを計る。埋土は大きく2層に分かれる。上層は焼土粒子を多く含み、軟質の明褐色土である。下層は焼土粒子が少なくよく締まった明褐色土で、上層よりやや暗い。

この遺構のほぼ中央部には炉跡があり、直径が56cm～58cm程のやや小振りのものである。床面からの深さは6cmで浅く、埋土も焼土や炭化物を含むが堅く締まった土で、ほとんど掘り込みのない炉跡であろう。

焼土の量の少なさからみて使用期間も短かったものと思われる。

床面に硬化面及び柱穴などは検出できなかった。

遺物の出土量は割と多かった。

○SI－39（第14図）

C－8グリッドを中心に一部B－8グリッドにかけて検出された。この周囲には他に顕著な遺構は少なく、一番近い住居跡がSI－29で5mほど離れている。

当初ここに住居跡が存在するとはしておらず、SX－01として埋設土器状に2つの深鉢土器が出土していたのみであった。離れた位置でもあり、調査自体を後回ししていた経緯がある。いよいよ本格的にSX－01と命名し、残していた遺構の調査に取り掛かると、周囲に散布する土器の出土の仕方に疑問が生じた。そこで精査しながら遺物の出土状況と土の状況を観察していった。するとどうもこのSX－01を中心として遺物が同心円状に分布し、土自体も周囲と異なっているのが分かった。そこで確認した範囲を遺構と想定し掘り進めた。はたして下から遺物がまとまって出土しだした。さらに硬化面も確認できた。ただ、平面形がやや歪んでいたが、調査の進展とともに想定した輪郭が誤っており、さらに南側に広がっていくのが遺物の出土状況で確認された。この遺構は、最終的に平面形が直径4.6mの円形となった。

遺構確認面から床面までの深さが11cmを計る。埋土は大きく2層に分かれ、上層は焼土や炭化物の粒子をわずかに含み堅くよく締まった暗茶褐色土である。下層は上層に似た土であるが、さらに堅く締まりきめも細かい暗茶褐色土である。

床面には炉の南東側の1mほどの範囲と、南西側の壁面につながるような範囲に硬化面が形成されている。

柱穴として4個所確認したが、いずれも小型のもので直径が16cm～24cmを測り、床面からの深さが8cm程である。並びかたはかなり不規則である。これらのことからこの遺構自体の柱跡と考える訳にはいかない。

炉跡はこの遺構の中心部に位置し、長径が50cm、短径が24cmを計る南東～北西方向に長く延びた楕円形を呈する地床炉である。地床炉である床面からの深さは約30cmを計り、擂り鉢状になっている。埋土は大きく2層に分かれ、上層はきめが細かい柔らかい土で焼土や炭化物をあまり含まない暗茶褐色土である。下層は上層よりやや締まった土で焼土や炭化物を多く含んだ暗茶褐色である。

炉の付近は先述したSX－01が出土していたところであり、それらの土器を取り上げ少し下へ掘り下げると小型の深鉢土器が磨石の上に据えられており、それが倒れたような状態で出土した（第14図下）。この土器は特殊な形態であり他に類をみないが、御領式土器の範疇に入るようである。

それらの土器や石器類を取り上げると焼土が多く出土し、炉の北西側に広がっていた。さらに掘り進めると炉の壁から底にかけて張り付けたような状態で大型の深鉢形土器の破片が出土した。これらの土器片は同一個体ではなく単に大型のものを利用したようである。接合しても炉自体の一部を埋めるだけではあったが、組み合わせると炉の壁体となるようである。いわゆる「埋甕炉」であろう。このようなあり方を示す炉は唯一これだけであった。

○SI－40（第15図上）

Ａ－３・４グリッド、Ｂ－３・４グリッドにまたがった位置で検出した。SI－41と切り合い関係にある。SI－41をSI－40が切っている。

平面形は長径が5.6m、短径が4.4mを計る、東西に長く伸びる楕円形と確認した。ただ、形態的に他の住居跡に比べ、やや長すぎるきらいがあり、焼土坑が３個所（うち１個所はSI－41のもの）検出されており、このSI－40とした遺構はもう一つの遺構と重なっている可能性が強い。しかし、土層観察及び平面観察のいずれでもそれを確認できなかった。そこで一応一つの住居跡としてとらえておく。

遺構検出面からの深さはかなり深く、14cm前後を計る。埋土は２層に分かれ、上層は堅く締まった粒子の細かい土で、焼土粒子を含みやや赤みがかった明茶褐色を呈する。下層は上層に似るがやや黒さが強くなり、茶褐色を呈する。

床面には硬化面と呼べるほどの土の硬化はないが、地山の土自体が堅い土となっている。柱穴を求めてかなり精査を繰り返したが、検出できなかった。

先に記したように３個所の焼土を伴う土坑があるが、そのうちの一番西側の壁近くにあるものはSI－41のものとして次に触れる。そこで、この遺構自体のものととらえた２個所の焼土坑を炉跡として述べる。

まず、この遺構のほぼ中心にあるものから述べると、掘り込みは南北側に長さ1.8m、東西に長さ約70cmを計る。床面からの深さは約22cmを計り、さらに中心より北側に深さ40cmほどのピットがある。このピットはこの炉穴に伴うか先行するものであろう。この遺構の埋土はブロック状の焼土を含み赤褐色を呈する上層と、上層よりも締まった土で焼土や炭化物の粒子をやや含む暗褐色土に分けられる。ピットの埋土は焼土粒子を多く含む暗褐色土で、底部はよく締まっている。

もう一つの炉跡は先のものの西側に位置し、80～100cmの径でやや北東～南西方向に延びそうである。床面からの深さは17cmを計り、擂り鉢状になっている。埋土は焼土と炭化物を多く含み、きめの細かなやや締まった暗茶褐色土である。

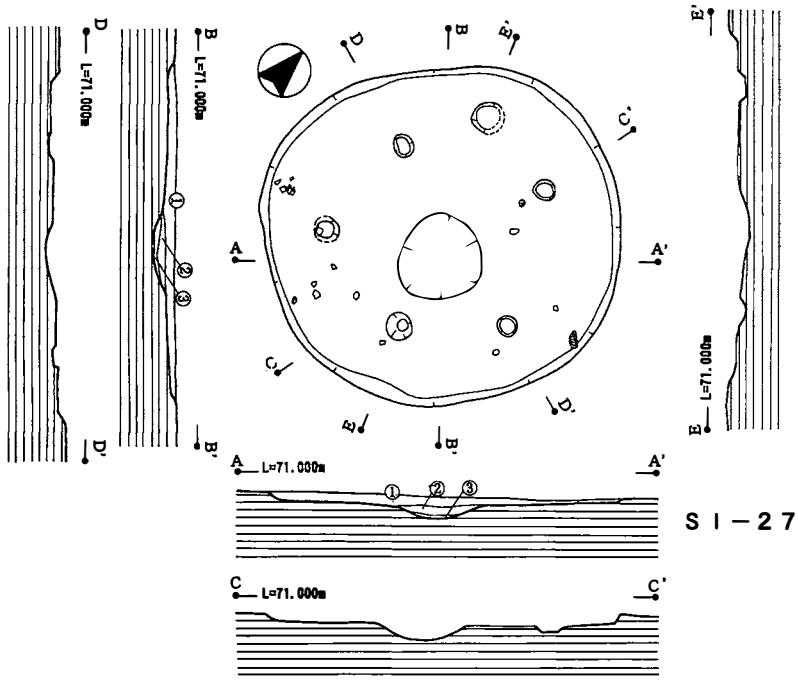
これらの炉がこの遺構に伴うとすれば地床炉である。

○SI－41（第15図下）

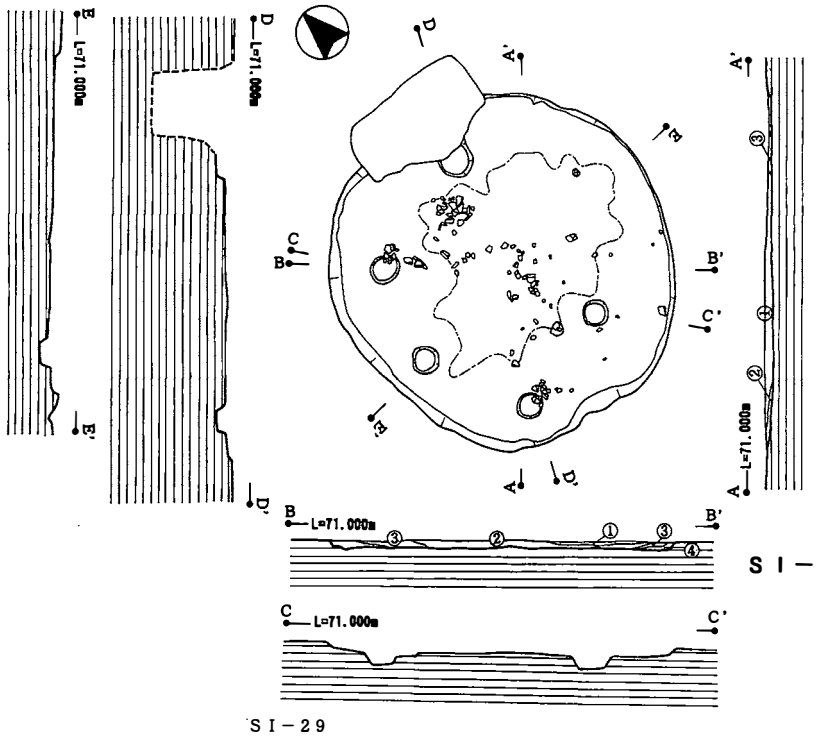
SI－40との切りあい関係である。SI－41が先行する。SI－40を調査中に炉跡が確認されたことによって、さらにSI－40の西側にもう一つ遺構がある可能性のあるものとして精査を行った。その結果この遺構を検出した。

平面形は一部遺構が切られてなくなっているが、推定によれば長軸が4.6m、短軸が4.0mを計り楕円形を呈する。遺構検出面からの深さは約10cmを計り、埋土は大きく２層に分かれる。上層はきめが細かく軟質の土で、焼土と炭化物を少し含む暗茶褐色土である。下層は上層よりもやや暗く締まりのある土で、暗茶褐色を呈する。

炉跡はすでにSI－40の調査中に確認されていたためその床面からの深さになるが、14cmを計る。埋土は大



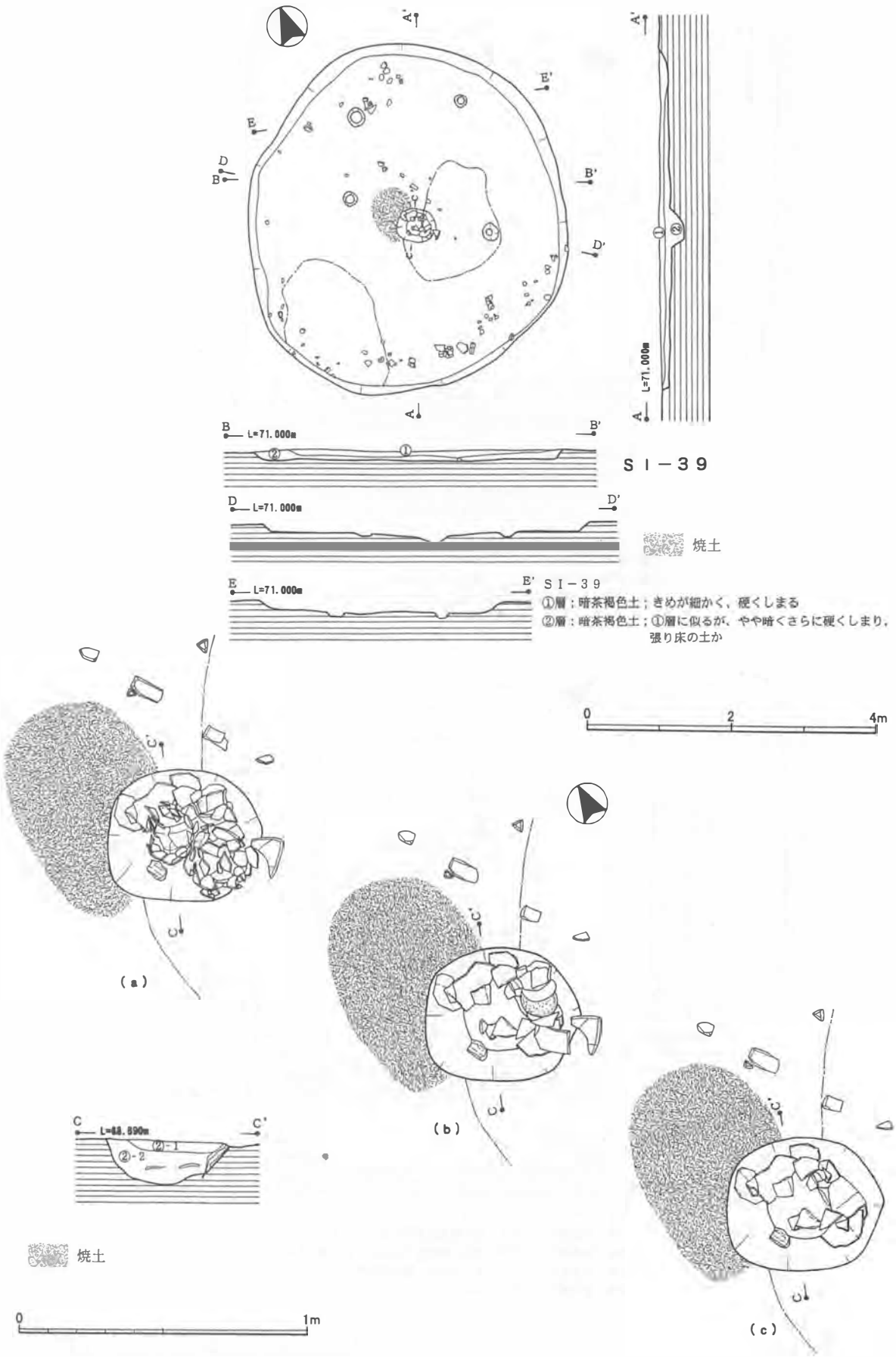
ＳＩ－２７
①層：暗褐色土；硬くしまり、焼土を含み、炉付近では多量の焼土が集中する
②層：明褐色土；焼土粒を多量に含み、硬くしまる
③層：暗褐色土；焼土粒を多く含み、きめが細かくしまりがない



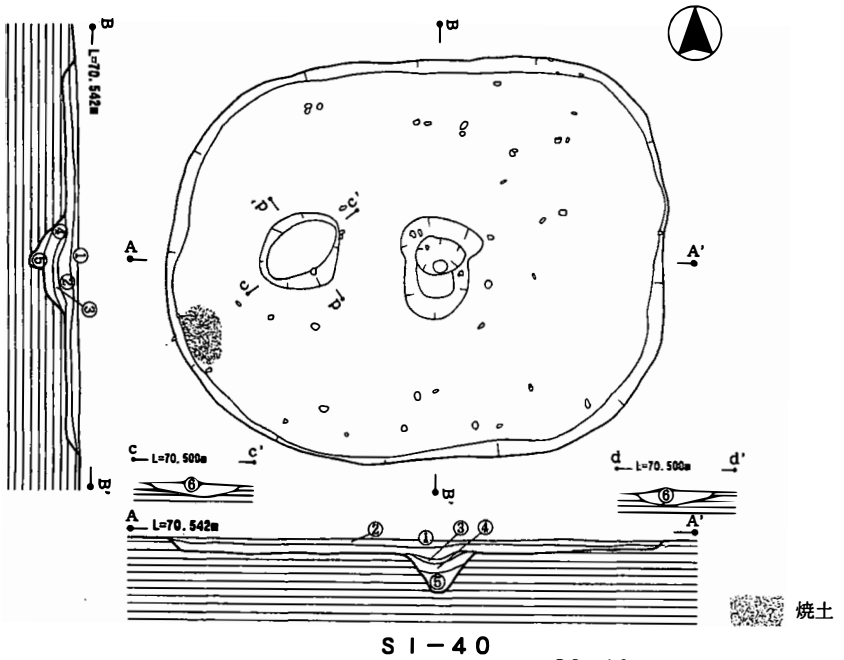
ＳＩ－２９
①層：明茶褐色土；焼土、炭化物をわずかに含み、しまりがない
②層：明茶褐色土；ややしまり、炉付近では焼土、炭化物をわずかに含む
③層：明茶褐色土；ややしまりがなく、粒子が細かい
④層：暗茶褐色土；ややしまる

0　2　4m

第13図　竪穴遺構実測図(7)

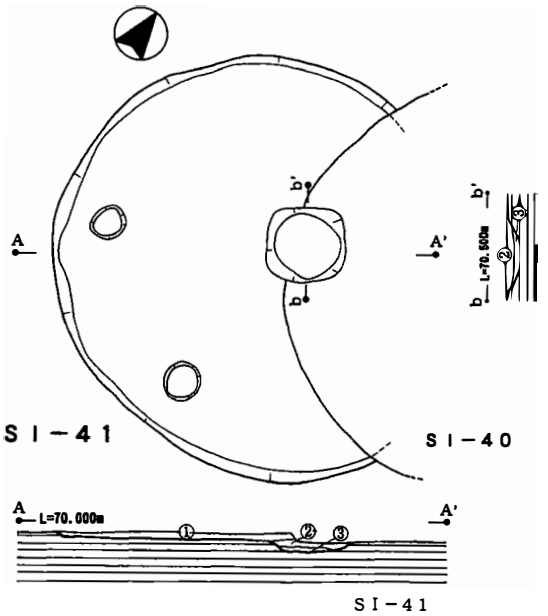


第14図　竪穴遺構実測図(8)

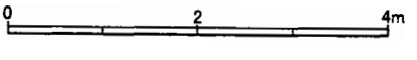


ＳＩ－４０

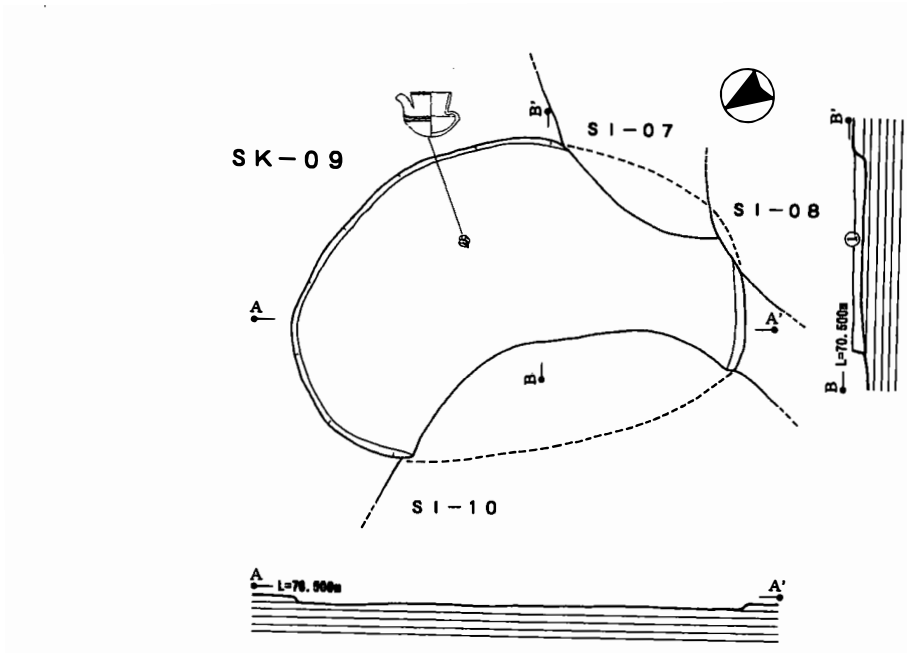
ＳＩ－４０
①層：明茶褐色土；硬くしまり、粒子が細かい
②層：茶褐色土；硬くしまり、焼土を含む
③層：茶褐色土；ブロック状の土を多小含む
④層：暗褐色土；焼土をやや含み、よくしまる
⑤層：暗褐色土；焼土を多量に含み、よくしまる
⑥層：暗茶褐色土；焼土と炭化物を多量に含み、
　　きめが細かい



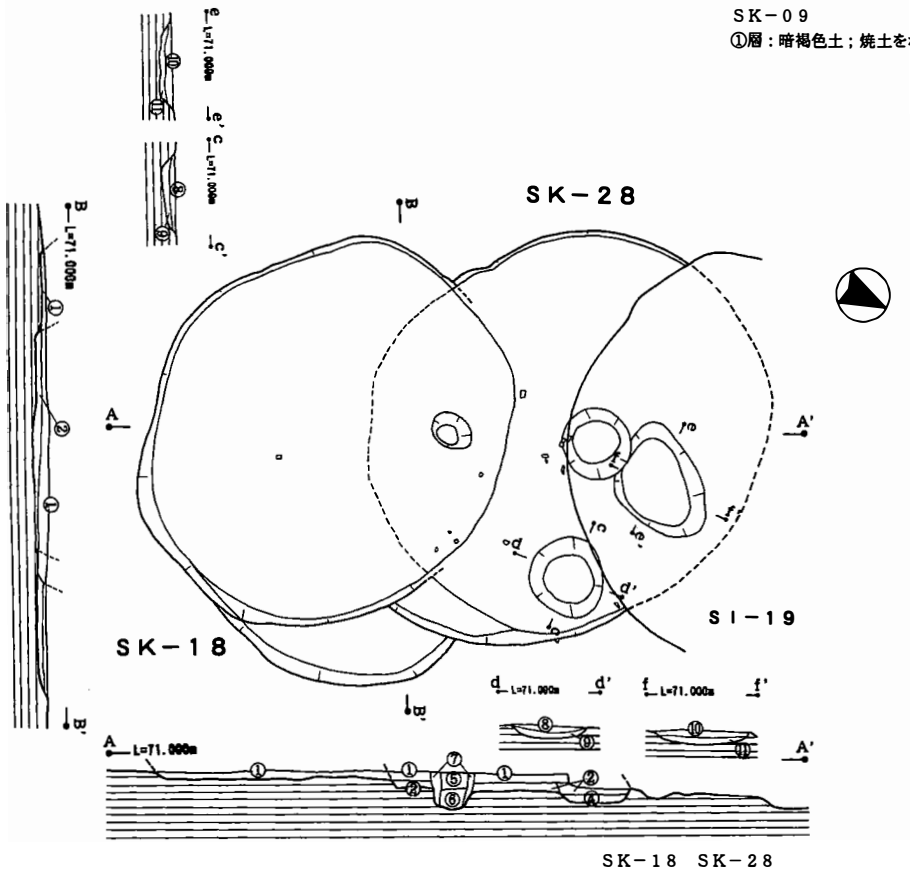
ＳＩ－４１
①層：暗茶褐色土；ややしまりがなく、炭化物、焼土を少し含む
②層：暗茶褐色土；炉内の埋土で、炭化物、焼土を多く含む
③層：暗茶褐色土；硬くしまり光沢があり、炭化物、焼土を少量含む



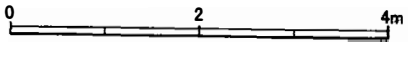
第15図　竪穴遺構実測図(9)



SK－09
①層：暗褐色土；焼土をわずかに含み、しまっている



SK－18　SK－28
①層：明褐色土；焼土や炭化物を微量含む
②層：明褐色土；硬くしまり、焼土や炭化物を微量含む
③層：明褐色土；硬くしまる
④層：明褐色土；焼土粒を微量含み、やや硬くしまる
⑤層：明褐色土；焼土粒、炭を少量含み、やや硬くしまる
⑥層：明褐色土；炭化物を少量含み、やや硬くしまる
⑦層：茶褐色土；焼土粒を少量含み、しまりがない
　　樹根またはモグラ穴の可能性有り
⑧層：明褐色土；焼土粒や炭化物を多く含み、やや硬くしまる
⑨層：明褐色土；焼土、炭化物を含み、硬くしまり砂粒を少量含む
⑩層：明褐色土；焼土粒、炭化物を多く含み、やや軟らかい
⑪層：明褐色土；焼土粒、炭化物を少量含み、やや砂質で硬くしまる



第16図　竪穴遺構実測図(10)

まかに２層に分かれ、上層は炭化物と焼土を多く含み、暗茶褐色を呈する。下層は上層より暗く堅く締まって光沢がある。炭化物と焼土は多量に含む。暗茶褐色を呈する。

○SK－09（第16図上）

この遺構はＢ－４グリッドを中心に一部Ｃ－４グリッドにかかる。この遺構はSI－10、SI－07、SI－08の各遺構に切られている。この遺構は上の各遺構が確認された後にさらに遺物の分布と地表面の土の乱れによって確認された。

この遺構は３基の遺構により切られているため完全な形は不明であるが、確認した時点では長径が4.9m、短径が推定の3.4mの長楕円形を呈していたものと思われる。

埋土は細かい焼土や炭化物がわずかに含まれる暗褐色土で地山の土と大差なく、締まり具合も変わらず非常に見分けにくかった。遺構検出面からの深さは、７～10cmある。

この遺構が確認されるきっかけになったのは注口土器の発見である。注口土器はこの遺跡では唯一のもの（第38図）で、しかもほぼ完形であった。注口部をやや下向きにした横転状態で出土した。この発見により周りを充分に精査した結果この遺構を確認したのである。

他にこの土器に伴う遺物の出土はほとんどなかった。

○SK－18（第16図下）

Ｃ－６グリッドを中心に一部Ｄ－６グリッドにかけて検出した。SK－28と切りあい関係にあり、土層断面の観察からSK－28を切っていると考えられる。

遺構の確認段階で充分に輪郭を捉えきれていなかったために掘り誤り大きめに掘り下げた。土層確認のためのベルトと遺構の下面の輪郭などを再確認した結果、図化したようになった。

平面形はやや不成形ながら直径3.8～4.0mの円形状を呈している。床面としては一応平らな面をとらえたが、硬化面や柱穴などは確認できず、炉跡も確認できなかった。

遺構検出面から床面までの深さは多少掘り過ぎた部分もあるが、概ね10cm前後である。埋土は周辺の遺構と類似しており、焼土と炭化物のわずかに混じった軟質の暗褐色土である。

○SK－28（第16図下）

Ｃ－６グリッドで検出され、SK－18とSI－19との両方と切りあい関係にある。土層観察によりSK－28→SK－18→SI－19の順に切りあいの順番を想定している。２つの遺構によって切られたり切ったりしているため形は十分とらえ切れていない。一応円形の平面形を想定している。その場合、残存した部分から直径が4.1m程であろう。

この遺構内には３個所の炉跡かと思われる焼土を伴う掘り込みがある。これは実際にこの一つの遺構内に複数の炉が営まれたのか、まだ他に遺構があったのか確認できなかった。ただ、この遺構に伴うと思われる炉跡は、SK－28と想定した遺構の輪郭のほぼ中央部にあるものである。直径が約70cmで、遺構確認面からの深さが約10cmである。

○SK－30（第17図上）

Ｃ－７グリッドを中心に一部Ｂ－７グリッドにかけて検出された。直径が4.1m～4.3mほどのやや楕円形気味の土坑である。

遺構確認面からの深さは８cm程のかなり浅いもので、埋土もⅠ層のみであった。焼土と細かい砂粒をわずかに含み、かなり締まった黄褐色の土である。

遺構内に顕著なピット等は確認できず、焼土の集中域もなかった。このことから土坑ということにしているが、形態的には住居跡の可能性がないわけでもない。ただ遺物の出土量は少なかった。

○SK－32（第18図上）

Ａ－５・６グリッド及びＢ－５・６グリッドにまたがり検出された。北側は芋穴により撹乱を受け、調査区外に延びているものと思われる。ただＩ区の北側は道路によって地下げを受けているため、遺構自体はこの確認範囲でしか残っていない。

イモ穴を掘り下げているとき、かなりまとまった遺物の集中がイモ穴の壁面で確認されたので、周辺を精査して確認した遺構である。遺構確認面と遺構自体の埋土が非常に似通っており、明確に遺構の輪郭を捉えきれず多少掘り誤った部分もある。

確認した遺構の平面形は北側が一部切れていることもあるが、かなり不定型なものである。東西に5.6ｍほど南北の残存長で４ｍほどである。

遺構確認面からの深さは12㎝程を計る。埋土は大きく２層に分かれ、上層は少量の焼土と炭化物を含む軟質の赤褐色土で、下層は炭化物を含む堅く締まった暗褐色土であった。

床面は北側方向に下がっている。この傾斜はⅡ区の地形の傾きにつながるものと思われ、この遺構が浅い谷状の地形の一部である可能性も示唆している。

○SK－33（第18図中）

Ａ－７グリッドからＢ－７グリッドにかけて検出され、SI－14及びSD－15によって切られている。また北側の一部は調査区外になっている。

一部掘りすぎや他の遺構によって切られたりしているので平面形は不明確であるが、長軸が1.5ｍ、短軸が1.2ｍを計る小判型の遺構であろうと推定される。

遺構検出面から深さは約10㎝ほどである。埋土は大きく２層に分かれ、上層は炭化物と焼土の粒子を含む軟質の暗褐色土で、下層は焼土粒子や炭化物をわずかに含み、堅く締まる暗褐色土である。

この遺構は性格がよくわからない。出土遺物も特にまとまったものではなく、地形的な落ち込みの可能性もある。

○SK－35（第18図下）

Ｂ－６グリッドを中心に一部Ｂ－７グリッド、Ｃ－６グリッドにかかる。SI－27と切りあい関係にあり、SI－27によって切られている。

切られているため本来の形状は推定となるが、.直径3.6ｍほどの円形であろう。遺構確認面からの深さは10㎝前後である。埋土は大きくＩ層であるが、壁面近くや床面近くにやや異なる土が入る。大まかな層はあまり締まりがなく、焼土や炭化物の粒子をわずかに含む暗褐色土である。床面近くや壁面近くの土はやや締まりが強い明褐色土である。

床面に明確な硬化面は確認できなかったが、わずかに硬化した面がある。また、中心部付近がより土も赤みが増し、焼土粒子の量も増えることから炉としては確認できなかったが、火を短期間にしろ、燃やしていた可能性がある。

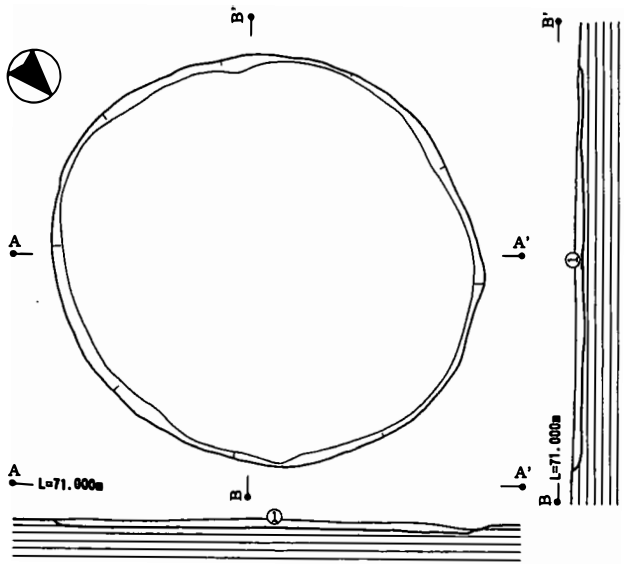
柱穴として確認したのは１個所のみであった。直径30㎝ほどで床面からの深さは約10㎝であった。埋土を観察したところ、中心部の径10㎝ほどに柱痕跡らしき落ち込みがあった。

遺物は床面直上に出土したものは少なく、床面より５㎝ほど上に多く出土した。中にはかなり集中して出土したものもあった。

○SK－36（第19図中）

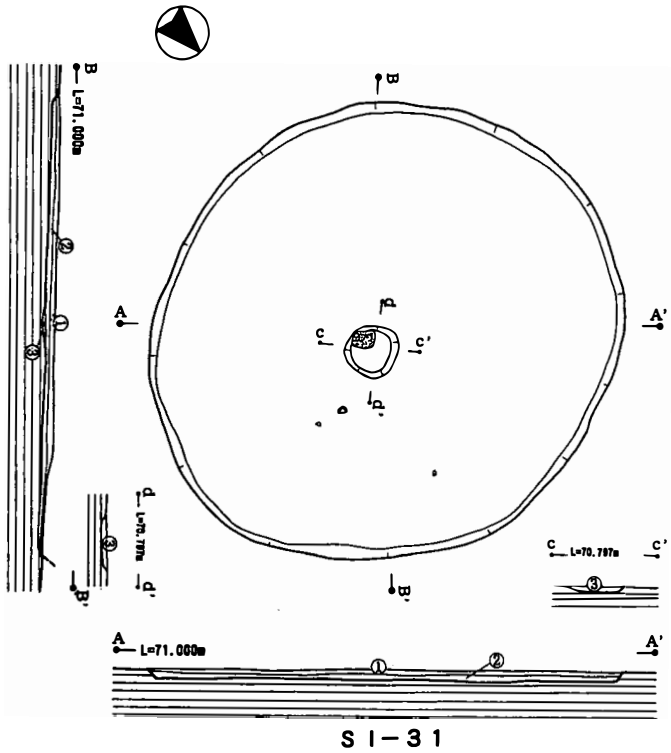
この遺構はSI－26、SI－27、SK－35の各遺構に切られている。これらの遺構の切りあい関係はSK－36からSK－35もしくはSI－26の順でSK－35をSI－27が切っている。

半分以上が他の遺構によって切られているために輪郭は不明確であるが、直径3.8ｍほどの円形を呈するのではないかと推定される。



SK－30

SK－30
①層：茶褐色土；硬くしまり、細かい砂粒と焼土を微量含む



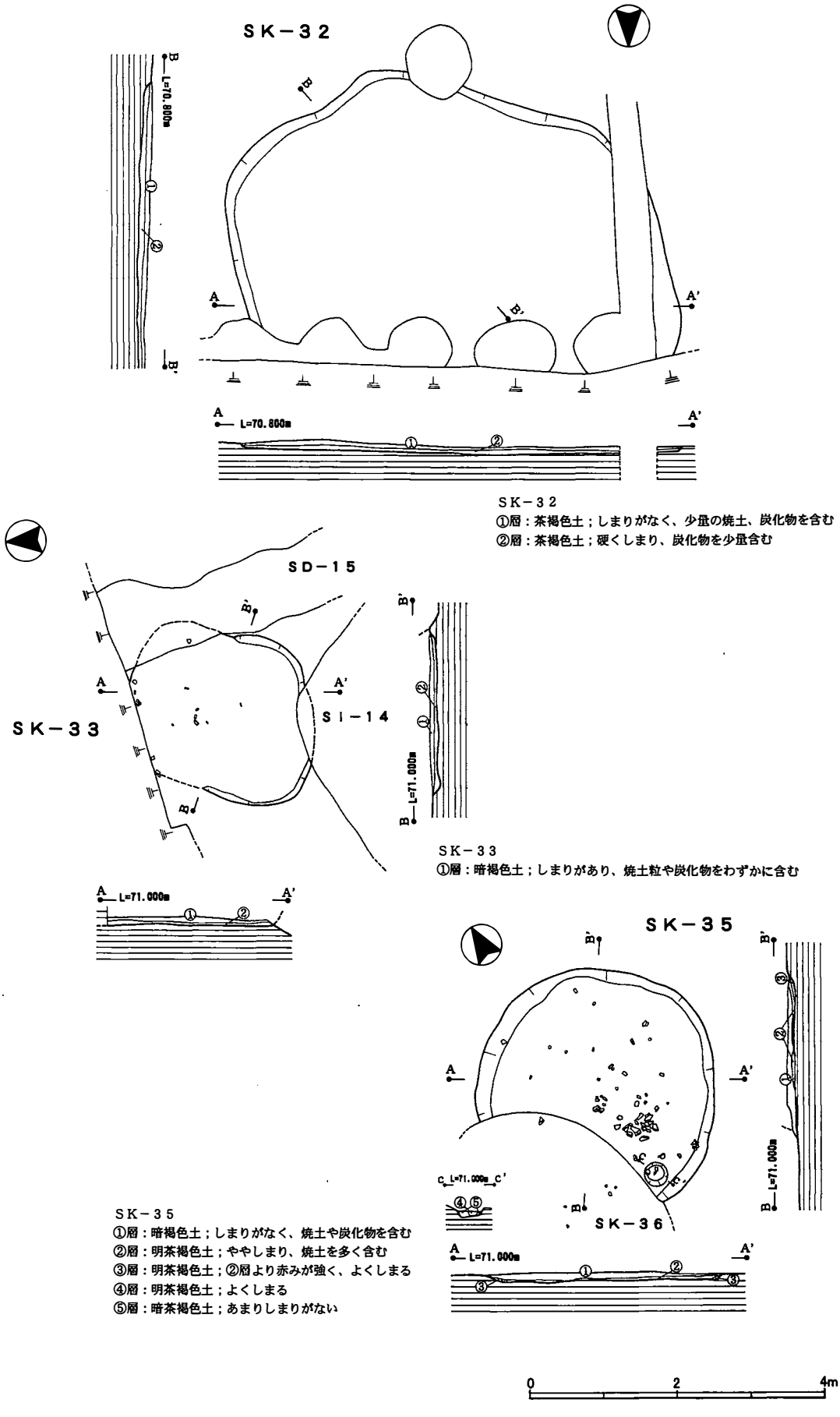
SI－31

焼土

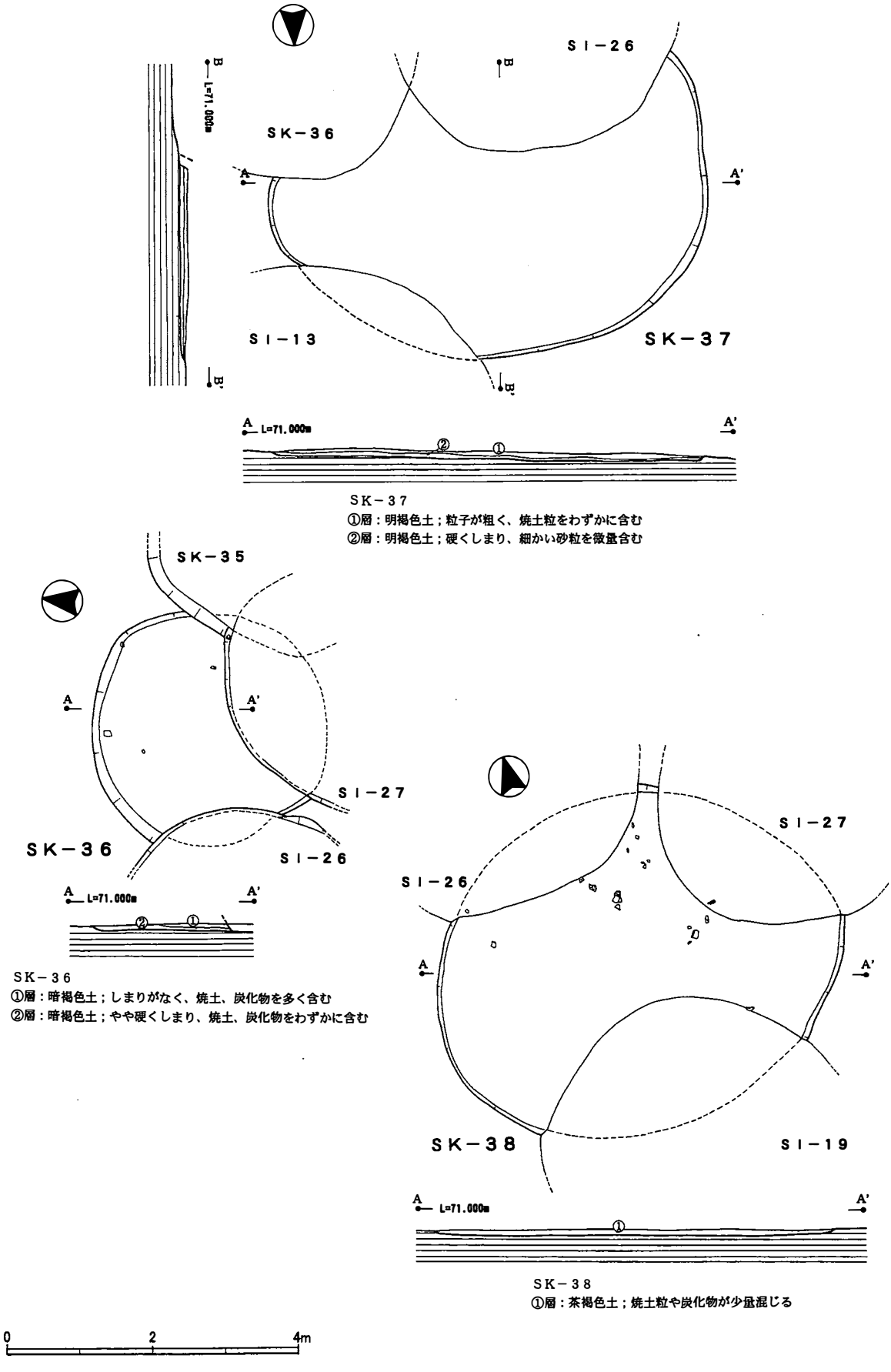
SI－31
①層：明褐色土；しまりがなく、焼土粒を多く含む
②層：明褐色土；硬くしまり、焼土粒を少量ふくむ
③層：明褐色土；硬くしまり、焼土や炭化物を含み、細砂粒も少量含む

0　2　4m

第17図　竪穴遺構実測図(11)



第18図　竪穴遺構実測図⑫

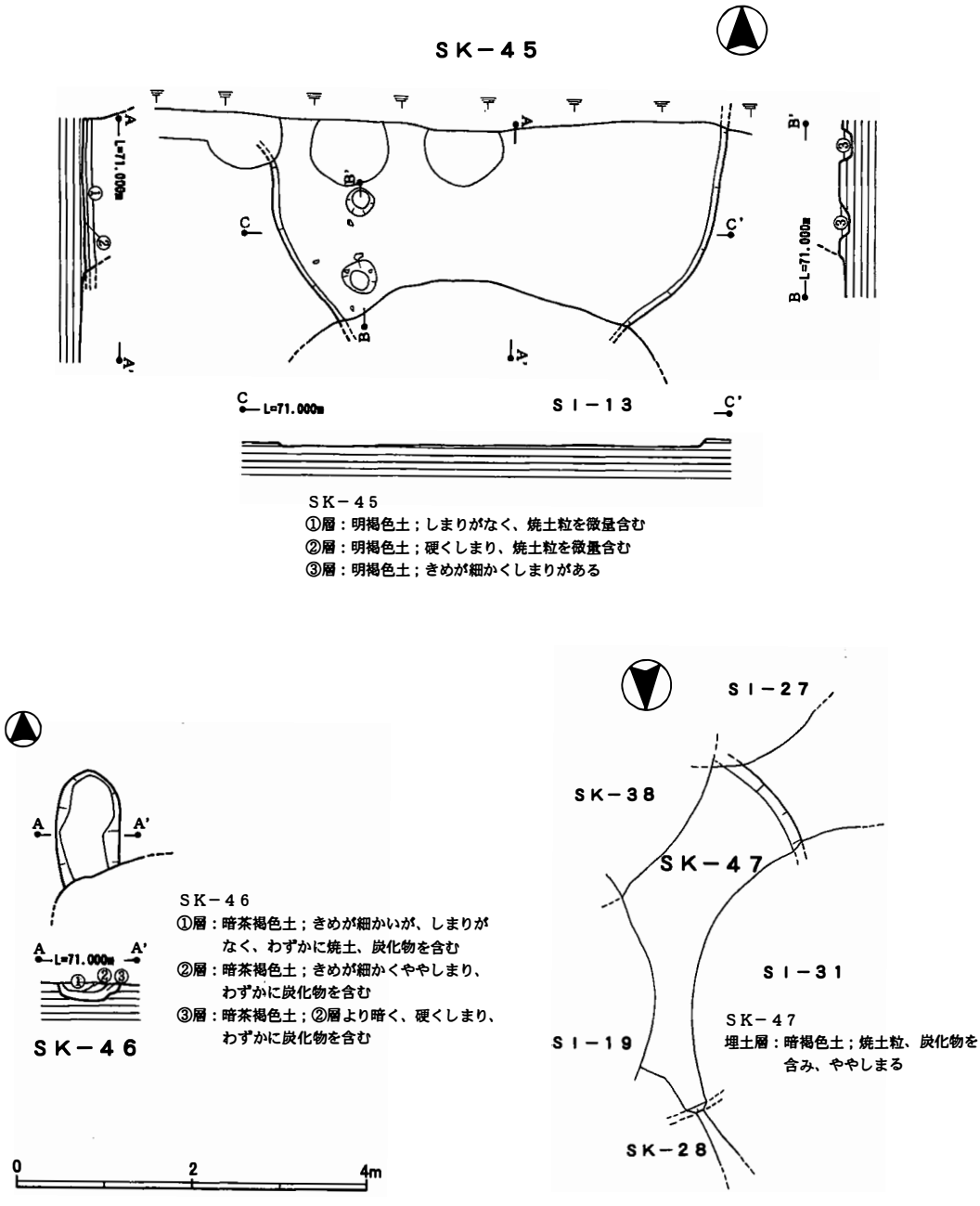


SK－37
①層：明褐色土；粒子が粗く、焼土粒をわずかに含む
②層：明褐色土；硬くしまり、細かい砂粒を微量含む

SK－36
①層：暗褐色土；しまりがなく、焼土、炭化物を多く含む
②層：暗褐色土；やや硬くしまり、焼土、炭化物をわずかに含む

SK－38
①層：茶褐色土；焼土粒や炭化物が少量混じる

第19図　竪穴遺構実測図(13)



第20図　竪穴遺構実測図⑭

遺構確認面からの深さは、約10cmを計る。埋土は２層に分けられる。上層は全体には広がらず中心部の付近にあり、軟質の暗褐色土で炭化物や焼土の粒子を多く含む。下層は堅く締まった暗褐色土で、焼土や炭化物の粒子をわずかに含む。

床面には特に炉や柱穴などの施設は確認できなかった。

出土遺物は少なく、接合する資料もあまりない。

○SK－37（第19図上）

この遺構はＢ－６グリッドで検出されSI－13、SK－26、SK－36の各遺構に切られている。遺構の確認に際しては他の切っている遺構に比べて確認しにくく、どうにか輪郭をひいたものである。平面形は長軸方向で5.6m、短軸は推定で4.8mほどの東西に延びる楕円形であろうか。

遺構確認面からの掘り込みの深さは10cm前後である。埋土は大きく２層に分かれ、上層は焼土がわずかに

混じる目の荒い明褐色土である。下層は細かい砂粒を含み、堅く締まっている。遺構内に特に柱穴や焼土の集中などは確認できなかった。出土遺物はあまり多くなく、破片も小さい。

○SK－38（第19図下）

Ｃ－６グリッドを中心に一部Ｂ－６グリッドにかけて検出した。SI－26、SI－27、SI－19の各遺構によって切られている。切っている各遺構の調査終了後、遺物の出土する部分を精査していて検出した。

平面形は各遺構に切られているため推定になるが、長軸が5.1m、短軸が4.6m（推定）の北西～南東方向に延びる楕円形とした。

遺構確認面からの深さは8cmを計る。埋土は１層で焼土や炭化物の粒子が少量混じり、堅く締まった茶褐色土である。

遺構内に焼土の集中域や柱穴などは検出できなかった。

遺物の出土量は少なく、接合資料も少ない。

○SK－45（第20図上）

Ｂ、Ｃ－６・７グリッドにまたがって検出されたものでSI－13に切られている。また、北側は調査区外になっており、全体の半分ほどが確認できただけである。残存幅は5.1mを測り、掘り込みの深さ10cmを測る。調査前は畑地の端にあたり、イモ穴による撹乱坑がみられる。当初から遺物の散布が見られたが遺構として十分確認することができなかった。ただ、SI－13の壁を確認しているにもかかわらずその壁に遺物の出土がみられることから精査を重ねてどうにか輪郭を検出した。

埋土は２層に分かれ、上層は焼土を少量含む明褐色土でしまりがない。下層は同じ特徴を示すが、こちらの方がよく締まっている。ピットを２つ確認したが柱跡としては確実に押さえきれなかった。調査できた範囲が限られ、遺構の性格は不明である。

出土遺物はかなり多いほうで、御領式土器が多い。

○SK－46（第20図下左）

Ｂ－７グリッドで検出されたもので、SI－14によって切られている。残存している範囲で遺構の形を類推すると長さが南北に1.1m、幅が0.72mの長楕円形の土坑と考えられる。ただ、南側がSI－14によって切られているため、正確なところは不明である。

遺構確認面からの深さは約20cmを計り、床面は一定ではない。埋土は３層に分かれ、①層が暗茶褐色を呈する土で締まりがなく炭化物と焼土をわずかに含む。②層はきめが細かくやや締まっており、わずかに炭化物を含む。③層は上層よりも暗い暗茶褐色の土でより締まっており、わずかながら炭化物を含む。出土遺物は、大きさの割には多かったが、接合できる資料となると非常に少なかった。

○SK－47（第20図下右）

この遺構はSI－31、SK－38、SI－18、SI－28の各遺構に切られ、これらの遺構によって原形がほぼ不明という状況になっている。

各遺構の調査終了後、周囲の精査を進めているうちにこの遺構に気づいたもので、ごくわずかな土の手がかりをもとにどうにか一部を検出した。

検出面からの深さは８cmほどで浅く、床面はやや締まっているものの硬化面などは確認できなかった。埋土は焼土と炭化物の細かい粒子が含まれ、地山よりやや暗い暗褐色土である。

出土遺物は少なく、破片も小さい。

○SX－42（第21図上）

Ｃ－９グリッドからＤ－９グリッドにかけて確認したもので、南北1.8m、東西0.92mを測り多量の焼土と炭化物を伴う土坑である。一部イモ穴によって破壊されていたが、土坑の南西部分はさらに深く落ち込ん

でおり、ここで確認面からの深さは1.34mを測る。当初風倒木の疑いがあったが、最下層まで焼土と炭化物を含み、遺構としての性格は不明である。埋土は６層に分層できたが大まかには４層に分けられ、最上層からさらさらした黄褐色のアカホヤ包含層、締まりのない黄茶褐色の炭化物と焼土を含んだ層、その下層の暗茶褐色を呈し粘質の強い炭化物と焼土を含む層、最下層の粘質の弱い暗茶褐色で炭化物と焼土を多量に含む層である。炭化物の中には出土した当初は板状の状況を示すものもあった。かなり大量の炭化物がまとまった状態で出土し、意図的な焼却作業が行われた結果であろう。

炭化物は古環境研究所にＣ14年代測定を委託した。その結果、この遺構から出土した炭化物は補正14Ｃによれば、3420±60年BPという値を得た。また、暦年代交点によればBC1705という値になる。偏差を考えれば、BC1760～1645ということになる。ここで出土した多量の炭化物はこの遺構内で木材を燃焼した結果生じたものと判断されるので、この遺構の実年代は中庸をとってほぼ紀元前18世紀はじめとなろう。したがって、この遺構も縄文時代後期のものと判断して縄文時代の遺構とし、ここに記述した。

○SX－43（第21図中）

Ｄ－９グリッドで確認したもので、長軸方向が北北東～南南西で、長軸が1.5m、短軸1.1mを計る楕円形の土坑である。土坑の南西部分にはさらに深く落ち込む径50cmほどのピットがあり、確認面からの深さ99cmを計る。確認面の南側には炭化物と焼土が径40cmほどに広がっていたが、掘り込みなどは確認できなかった。埋土は大きく２層に分かれ、ともに炭化物と焼土を含む締まった土であるが下層の方がより堅く締まっている。出土遺物としては石鏃が遺構の中位から一点だけ出土した。

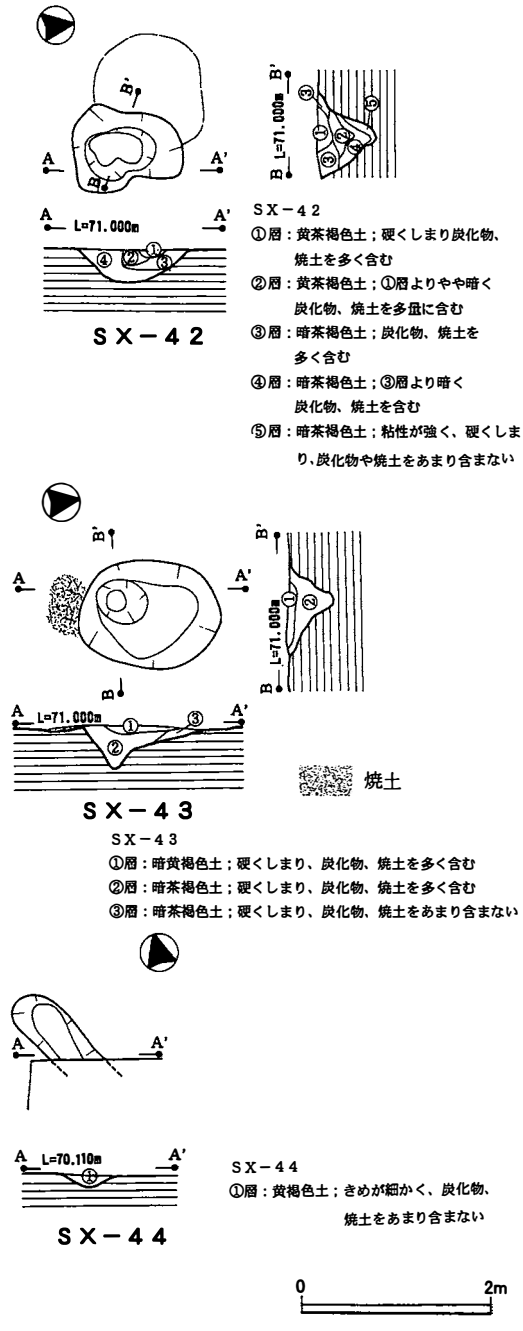
この遺構もSX－42に隣接し、遺構のあり方が類似する。このことから一応、この遺構も縄文時代のものとして扱う。

○SX－44（第21図下）

Ｄ－10グリッドで確認したもので、確認トレンチによって一部切られている。面的な確認は当初できなかったが、トレンチ部分をあらためて掘り下げ土層を確認していたとき確認できたものである。

残存している状況でみると、北東から南西方向に延びる長楕円形の土坑である。幅1.8m、残存長１mほどを計る。深さは浅く、確認面からの深さ16cmを計る。層は分層できず、僅かに焼土を含む暗赤褐色を呈する堅く締まった土である。

この遺構からは縄文時代後期のものと思われる土器片が１点出土した。内外器面とも丁寧な研磨が施された浅鉢形土器の頸部付近と思われる。内外器面とも明褐色を呈し、焼きも良好であった。ただ、文様や器形全体のプ



第21図　焼土坑実測図

ロポーションまで推定できるような破片ではなかったため正確な判断は下せなかった。この遺構自体は先のSX－42やSX－43のあり方とやや異なる様子はあるが、やはり２つの遺構に近接していることと出土遺物を勘案して、縄文時代の遺構ととらえここで扱った。

２　縄文時代の遺物

⑴

鶴羽田遺跡出土の土器は包含層中からの出土と遺構からの出土がある。遺構からの出土においては、かなりまとまって出土したものもあったが、接合が可能な資料は少なかった。そのため土器片としてとらえざるを得ないものが多く、全体の器形を判断できるものは少ない。また、遺構外からの出土した遺物はなおさら接合資料は少なく図化できるものも限られる。文様のある土器も限られた部分しか出土していないためその特徴を明らかにするのに十分とはいえない。

このため土器について記述するにあたって、従来からの器形や文様による土器型式分類に従うことにする。器形については大きく深鉢形、浅鉢形、椀形、注口形の４つに分けるものとする。

本遺跡出土の縄文土器は主にⅡＢ層からⅢ層を中心に出土している。土器は遺構に伴うものと包含層に含まれるものに大きく分けられ、さらに時期差も大きい。出土数は型式によって違いは大きく、後期末から晩期にかけての遺物数は格段に多い。ここでは、それらをこれまでの編年の成果をもとにして各土器について述べる。

Ａ　早期～中期の土器

まず早期の土器と考えられるものはアカホヤの２次堆積層のⅢ層からさらにその下のⅣ層の上面にかけて確認された。数としては少量であり遺構も確認できなかったが、この調査区の外側でこの時期の遺構が存在する可能性がある。出土分布の傾向としては、調査区の西側から北西側のＡ・Ｂ－１・２・３グリッドに偏っていることから考えて、第Ⅰ調査区外の西側から北側に広がると予想される。

次にこの時期の土器としてこの遺跡で出土したものは、押型文系土器、塞ノ神式系土器などの各型式に分けられる。

【押型文系土器】（第22図）

出土した数量はごく僅かである。Ｐ－001は胴部片で、楕円文が施文されている。中央部よりやや上方の緩やかな屈曲を境としてその上部は縦方向に施文され、その下部は右上がりの横方向に施文されている。施文の単位は６粒で交互に配置される。施文具の長さは約３㎝程であろう。

Ｐ－002は口縁部片で山型文を縦走させている。単位は小破片のためはっきりしないが、あえていえば６本の山型を単位としている。施文具の長さは２㎝強であろう。口唇部に施文原体による押し引きがなされる。山型の間は1.8㎝と間延びしたものである。胎土中には多くの細砂粒が混入している。白い砂雲母がはいっている。器壁は８㎝でかなり薄手のものである。

これらの押型文土器は時期的には手向山式土器のものである。

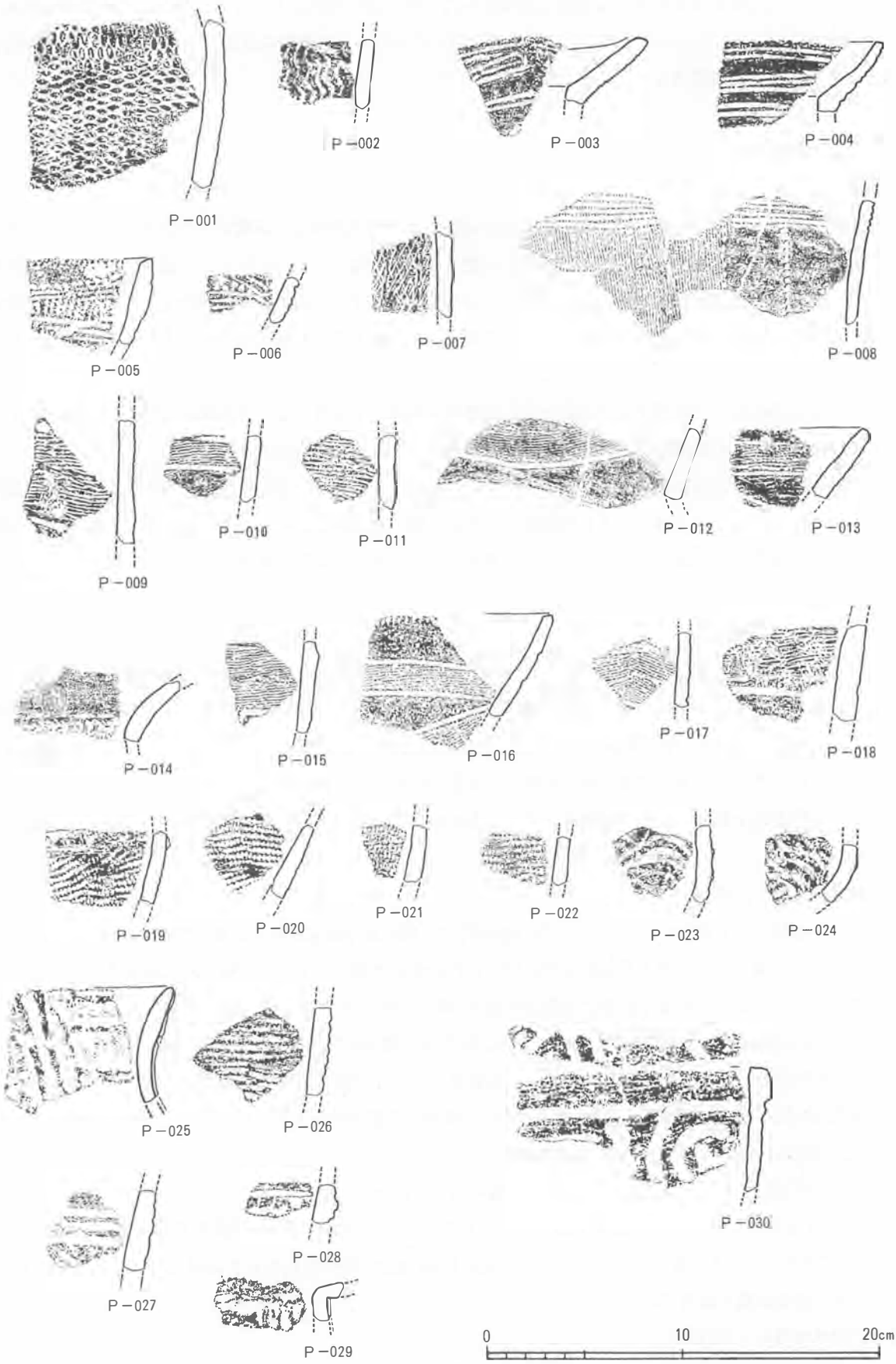
Ｐ－006は小破片であるが手向山式土器と認められる。文様は沈線とその間の刺突文からなっている。

Ｐ－007は撚糸文を主文様とする土器である。長さ1.5㎝ほどの原体を転がして文様を施している。これも手向山式土器の範疇であろうか。

【塞ノ神系土器】（第22図）

これも出土数量は少ないが、Ｐ－003～005、008～018がそれにあたる。

Ｐ－003、004は同一個体の土器の口縁部と思われる。胎土、焼成、色調ともによく似る。これらは、波状口縁を呈するもので２～３本の貝殻条痕を文様として描く。



第22図　縄文土器実測図(1)

胎土は細かい白砂粒を多く含むが、よく精製された粘土できめは細かい。口唇部には刻み目が入る。焼成はやや良好である。色調は内外器面とも淡黄褐色を呈する。

Ｐ－005は口縁部の破片で、文様は口唇部に刻み目、その下に２～３本の沈線とそれを囲む刺突文と貝殻の押引文が横走する。やや中央部が膨れる。黒ウンモの含有量が多い。

Ｐ－008はまず撚り糸文を縦走させ、次に横方向の平行する沈線を施文する。さらに縦方向の刺突文を撚り糸文のない部分に施している。器壁は１㎝ほどと薄いが、復元径はかなり大きくなりそうである。これは鹿児島でいう「石坂上式」土器であろうか。これを人によっては塞ノ神式土器の古式のものにしてあり、ここに入れた。

Ｐ－009～018はいずれもいわゆる「塞ノ神式土器」である。施文はいずれも沈線による区画とその中の撚り糸文によっている。ただ器面調整、色調、焼成などは各個体により異なっている。

【貼付突帯文土器】（第22図）

Ｐ－025は口縁部である。ラッパ状に開くものでその口縁部の外器面に縦方向の隆帯と横方向の隆帯をそれぞれ貼り付けている。縦に１㎝間隔でやや斜めに貼り付け、ナデ調整を施している。さらに横方向に間隔は任意であるが隆帯を貼り付けている。貼り付けた後にこれもナデ調整をしているようである。内器面には煤の付着がみられ、煮炊きに利用されていたのかもしれない。胎土は白細砂粒やウンモなどの細砂粒を多く含むが、きめは全体として良い。焼成も良いほうである。

この土器は確認トレンチのⅢ層の下部付近で出土したもので、この時期の遺物の存在を予想させる契機となったものである。

次に前期から中期にかけての土器をみてみよう。この時期の土器も出土点数は非常に少ない。

【縄文土器】（第22図）

Ｐ－019～022は縄文を器表面に施している。このうちＰ－019は、縄文に加えて張り付け刻み目突帯を付けている。一部のみ残っているが５㎜ほどの隆帯を貼り付け、そこに刻み目を付けている。これら４点とも胎土は似通ったものがあり、同一個体の破片の可能性もある。胎土中には多くの白い細砂粒が含まれており、中には１㎜を越えるようなものもあり気泡もかなりみられる。焼成は良好である。

これらは一応船元式土器か竹崎式の範疇であろう。

【縄文＋突帯文土器】（第22図）

Ｐ－023、024は縄文を地文として微隆起帯を貼り付けている。かなり磨耗しているが、地文としての縄文がうっすらと見える。節などは不明である。これらの土器を上記の縄文土器と分離したが、同じものである可能性があり、竹崎式土器に入れるべきかもしれない。

【阿高式系土器】（第22図）

Ｐ－030がそれで、１点のみの出土である。Ｅ－10グリッドに破片のみが出土していた。丹念に周囲を精査し遺構や他の破片を見つけようとしたが見つからなかった。このような出土は内陸の遺跡地内によくみられる状況で、単独でかなり大きい破片が出土する。なぜそのような出土をするのか不明である。

土器は口縁部付近だけで、全体の１／10ほどが出土した。口唇部に刺突文を施し、口縁部に凹線によって横線、縦線、渦巻き文を組み合わせて施文している。胎土にはわずかながら滑石が含まれているらしく、なでるとつるつるした手触りがある。器表面は暗赤褐色を呈し、よく焼きしめられている。

Ｂ　後・晩期の縄文土器

これから述べる後・晩期の土器がこの遺跡の中心となる時期の遺物である。ここではこれまでの土器研究の成果をふまえ、土器の形式分類と型式分類について順を追って述べていく。

まず、後・晩期の土器についてこれまでの他遺跡の資料をもとにして形式的な分類を行いたい。

ア　形式分類　この遺跡で出土した後・晩期の土器を、深鉢形、浅鉢形、椀形、注口形と分けて考える。この中にはどちらに分けた方がよいのか明確でないものもある。深鉢形と浅鉢形との中間的な形態で、鉢形とすべきものである。しかし、この遺跡で出土した土器類だけでは形態差を十分につかめなかったので、基本的に「鉢形」という用語は使用しないことにした。なお分類に際しては、熊本県教育委員会報告第144集『ワクド石遺跡』で示された形式的分類に負うところが大きい。

深鉢形土器

Ａ類

土器の形態が基本的に口縁部、頸部、胴部、底部の４つの部分からなっているものである。

Ａ－１類は口縁部断面が弱く逆「く」の字状に折れ曲がり、口縁部が波状を呈しているものである。

Ａ－２類は口縁端部の断面が三角形を呈し、外器面で１条の帯状の面をつくり、そこを口縁部及び口縁部文様帯として利用しているものである。口縁端部は水平となっている。

Ａ－３類は口縁端部が水平になり、口縁部幅も広くなるものである。頸部から口縁部にかけての屈折の度合いで二つに細分できる。頸部上端が外反し口縁部が内傾または直立するものと、頸部から単に折れ曲がるだけで、口縁部も真っ直ぐ外傾しているものがある。それぞれをＡ－３ａ類、Ａ－３ｂ類とする。

Ａ－４類はＡ－３類の口縁端部の４ヵ所に山形の小さな突起が付けられたもので基本的に水平な口縁である。ただこれについては破片である場合、Ａ－３類との差異を認められない可能性がある。

Ｂ類

Ａ類の口縁部にみられた帯状の口縁部にあたる部分がないものである。基本的に頸部、胴部、底部の３つの部分に分けられるもので、頸部の先がそのままのびて口縁端部になるものである。その端部は水平になっている。胴部以下のあり方はＡ類と大きな差異はない。

Ｃ類

底部から立ち上がり、胴部、口縁部までほぼまっすぐにのびて終わるものである。Ａ類にみられた口縁部やＡ類・Ｂ類にみられた胴部の屈折などがないものである。

Ｃ－１類は土器の最大径が口縁端部になるものである。

Ｃ－２類は口縁部近くで外湾し、口縁端部が土器の内側に傾いているものである。

Ｄ類

土器が基本的に口縁部、胴部、底部の３つの部分からなっているもので、これまでの分類に入らないものをこの類にした。口縁部と胴部の形態から２つに分けられる。Ｄ－１類は口縁部から胴部、さらに底部までほぼ直線的におりるものである。Ｄ－２類は口縁端部外面に粘土紐を張りつけ、突帯とした、いわゆる突帯文土器である。突帯には刻み目がつけられている。

浅鉢形土器

Ａ類

基本的に口縁部、頸部、胴部、底部の４つの部分に分けられるもので、深鉢形土器のＡ類にあたるものである。深鉢形土器の丈を短くした様な器形である。口縁部には文様帯と呼べる一条の屈折部を持ち、頸部は弱く内湾しながら大きく外反する。底部はやや上げ底になっている。

山形の波状口縁のものと平坦な口縁のものとに分けられ、それぞれＡ－１類、Ａ－２類とする。

Ｂ類

基本的に口縁部から緩やかな丸みをもった胴部にいたり、そのまま底部にいたるものである。口縁部は屈折し、ほぼ直立するようになっている。この類の底部はいわゆる丸底である。口縁部の文様の有無から、Ｂ－１類とＢ－２類に分けられる。ただ本遺跡では出土点数は少ない。

Ｃ類

Ｂ類に似た器形であるが口縁部は明瞭な屈折部を持ち、胴部は直線的に伸びて底部にそのままいたるものである。口縁部、胴部、底部の３つの部分からなるものである。

Ｄ類

基本的には口縁部、頸部、胴部、底部の4つの部分からなり、底部と胴部の境が明瞭ではなくいわゆる丸底の形状をしている。

Ｄ－１類は胴部から内湾しながら、強く外反する頸部から口縁部が直立している。口縁部幅の器高に対する割合は小さい。水平な口縁端部である。この類は器高に対する口径の割合の大小で二つに分けることができる。Ｄ－1ａ、Ｄ－1ｂ類とする。

Ｄ－２類はＤ－１類の口縁端部に４つの小さな山形の突起を付けたものである。この類も器高に対する口径の割合の大小で二つに分けることができる。Ｄ－２ａ、Ｄ－２ｂ類とする。

Ｄ－３類は口縁部が形骸化しており、頸端部をわずかにつまみ上げたと思われるほどになっている。また頸部の割合が相対的に大きくなり、額部が長くのびた形状になっている。そして頭部の外反がそれほどでもなく、直線に近くなり、口縁部近くでは外湾ぎみになっている。

Ｄ－４類は口縁部、頸部が形骸化している。口縁部は段状になり、頸部は短く湾曲から折れるような外反になっている。この類も器高に対する口径の割合の大小で二つに分けることができる。Ｄ－４ａ、Ｄ－４ｂ類とする。

Ｄ－５類は口縁部と頸部が一体化し、もはや区別できなくなっている。さらに胴部上半と下半の境に明確な屈折がみられるようになっている。胴部上半が外湾しながら内側に傾いている。

椀形土器

底部から立ち上がった胴部がそのままのびて口縁端部になっている。口径に比べて器高が低いものである。底部は丸底である。口縁部付近でやや直立する印象を受ける。かなり大型品もあるようである。ただ、この形態の土器はこの遺跡では出土点数が少ない。

注口土器

注口土器は時期によってその形態が変化している。注口土器はこれまでの他遺跡の資料により大まかな分類が行われている。特殊な用途が想定される土器ではあるが、その時期に応じた変化が他の土器と呼応してみることができそうである。ただ、鶴羽田遺跡では注口土器としては１点のみの出土である。破片の中に注口土器が含まれる可能性はあるが、十分に捉えていない。この、１点だけ確認した土器については御領式土器のところで述べる。

イ　型式分類

この遺跡で出土した後・晩期の土器を詳細に観察したところ、磨消縄文系土器、黒色磨研系土器、刻目突帯文系土器に大別できる。なかでも出土数がもっとも多いのは黒色磨研系土器である。しかも、これまでの土器型式に従えば、三万田式・太郎迫式から天城式、黒川式、山の寺式と複数型式にわたっている。磨消縄文系土器では太郎迫式土器、刻目突帯文系土器では山ノ寺式と時期的に限定されているのに比べても多い。

また、ここの第Ⅰ調査区で多く出土した竪穴遺構は主に黒色磨研系土器に伴うものであると思われる。

この遺跡の大部分は後・晩期の土器でしめられている。これらの時期の土器片についてはこれまで詳細な

型式分類がなされ、型式もほぼ定着している。これまでの成果をふまえつつ、この遺跡から出土した土器について進めていく。

縄文時代後期後半以降の土器型式については多くの研究者の研究があり、その研究の上に現在の型式の変遷がある。ただ、当然のことながら全てに見解の一致をみるものではなく、研究者によってその変遷は若干の相違がある。

熊本県地方の後期後半における土器研究では富田紘一氏と島津義昭氏の土器型式の変遷案がこれまで示されてきており、それらをもとにしながら鶴羽田遺跡出土の土器を型式分類していく。ただ、鶴羽田遺跡出土の土器は時期的に限定されるものが多くそのほかの時期の土器は出土点数がかなり少なくなるが、出土した土器の一応の流れをみるために土器の変遷を述べ、土器説明の目安としておく。

両氏の研究によれば、後期後半から縄文晩期・弥生時代にいたる土器型式変遷として次の型式変遷が考えられている。

（鐘崎式→北久根山式→西平式→）太郎迫式→三万田式→鳥井原式→御領式

――（後期晩期の境）

→天城式（上南部Ⅲ式）→古閑式→黒川式→山の寺式→夜臼式（→板付式→）

鶴羽田遺跡では数量的にまとまって出土したのは御領式から天城式にかけての土器であるが、他にも出土数量は少ないものの太郎迫式～山の寺式までの土器がある。出土点数を考えれば中心になるものを主に記述すればよいのであるが、ある程度の流れを考え全般的にふれていきたいと思う。

以上のことをふまえてこれから後・晩期の土器の詳述を行うに際し、先に述べたように磨消縄文系土器、黒色磨研系土器、突帯文系土器に大まかに分け、さらにその中を型式的に分けて記述する。

【磨消縄文系土器】（第23図）

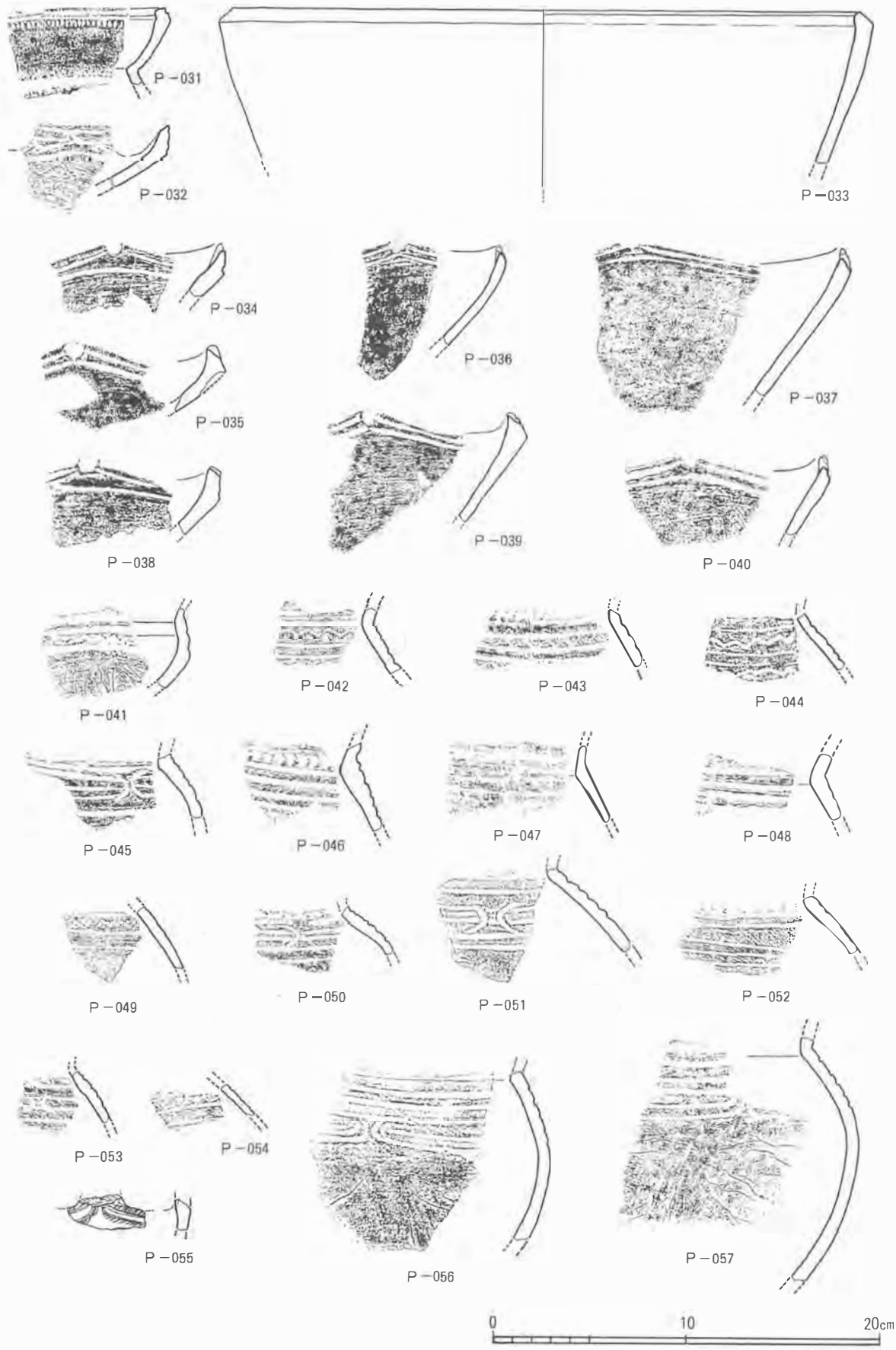
この系統の土器は調査区内での分布域が限定される。主にＢ－１～Ｃ－１グリッドで出土している。調査区でいえば西側の端近くになる。この付近は耕作による削平が進んでおり、土層の撹乱も進んでいた。その中で土器の集中部分がいくつかみられ、その付近に焼土の集中域もあった。このため遺構の存在も予想し、かなり精査したが確認できなかった。その一帯にこの系統の土器が集中するようである。ただ、出土した土器は数量的に少なく、そのすべてに磨消縄文が施されているわけではない。そこで、代表的な部位と思われる部分を図化し、それについて述べることにする。

深鉢形土器は口縁部が波状のものと平坦なものに分けられる。Ａ－１類とＢ－４類とに分けられ波状口縁には狭い屈曲部があり、そこに文様帯が形成される。文様として沈線文、磨消縄文、凹点文の組み合わせがみられる。第23図のＰ－032、034～040がこの例にあたる。

その下部には無文域があり、口縁部は頸部に向かってすぼまり、そこを境にして急激にふくらむ。その頸部から胴部の上部に文様帯が形成されている。文様の要素として磨消縄文、沈線による平行線、沈線による「Ｘ」字文、沈線による鋸歯状文、刺突文などがある。さらに底部はやや径の小さい上げ底となっているようである。Ｐ－042～054、056、057がそれにあたる。刺突文は頸部のくびれ部にみられ、Ｐ－043、046、050、052などにみられる。鋸歯状文はＰ－041～044にみられる。Ｐ－042は磨消縄文に伴ってみられる。

口縁部が平行になっているものは口縁部が弱く内傾しており、その部分がやや肥厚して無文様帯を形成している。Ｐ－033がそれにあたる。この遺物は胴部以下についてはよくわからないが、胴部にも文様帯が存在する可能性がある。焼成は良好で硬くしまり、色調はこの時期の土器としては他と異なり明褐色を呈している。

浅鉢形土器はこの遺跡で確認したものは少なく、Ｐ－032、041がそれであろう。Ｐ－032は口縁部である



第23図　縄文土器実測図(2)

が蝶ネクタイ状の突起をもち、その外器面に沈線による文様を入れている。文様は中央でクロスした結び目様のものである。

Ｐ－041は胴部と思われ、沈線の間に鋸歯状文を施している。口縁部と底部については不明である。ただ、この土器は高坏形の可能性もある。

このほかの器形もあると思われるが、ここでは確認できなかった。

これらの遺物は文様の状態から考え、少なくとも２時期には分けることはできそうである。磨消縄文が強く施文されたものと、その縄文が消え、文様が形骸化する段階である。そのうち磨消縄文がはっきりと認められるものは太郎迫式の中に入るものであろう。太郎迫式土器は器形として深鉢形、鉢形、浅鉢形、椀形、高杯形、皿形が想定されているが、この遺跡ではそのうちの深鉢形を中心に確認できた。この土器の特徴に文様の磨消縄文と「Ｘ」文がある。先に述べたようにこの特徴がはっきりとみられるものがある。しかし、Ｐ－045、Ｐ－051のように磨消縄文が消え、「Ｘ」文はかろうじてあるもののあまくなったものがあり、この型式に次ぐものとすべきか、そこからさらに進んだ段階と捉えるべきか今後の考慮を要する。

深鉢形土器にはＡ－１、Ａ－３、Ｂ－１、Ｃ－１類があり、Ａ－１、Ｂ－１類が大半をしめる。

文様を持つものはＡ－１、Ａ－３類であり、Ｂ－１類についてははっきりしない。文様帯は口縁部と胴部上半部の二つの部分である。なお、Ａ－３類は胴部上半部に文様帯をもつかどうかはっきりしていない。

浅鉢形土器には良好な資料がなく明確ではないがＡ－１、Ｂ－１、Ｆ－１類が存在するようである。また、文様は細い平行沈線、磨消縄文、貼り付け粘土浮文で構成されるらしい。Ａ－１類は深鉢形土器Ａ－３類の文様構成と同じものもあるようだ。また、口縁部を四分割した口縁端部に粘土を貼り付け、浮文としているものもみられる。ただ、この類は高杯形土器と類似するため、破片だけでは明確ではない。

Ｂ－１類はやや内傾する口縁部に特徴的な細い３本の平行沈線を引いている。

【黒色磨研系土器】

黒色磨研系土器として以下で扱う土器については、三万田式にはじまり御領式で完成し、古閑式で拡散していく過程が想定されている。ただ、この系統の土器の祖型は磨消縄文系土器の末につながるものであるのは確かで、全体のプロポーション、文様帯のあり方など共通するものが多い。その一方で、新たな研磨を加えることで土器表面の調整を図るという技術の進展がこの系の土器を特徴づける。

鶴羽田遺跡で出土した土器のうち大部分はこの中に含まれているものと考えられる。竪穴遺構の形成された時期もこの土器の盛業期である。出土した土器の点数も最多である。これらの土器についてここで詳細に記述を行い検討すべき所ではあるが、これまでと同様の記載を行うことは困難を伴う。また、これらを明確に区別するには十分な全体像を示す資料が必要と思われるが、それを果たすべき完形資料は少ない。したがって、以下では形式的に分けられた遺物をもとに各要素によって型式ごとに遺物の分類を記述していくことにする。ただ、破片のみで構成される型式の記述にすぎないため、これまでの土器研究の成果をもとに記述せざるをえない場合が多々ある。また、破片のみであるのでやや従来と異なる基準を設ける場合もある。これらについては調査者の判断によるものである。

三万田式土器（第23図　Ｐ－055）

この型式の土器は、いわゆる黒色磨研系土器の初現型式として知られ、表面に丁寧な研磨が施されている。このためよく光沢を持つものがある。さらに磨消縄文技法はなくなり、細線羽状文が施されるようになる。現在のところ器種として深鉢形、浅鉢形、椀形、注口形、高杯形土器が知られれる。この遺跡でも三万田式と考えられるものが出土している。

Ｐ－055はその例で浅鉢形土器の口縁部の一部と考えられる。山形の突起部があるが、破損によりその形

状は不明である。外器面には二本の平行沈線の上下に細かい綾杉文が丁寧に施され、突起付近で二本の平行沈線がＸ字状に交わり、突起方向へと向かっている。小さな刺突が交差部分にある。突起部分には内器面から外側へ向かって穴をあけていた可能性がある。

器壁は薄く、６㎜ほどである。胎土中には細かい砂粒が多く混じるが、よく精製されているようである。内器面・外器面とも丁寧な磨研が施され、黒褐色を呈している。ほんの一部にしかすぎないため全体像をつかめないのが残念である。

出土状況から見てもこの調査地内にこの時期の遺構が存在する可能性は薄い。

鳥井原式土器（第24図Ｐ－063）

この型式の土器は三万田式に後続するものととらえられている。鳥井原遺跡の調査に際して出土した後期末～晩期の土器が第１～第４群に大別されている。このうちの第１群と第２群とされたものを鳥井原式土器とし、第１群の土器は浅く刻まれた頭から尾までが著しく長い羽状文と三角文をもつ土器であり、第２群の土器は器形が同じながら羽状文が消滅したものである。

深鉢形土器は口縁に２～３条の凹線を施し、文様帯の下半に巻貝などによる押点をもつ。内湾ぎみの球形の胴部をもつものなどがある。

この遺跡ではＰ－063にみられるように幅広の口縁部の文様帯に二本の凹線文が施されたものしかなく、長い羽状文のあるものはないようである。Ａ－４ｂ類であろう。

浅鉢形土器類では鉢形の胴部で口縁部が立ち上がる鉢形土器、口縁部と頸部下半～胴部上端に凹線に羽状文を描くものと凹線だけのものがあり、山形突起をもつものもある。また、体部の上縁が外反して口縁部になるものや口縁帯に凹線を施文するもの、なかには細線羽状文を付けるものがある。胴部は長く伸び喇叭状になる。胴部から強く内湾して口縁部が立ち上がるもの、また文様帯をもつ鉢形土器、浅鉢形の大型化した捏鉢形の土器などがある。

御領式土器

御領貝塚出土の土器によって型式設定されたものである。九州縄文土器編年の基礎を作った小林久雄氏はこれを〈末期〉とし、山内清男氏は〈晩期〉としたが、御領貝塚の発掘と報告を行った坪井清足氏は御領式を後期末と位置づけ、今日これが定説となっている。

御領式土器型式は後期後半～晩期前半の土器をみる上で基準となっており、御領式を中心に型式変化によってさらに新たな分類が行われてきている。さらに黒色磨研系土器としては確立完成された土器といわれる。この遺跡の土器はほぼこの型式から続く天城式に比定されるものが多い。

器種としては深鉢形土器、浅鉢形土器、椀形土器、注口形土器が知られ、非常に画一化されたものとなっている。本遺跡においても各器種が出土している。

深鉢形土器では口縁部に１～３条の幅は狭いが沈線とは呼べない凹線をめぐらし、頸部下端に段状の界線をめぐらしたものが多い。口縁部の沈線はこの遺跡の場合、ほとんどが２条となるものである。まれに凹点文を施す場合もある。他に口縁部の文様帯としての屈曲部はあるものの無文のものや、口縁部の文様帯がなく外反口縁をもつものがある。さらに御領式の特徴として凹線と凹線の間を突帯状に盛り上がったように作りだしているものがあることである。胴部では層の界線をもつものともたないものがある。この器形が御領貝塚では総個体数の44％を占めていた。鉢形をなす粗製土器もある。器形上の特徴として、深鉢形や浅鉢形では胴部から頸部へかけての屈折部が鳥井原式と比べ角張っている。また、屈折部付近で明らかな接合面があり、そこからはがれた状態になっているものが多い。

浅鉢形土器では小型の皿・椀など、器高に対する口径の割合の大小が明確になり、二つに細分することが可能になってくる。〈く〉字形口縁をもつ椀形土器、口縁部に２～３条の凹線をめぐらすものや、口縁下端

に楕円形の凹文を施すものもある。皿形の体部に強く外反して端部が立ち上がった口縁をもつ土器や口縁に山形突起をもつものもある。頸部が短く、内傾あるいは外反する鉢形土器もあり、ほとんどが山形突起をもっている。

注口土器は小型化し、胴部断面が算盤玉状になる。細線羽状文はどの形式にももはやみられない。

以上のことをふまえ、図に基づき具体的に遺物をみていこう。

まず、深鉢形土器は４類に分けられる。

Ａ－３類の全体の器形は鳥井原式とあまり変化していないが、口縁部幅が短くなり、かっちりとした印象を受ける。また、土器の最大径が胴部と頸部の屈折部にあり、頸部から口縁部にかけては内傾する。胴部から頸部への屈折部は鳥井原式まであった丸みが無くなり角張ってくる。頸部から口縁部にかけての頸部上端は鳥井原式より強く、しかも短く外反している。文様帯は口縁部にあり、基本的に二本の凹線文が引かれる。その凹線文はしっかりと引かれている。深鉢形土器ではＡ－３ａ類としてＰ－058～061、066、070～072などがある。

胴部と頸部の屈折部よりやや頸部寄りに、いわゆる界線と呼ばれている一つの段がめぐっている。これは鳥井原式までみられていた頸部の屈曲部分の名残であろうか。

この部分ではＰ－115、116がその特徴を示す。

Ａ－４類の器形はＡ－３類とほとんど変わらない。山形の突起のある部分は二本の凹線のうち上の1本が山形になる。口縁部下端に凹点が付くものがある。Ｐ－074、075などがある。

Ｂ－1類は全体の器形として頸部が内傾せず、ほぼ直立している。このため口径と最大胴部径がほぼ同じか、やや口径が大きくなる傾向にある。胴部から頸部への屈折部は角張る。Ｐ－079、089などがこの類であろうか。

小型の深鉢形土器（第38図Ｐ－306）が１点ではあるが、SI－39から出土している。形態的にこの型式に近いためここで述べることにする。胴部と頸部の境に界線がみられ、胴部の屈曲はやや丸みを帯びている。高さが10.05㎝、口縁径が11.3㎝、胴部径が9.1㎝を測るもので、ほぼ完形である。胎土には砂粒を含み、焼成も良好である。ただ、作りとしては決して見栄えのよいものではなく、器壁の厚さが0.9㎝前後を測り、底部に至っては1.3㎝ほどと非常に厚く、手捏ね的な土器である。最大径は口縁部であり、口縁部には文様帯としての屈折部はみられない。底部は上げ底となっている。形態的には深鉢形土器のＢ類の範疇に含まれよう。

この土器は遺構の中では炉のあった場所の上に石に置かれたような状態で出土している。偶然そうなったのか、遺構の廃棄に際してそのように配置したものか調査中には確認し得なかった。ただ、この土器は形態としては特殊なあり方をしているが、外器面の上部に付着した煤などから考えると、実用品として火を使う行為に利用されていたものと思われる。

次に浅鉢形土器であるが、Ｂ－２、Ｃ－１、Ｄ－1、Ｄ－２類がみられる。

Ｂ－２類は器形においては鳥井原式のそれとほとんど変わらない。ただ、口縁部幅が短くなっている。文様帯は口縁部にあり、二本の平行凹線文が引かれている。無文のものもあるようだ。

Ｃ－１類はＰ－114として確認されるが、胴部以下の形態は接合できていないため詳細はわからない。

Ｄ－１類は頸部が胴部との屈折部から短く内傾したあと強く外反するところに特徴があり、頸部と胴部、頸部と口縁部との屈折部は強く角張っている。文様帯は口縁部にあり、二本の平行凹線文が引かれている。口縁部幅は鳥井原式より短いがしっかりと直立する。

Ｄ－２類は二つに細分される。胴部や頸部が外に傾き、器高に対して口径の割合が大きくなるものと、胴部や頸部が外にそれほど傾かず、特に頸部は直立気味に内湾するため器高に対して口径の割合が小さくなる

ものである。屈折部は角張る。文様帯は口縁部とまれに頸部下端部にある。口縁部文様は二本の凹線文が引かれており、山形突起の口縁部下端には凹点文が押されている。胴部文様は深鉢の界線に近い凹線になるようだ。

椀形土器としては、この時期のものは不明確である。ただ、ミニチュア土器といえそうな第38図に示したＰ－307がある。この土器は破片ではあるが口縁部、胴部の屈曲部、底部の３つの要素からなっており、口縁部が最大径をもつ椀形土器といえよう。ただ、この土器と同じものはないのでやや特殊な意味合いのものである可能性がある。この土器の内器面には赤色顔料が付着している。その付着範囲が限られていることや外器面にはいっさいみられないことなどから考えると、この土器内に赤色顔料を蓄えていた可能性がある。

第38図のＰ－305の注口土器は本遺跡で唯一出土したものである。ほぼ完形品としてSK－09より単独で出土したものである。注口部をやや下にして横に倒れた状態で出土した。この注口土器はこの時期に含まれる可能性が大きいためここで述べる。

出土したSK－09の埋土は地山と非常によく似た土で、当初は遺構ではなく地山として処理していた。しかし、この遺物が出土したことで何らかの遺構の可能性がでてきたため、再度精査を行ったところ微妙な埋土の違いを発見し、遺構を捉えることができた。

注口土器は口縁部の径が8.6㎝、頸部から口縁までの高さ3.5㎝、胴部の最大径11㎝、注口部の接合部からの高さ4.3㎝を測る。口縁部は胴部からほぼ直線的に外反しながら立ち上がり、口唇部近くで一本の浅く狭い凹線が一周する。口唇端部は狭い平坦面を形成している。口縁の付け根は、口縁部自体の重みのためにやや沈み込んでいる。

注口部は接合部分からほぼ垂直に立ち上がり口近くになって急激に外反する。口部は口縁部とほぼ水平の高さになり、やや外側へ落ちている。接合部分は胴部の上部に頸部と接するようになっている。

胴部は算盤玉状になり、胴の一番張った部分に二本の平行凹線がはいり、下の凹線の下部で最大径を計る。凹線は注口の付け根付近で上の凹線が両側からせり上がり、山状のとがりを形成している。これは深鉢形土器のＡ－１類にみられる波状口縁の凹線の描き方に似ている。

胎土中には黒雲母や長石などの細砂粒を多く含むもののよく精製されている。焼成は良好であるが、器壁が薄いためもろくなっていた。底部は中央がやや平坦に近くなった丸底である。底部外器面の中心部分はよく利用されたのか器表面があれている。

器表面自体はよく研磨されている。さらにその表面には赤色顔料が塗布されていたようで、部分的ながら、顔料の付着がみられる。

全体的にみると、目立つ文様はないものの非常に整ったプロポーションをしている。なお、この土器は御領貝塚出土の注口土器の破片に類似しているようである。

天城式土器

晩期前半の型式としては、黒川洞穴の発掘により黒色磨研土器と条痕文土器の組み合わされた土器が知られ、晩期初頭の黒川式とされた。しかし、その後の調査の進展により、九州各地で黒川式と御領式の間を埋める土器群が知られるようになった。菊池市天城遺跡では三万田式・鳥井原式・御領式などの各型式の土器にまじって御領式土器と類似しながらも異なる土器群が抽出された。深鉢形土器では口縁部の文様がより狭い沈線であったり、浅鉢形土器にバリエーションが生じている一群で、天城式と命名された。

器種としては深鉢形土器、浅鉢形土器、椀形土器などがみられる。また、浅鉢形土器での器高に対する径の割合の大小による二分化がより明確になってくるという。

文様は縮小化が進み、はっきりした文様帯は深鉢形土器の口縁部などに限られ、その文様も平行沈線文が粗雑に引かれ、数も一定しておらず三本以上が一般的である。浅鉢形土器の口縁部にも沈線文がみられるが

１条のみとなり、ともに文様の本来の意味が薄れてきたのか、変化してきたものと思われる。

器形は胴部から頸部にかけての屈折部の角張りが弱くなり、角度も大きく緩やかになっている。これは浅鉢形土器にもみられる傾向である。

器面調整では、浅鉢形土器以外の磨きが粗くなり、特に深鉢形土器では胴部以下の部分は部分的な磨きが主流になっている。磨きの前に行われた条痕がかなり残っている。

深鉢形土器には、Ａ－４、Ｂ－１類がみられる。

Ａ－４類は深鉢形土器の口縁部が内傾せず、直立するかやや外傾しており、口縁部幅も少し広くなる。また、胴部も緩やかなふくらみを持っており、重心が下がり安定している。最大径は胴部から頸部への屈折部にあり、頸部はやや外湾しながら内傾してしまっている。胴部と頸部の屈折部外面には界線が無くなってしまったものもあるが、粗くなっているもののかろうじて確認できるものもある。

なお、この類は御領式にみられた口唇端部のきっちりとした平坦な面が丸まりながらも残されている。口縁部の文様帯はあるが、幅は広がり、狭かった凹線もしまりがなくなっている。Ｐ－119、143などがそれである。

文様帯として口縁部に帯部をもつが、無文化したものも引き続きあるが、その幅は広がり、屈曲も弱くなり、頸部との境も明瞭さを欠くようになる。第27図のＰ－102、105～112はその特徴を示しているようである。また、第36図のＰ－267もこの中に含めるべきであろうか。ただ、この土器では頸部と胴部の境に界線の痕跡と思われるものがかなり明瞭に引かれている。

Ｂ－１類はＡ－４類の底部から頸部までの特徴とほぼ一致する。口縁部の文様帯に当たる部分が無いもので、明確に御領式との差が見分けにくい。ただ、頸部から底部にかけての特徴からこの中に含まれるものと判断ができる。

Ｐ－114はこの時期のものであろうが、かなり丁寧な磨きが内器面、外器面ともに施され、作りとしてはよいものである。Ｐ－143もこの中に含めてよかろう。

これらの底部はまだ若干の上げ底気味ではあるものの平坦化が進行しているようである。

浅鉢形土器では、Ｄ－１、Ｄ－２類がみられる。両類とも口縁部はしっかりとした立ち上がりを示すが、その幅はかなり短くなり、沈線文は基本的に１本～２本で構成されるが、１本線のみへと近づいている。また、Ｄ－２類の山形突起も形式化が進んでいく傾向にある。ただ、山形突起の下に付けられる凹点文は形式的ではあるがまだ残されている。Ｐ－218、231などがそれである。

椀形土器はこの時期のものとして明確には不明であるが、Ｐ－259などがその中に入るのではなかろうか。他遺跡の例では、手捏ねのような状態で粗雑な作りになるものもあるという。

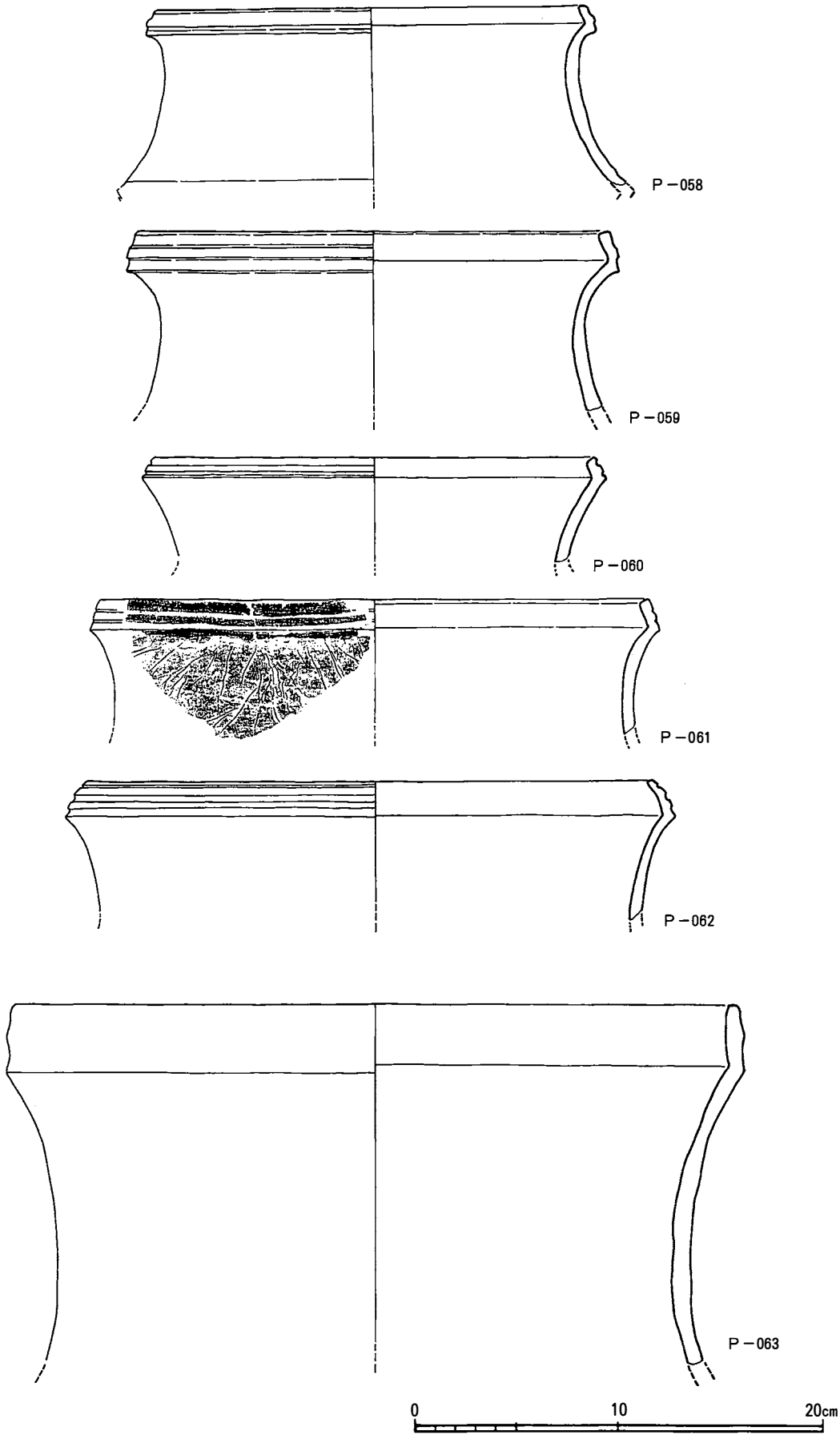
この時期の注口土器は鶴羽田遺跡では出土していない。

古閑式土器

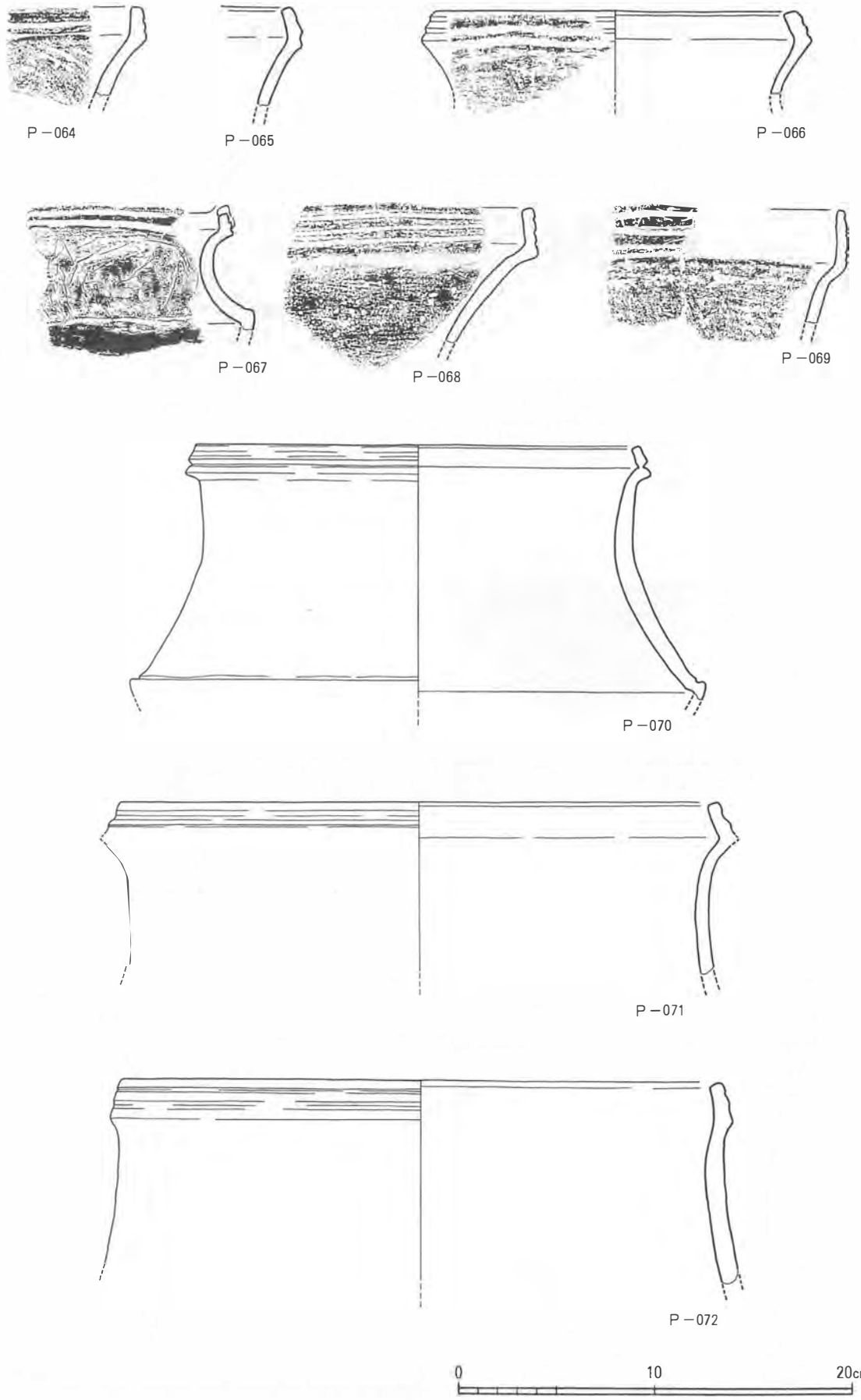
天城式土器に後続するものと想定されているのが、上益城郡益城町の古閑遺跡を標識遺跡とする古閑式土器である。古閑遺跡の調査で出土した土器は黒川式直前のものと考えられ、一括して古閑式と呼ばれている。御領式以来の形式がさらに形骸化し、異形の鉢形土器などが出土する。また、土器の成形・整形・調整・焼成が甘くなり、雑な土器が多くなってくる。黒色研磨土器に変化があらわれてきたようである。鶴羽田遺跡から具体的に古閑式とすべき土器は非常に少ない。器種も限られる。図化しなかったが、口縁部の縁帯が広がり退化し、頸部との境を示すように口縁側を押さえ、その下部が隆起するような形態の浅鉢形土器の一部がある。その胴部以下は粗めの条痕による調整がなされている。

なお、この古閑式は２～３型式に細分される可能性が指摘されている。

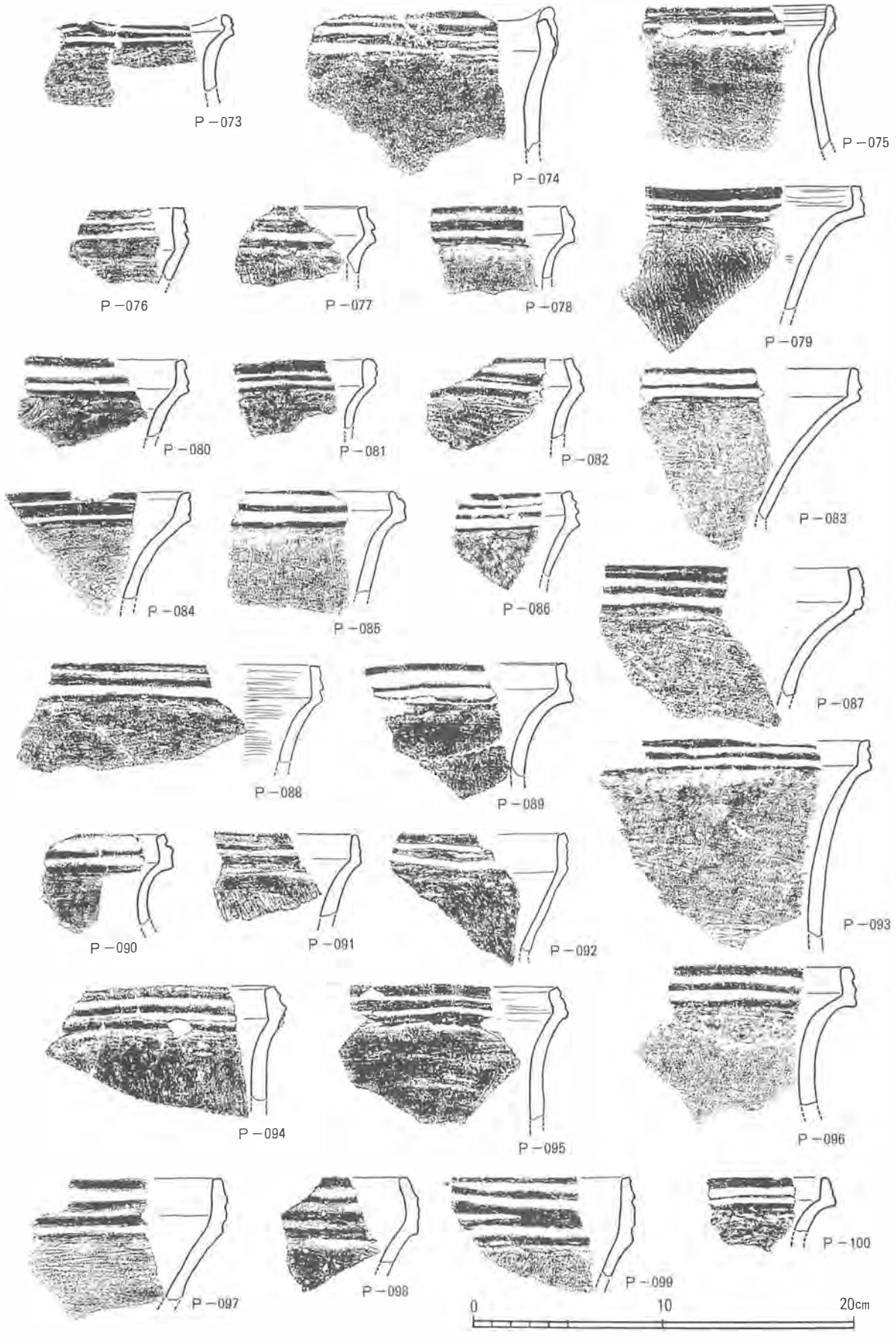
古閑式には滋賀里II式の浅鉢を伴うことが知られている。外器面の口縁より下の部分に細線による重弧文



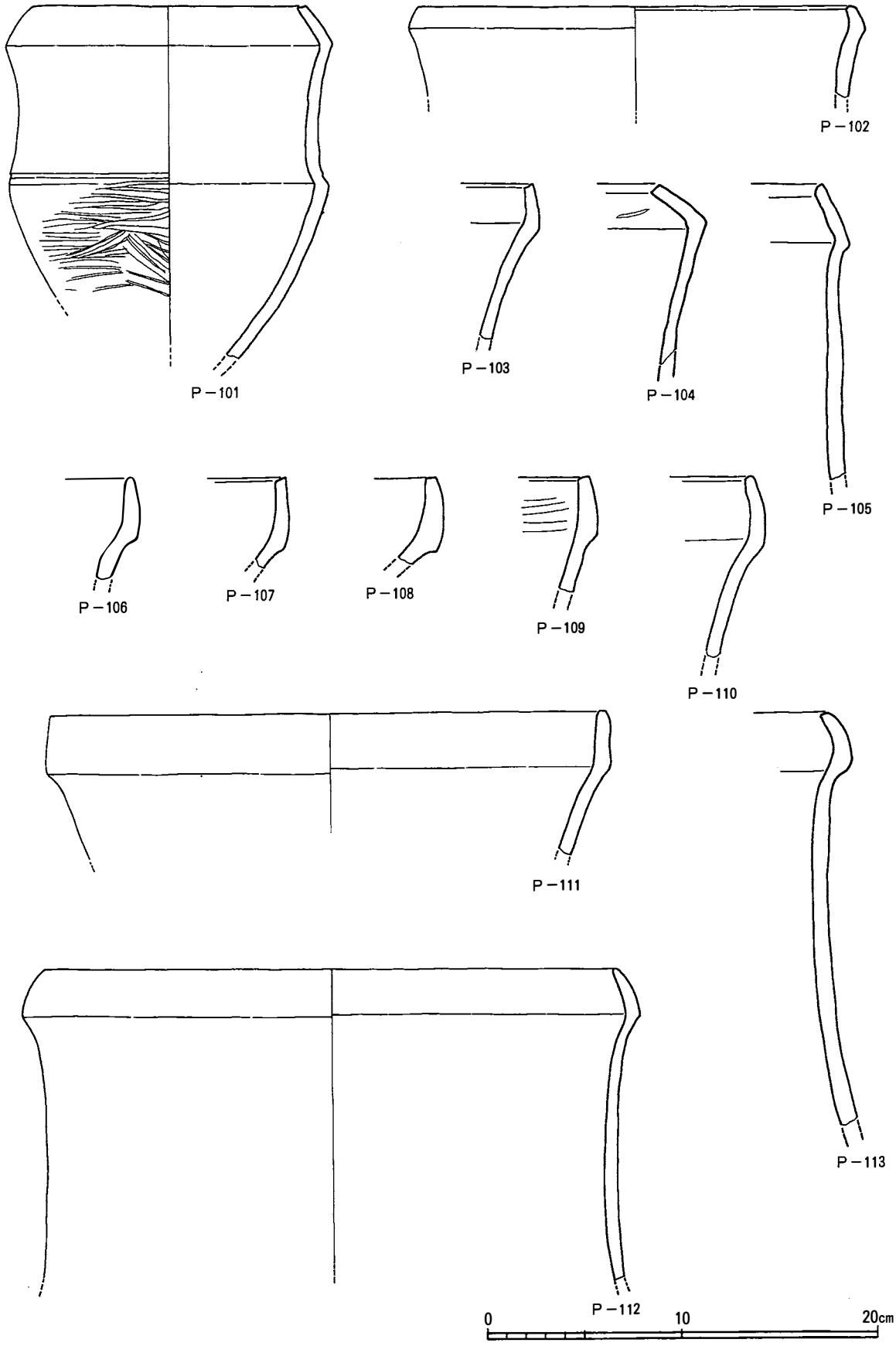
第24図　縄文土器実測図(3)



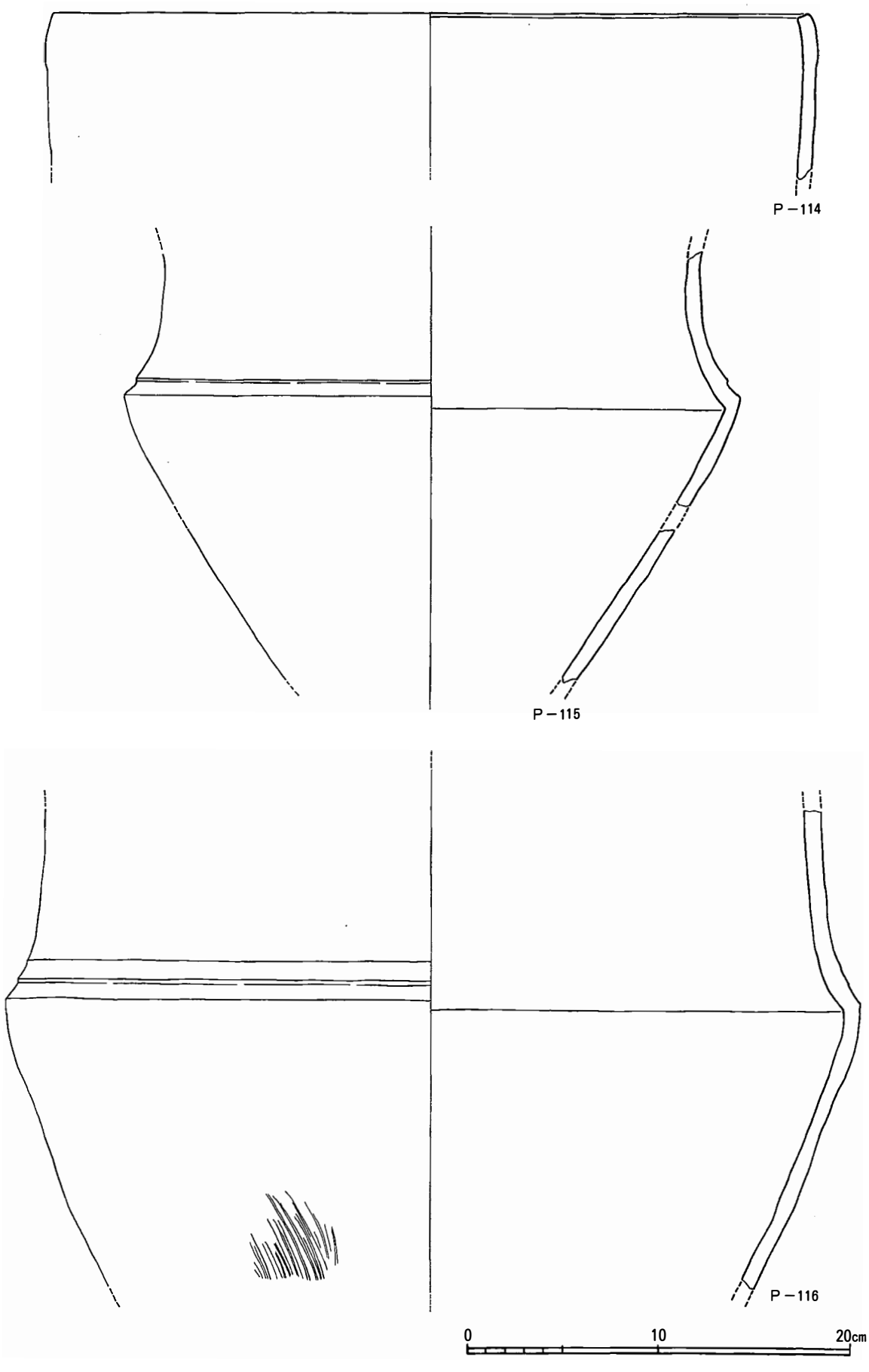
第25図　縄文土器実測図(4)



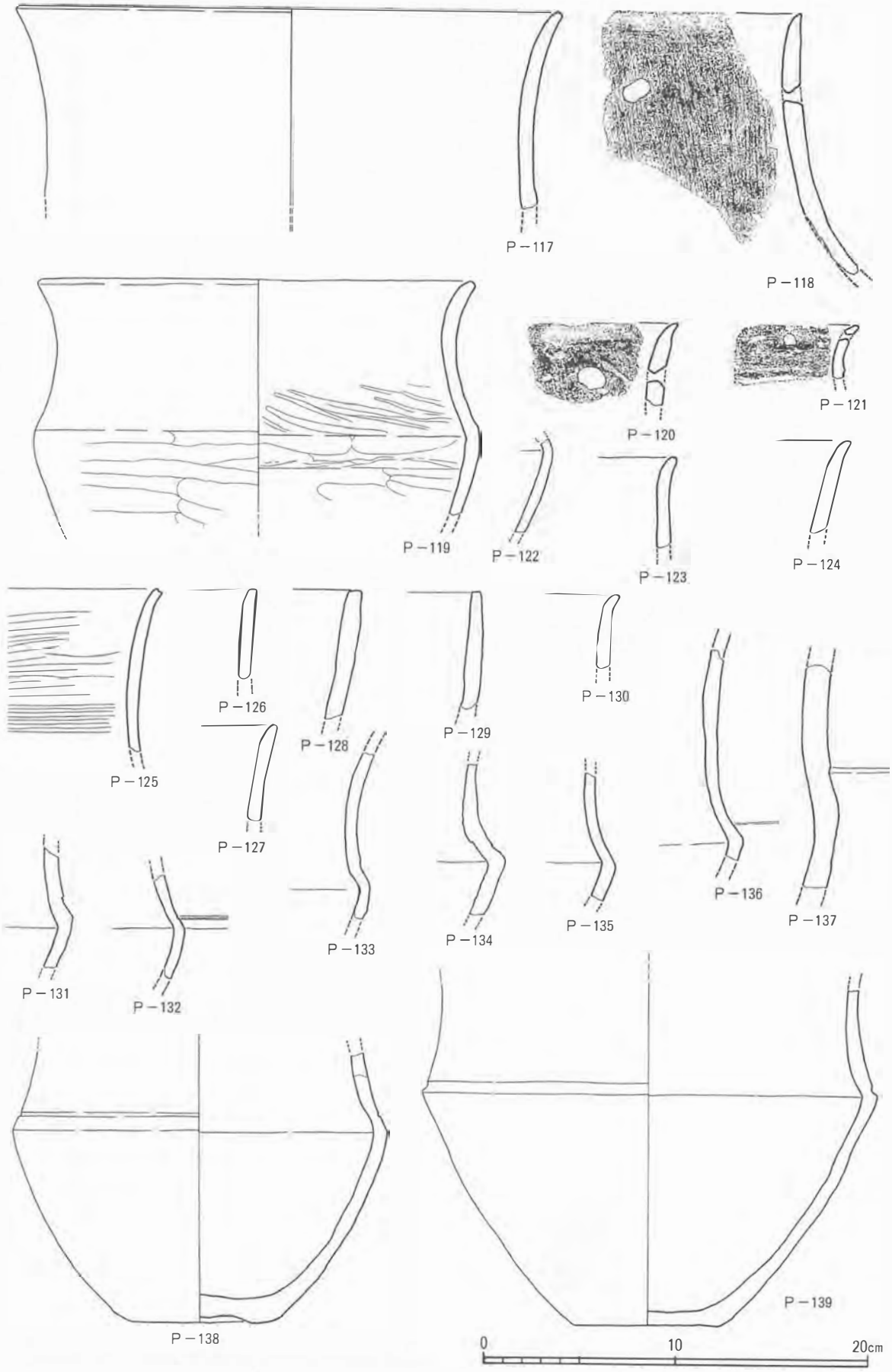
第26図　縄文土器実測図(5)



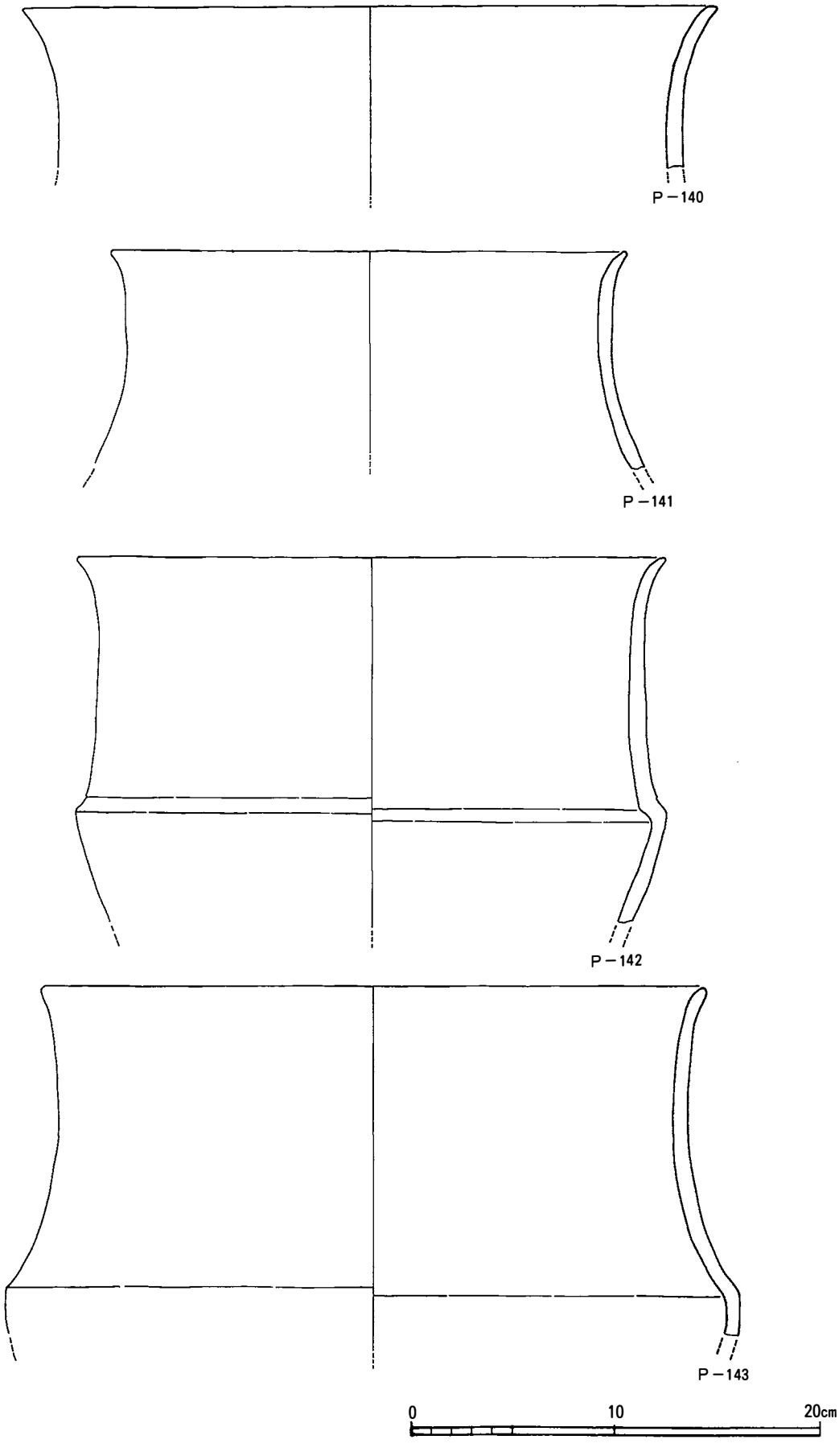
第27図　縄文土器実測図(6)



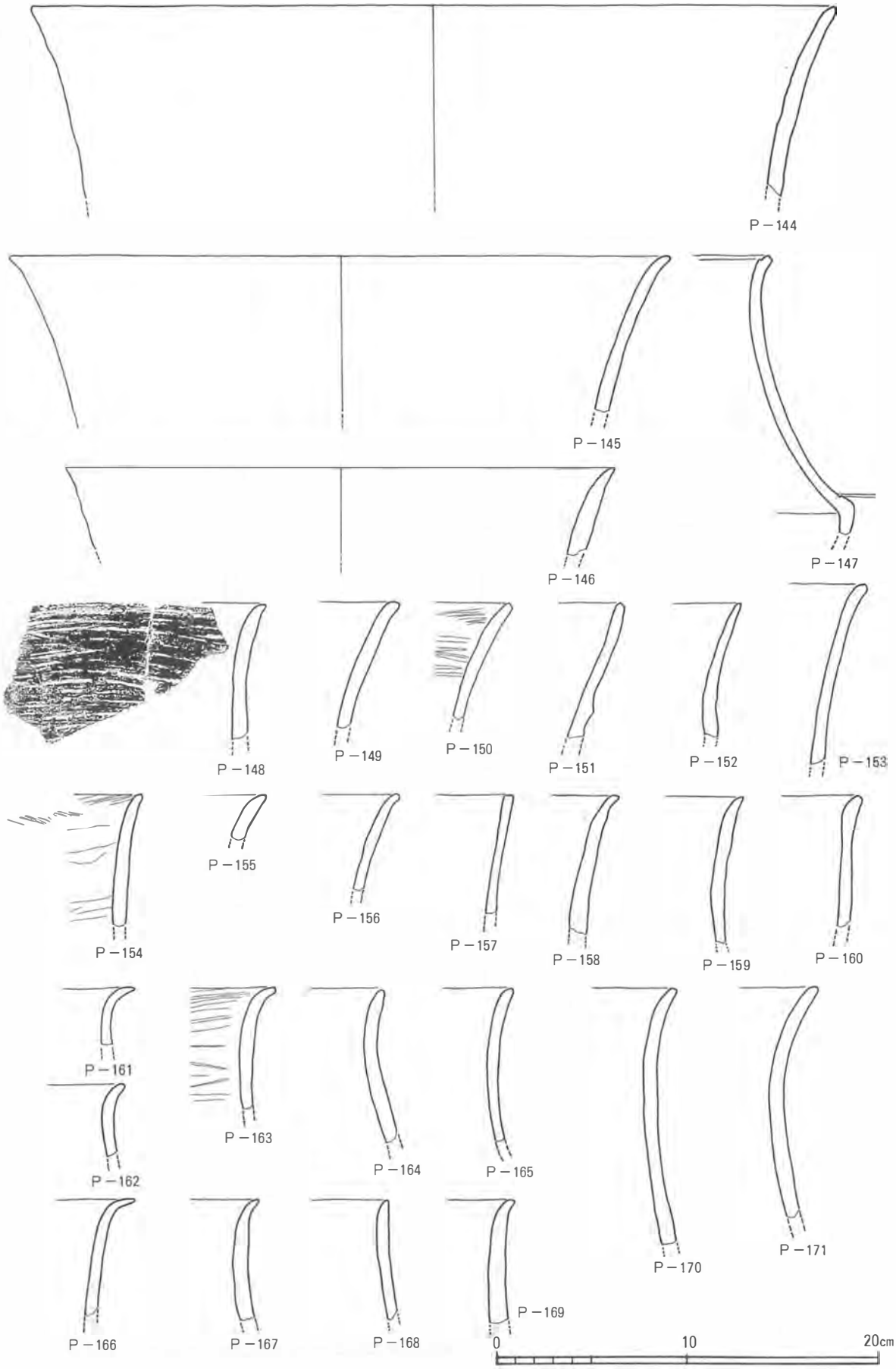
第28図　縄文土器実測図(7)



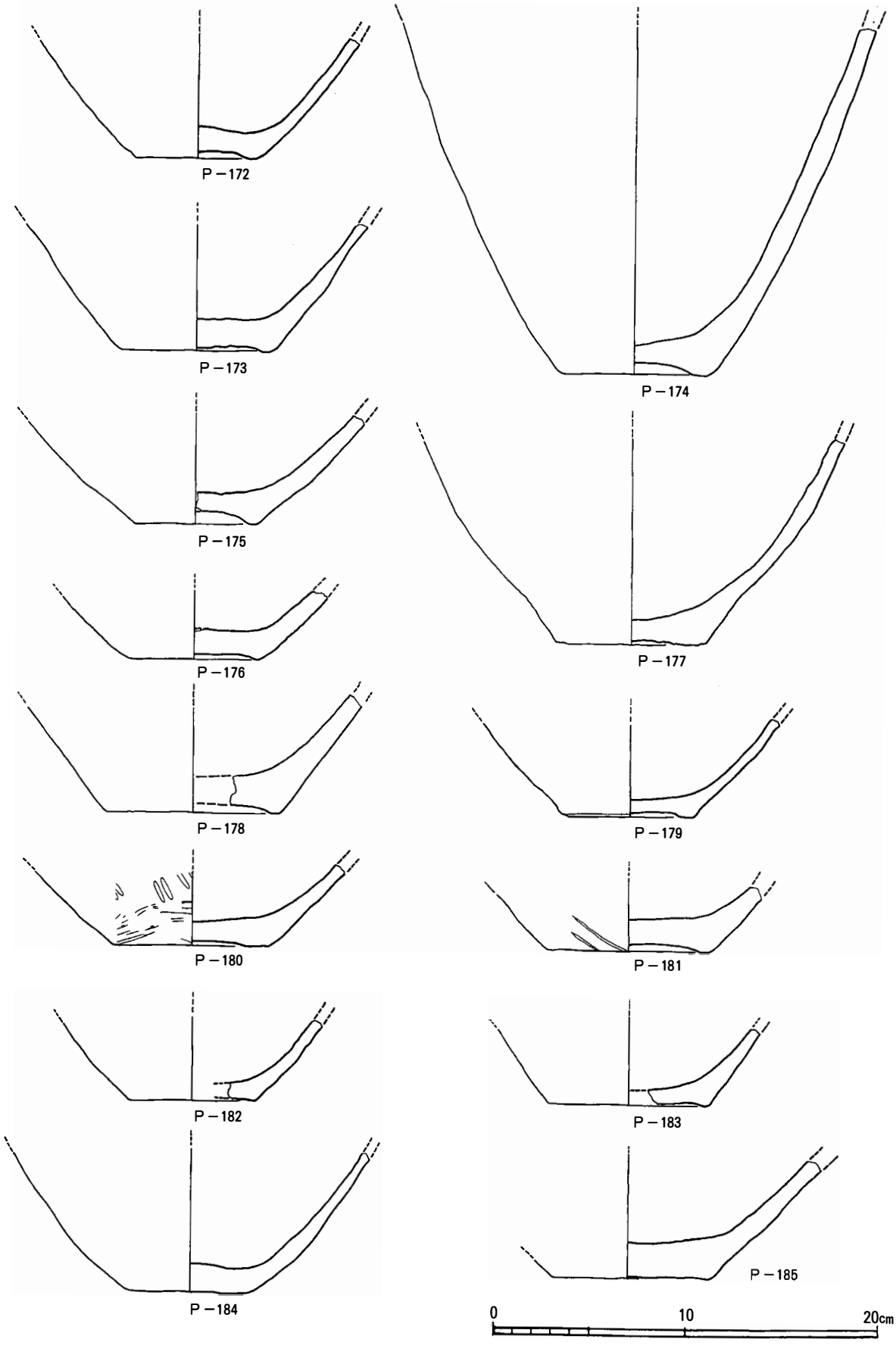
第29図　縄文土器実測図(8)



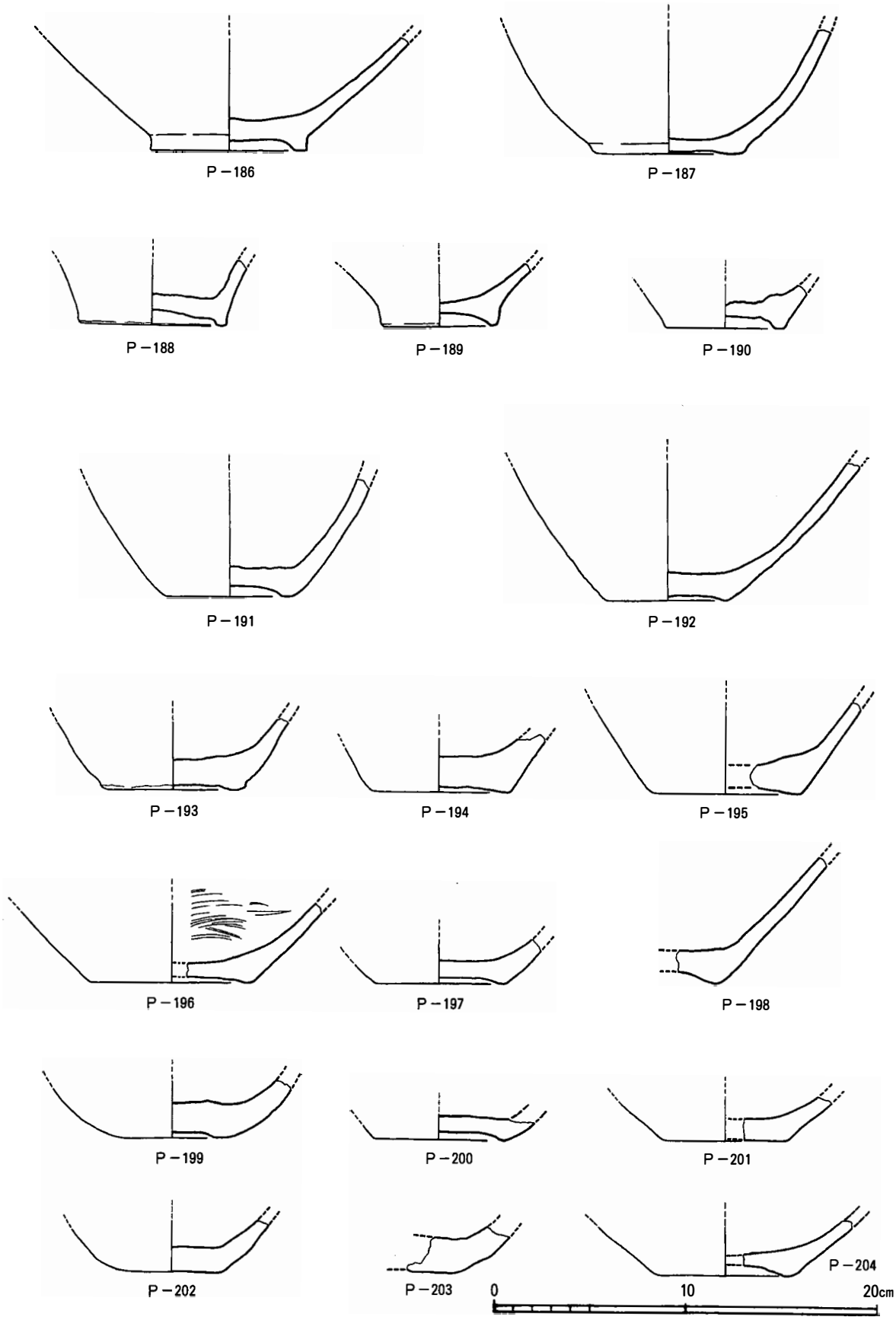
第30図　縄文土器実測図(9)



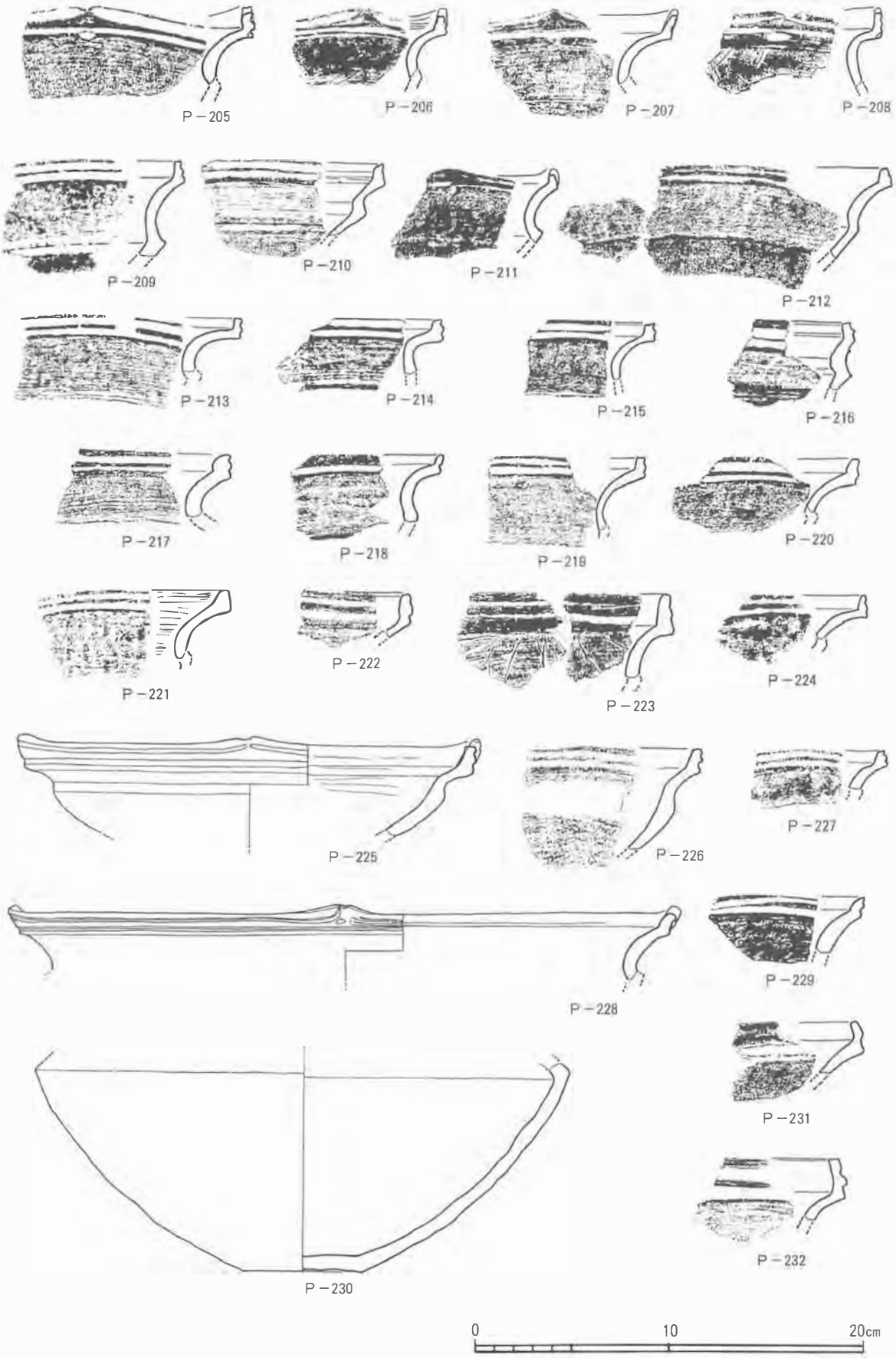
第31図　縄文土器実測図(10)



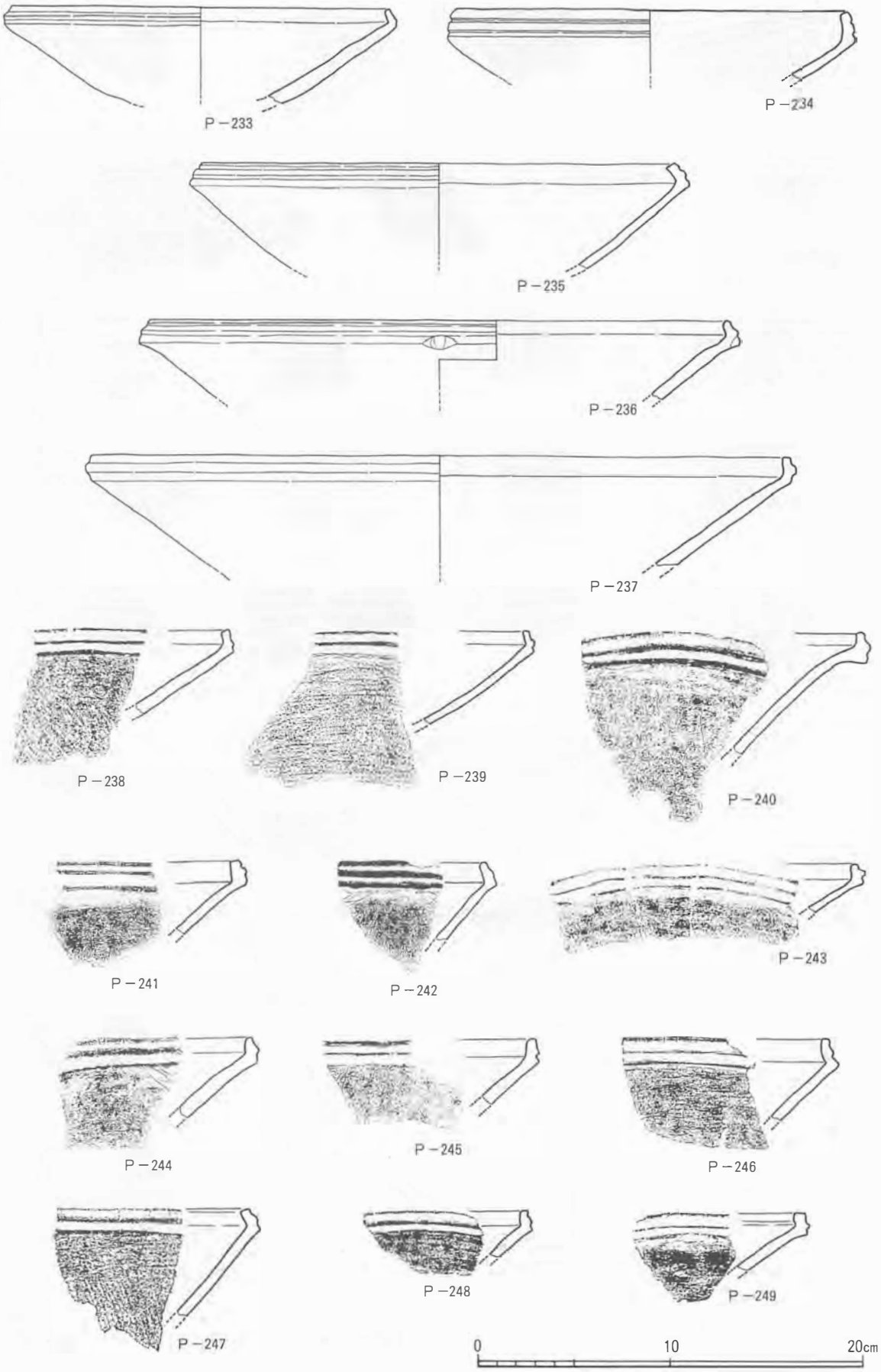
第32図　縄文土器実測図(1



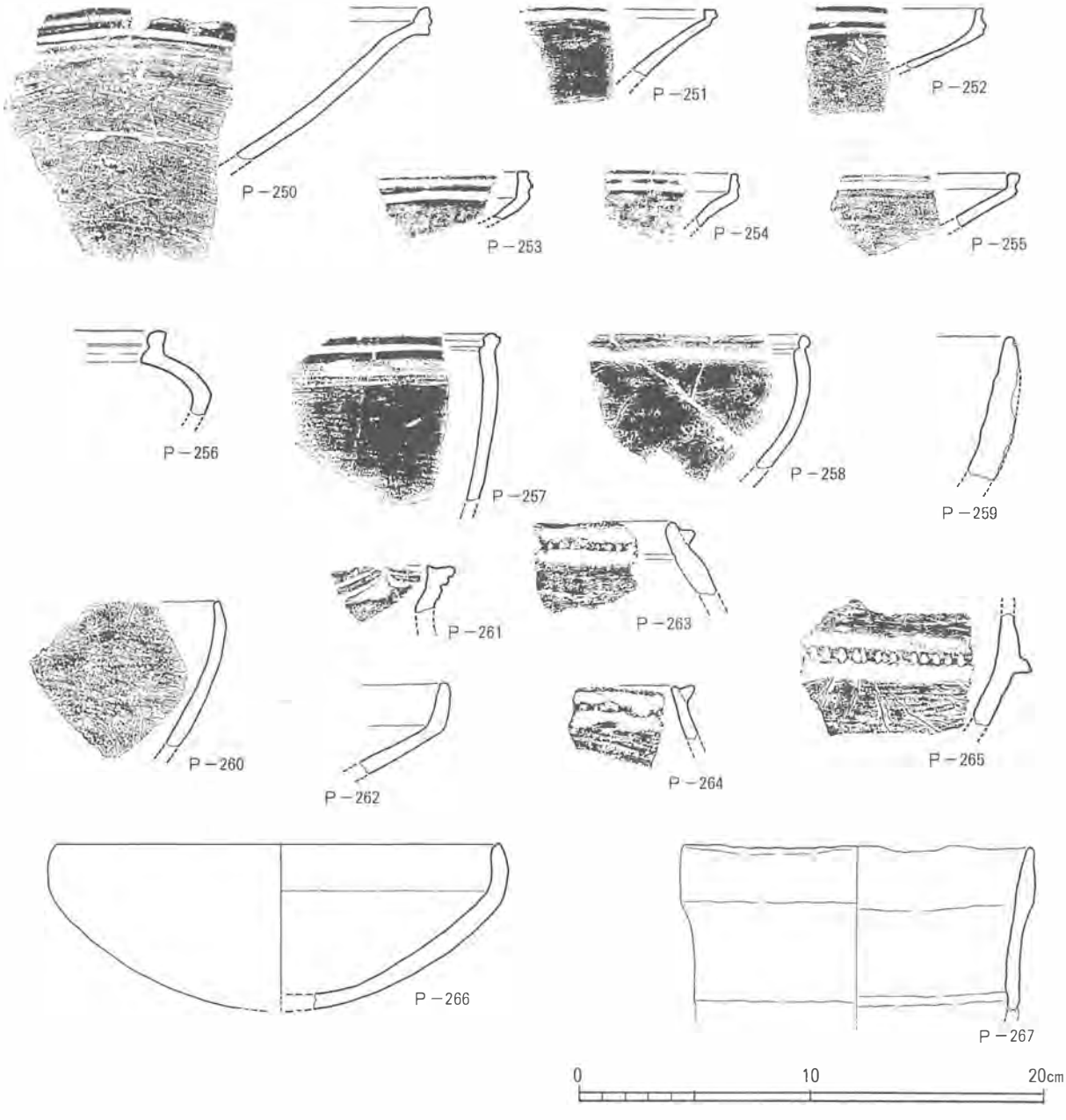
第33図　縄文土器実測図(12)



第34図　縄文土器実測図(13)



第35図　縄文土器実測図(14)



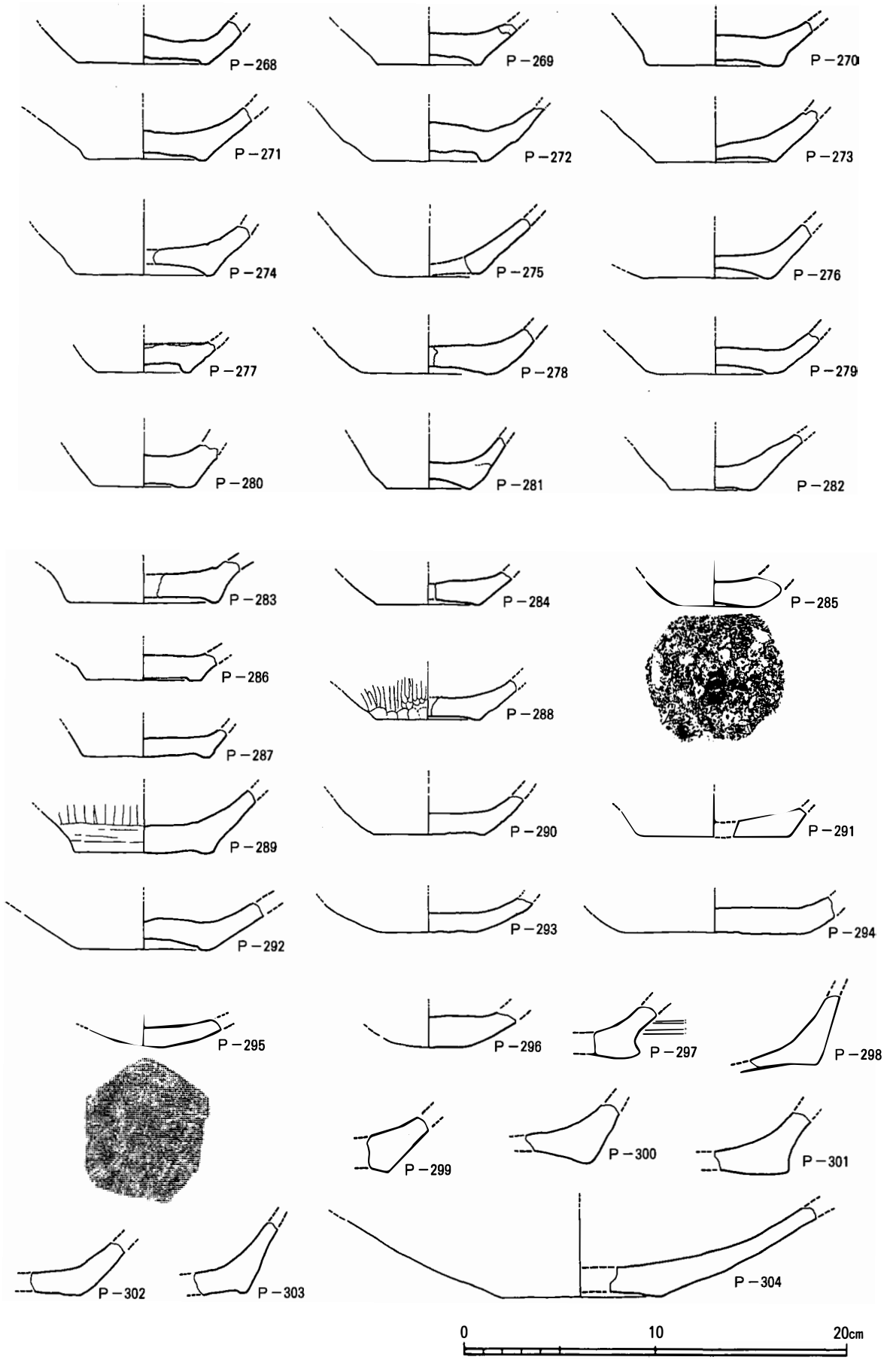
第36図　縄文土器実測図(15)

や平行沈線を施すものがある。さらにこの期以後、浅鉢形土器のみに黒色研磨の技法がみられ、深鉢形土器は表面の条痕をそのまま残すものが主流となる。

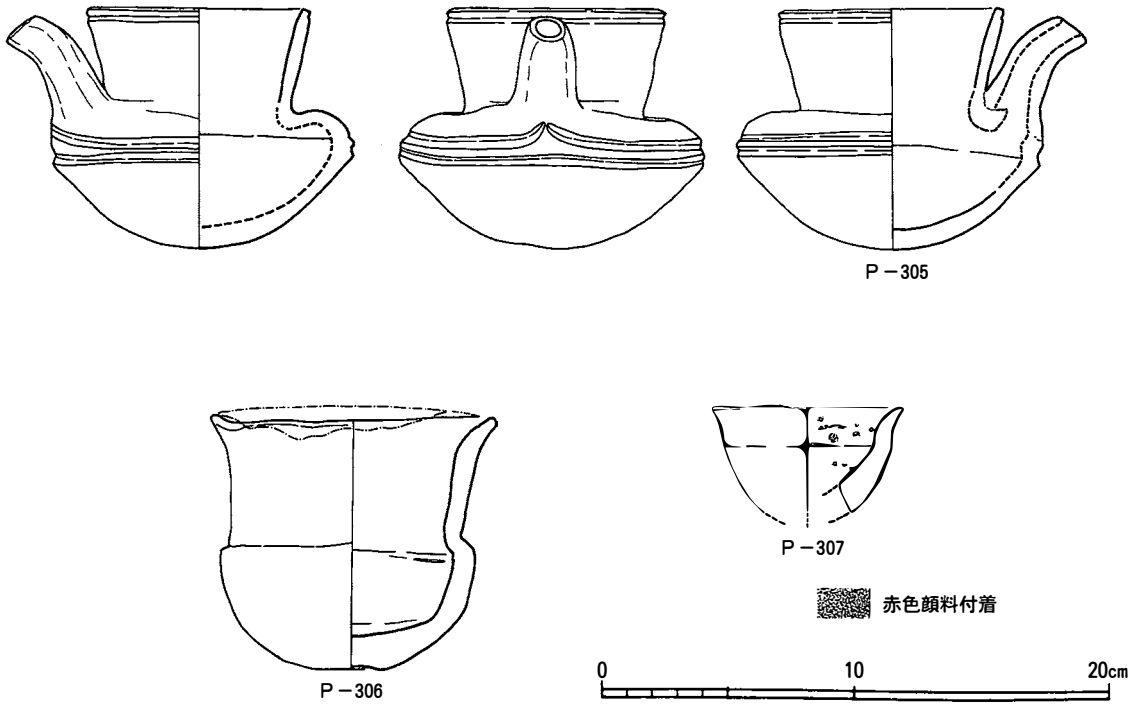
また、御領式・天城式に比べ器形の規則性がなくなりはじめ乱雑化が進み、器面調整も粗雑に行われるようになる。なお、古閑遺跡では浅鉢形土器の比率が47.2%と高く、形式の多様化と考えられている。

黒川式土器

中部九州の中で、熊本県地方では古閑式の後に設定される土器型式の良好な遺跡が知られておらず、当地域での型式名の設定はされていない。そのため現在まで論文、報告書などで用いられてきた鹿児島、宮崎地



第37図　縄文土器実測図(16)



第38図　縄文土器実測図(17)

方の型式名である黒川式をそのまま使用する。そのため、本来の黒川式土器の内容とは異なる部分があると思われる。

黒川式土器の段階になると、器面調整や胎土において深鉢形土器と浅鉢形土器の差がさらに広がる。深鉢形土器の器面調整は粗い条痕によって仕上げられている。一方、浅鉢形土器は胎土がよく精製された良好なもので、器面調整でも丁寧な研磨が施されている。

器種としては深鉢形土器、浅鉢形土器、椀形土器などがある。

深鉢形土器には、A－4、C－1、D－1、D－2類がある。A－4類は口縁部、頸部、胴部の各部が前型式より、いっそう屈曲が弱くなり直線的になる。前段階までみられた胴部のふくらみもなくなってきているようである。

C－1類がこの型式になって目立ってくる。古閑式のC－1類が胴部の口縁部近くで外湾ぎみに丸みを持っていたのに比べ、黒川式は口縁部まで直行する器形や、胴部の上位がわずかに逆「く」の字状に屈曲する突帯文系土器の深鉢形土器に近い形状を示すものもある。この類には口縁端部に蝶ネクタイやそれを半割したような突起飾りが付くものがある。

D－1類は胴部上端が外側に折れ曲がり、口縁部のようになったもので、いわゆる甕形をなす。資料としては少ない。第36図のP－257がこの範疇に入る。

D－2類はD－1類の口縁端部外面や、やや下部に断面三角形の突帯をめぐらしたもので刻み目は入っていない。ただ、凹点文がまれに確認できる。これは連続するものではなく周囲をいくつかに分割する位置にあるものと思われる。

この時期の土器の底部は平底でつくりも厚くなる傾向にある。ただ、本遺跡での出土例は少ない。

浅鉢形土器には少数であるが、第36図のP－256のような土器がみられる。ただ、他の器種もあると思われるが、確認できたのはこのタイプのみであった。この土器は胴部上半が外湾し、頸部と口縁部はほぼ一体化し、かろうじて前段階の特徴を持っているものの非常に間隔が短くなった器形を示している。外器面の口

唇部にあった沈線はすでになく、内器面に口縁部の立ち上がりの痕跡が沈線となってめぐっている。

また、形態的には椀形としてもいいようなＰ－258も浅鉢形土器の変化したものと捉えられる。この土器の最大径は口縁部付近で口縁外器面に文様はまったくなく、内器面に沈線がかろうじて残されている。Ｐ－256とＰ－258が同時期なのか時期差による形態変化なのかはにわかに決めがたい。しかし、他の遺跡の例からすれば、ほぼ同時期で器種の違いとでもするべきであろうか。これらの土器は明確な黒色磨研土器で、よく精製された胎土と丁寧な器面調整及び黒色の器表面が特徴である。

椀形土器については、前型式と同様のものと考えられるが、詳細は不明である。ただ、Ｐ－260とＰ－295は椀形土器に分類され、外器面に沈線による重弧文様を描いている。

高杯形土器も想定されるが、出土していないため不明である。

【突帯文系土器】

この系の土器はすでに黒川式土器の段階に初源が在るようであるが、明確にみられるのは山の寺式土器の段階からである。その後弥生時代まで続いていく。ただ、この土器は黒色磨研土器と重なる時期があり、クロスしながらさらに赤色磨研土器との関係を持ちながら続いていくようである。

山ノ寺式土器

この段階の土器型式は熊本県ではまだ明確になっていないところがあり、他地域の型式名である山の寺式を便宜的に使用する。鶴羽田遺跡では山の寺段階の土器片と思われるものが僅かながら出土している。突帯に刻み目が入るいわゆる刻目突帯文土器である。また、これに伴う黒色磨研土器も出土している。この段階では、器形としては深鉢形土器では突帯文が現れ、浅鉢形土器はそれ以前から黒色磨研が施されている。しかも、この黒色磨研土器はより洗練されたものも生まれ、他地域からの要素もより目立つ傾向にある。

Ｐ－263～265はいずれも刻目突帯文土器で、外器面に粘土を貼り付け、それに刻目を細かい工具でつけている。小破片のため調整ははっきりしないが、Ｐ－265の外器面には条痕による調整がみられる。

【底部】

最後に底部について述べる。底部はこの黒色磨研系土器においては、他の遺跡例とも併せて考えると、上げ底から平坦な底へと変化していくようである。また、径も変化があるようであるが、口縁部との関係を具体的にみることができなかったためここでは不明としておく。

この遺跡で出土した大部分の底部は、上げ底かやや上げ底気味のもので、晩期の後半にみられる完全な平底のものはないようである。ただ、底部のみをみながら全体的な傾向としては平底化が進行していっているようである。

(2)石器

本遺跡から発掘された縄文時代の石器は総数100点をはるかに越える。出土状況としては、遺構に伴うものと包含層からの出土である。

石器の器種ごとに以下に分類して記述していくが、図化した遺物の計測値や観察結果については出土石器観察表（第３表）にまとめている。

ａ　石　鏃（第39図）

総数33点が遺跡全体から出土した。遺構に伴うものが12点と少なく包含層中からの出土が多い。石鏃の出土状況としては、遺構内で出土したものと点取りしてあげたもののうち総数の１／３程は原位置を保持している。ここで図化したものは遺構からの出土品を主として、全体の１／２近い14点である。

石鏃はその形状と特徴から、大きく８類に分類した。

Ⅰ類

図化していないが、全体の形状が二等辺三角形をしている平基式の石鏃が１点のみ出土している。両側辺はほとんどふくらまずに先端へと続く。裏面は側辺の加工以外ほとんど剥離面がそのまま残り、裏面から表面への剥離によって調整している。

Ⅱ類（第39図　Ｓ－003、004）

全体の形状が正三角形をしている凹基式のものが３点出土している。Ｓ－003は凹基ではあるが、わずかに内湾するくらいである。両側辺はやや外湾しながら先端へ続く。石材はチャートを利用している。

Ｓ－004はわずかに凹基ながら、ほとんど平基に近い。両側辺はわずかにふくらみながら先端へ続く。石材は安山岩であろう。

もう１点は図化していないが、S－004に似るもので、ほんのわずかに抉りが入り凹基式の中に入れられるものである。両脚は先端が丸まっている。

Ⅲ類（第39図　Ｓ－005、006）

全体の形状が二等辺三角形をしている凹基式の石鏃である。凹基はわずかに内湾する。両側辺は基部からやや外湾し、下から１／３をすぎたところから先端部に向けて直線的になるものである。Ｓ－005は黒曜石製で、両側辺からの剥離が丁寧になされ、一見鋸波状を呈している。両基部の先端は尖る。

S－006もこの中に含まれるが、005に比べやや作りが粗雑で、片面に素材からの剥離面が残っている。同じく黒曜石製である。

Ⅳ類（第39図　Ｓ－007～009）

全体の形状が五角形をしている非常に特徴的な凹基式の石鏃である。凹基の抉りは内湾状をしているが、抉り自体は浅い。両側辺は基部からほぼ垂直に立ち上がり、中位置よりもやや下部で最大幅を計り、そこから先端部へと直線的に伸びる。二つの脚部はそのため内側に向かっているか、直に降りているものである。その最大幅の位置から２つに分けられる可能性がある。

Ｓ－007は全長の1／２付近が最大幅を計り、他のものに比べてやや小振りである。安山岩製である。Ｓ－008は全長の１／３付近に最大幅をもつものである。黒曜石製で裏面に素材からの剥離面をそのまま残す。Ｓ－009も全長の１／３付近に最大幅をもつもので、丁寧な剥離がなされている。

Ⅴ類（第39図　Ｓ－010～012）

全体の形状が二等辺三角形をしている凹基式の石鏃である。凹基の抉りは浅いが、丁寧に抉りを入れている。両側辺は基部から直線的に先端部へ伸びる。基部の両脚部の先端が丸、もしくは方形ぎみになっている。両側辺からの剥離は剥離面に対して鈍角になされたためか、断面が他のものよりやや厚い印象を受ける。

Ｓ－010は裏面の剥離がやや粗いようである。Ｓ－012はやや小振りである。基部の両脚がかなり明確に方形に近くなっている。凹基の抉りは丸い。

図化していないもののうち、５点がこの類に入る。

Ⅵ類（第39図　Ｓ－013、014）

全体の形状は二等辺三角形を呈しており、両脚の先端が鋭角に尖るものをこの類とした。ただ、Ｓ－013は凹基の抉りが深く、全長の１／２近くまで入り込んでおり、両側辺もやや外湾気味である。一方Ｓ－014は凹基の抉りが浅くＳ－011と類似している。このためこの類はさらに分類可能か、Ｓ－014を他の類に移す必要があるのかもしれない。

図化していないものでこの類に入るものは２点あり、いずれも図化したものよりも小振りである。

Ⅶ類（第39図　Ｓ－015、016）

全体の形状が二等辺三角形をしている凹基式の石鏃である。凹基の抉りはアーチ状をしており、抉り自体はそれほど深くはない。両側辺はやや外湾するがおおむね直線状をしている。さらに特徴として両脚部がやや幅広で、先端が水平になっている。Ｓ－015は両脚とも欠損しているもののＳ－016との類似性からこの中に含める。Ｓ－016は出土した石鏃では大きい方に入り、凹基はそう深くはないもの明確な抉りが入っている。

図化していないもののうち、８点がこの類に入る。

Ⅷ類

高さに対して基部の両脚の幅が広い二等辺三角形を呈するもので、１点のみの出土である。これも図化していない。抉りは浅いが幅は広く大きく感じる。黒色気味の安山岩製である。

このように石鏃をおもに形態によって分類したが、時期については明確にする事は困難である。この遺跡では、縄文時代早期から晩期までの土器が出土しており、時期を特定するのはかなり厳しいようである。しかし、その中でも後期末から晩期はじめの時期の遺物が多いと考えれば、石鏃のうちのかなりのものがこの時期に含まれると推定される。

また、使用されている石材は、黒曜石とサヌカイト類似の石材に大きく２分されるようである。黒曜石は明らかに姫島産といわれるものもあるが、大部分はやや気泡を含む黒色のものである。

ｂ　スクレイパー（第40図～第42図）

ここでいう「スクレイパー」とは、この石器によって対象物を薄く削ったり、剥いだり、なめすなどの作業を行ったと推定される石器を指す。その対象物は石材よりも軟らかいものとしておく。形態上、定型的な形と剥片の側辺の鋭いエッジをそのまま利用したものがある。

以下にその具体的な石器とその個々の説明を行う。

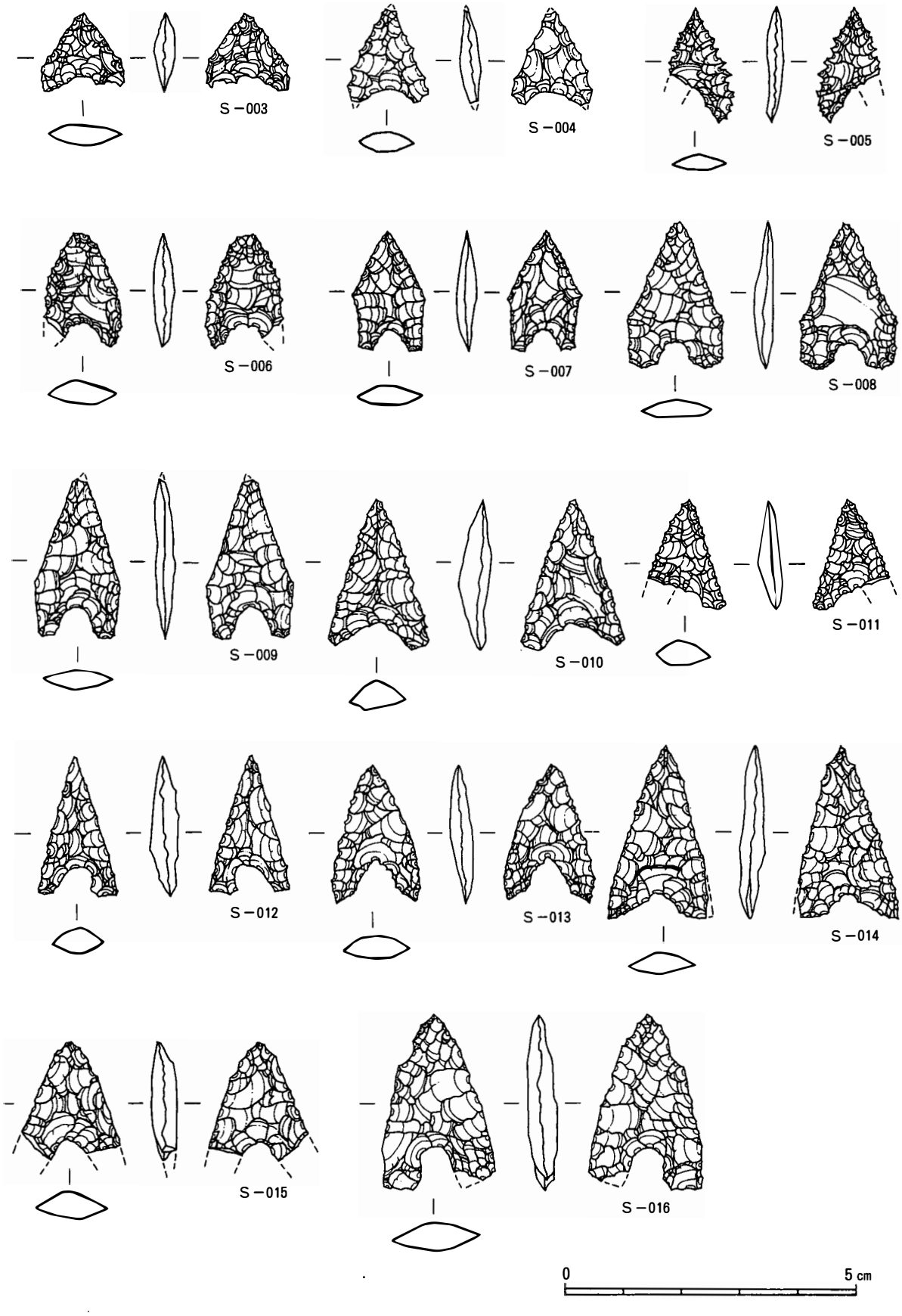
Ｓ－017～019まではいわゆる「石匙」と呼ばれる石器である。Ｓ－017は縦型のものである。石材は黒色のサヌカイトに似た安山岩で作られている。横長の剥片を利用したもので、長軸の一方の端に抉りをいれてつまみ部を作り出し、刃部を作り出している。Ｓ－018も縦型の石匙で、横長の剥片の各側辺に剥離を入れ、長軸の一方に抉りをいれてつまみ部を作り出している。側辺の剥離は丁寧であるが、全体的には素材からの剥離面をよく残している。これも安山岩製である。

Ｓ－019は横型のもので、横長の剥片を利用したものである。バルブが残っており、そこに抉りをいれつまみとしている。刃部は細かい剥離を入れている程度で、剥片本来の薄く鋭利な部分を利用しているようである。頁岩製か。

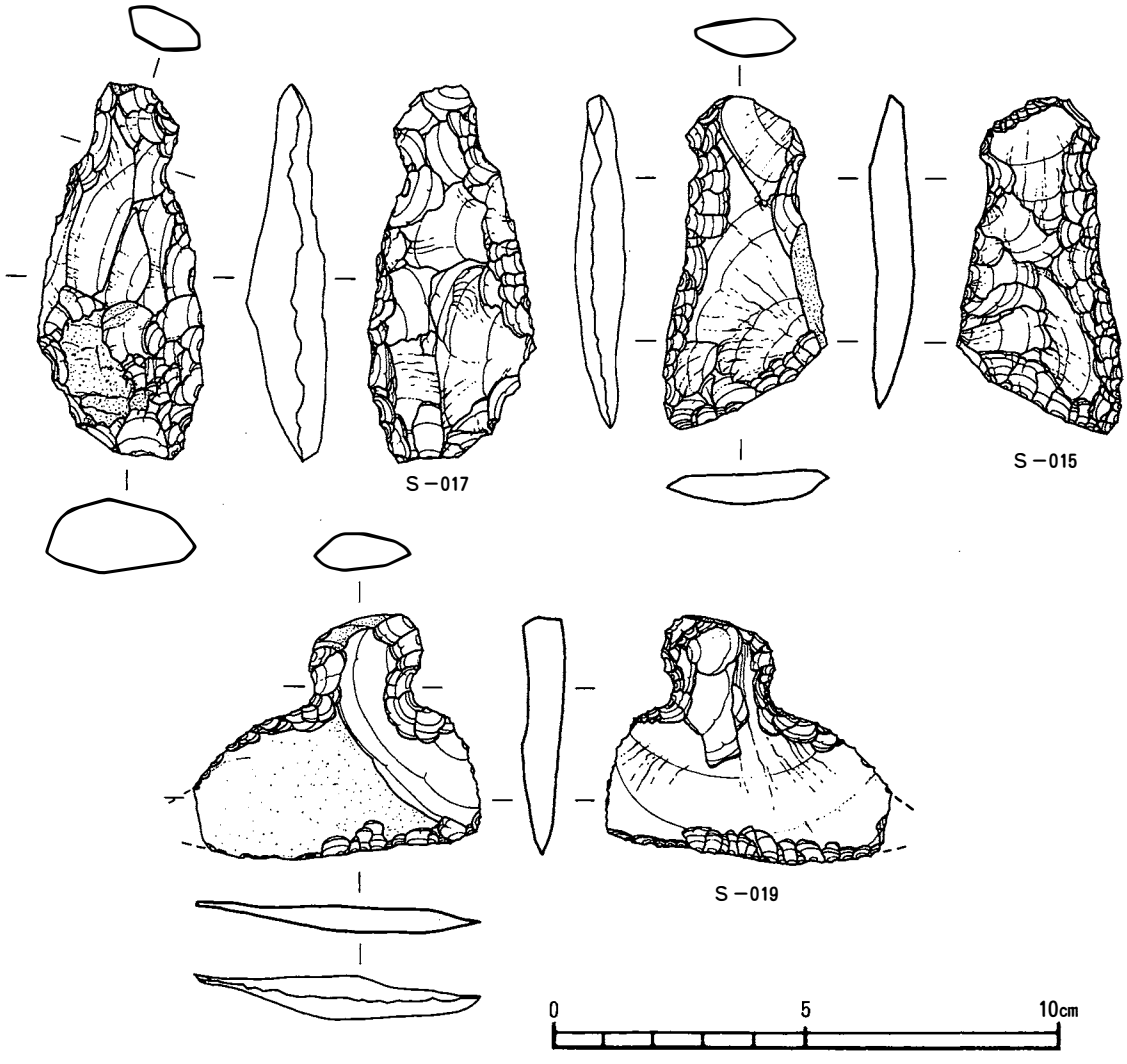
以上の３点がこの遺跡における石匙のすべてである。この他にスクレイパーの類に属すると思われるのが、第41図、第42図に示した石器群である。これらは石匙に比べると定型的なものではないが、細かい剥離による調整痕があるもので、いわゆる「調整痕のある石器」といわれてきたものである。これらの石器は剥片をそのまま利用したものが多いが、薄いものだけでなくやや厚い素材を利用していたり、刃として利用すべき部分にあえて剥離によって調整を加えているところから、皮なめしなどの作業に利用した可能性が高い。Ｓ－020からＳ－022は適当な剥片の一側辺もしくは二側辺に加工を施し、刃部としている。それ以外はほとんど素材からの剥離面をそのまま残している。

Ｓ－023と024はやや趣が異なり、厚めの素材を利用しているものである。Ｓ－023は明らかに石核であったものであろうが、その側辺部分にやや剥離を加え、刃部としているようである。Ｓ－024も石核としては薄目であるが、素材の剥ぎ取り跡からみると石核であろうか。そのやや薄い側辺部に剥離を施し、刃部としている。Ｓ－023、024ともに安山岩を利用している。

このほかに少しの調整痕らしきものが残る剥片があったが、ここでは掲載していない。


S－003
S－004
S－005
S－006
S－007
S－008
S－009
S－010
S－011
S－012
S－013
S－014
S－015
S－016
0
5 cm

第39図　石器実測図(2)



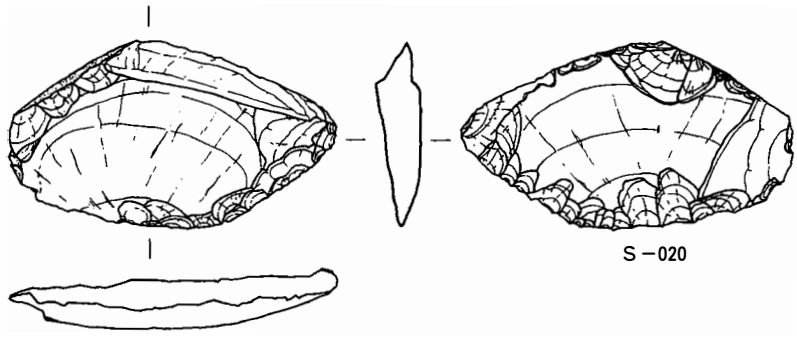
第40図　石器実測図(3)

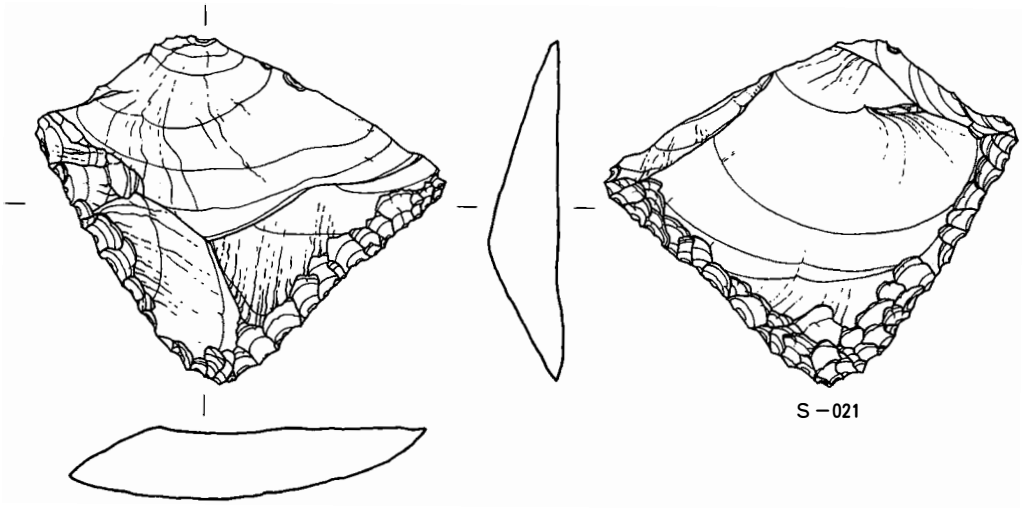
c　**石核**（第42図　Ｓ－025）

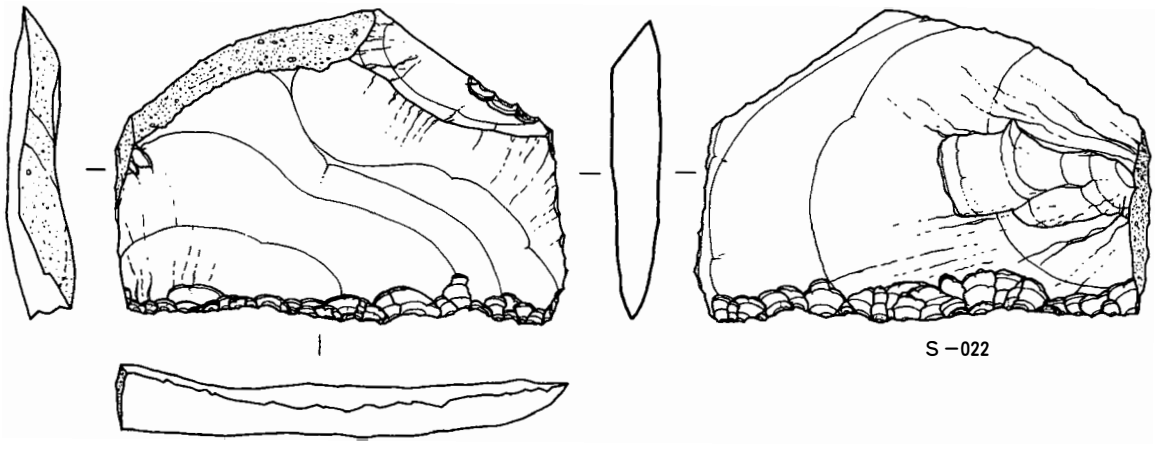
この遺跡で明確に石核ととらえられたのは、４点ほどである。このうち図化したのはＳ－025である。この石器は黒曜石を材料とし、剥離作業面を裏表と次々に変えていった結果、全体の形状は多面体を呈するようになっている。剥離作業の回数はゆうに10回を越えている。

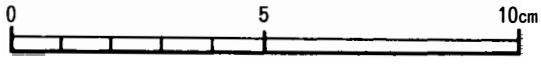
先に示したＳ－023も本来石核であったものであろう。Ｓ－024もその可能性が高い。このほかに図化していないがサヌカイト製のものも出土している。

これらの石核から取られた剥片は割と細長の剥片であるようで、石鏃などに利用されたのではなかろうか。この石核も他の石器と同様にどの時期のものかを判断するのは非常に困難である。石材としては黒曜石やサヌカイトがほとんどである。ただ、この遺跡からは多くの剥片や石屑が出土しており、石器の原石と思われるものも出土している。剥片や石屑はいくつかの集中域がみられ、住居跡の集中するＢ、Ｃ－６・７グリッド付近に多く、遺構としてはSI－13、14、19により多く出土している。他の住居跡や土坑などからもわずかながら出土している。大きさはせいぜい１～３㎝大のものがほとんどで、まだ加工の加わっていないものである。SK－38からは長さが５㎝、幅５㎝、厚さ３㎝ほどの黒曜石の原石が出土している。これらの黒曜石は気泡をわずかに含むものの質は全体としてよく、風化すると縞状の文様の現れるものである。原産地は特定できていない。他に乳白色の黒曜石も石材としてみられ、これは大分県の姫島産のものであろう。この黒

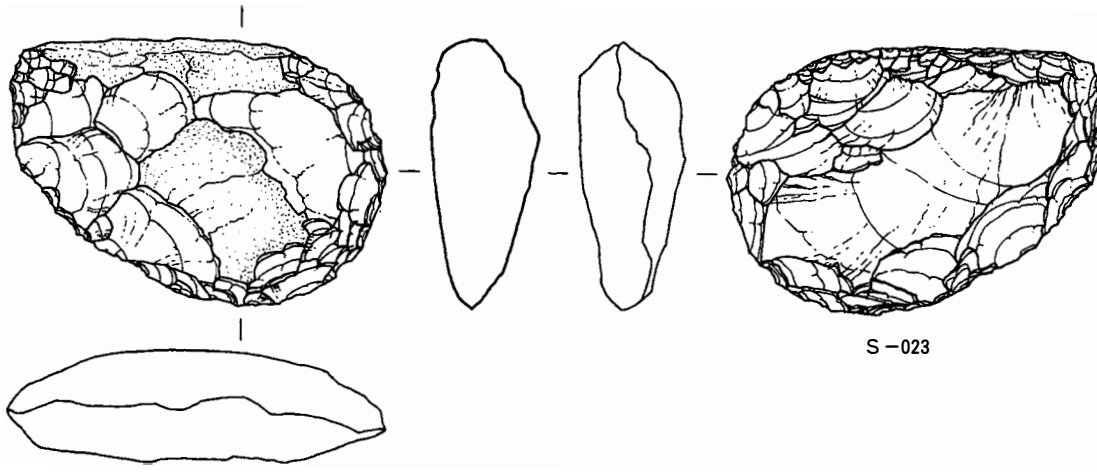


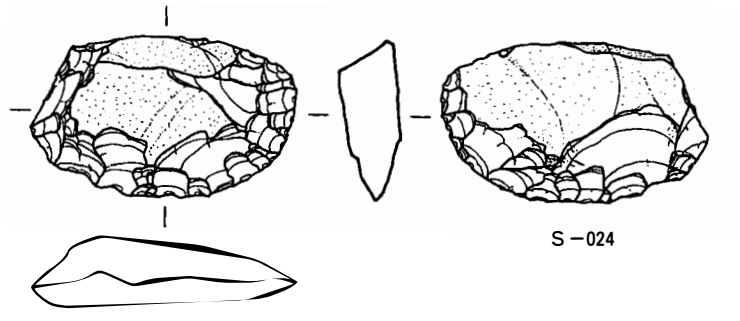


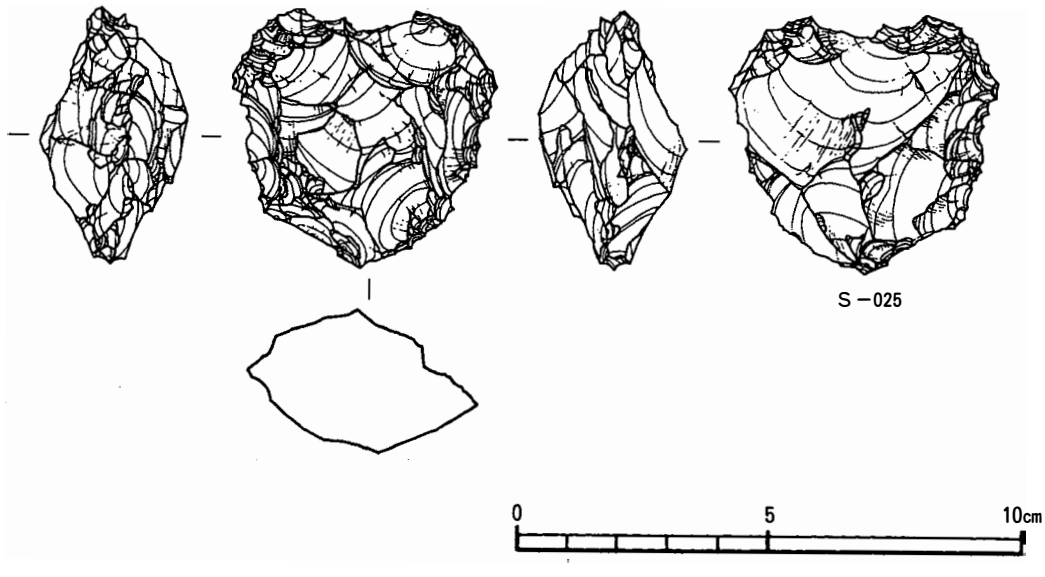




第41図　石器実測図(4)







第42図　石器実測図(5)

曜石に次いで多いのがサヌカイトである。剥片やチップも遺構内や包含層などから多数出土し、剥片はそのまま使用された痕跡のあるものもある。そのほか安山岩、チャート、石英、頁岩などの剥片やチップもわずかながら見られる。

ｄ　十字形石器（第43図）

従来から「十字形石器」と呼ばれてきたこの石器は、その用途があまり明確にされていなかった。この遺跡では３点のみが出土しており、Ｓ－027、028の２点は表土剥ぎに際して出土し、その層位や出土位置の特定が難しいものである。Ｓ－027は粘板岩の板状石材を利用したもので、四方向から抉りをいれ、それぞれの方向から整形剥離を施して作り上げている。上部が使用によるものか破損している。

Ｓ－028は同じく粘板岩の板材に四方から抉りを入れ、縁辺部に丁寧な剥離整形を行っている。４つの抉りはやや擦れているようである。

Ｓ－026はSI－41から出土したもので、形態的に他の２点とは趣を異にする。石材は安山岩を利用し、扁平にした石材に四方から抉りを入れるのは同じであるが、突起のうち２本は先端を尖らせており、全体的に小振りのものである。他のものと用途の違いがあるのかもしれない。

ｅ　磨製石斧（第44図～第45図）

磨製石斧は破片まで加えると、総数17点を数える。その中には局部磨製石斧も含めている。竪穴遺構からの出土のほか包含層、イモ穴などからの出土であった。

この調査で出土した磨製石斧は個々の形態が様々で、中には未製品や欠損したものもあり、分類のしにくいものであった。その中で石材と形状、厚み、磨製部位などにより分類した。

Ⅰ類（第44図　Ｓ－029、035）

Ｓ－029はＢ－３グリッドで出土したもので、全体の形状は中膨らみで、平面形が鰹節風のものである。部分的に研磨されており、下部が薄くなり刃部となるものであろうか。製品なのか未製品なのか不明である。場合によっては整形し直しているものかもしれない。したがって、石斧とするには不安が残るが、石材が蛇紋岩で研磨部分もあるということで磨製石斧の中に加えた。

Ⅱ類（第44図　Ｓ－030、033）

基部が欠損しているが、全体の形状は長方形もしくはそれに近い、いわゆる「短冊形」をしているものである。

Ｓ－030はSI－10から出土したもので、破損が激しいものの刃部はしっかりと残っている。断面形は平面で薄い。刃部は片刃になっている。研磨は刃部のみにみられる。Ｓ－033はSI－26から出土したもので、片岩の扁平な自然板材を利用し、刃部は研磨によって両刃状につくられている。

Ⅲ類（第44図　Ｓ－031）

Ｓ－031はＢ－２グリッドで出土したもので、片刃でかんな状の石斧である。側辺がやや張りだしながらも直線上になっている。側辺にきちんとした面取りがなされているが、断面はレンズ状に近い。全体的に丁寧な研磨が施されている。刃部は片斧状になっている。

Ⅳ類（第44図　Ｓ－032）

断面が楕円状になった棒状の石材を利用したもので、全体的に研磨を施している。頭部と刃部が欠損しているため、本来の長さは不明である。刃部は残された部分から考えると両刃であろう。丸ノミ状の形態をとっているようである。ここではＳ－032のみがこの類に入る。

Ⅴ類（第44図　Ｓ－034～036）

大型の丸ノミ形の両刃石斧である。全体的に細長く、最大幅は側辺の中位からやや下部にかけてであり、頭部が細く、刃部が丸くなっている。断面は楕円状をしている。

Ｓ－034はこの形態の典型的なもので、断面形が楕円形で、刃部は丸ノミ状である。頭部に使用による欠損がある。

Ｓ－035はSI－41から出土したもので、この類の未製品であろう。この遺物は鰹節状を呈しているが、表面には細かい丁寧な琢調痕が残り、製作途中の状況を示している。頭部と刃部にみられる剥離は調整のためと思われ、ここから研磨によって全体の形態が整えられたのであろう。ただ、なぜ廃棄されていたのか不明である。

Ｓ－036はSI－26の床面直上で出土したもので、刃部が欠損している。これもこの類の典型的な石斧である。側辺の下部に最大幅があり、頭部はすぼまり尖り気味である。全体的に丁寧な研磨が施されている。刃部の欠損した部分には敲打痕があり、欠損後に敲き石として利用されたのであろう。

Ⅵ類（第45図　Ｓ－037、038、040～043）

二等辺三角形を呈しており、最大幅が刃部にある。断面は薄く扁平のものが多い。刃部は両刃で丸くなっている。石材は打製石斧に使用される、やや軟質の安山岩を用い、調整痕を残しながら刃部を中心に研磨を施した局部磨製石斧である。

Ｓ－037と038はともに頭部の残欠である。ともに玄武岩質の安山岩製である。調整のための剥離痕を残しているものの、研磨はしっかりとしている。

Ｓ－040と041は刃部だけのもので、丸い刃部は丁寧な研磨が施されている。ただ、Ｓ－040は破損した部分にさらに打ち欠いて加工したようなあとがあり、その後にスクレイパーとして再利用した可能性がある。

Ｓ－042は扁平な板状石の側辺に簡単に加工を施し、刃部のみをよく研磨して成形している。やや片刃気味である。

Ｓ－043は母岩から剥片をとり、裏面の両側辺から粗く加工し、さらに細かい剥離による加工を施している。刃部のみを丁寧に磨き上げ、他は打製石斧そのままで、片面には自然面をそのまま残している。

Ⅶ類（第45図　Ｓ－039）

全体の形状は短冊形でやや刃部付近が最大幅となるものである。細長い剥片を側辺から打ち欠いて加工し、刃部を中心に局部的に磨製を施したものである。Ｓ－039がそれで、安山岩製である。

以上、磨製石斧について分類したが、磨製石斧の場合もその所属時期を決定するのは難しい。ただ、いくつかのものは縄文時代後期の遺構から出土しており、この時期のものとする事ができるものもある。特に打製石斧と同じ石材で作られたものは明らかに縄文時代後期以降の所産としてもよいと思われる。したがって、この安山岩質の局部磨製的な石斧は打製石斧に似た機能を持つものかもしれない。

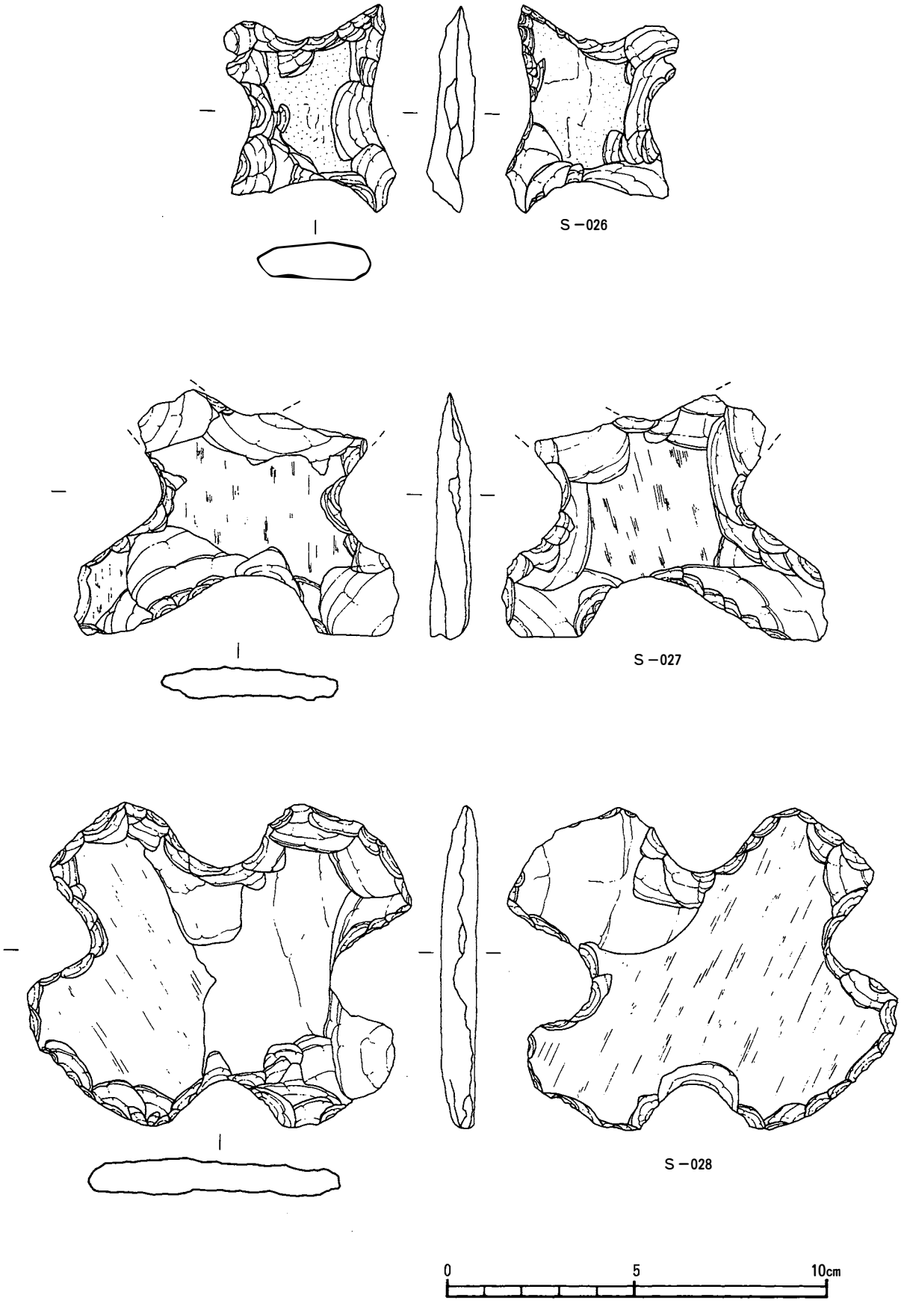
他の磨製石斧については時期を特定することは困難である。

ｆ　打製石斧（第46図～第50図）

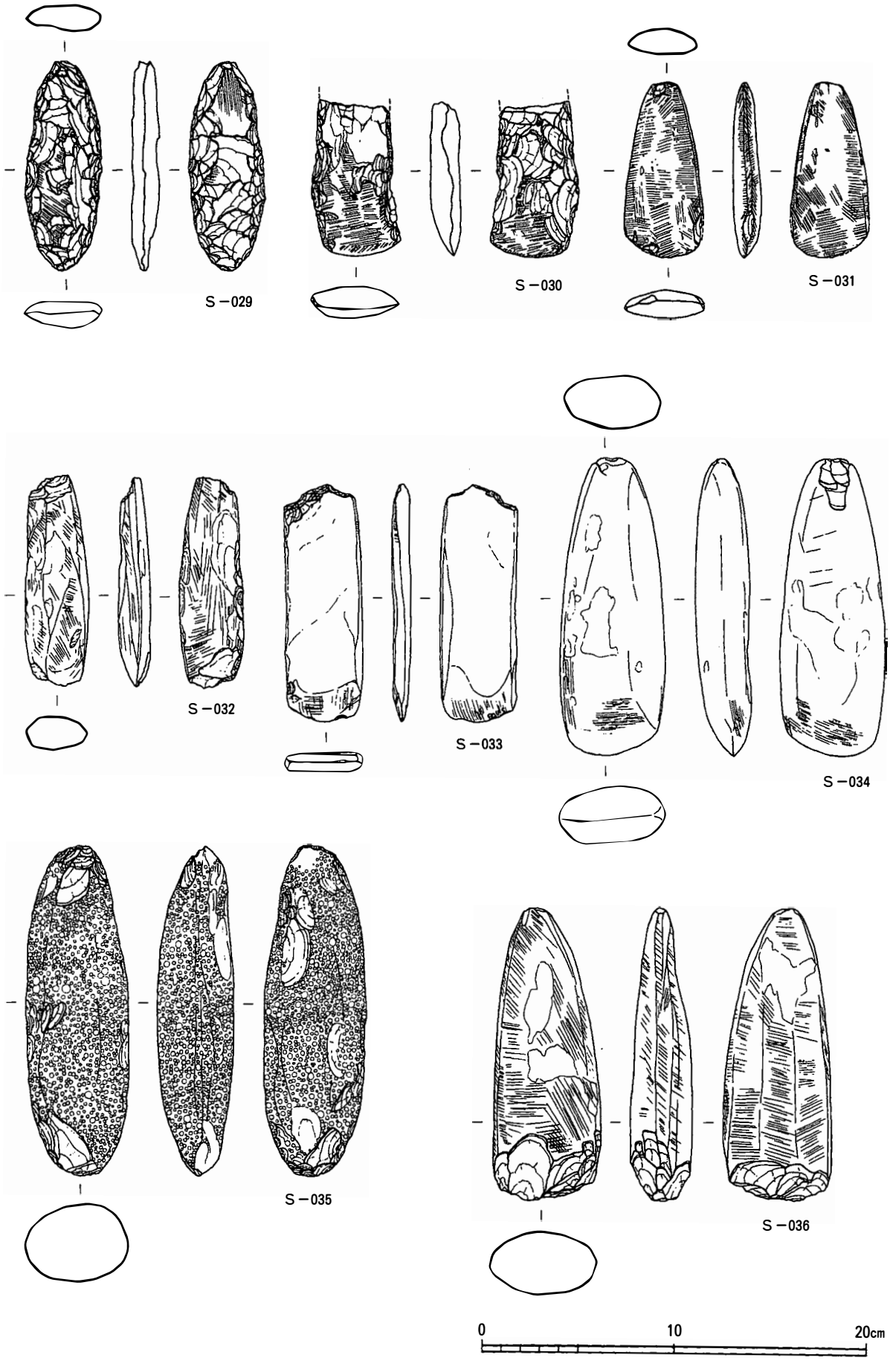
今回の調査で出土した打製石斧の総点数は52点である。出土した石斧のうちには、破損したものも多く、単に石片として処理したものの中に打製石斧の破片が混じっている可能性もある。ここでは、確認した打製石斧のうち完形に近いものを中心に図化した。

打製石斧は包含層やイモ穴、溝からの出土に加えて、竪穴遺構に伴って出土しているものも多い。その分布を図化してみたが、調査区の限りもあり、その分布に一定の傾向は読みとれなかった。出土数としては遺構の数量に比較してやや少ないかもしれない。ただ、遺構は集落が中心であり、人々の居住空間にも打製石斧が少なからず存在することの意義は大きい。

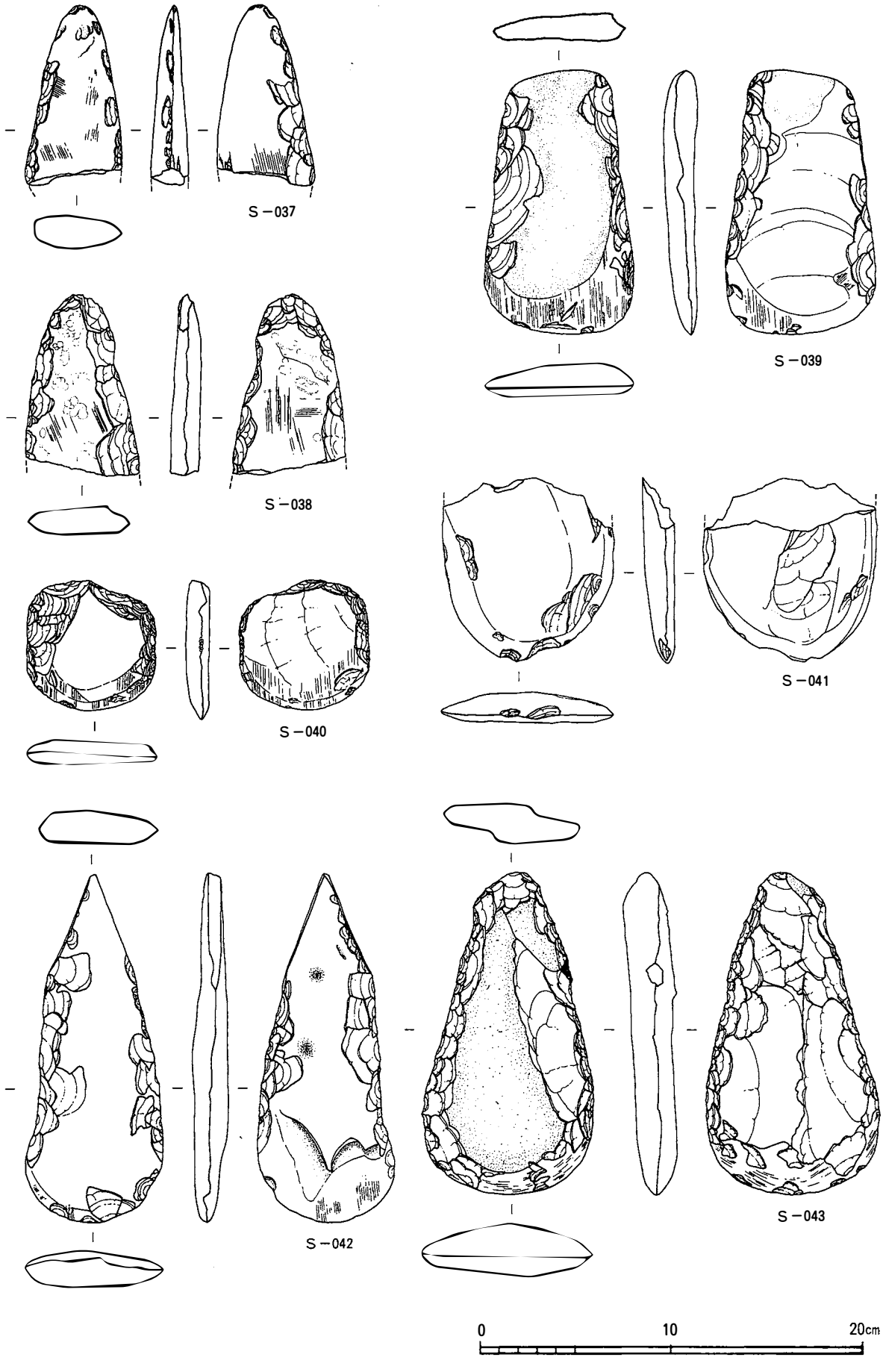
石材としては安山岩製のものが多く、この遺跡から北東約４㎞に所在する二子山石器製作址の石材に類似したものである。この製作址の石材は玄武岩質安山岩である。表面観察のみで石材をみた範囲では非常に類似しているように思われる。



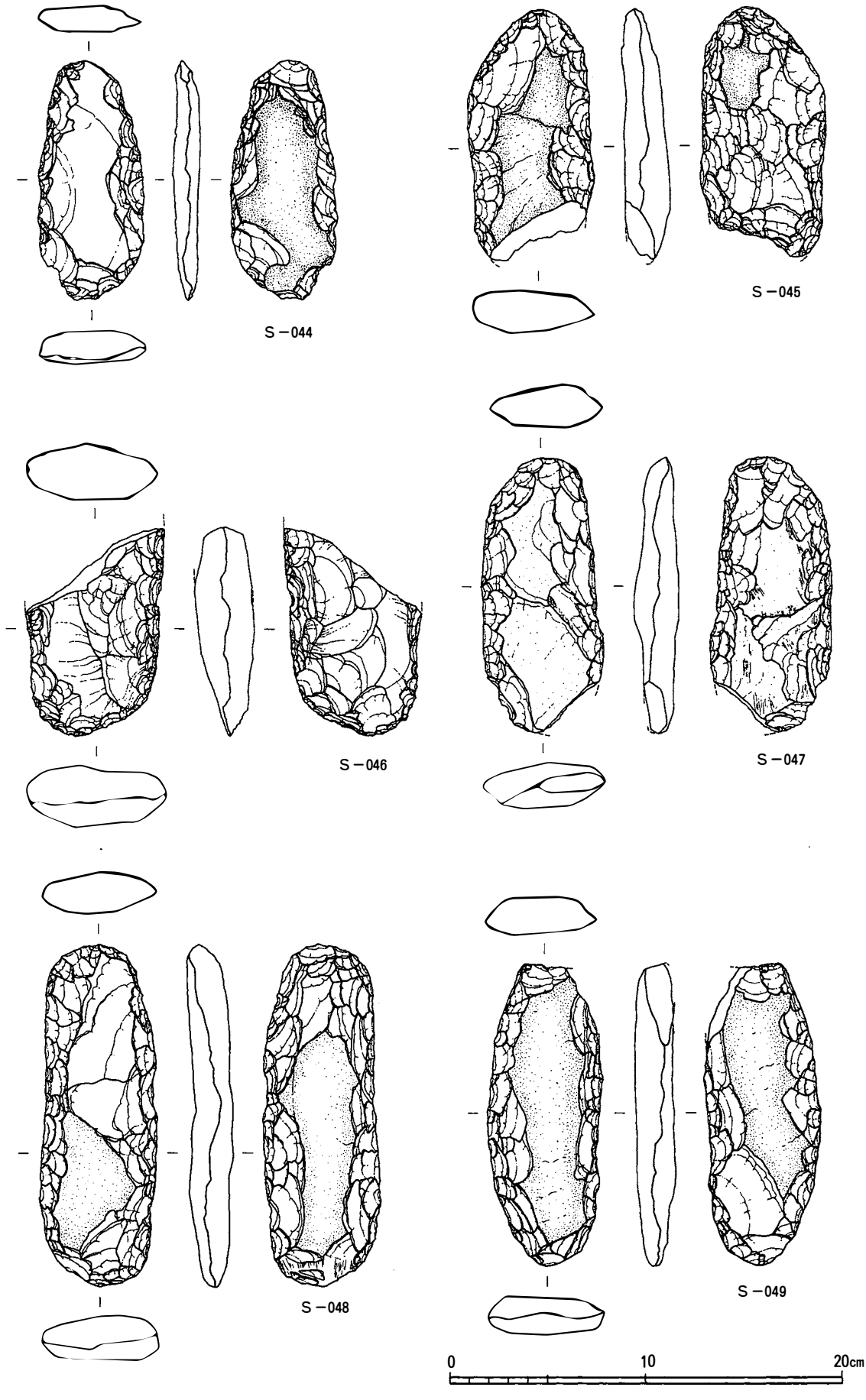
第43図　石器実測図(6)



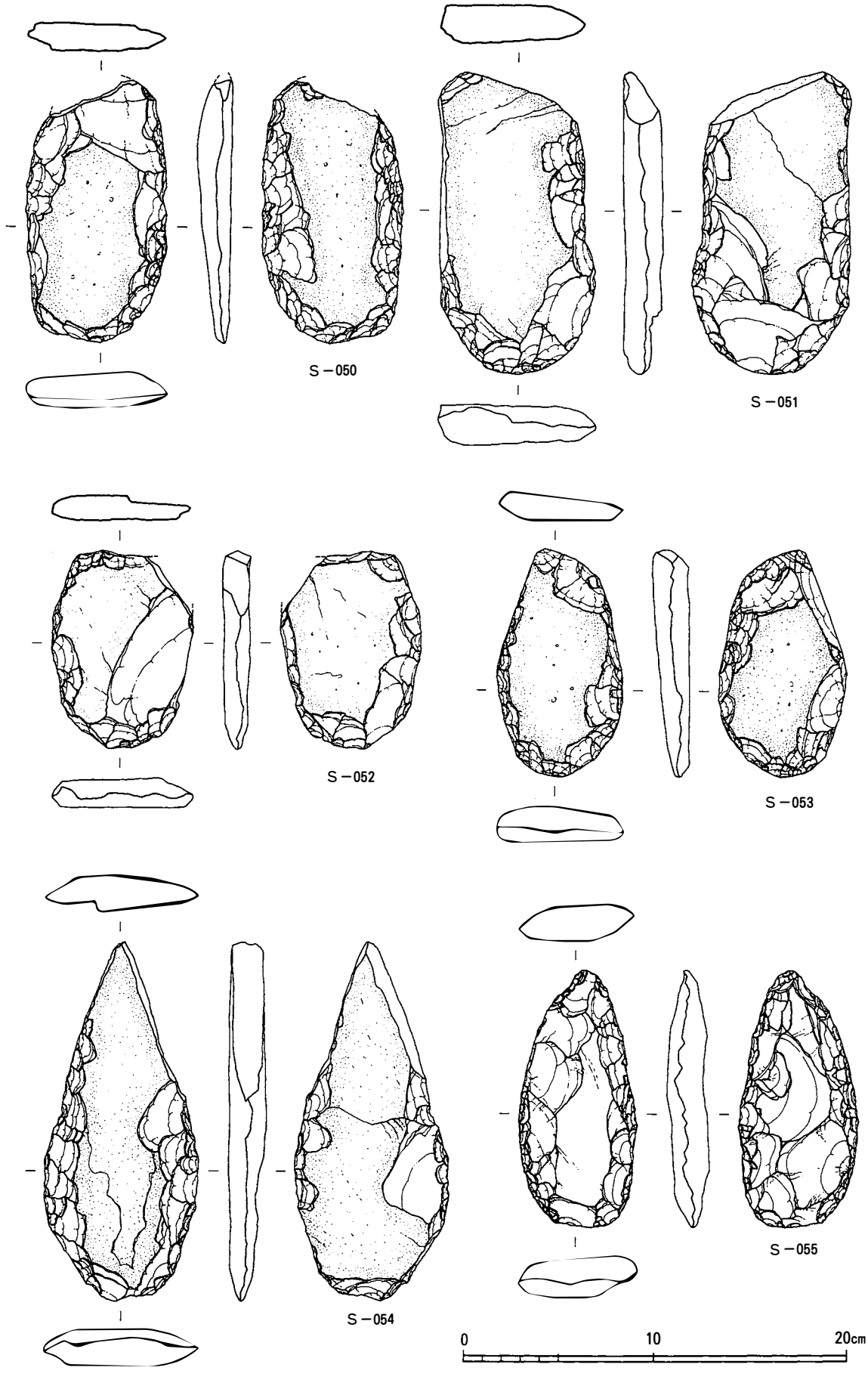
第44図　石器実測図(7)



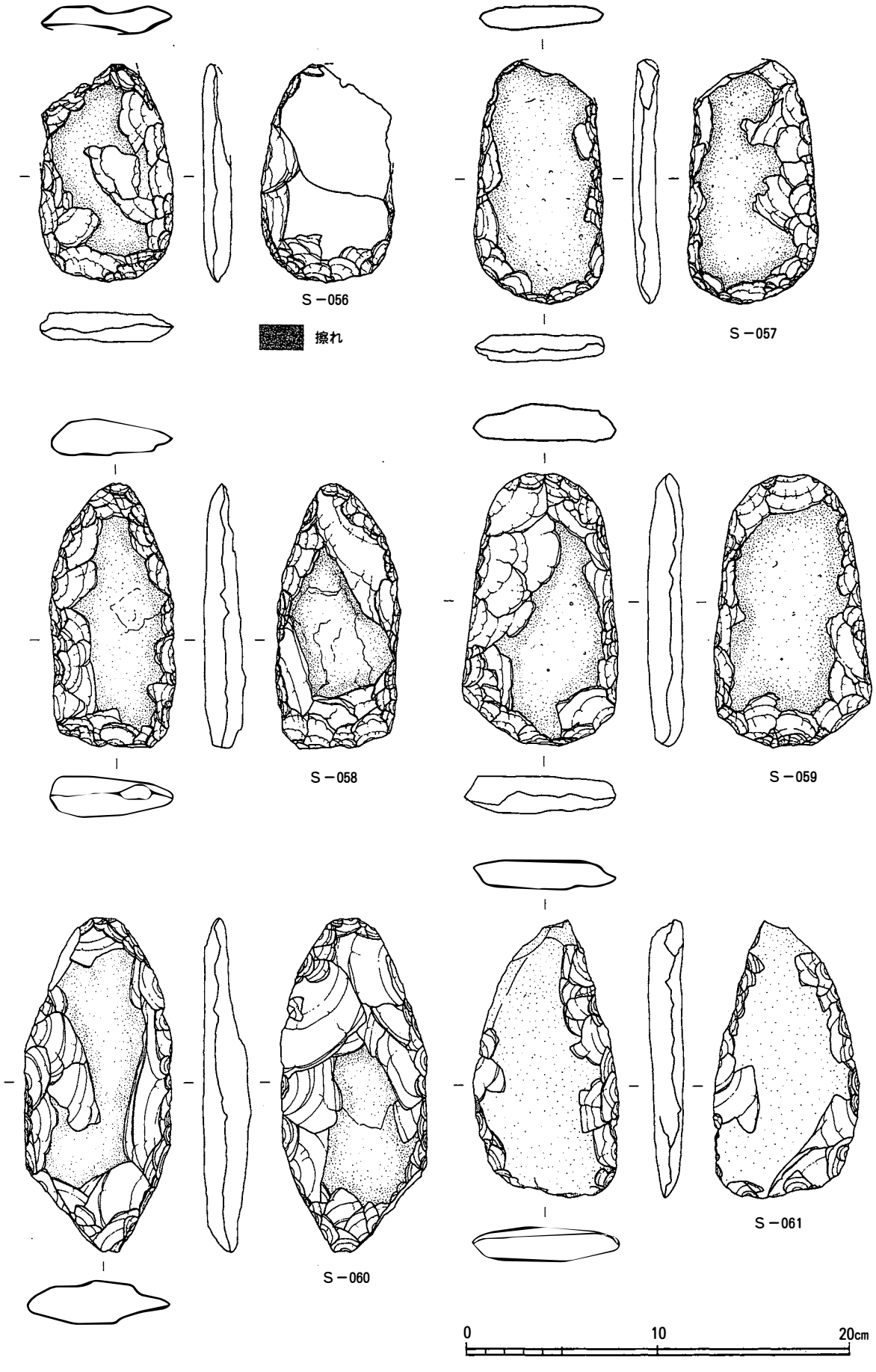
第45図　石器実測図(8)



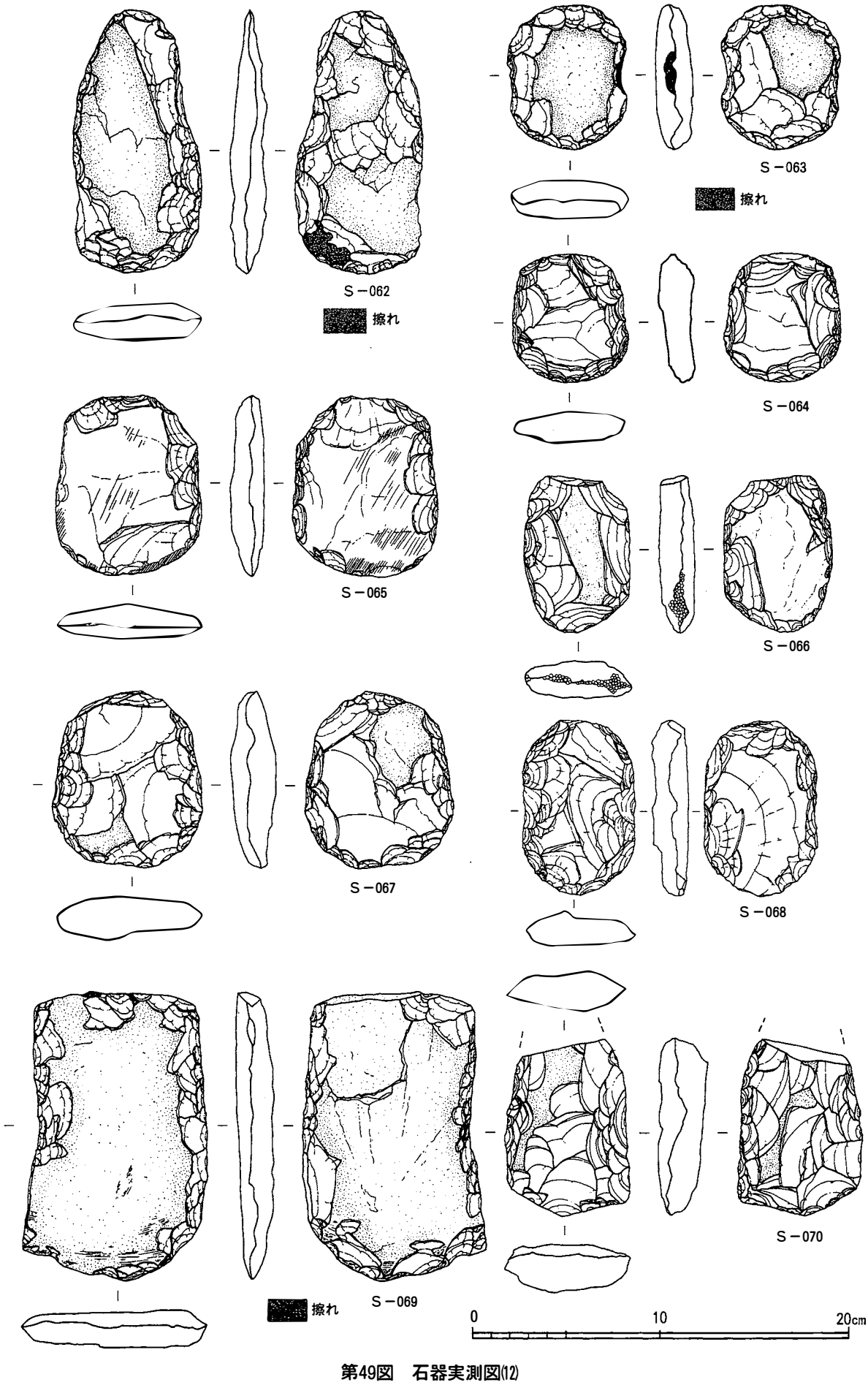
第46図　石器実測図(9)



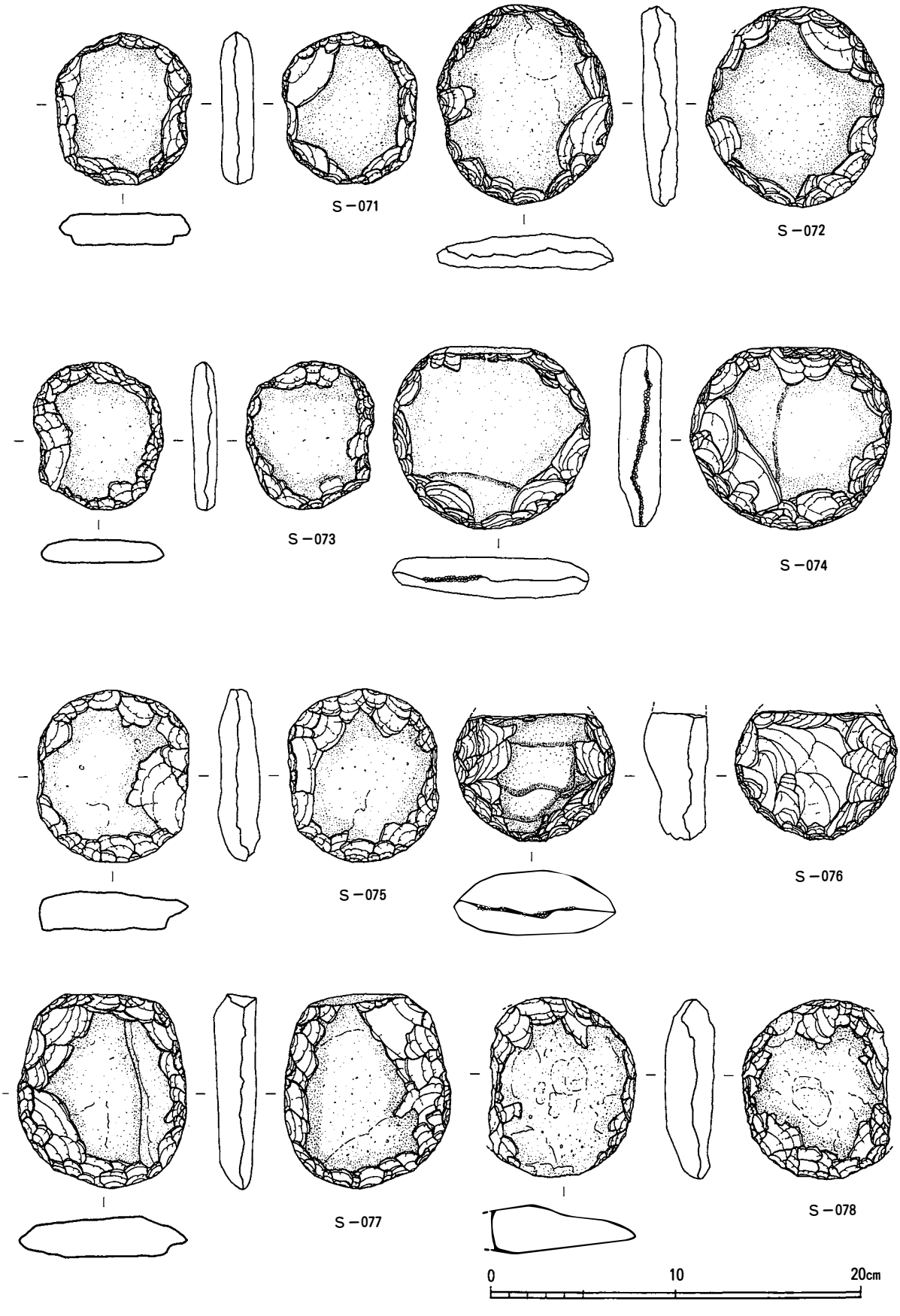
第47図　石器実測図(10)



第48図　石器実測図(11)



第49図　石器実測図(12)



第50図　石器実測図(13)

出土点数のうちここに図化しているものは27本で、全体の５割ほどである。

次に打製石斧をその形状、調整、大きさから大きく７類に分類し、具体的に遺物をみていく。

Ⅰ類（第46図　Ｓ－044）

全体の形状はやや細長く、側辺がやや胴張りし、最大幅が中心よりやや下がるものである。厚さも薄手のものである。母岩から剥ぎとった細長い剥片の側辺、頭部、刃部をそれぞれ打ち欠いて成形したものである。片面には自然面がのこるものである。長さは10cm前後でやや小型のもである。第46図のＳ－044がそれにあたる。

Ⅱ類（第46図　Ｓ－045～Ｓ－051）

全体的に細長く、側辺が直線的で、刃部と頭部が丸くなるものである。幅の違いからさらにⅡａ類とⅡｂ類に分けられる。

Ⅱａ類は長さ15cm～20cmほどのもので、幅が７cm以下のものである。Ｓ－045～Ｓ－049がこの中にはいる。ただ、さらに細分できるかもしれない。

Ⅱｂ類は長さは欠損しているため不明であるが、幅が10cmほどのものである。Ｓ－050とＳ－051がこのなかに入る。第48図のＳ－057もやや下部が張り出してくるものの、この類に入るかもしれない。

Ⅲ類（第47図～第48図）

従来から「バチ形」と呼ばれてきたものである。全体の形状は二等辺三角形に近く、最大幅は石斧の下位にくるものである。最大幅の位置と形状から二つに細分される。最大幅が刃部からやや上位になり、全体の形状がⅠ類に近く、円形に近い刃部を持ったものをⅢａ類、最大幅がほぼ刃部付近にあり、刃部が直線的なものをⅢｂ類とする。大きさにややばらつきはあるようである。Ⅲａ類としては、Ｓ－053、054、055がある。Ⅲｂ類としては、Ｓ－058、061、062がある。

Ⅳ類（第48図～第50図）

形状としてはⅠ類によく似ており、両側辺が直線的でやや頭部の方にすぼまり、刃部と頭部が丸くなるものである。Ｓ－056、057、059などがこのなかにはいる。刃部はやや偏る。

縦が短いもので、従来は打製石斧以外に入れられていたものが多い。これも形状からいくつかの類に分かれる。ここでは大きくⅣａ～Ⅳdの４類に分けた。

Ⅳａ類は石斧の側辺に内湾する抉りがわずかに作りだされたもので、従来「分銅形」と呼ばれてきたものに近い。ただ、分銅形と言い切るのは難しい面もある。ここでは、Ｓ－063、064、071、073などがこの類にはいる。Ｓ－072、075もこの中にいれてもよかろう。ただ、大きさが先のものに比べるとやや大型である。あえて分ければ、先のものをⅣａ－１類、後のものをⅣａ－２類とする。

Ⅳｂ類は全体的な形がやや角張った楕円形とでもいえるものである。Ｓ－065は本来磨製石斧と思われるが、破損した後に側辺と頭部に打撃を加え、この形態にしている。Ｓ－067は純粋に打製品で敲打によってこの形態としている。

Ⅳｃ類は、Ⅳａ類よりも縦長のもので側辺に弱い抉りがはいる。このためⅣｂ類に含めてもよいが、形態的にやや異なるものとしてここで別の類に分けた。縦長が10cm前後、横幅が６cm、厚みが1.8cmを測る。Ｓ－066、068がこの類である。

Ⅳｄ類は横長のもので刃部が下方に設けられたものである。頭部の方は厚みが2.4cm～３cmほどを測り、かなり厚めである。刃部は対称的に尖り気味である。Ｓ－074、076、078などがこの中にはいる。Ｓ－076は上部が欠損しているようであるが、意図的に破壊し、上部の平坦面を作り出している可能性もある。Ｓ－078は図上では刃部が側辺にあるように図化してしまったため縦長のようにみえるが、本来は他のものと同じように刃部を下にすべきものである。これも刃部の対辺が平坦になるように打ち欠かれた可能性がある。これ

らの石器は厚みも２㎝以上のもが多い。その形態から単に打製石斧の類にすべきものではなく、クサビのような使用のされ方があったのかもしれない。

Ｖ類（第50図　Ｓ－077）

Ｖｄ類は、先のⅣ類のように頭部が厚く刃部が尖るものである。他の打製石斧よりは短いが、確かに刃部を利用しているのが窺える。この類としては図ではＳ－077がある。この石器は縦長が10㎝程で、横幅は側辺で９㎝ほどである。

Ⅵ類（第49図　Ｓ－069）

Ｓ－069は、扁平な石材を利用した大型品で、全体の形状は長方形に近い縦長のものである。ただ、頭部は欠損している可能性がある。扁平な石材の側辺に敲打を加え簡単に成形しているようである。刃部は下方の表裏面から打ち欠き作り出している。側辺の片方はやや抉りが入り擦れもみられ、柄などを装着した可能性もある。石材は軟質の安山岩である。

Ⅶ類（第49図　Ｓ－070）

Ｓ－070は硬質の安山岩を利用したもので果たして打製石斧とすべきか疑問のあるものである。両側辺から剥離を繰り返し全体の形を作りだしている。頭部は欠損している。刃部は下方より打撃を加え作り出している。厚みは他の打製石斧に比べ厚手で他のものとやや異質な感じを受ける。

以上、分類基準を示しそれぞれについてもみてきた。なお、装着に際して側辺の「擦れ」は図上にスクリントーンをはり、使用による「潰れ」は図上の泡粒状に集合した円文によって示した。

ｇ　円盤状石器（第51図）

従来「円盤状石器」と呼ばれてきたもので平面形が円形で、ほぼ全周を打ち欠いて刃部を作り出している。刃部として使用された部分が明らかにみられるものがある。大きく厚みのあるものと薄いものに分かれ、それをⅠ類とⅡ類とする。

Ⅰ類は直径が５～10㎝ほどのもので、厚みが２㎝前後を計るものが多い。しかも側辺にはいくつかの敲打による潰れがみられる。第51図のＳ－079～Ｓ－081、Ｓ－086がこの類に入る。

この類は敲打器としての利用が想定され、打製石斧の変形として考えられることもある。打製石斧の使用法から考えれば、土掘り具としてはよいのかもしれない。

Ⅱ類は厚みが1.5㎝以下で、直径が10㎝前後を測るものである。石材は粘板岩質のもので、薄手である。第51図のＳ－082～085がこの類に含まれる。

これらの石器は本来薄い板状の石材の側辺を丁寧に打ち欠き、円盤状に作り上げたものである。この類にも側辺の一部に使用によると思われる潰れがあるところをみると、敲打に使用されたことが窺える。しかし、石材の脆さと石材自体の破損率が少ないことを考えるならば、決して敲打を中心とした作業に利用されたものではないようでもある。

先のⅠ類とも共通する事であるが、土掘り具として利用するならばこれでよいのかもしれない。

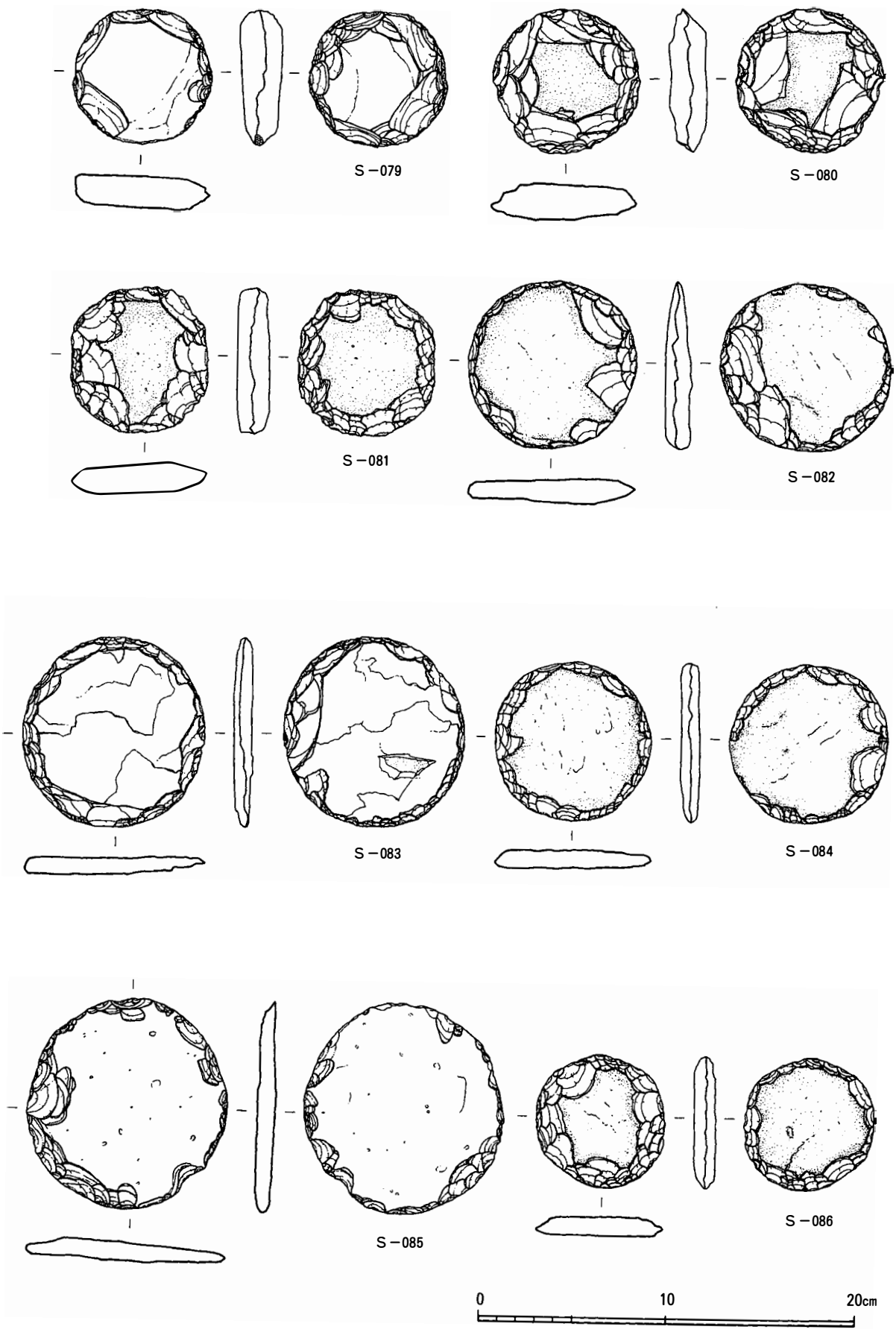
ｈ　敲　石（第52図～第53図）

ここで特に敲石としたのは、石器自体の一部に明確な敲打による破損が認められたものである。磨石の一部にも敲打による破損のあるものもあるが、これは含めていない。

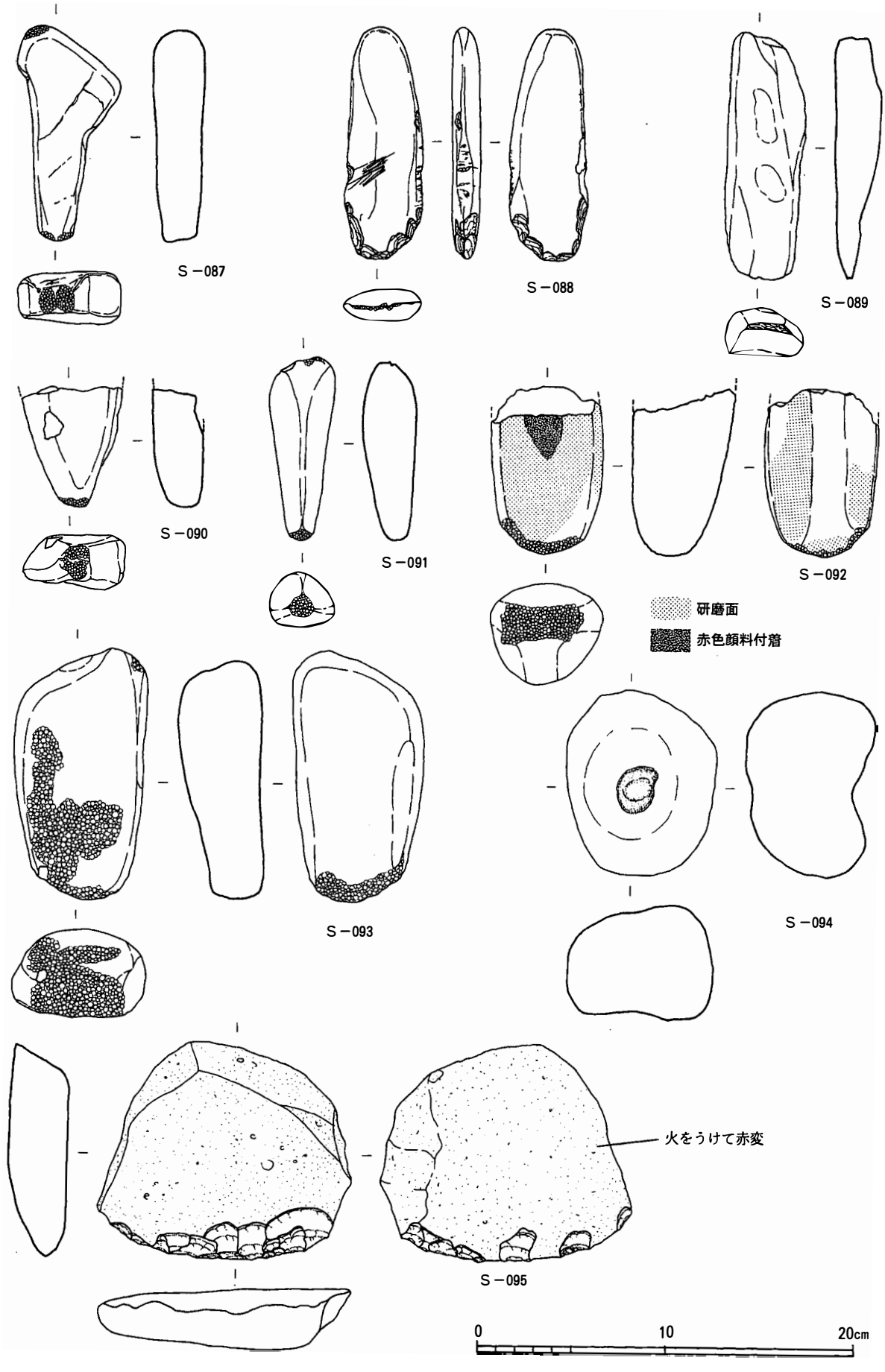
第52図ではＳ－087～091、093、095、第53図では、Ｓ－096、097などである。これらをあえて分類するならば、大きく４類に分けられる。

Ⅰ類は長細い棒状の自然石を利用したもので、両頂部または片方の頂部を手で握り、他のより硬質の石材を台として敲打を行った痕跡を残すものである。ここでは、Ｓ－087、090、091がこの類に含まれる。

Ｓ－087、091はともに棒状の自然石を利用したもので、両頂部に敲打痕があり、特に下部のものが強い。



第51図　石器実測図(14)



第52図　石器実測図(15)

Ｓ－090は上部が破損しているため、頭頂部は不明であるが同様のものである。

Ⅱ類はやはり棒状の石材を利用したものであるが、この石器を手に持ち何かを打ち欠くために利用したものと想定できるものである。Ｓ－088、089がこの類に入る。

Ｓ－089は形状が石斧状をしていたため打製石斧と捉えていた。ただ、調整痕がほとんど無く、刃部と思われた部分に剥離痕がみられる程度であった。その頂部に敲打痕があり、また刃部としていた部分は、偶然に欠損した部分であろう。Ｓ－089は明らかに何か硬いものを敲き、その際に一部欠損したものである。

Ⅲ類は基本的にⅠ類と共通し、棒状ながら横幅があり、敲石としての利用とともに磨石としての利用も行われているものである。Ｓ－092、093がこの類に入る。

Ｓ－092は下部に敲打痕を持つが側面は磨研した跡がある。さらにその面の一部には赤色顔料が付着しており、顔料をすりつぶす際に利用したのであろうか。Ｓ－093は側面の敲打痕のほかに平面部分でも敲打痕がみられ、ある場合は台石として使用された可能性もある。

ｉ　**礫　器**（第52図　Ｓ－095）

この種の石器と認定したものとして、大型の剥片を利用したＳ－095がある。この石器は大型剥片の薄くなった一側辺を敲打によって打ち欠き、刃部を作り出している。また、石器の表面自体はかなり磨研されており、磨石的な使用もなされたもかもしれない。表面には火を受け赤化した部分もみられる。石材は安山岩である。

ｊ　**磨　石**（第53図～第56図）

ここで磨石としたものは、いずれかの面に研磨痕跡が認められるものである。敲石として利用されたものもあるが、基本的に磨石のなかで捉えることにした。その総数は約20点ほどで石器の中でも多い方である。この石器の分布状況に顕著な特徴はなく、遺跡全域から出土している。それらのうち本来の形状をよく保っているものを中心に図化した。

磨石の形状は使用頻度の違いによって、また使用の方法によってもかなり異なってくると考えられる。この磨石と対になる石皿との関係を考える必要もある。

ここでは以上のことを深く追求することはできなかったので、磨石の形状から分類したものを示すだけにする。

Ｓ－096は敲打痕が側辺にみられ、敲石としての利用も想定される。断面は長方形を呈し、一面に磨った跡がある。

Ｓ－097は不正形な自然石を利用したもので頭部は欠損している。下部に敲打痕がみられ、平坦面が研磨されている。これも敲石としての利用もあったようである。

Ｓ－098～108は自然の平らな転石を利用したものである。ただ、その大きさはばらつきが大きく、また、断面も非常に扁平なものから分厚いものまで様々である。このことは、その使用に際しての違いを示しているのかもしれない。

Ｓ－098、103は非常に扁平な断面を示し、両面が使用されている。Ｓ－100も同様であるがやや厚いものである。Ｓ－102は長径が５㎝ほどの小さいもので片面の使用が多いようである。これらの石器は大きさの点から考えてもおそらく、石皿とセットで使用されたのではなく、土器の磨きなど器面調整に使用されたのかもしれない。

Ｓ－099は縦が7.5㎝、幅が5.45㎝、厚さが3.55㎝を測るもので、一面から側面にかけて赤色顔料が付着している。これはベンガラと思われ、先に示したＳ－092とともに、赤色顔料を粉砕する際に使用したものと考えられる。表面はその作業によってよく研磨されている。

Ｓ－101は平面が茄子状で、断面が扁平なものである。磨いた痕跡はあまりはっきりとしないが、磨研が

両面で行われているようである。

Ｓ－104～108の石器は、より典型的な磨石に近いもので、磨研された面が一方、もしくは両方に確実に認められるものである。特にＳ－105は片面のみが特に使用された結果、片面が扁平で片面が盛り上がったような状況のままである。Ｓ－108になると両面の使用が多くて両面が平坦な面を形成し、断面が長方形に近くなっている。

さらに研磨の状況が進展していくと、Ｓ－109～112は研磨された直方体的な様相をしめすようになり、いわゆる「石鹸石」といわれるようなものもある。同時にいくつかの面に敲打による跡がみられる。

Ｓ－109は長さが11.6㎝、幅が7.2㎝、厚さが4.6㎝を測るもので典型的な「石鹸石」の部類にはいる。この石器の表面には敲打による跡が残っており、敲石もしくは凹石としての使用法があったのかもしれない。Ｓ－110は大型の転石を利用したものであるが磨石としての利用が長かったためか角が形成されている。欠損は敲打によるものと思われ、一側面に非常によく敲打痕跡が残っており、その方向から破損している。この石器も磨石として使用されたと同時に敲石としての利用もなされている。

Ｓ－111はよく研磨されているが片面の減り方が強く、その面も使用が多かったものと思われる。これも敲打痕があり、それによって破損しているようである。やはり敲石として利用したのであろう。

Ｓ－112もかなり磨石としての利用がなされたものと思われ、転石としての面からかなり角張ったものへとなっている。それとともに縦長の上面と下面に敲打痕がある。特に下面のものはかなり強く、この面で敲打が繰り返し行われたのであろう。

Ｓ－113は一面と側面の一部に研磨痕がある。製品としては大型で、長さが16.5㎝、幅が12.5㎝、厚みが8.6㎝、重さが2.65kgを測るものである。磨石として使用されたとは思われるが、使用のされ方は先に示したような小型の磨石とは異なっていたのではなかろうか。

以上、磨石についてやや分類を加えるような形で述べてきたが、一口に磨石といっても研磨するという行為は行われたであろうが、使用方法はそれぞれでかなり異なるものであったのではなかろうか。

ｋ　凹　石（第52図　Ｓ－094）

この遺跡で唯一の凹石と認定したのは、Ｓ－094である。この石器は多孔質の安山岩と考えられ、自然の転礫を利用したものであろう。表面に窪んだ部分がみられ、そこを使用している。

ｌ　石　　皿（第57図、第58図）

石皿の出土総数は少なく、ここでは５点ほど出土している。そのうち３点は破損している。石皿は本来大きい遺物であり、耕作などで邪魔な存在として掘り出されていたと考えられる。調査前に調査区の畦に大きな石皿状の石塊があったが、表面にはそれほどの使用痕がみられなかったため、放置してきてしまったが、それなどは耕作に際し、掘り起こされた石皿であった可能性が高い。

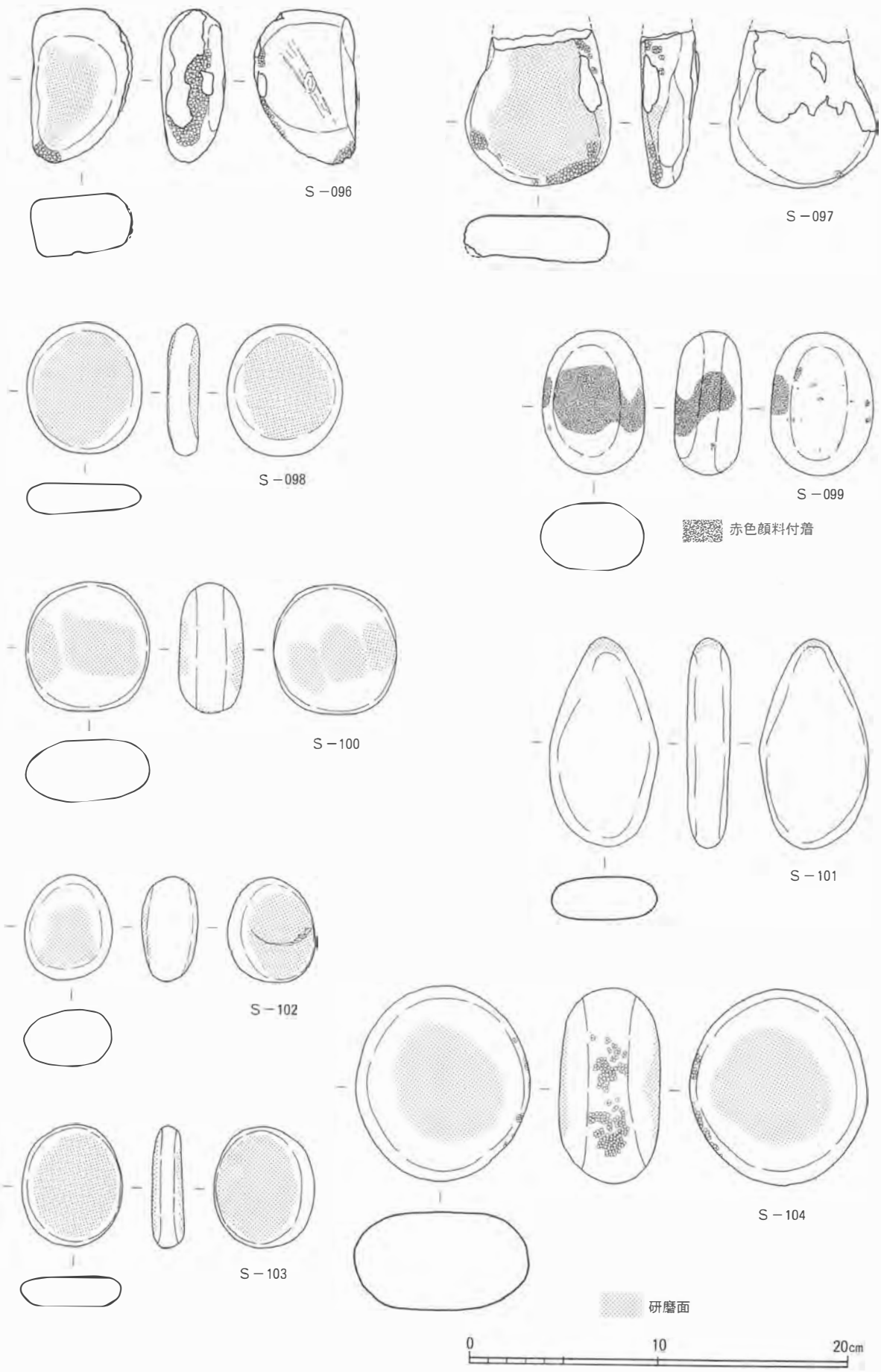
これらの石皿のうち５点を図化した。第57図及び第58図に示したものである。

Ｓ－114は本来かなり大きい安山岩製の石皿で、表裏両面に石皿のくぼみが見られるものである。くぼみはかなり発達しており、長期間使用されたことが窺われる。

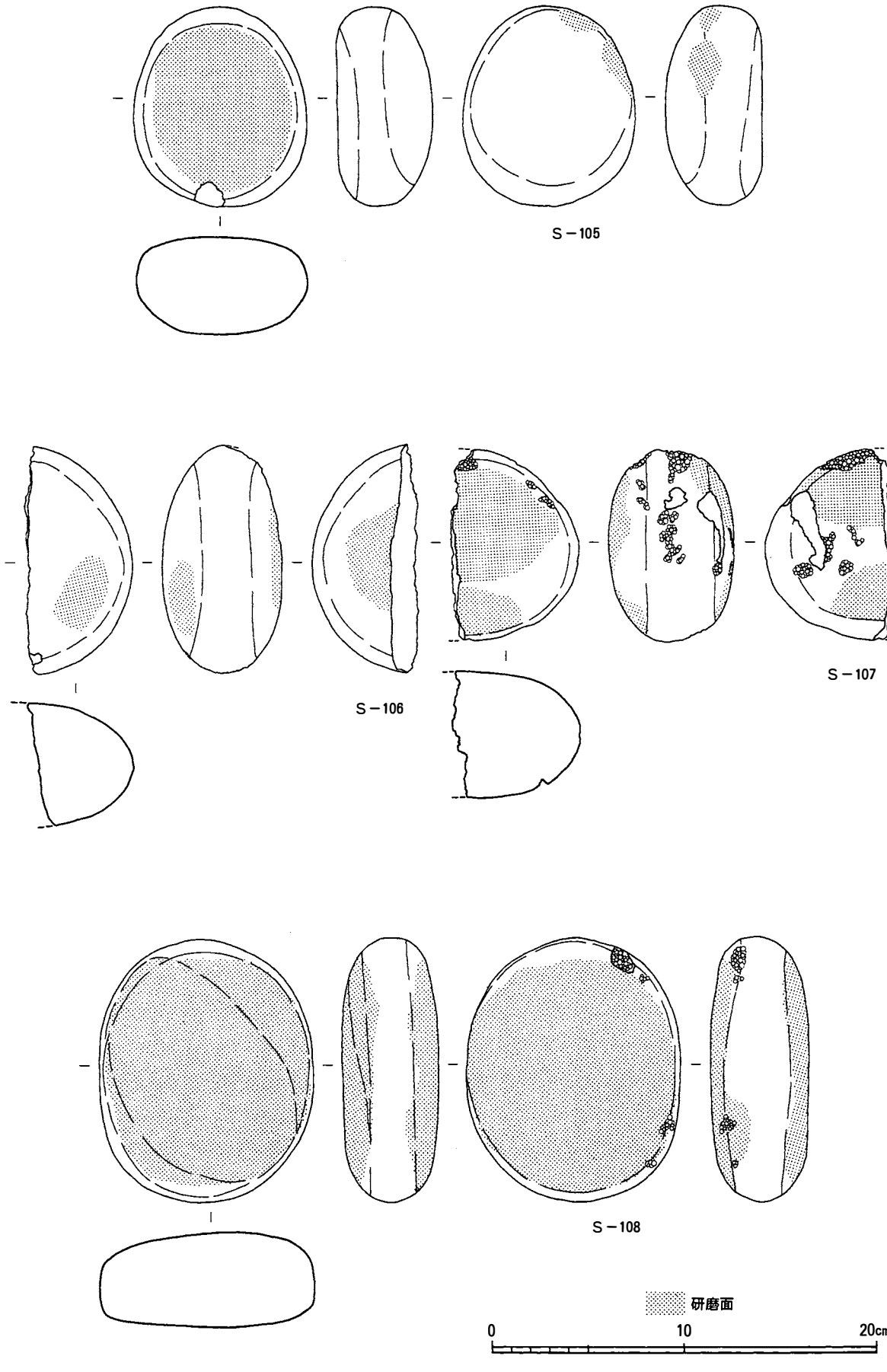
Ｓ－115は片面に石皿のくぼみが見られるもので、これもかなり長期間に渡って使用されたようだ。

Ｓ－117はそう大きくない円礫を利用し、片面に石皿のくぼみが見られるもので、くぼみもあまり発達していない。Ｓ－114、115とはすりつぶす対象も異なっているのだろう。

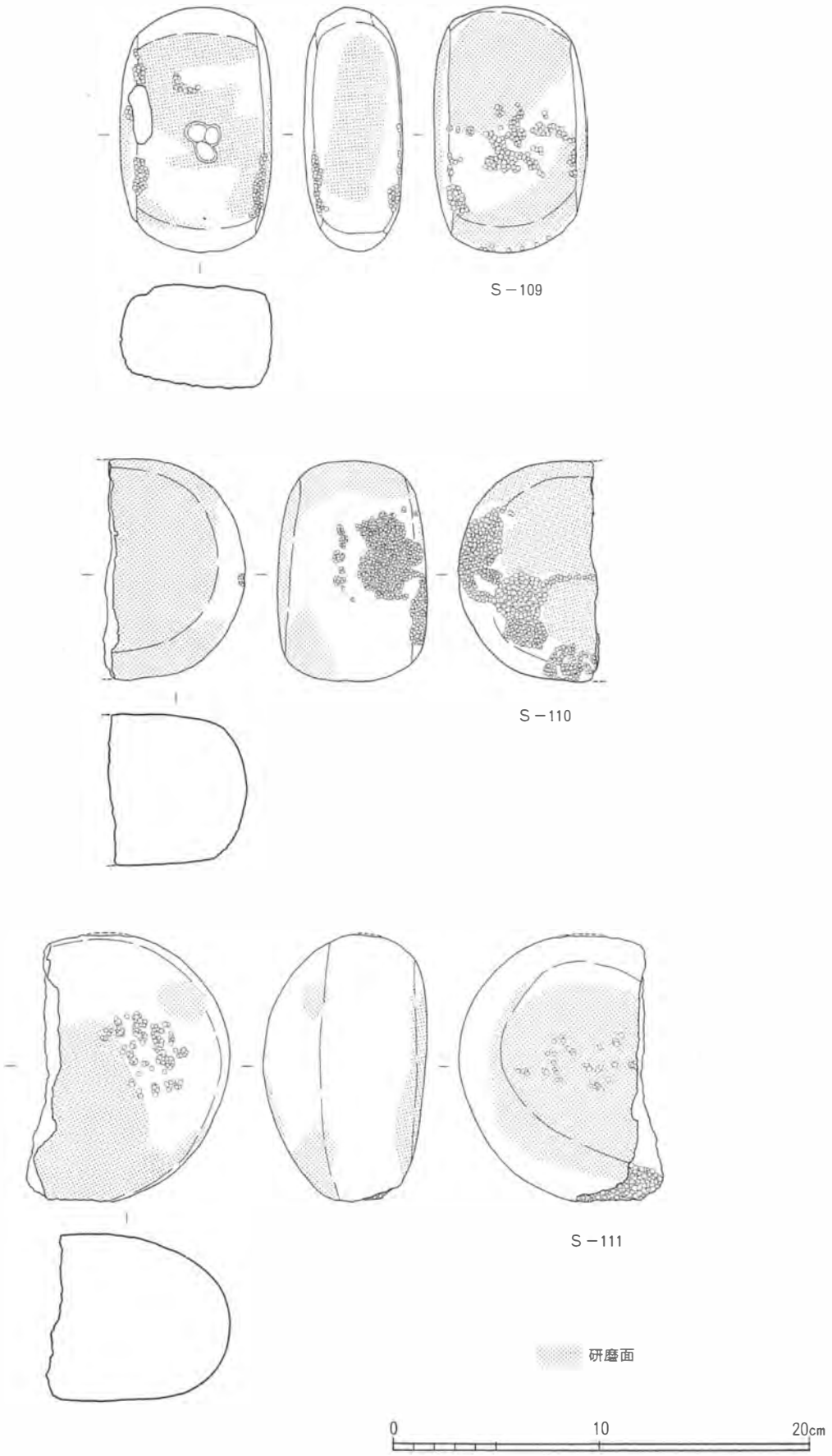
Ｓ－118はSI－13から出土したもので、ほぼ完形であった。床面近くで出土したが、全面火を受けたようで、赤化し剥落している部分もある。平坦な面を下に据えて上面の傾斜した部分が研磨されていた。石材は輝石安山岩を使用し、本来堅い石材であり、それがある程度摩耗しているところをみるとかなりの使用がなされたようである。重さが12.83kgを測り、遺跡内では大型品である。



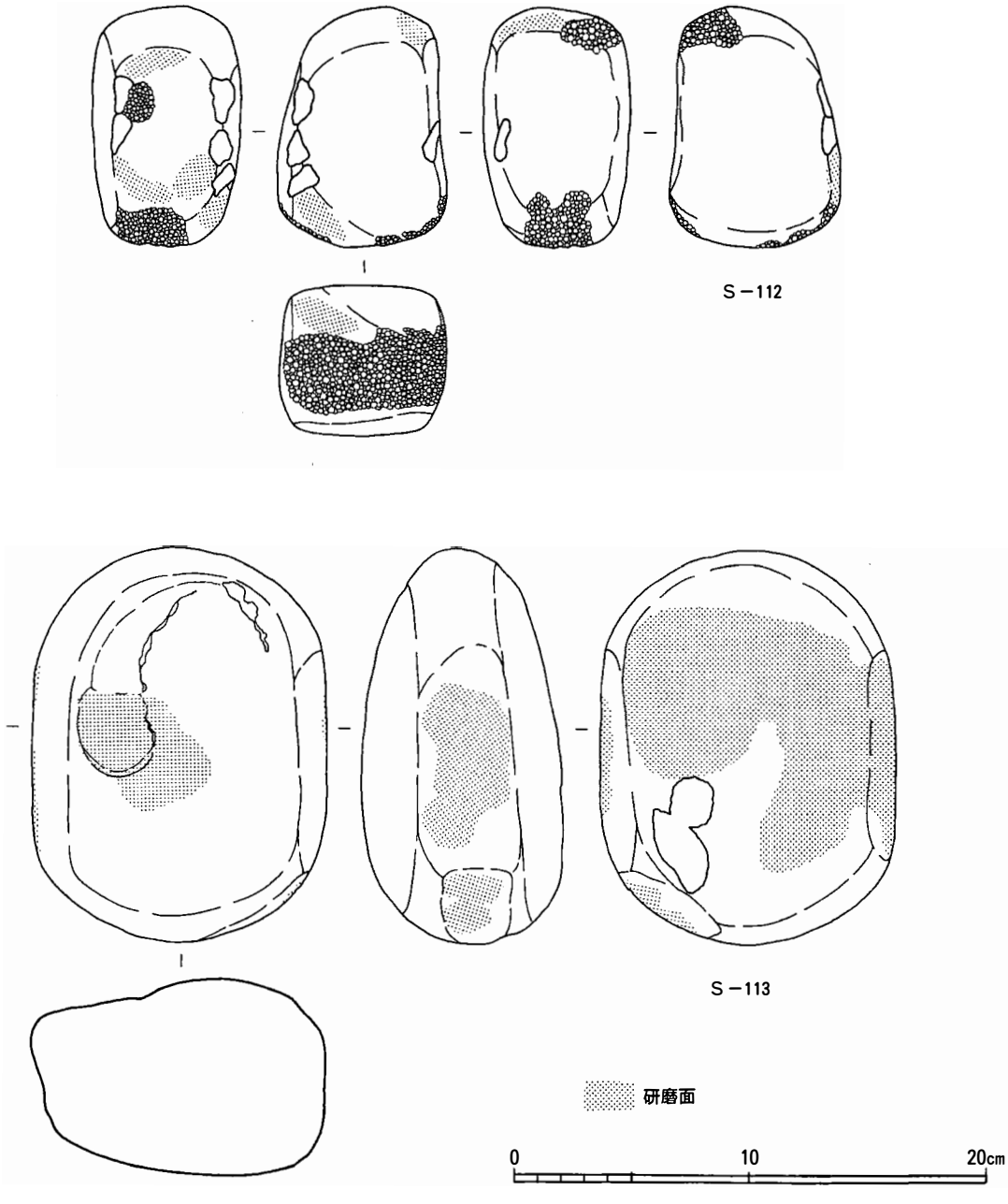
第53図　石器実測図(16)



第54図　石器実測図(17)



第55図　石器実測図(18)



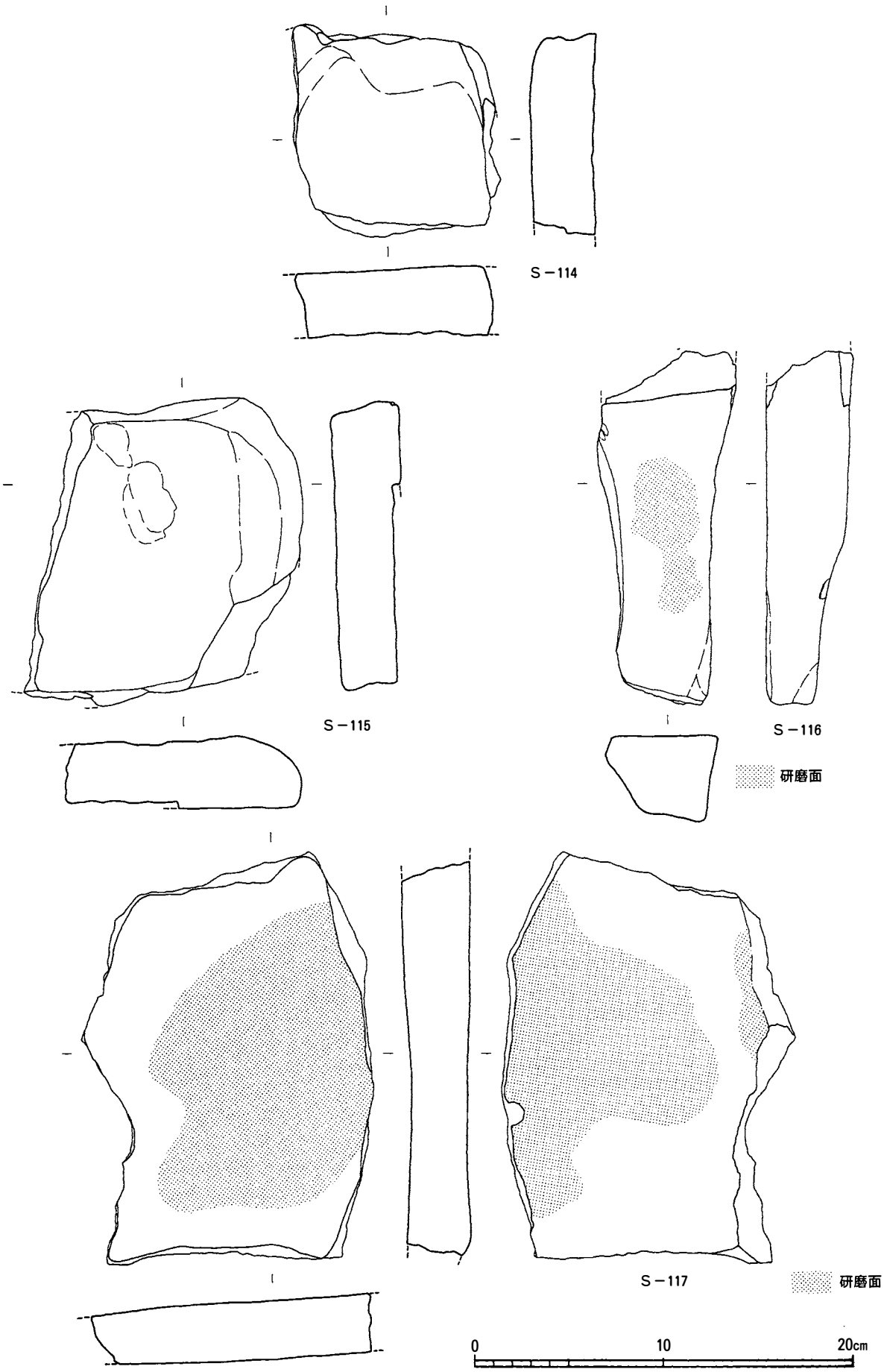
第56図　石器実測図(19)

Ｓ－119は、SI－26の床面よりやや浮いた位置で出土したものである。片面が平らでもう一面は凸状になっている。裏表両方が使用されているが、凸面の方は一番凸になった部分が中心で、平坦な裏面はまんべんなく使用されていたようである。完形で、石材は砂岩の自然石である。

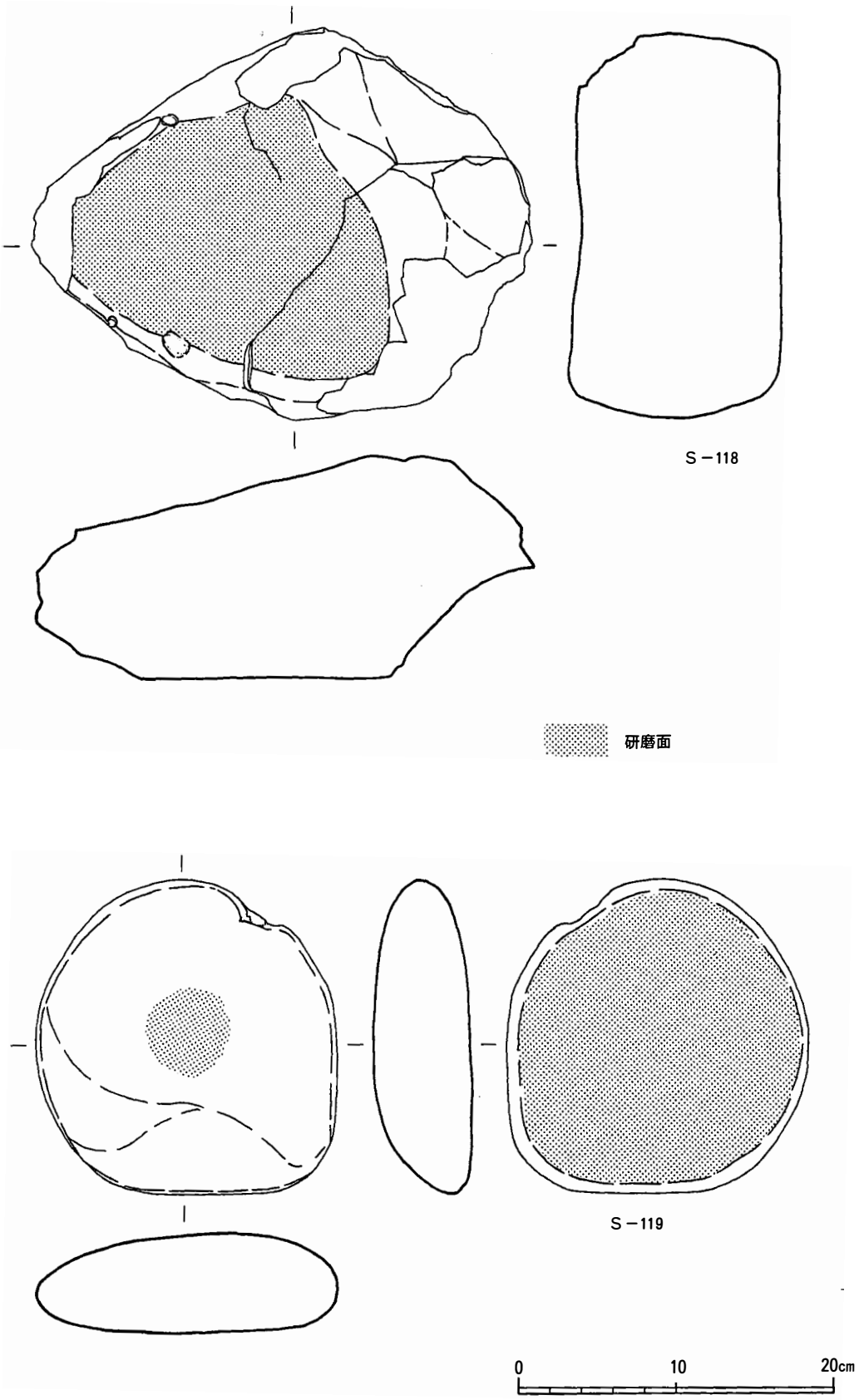
m　砥　　石（第57図　Ｓ－116）

ここで砥石と考えたものはＳ－116の１点である。溝をもった砥石ではなく、平砥石である。破片であり、本来は石皿の破片かとも考えたが、幅はこの広さだけであるようで一面のみの使用である。下部の座りはあまりよくないがさらに台を用いれば十分使えそうである。表面は研磨によってつるつるした面となっている。

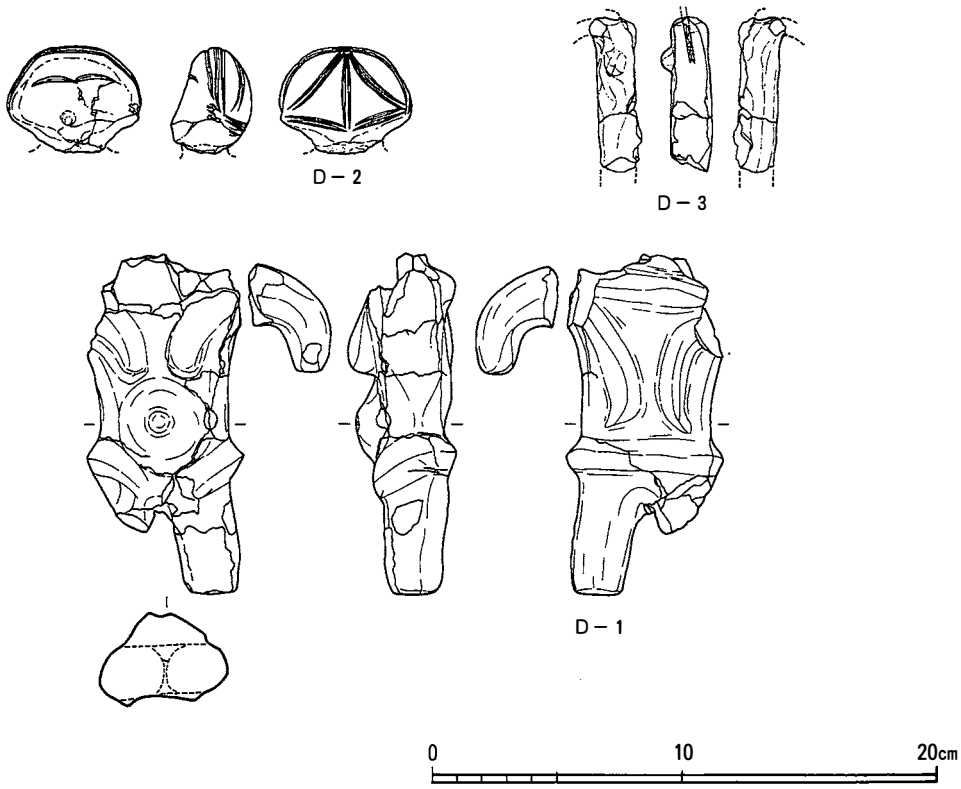
以上鶴羽田遺跡における縄文時代の石器について器種ごとに分類しながら述べてきた。石器はこのほかにも出土している。中でも使用痕のある剥片をここではほとんど記述していない。これらの石器は剥片の薄く



第57図　石器実測図(20)



第58図　石器実測図(21)



第59図　土偶実測図

鋭い部分を刃部として使用している不定型な石器である。そのほかにも出土した遺物のうちから任意に選び出したので、記載に漏れたものもあることを付記しておく。

(3)縄文時代の特殊遺物

a　土偶（第59図）

Ｄ－１は１号土偶としたもので、Ａ－２グリッドから表土剥ぎを行った後の精査中に出土したものである。前面を上に向けて横たわり、その側に腕も出土した。出土層は、Ⅲ層上面である。胴体と腕は接点がなかったものの、胎土や焼成などが似ており、同一個体と思われる。欠けた部分があるものの、肩から足先までほぼそろっていて頭部より下部は全体像が推定できる。肩部から足先までの残存長が20㎝、胴部の幅が5.1㎝、胸部の厚さが4.2㎝、腹部の厚さが3.6㎝を計る。

胸には豊かな乳房を表現し、腹部は妊婦を示すように高く盛り上がっている。腰は強くはっておりそこからやや短めの足先へと降りていく。両腕は何かで意図的に破壊を加えられたようで、えぐられたようにない。近くでこの土偶のものと思われる片腕が出土したが、まったく接合できなかった。

また、背面はやや張り気味の肩、肩胛骨を示すような縦に延びた隆起線、その下の突き出た臀部が表現されている。首は欠損しているのでいかなる頭部があったか不明である。ただ、首のところには土器片が埋め込まれており、肩部の中央付近であるため、頭部を接合するのに利用されたものと考えられる。全体的にみると、非常に豊かな女性の像であり、県内出土土偶の中でも優品の一つである。

他に埋め込み土器がないか、また土偶の製作技法がどのようであるのかという疑問に基づき、土偶の工業用Ｘ線CTスキャナーによる撮影を試みた（巻頭グラビア）。熊本大学工学部の尾原祐三教授、菅原勝彦教授の協力によるもので、TOSCANER－2320miniを操作して得られた画像から大まかなつくりが読みとれた。

まず大きな粘土紐を２本作り、それら２本を並べて１つにするように接合して、胴体及び脚部としている。その接合した胴体部に肉付けをしていく。胸の乳房や腹部、臀部などはいずれもこの段階で貼り付けられたものである。この途中で首近くの土器片は埋め込まれたようである。このようにして全体の成形が行われたものと想定できる。

Ｄ－２は頭のみで、やや特殊な雰囲気のある竪穴遺構であるSI－14から出土している。残存高が4.15㎝、最大幅が5.25㎝、最大厚が2.75㎝を計る。この遺構からは同時に石棒も出土している。これを２号土偶とした。

土偶の顔の表面は平らで、中央よりやや上部に目もしくは眉を細線で上円弧状に描き、その下部に凹点で丸く口を表現している。その口は目（眉）と比べてやや左に偏っており、ちょうどひょっとこ面のイメージがある。また、目の描き方から笑っているようでもある。

Ｄ－３は整理作業中に確認されたもので、イモ穴中の出土である。当初よくわからなかったが、詳細に観察したところ土偶の胴部の半裁されたものであることがわかった。

乳房を表すと思われる小さな隆起を胸につけ、腹部はすっと下にまっすぐ伸び、肩の付近に腕の一部が残存している。また、下部の方では一部足を形成しているようである。この土偶もＤ－１と同じく粘土紐を二本並べてつないだものと思われ、その部分から二つに別れている。また首が繋がれていたところには、胴部に細い棒状の痕跡が残り、棒で胴と首を接合していたようである。

このほかにも土偶ではないかと思われるものがあるが、明確ではないためここにはいれていない。

ｂ　**石棒**（第60図　Ｓ－122）

第59図のＳ－122に示したものがこの石器で、SI－14から出土した。SI－14の床面直上10㎝ほどのところに横転した状態で、刃部が水平面よりやや下に降りたような状態で出土した。このため、本来立っていたものが倒れたのではないかと推定される。ただ、他の遺物の出土状況から考えると、この遺構に廃棄されたものに混じっていたとも考えられる。

長さが29㎝、刃部の最大幅が4.25㎝を計り、下部の方ほど幅広かったようである。最大厚が2.4㎝を計るが、これは刃部の始まり部分である。石材は硬質砂岩であろう。

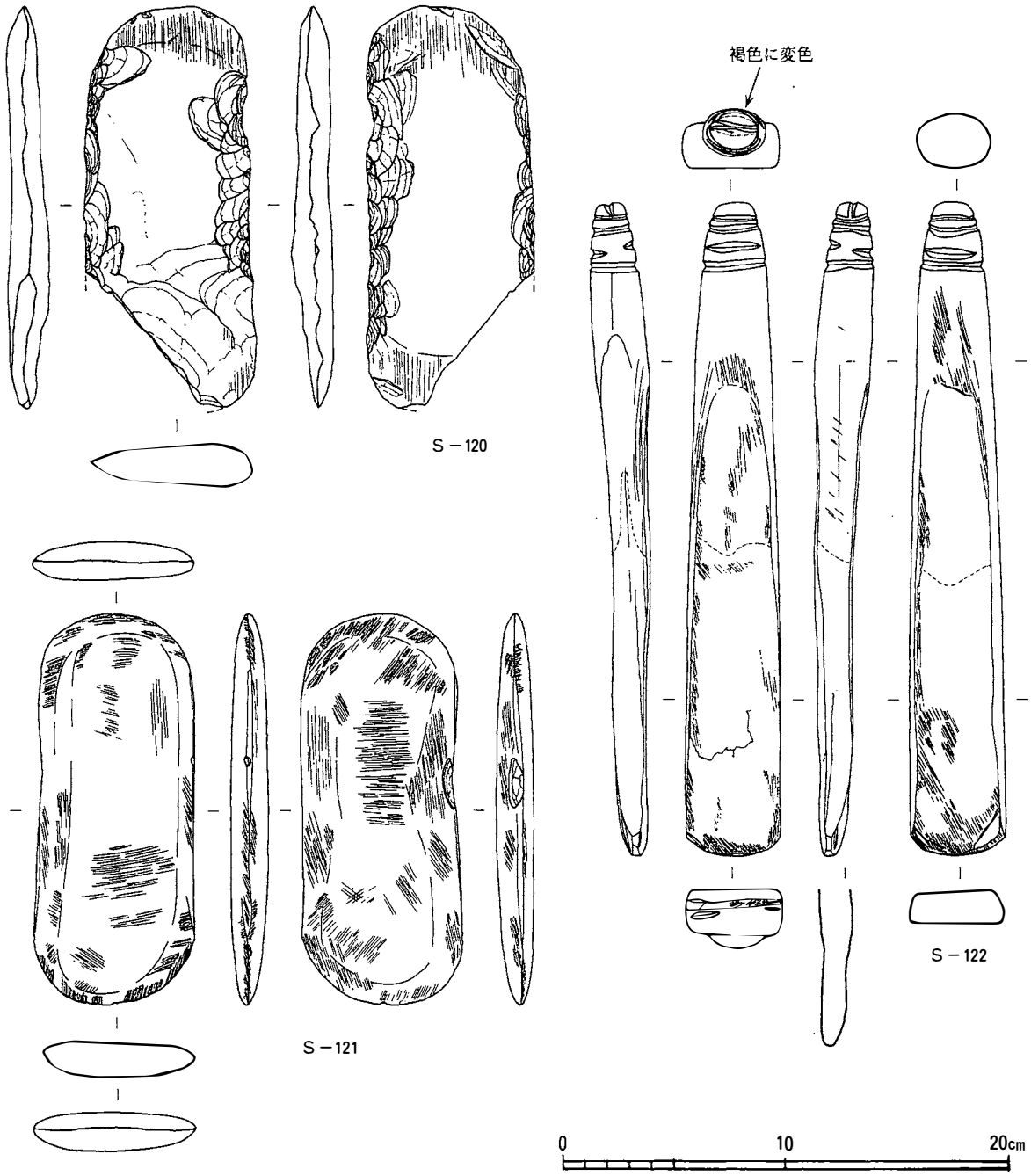
頭部は先の方ほど細くなっており、先端に横方向に幅2㎜、深さ1㎜ほどの凹線が彫り込まれる。その下部には両面に凹線が４本彫り込まれている。一番上の凹線は一周しており、頭頂部の横線とつながっている。２本目の凹線も一周している。３本目の凹線は側辺までいかずに途中で両面とも終わっている。４本目の凹線は２本目と同様である。２本目以下の凹線はいずれも丁寧な研磨によるもので、幅3㎜、深さ1㎜を計る。１本目のものは頭頂部の凹線と似ておりそれ以下のものとやや線の付け方が異なる。幅1.5㎜、深さ1㎜を計る。このことは凹線を入れる技法の差か、時期の差を示すものかもしれない。

頭部から８㎝付近の体部途中から刃部が作り出されている。刃部の端は通常の磨製石斧のようにとがるのではなくやや平坦面をもつ。この部分は本来尖っていたものが使用によって摩耗したものであろう。使用による摩滅痕や擦痕も多い。

また、頭部から14～15㎝ほどより下部はやや赤変している印象を受ける。明瞭ではないため推定であるが、赤変した部分は火を受けた可能性もある。

ところで、調整痕をみると本来の器表面は全面丁寧な研磨が施されていたようであり、ほとんど当初の擦痕は認めがたいほどである。ただ、石器途中の刃部を作り出し始める部分から石のはぎ取り面が残り、仕上げが粗くなっており、切っ先の部分も研磨はかなりなされているものの本来の調整痕には及ぶべきもない。

このように観察結果をもとにして考えると、本来石棒状の石器であったものが途中から何らかの理由により、「特殊な」形態の石斧に変えたものだと思われる。したがって、あえてここではこの遺物を「石棒」と



第60図　石器実測図(22)

とらえて項目を設けた。

c　**双刃石斧**（第60図）

この遺跡からは双刃石斧が2点出土している。いずれも安山岩製である。

S－121は、SI－19の床面から出土したもので非常に丁寧な作りのものである。石材自体は、多孔質の安山岩であるため、本来あまり見栄えのよくないものであるが、それを丹念に研磨し石斧として仕上げている。長さが17.4cm、最大幅7.3cm、最大厚1.7cmを計る。

双刃とも完全に残っているが、刃にはともに刃こぼれがあり、何らかの行為に使用されたのは間違いない。ただ、石材の強度から考えて、木などの切断には利用されなかったものと思われる。刃自体は両刃であろう。

両側辺は刃部よりもやや細く、厚くなっている。その両側辺の一部には擦れた痕跡があり、この部分に柄などが装着された可能性がある。しかし、どのような柄が装着されたのか不明である。

Ｓ－120はSI－27の床面から出土したもので刃部付近のみが磨研される局部磨研の双刃石斧になるようである。長さが、18.8㎝、最大幅が7.4㎝、最大厚が1.8㎝を計る。

双刃に対する研磨は非常に丁寧になされているが、その間の体部では両側辺からの打撃による調整痕が残されたままである。ただ、側辺の中央部には擦れた跡があり、この部分で柄に装着されたのかもしれない。双刃のうち一方は欠損しており、実際に使用されたものである。かなり衝撃の加わる作業が行われものと考えられる。

ただ、この石斧は一方の刃が破損したために、新たに頭の方に刃を作り出したものとも考えられる。製作状況をみるとＳ－121とは明らかに大きな差異があり、どちらかというと打製石斧の製作方法によく似ており、新たに刃部を逆の側に作り出した可能性が高いようである。

⑷土製品・粘土塊・玉

Ａ　土製品・粘土塊（第61図）

Ｃ－01はSI－41から出土したもので、粘土塊である。明褐色を呈し、気泡もしくは指の押圧らしきものが表面に多く見られる。胎土中には白い細砂粒を僅かに含み、かなり精製されたもののようであるが、焼き自体は甘く、かなり表面が風化している。特に目的をもって焼かれたものとはいえないようである。

Ｃ－02はSI－14から出土したもので、粘土紐状のものである。もしかすると土偶の一部か、勾玉の可能性もある。残存長は4.5㎝で、径が1.2㎝を測り、欠けていない方の端部は丸まっている。

Ｃ－03はSI－13から出土したもので、粘土塊と最初考えていたが、よく観察すると丁寧な面取りがなされており、土偶などの一部の可能性もある。表面は暗褐色を呈しており焼成も良好である。最大幅は3.5㎝、最大厚は2.3㎝を測る。

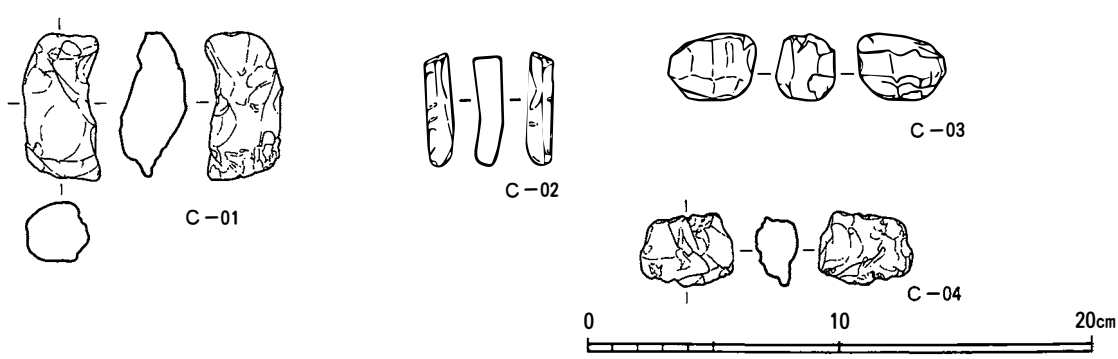
Ｃ－04はSK－37から出土したもので、粘土塊である。焼成も悪く、粘土の塊をそのまま火にくべたもののようである。最大長は2.9㎝、最大幅は3.65㎝、最大厚は1.6㎝を測る。

このほかにも粘土塊は数点あるが、いずれも焼成が悪く、赤褐色を呈し、もろいものである。

Ｂ　玉（第62図）

本遺跡で唯一の玉が第62図のものである。SI－19から出土したものである。埋土中の出土で土層観察用のベルトを取り除き始めたときに埋土の上部でみつかったものである。

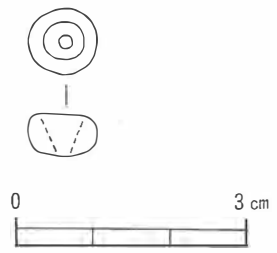
碧玉製と思われ、淡青緑色を呈しているが、全体的にはやや乳白色がかっている。高さが0.3㎝、径が0.9



第61図　土製品類実測図

cm、重さが0.6ｇを測る。搾孔は一方向からだけなされており、図では上方からである。そのため、穴の上部径が5mm、下部径が1.5mmを測る。

玉は両方向から穴をあける場合が多いので、片側からの搾孔方法はやや特殊なようである。この大きめの穴と組合わさるものがあるのかもしれない。



第62図　玉実測図

第３節　弥生時代以降の遺構と遺物

１　遺構

弥生時代以降の遺構としてこの遺跡で検出したものは、あまり時期の特定ができないものが多い。道路状遺構（SR－02、03）、溝状遺構（SD－15）がおもな遺構とすることができる。さらにここに多く見られたのがいわゆる「イモ穴」である。以下にそれらについて記述する。

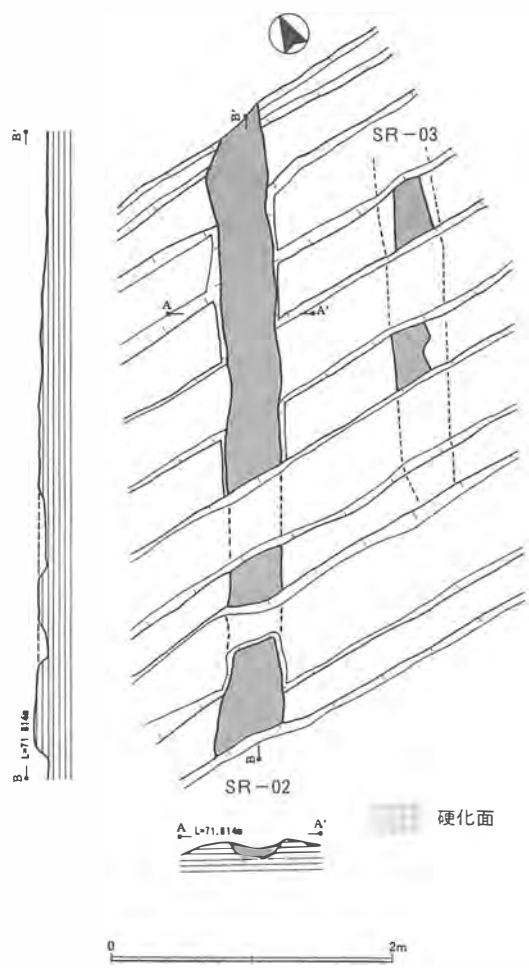
○SR－02、03（第63図）

Ａ、Ｂ－３グリッドで確認したもので、ほとんど硬化面のみが残存していた。確認した一帯は調査区の東北側に当たり、一部は調査区外に延びていた。この２本の硬化面の帯はほぼ平行に並んでいたが、SR－03は上部の削平が進んでおり残りが悪かった。

SR－02の確認面は表土下５cmほどで表土剥ぎ後すぐに確認できた。また、２ｂ層が残る段階で黒ボクとアカホヤが混じった状態の土のさらに上の層から掘り込まれていると思われた。ここでは完全な黒ボク層は確認できていないため推定である。ただ、硬化した土は黒褐色を呈するもので黒ボク起源と思われる。非常によく堅く締まっており、かなり道路として利用されたものと思われる。幅は40cmほどであり、残存していた長さは４ｍほどである。硬化面の厚さは10cmを測り、かなりしっかりした道路敷であったと思われる。方向はNE－10度－SWである。この延長は僅かに南側にもみえそうであったが、精査するうちに確認できなくなってしまった。地形的に南側が僅かに高くなっているため、削平により消失したのであろう。

SR－03も確認した面は同じであるが、先に述べたように残りが悪く、部分的に確認できただけで、はたしてこのまま長く延びるものか不明である。残存した部分では幅約40cm、長さ約2.5ｍを計り、方向はNE－10度－SEで、SR－02とほぼ同じ方向である。しかし、レベル的にSR－02よりも高い位置で確認されており、SR－02に後続する可能性がある。

これらの遺構からはほとんど遺物が出土しておらず、時期の特定は困難であるが、出土層やその埋土などの状態から考えると、中世以降のものである可能性が高い。



第63図　道路状遺構実測図

○SD－15（第６図）

この遺構はＡ－７～Ｃ－７グリッドにかけて、ほぼ南北に長くのびている。確認した範囲での長さが20m、幅が２m前後、確認面からの深さが30cm前後を計る。埋土は３層に分かれ①、②層は暗褐色土で、焼土と炭化物を少量含み、あまり締まりのない土である。若干①層と②層では明度に差があり、①層の方がより明るい。③層は②層に似るが、明褐色のブロック状の土塊を含み、やや締まっている。

この遺構に含まれている遺物は縄文時代後期末の遺物がほとんどであるが、埋土は明らかに竪穴遺構とは異なり、黒色の強い土で締まりがなく、黒ボクがかなり含まれているようである。このことから、時期は特定できないものの先の道路状遺構と併行か、より新しい時期に形成されたものと考えられる。もっと具体的にいえば、埋土のしまり具合はイモ穴のものに近く、それと非常に近い時期ではないかと考えられる。

○イモ穴群

これらの遺構は調査Ｉ区のかなりの部分で検出された。約40基ほどあったと思われる。残念ながら縄文時代の遺構を中心としてとらえていたため、この遺構は縄文時代の遺構にとって単なる撹乱の穴として綿密に調査されなかった。

埋土はいずれも暗灰褐色を呈し、締まりはほとんどない。円形のものがほとんどで２、３基長方形を呈するものがあった。円形のものは径が80～100cmほどで、深さは地表から１m～1.5mほどであった。かなりのものが現在の畑の畦近くに分布し、それ以外のものも畑の旧状態では畦近くであった場所に分布しており、現在の畑地もしくは、10数年前の畑地との関わりの強いものであった。さらに１基だけであったが、底部近くにサツマイモの腐植しかかったものがそのまま出土した。このことからこれらの遺構はイモ穴であると判断した。さらにその所属時期についても近代以降、現代といってよい時期に掘られたものと結論づけた。また、方形のものと円形のものは、時期の差かその貯蔵するものの違いとみてよいであろう。

２　遺物（第64図）

ここでふれる遺物は弥生時代のものと古墳時代のものと考えられる。もちろんイモ穴などの近代以降の遺構からも遺物は出土しているが、ここではふれない。

弥生時代の遺物としてＰ－308は甕の口縁部である。須玖式の甕の口縁部であろう。口径などの復元はできないくらいの小破片である。一括遺物として取り上げた中にあったもので、遺構には伴わない。

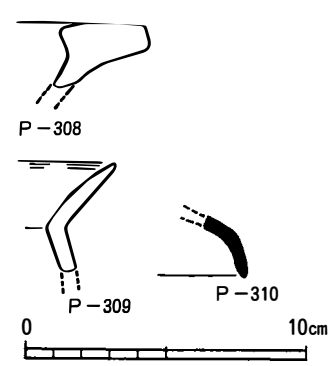
Ｐ－309は甕の破片である。これは古墳時代前期のものであろう。これも口縁での復元は困難であった。

Ｐ－310は須恵器片である。杯の蓋の一部と考えられる。これは、廃土中に混じっていたものである。時期は古墳時代後期のものであろうか。調査区内では須恵器の杯の破片とおもわれるものをもう１点確認していたが、取り上げる前に紛失してしまった。

第４節　第Ⅱ調査区の遺構と遺物

第Ⅱ調査区の調査は第Ｉ調査区と同じⅢ層上面まで表土剥ぎを行った。この調査区は先にも記したが、工事に際して道路敷きとなるうちの下水道などの配管により掘削される部分のみを対象としている。そのため調査区は幅10m、南北に長さ50m、東西に120mほどのＬ字形を呈している（第65図）。

表土を剥ぎ終わった時点で、おおまかな当時の地形が復元できた。以前の確認トレンチによっても確認されていたことと併せて考えると、西に傾斜する浅い谷部がこの調査区の中央部に入り込んでいるのが分かった。これは現地形でもその傾向があるが、旧地形ではさらに谷の落ち込みが大き



第64図　土器実測図(18)

かった。

確認調査時には一番低い谷部付近で焼土坑を確認していたが、この調査部分では確認できなかった。ただ、一箇所で焼土が認められたが、土坑は確認できなかった。その焼土はZ－8グリッドの谷の落ちぎわであった。Ⅰ区の調査を踏まえ、この焼土の周囲で遺構の存在を確認するため精査を進めた。しかし、何ら遺構は確認できなかった。

さらに調査区全体の精査を進めて行くと、縄文後晩期の土器片が散発的に所々で出土した。遺構としては以下に述べるものが出土した。

○SK－201（第66図）

この遺構はV－8グリッドにおいて確認されたもので、確認面は第Ⅰ調査区と同じくⅢ層の上面である。ここに暗褐色土の落ち込みがはっきりと確認できた。

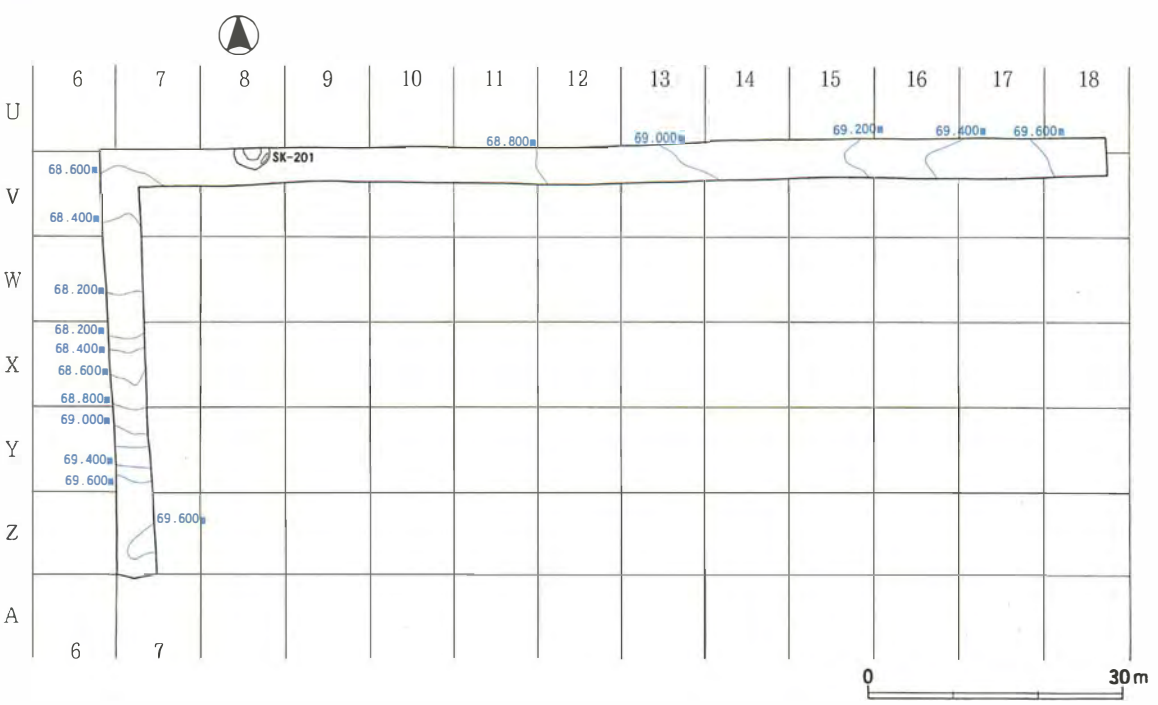
この掘り込みの上面はⅡ層の途中から掘り込まれていた。掘り進めると、焼土と炭化物が互層になっていた。ただ、炭化物以外の出土遺物がなく、時期の特定は困難である。

掘り込みは調査区外に伸びており、これが土坑でよいのか北へ延びる溝の一角であるのかこれだけの調査範囲では不明である。ここでは一応土坑としておく。

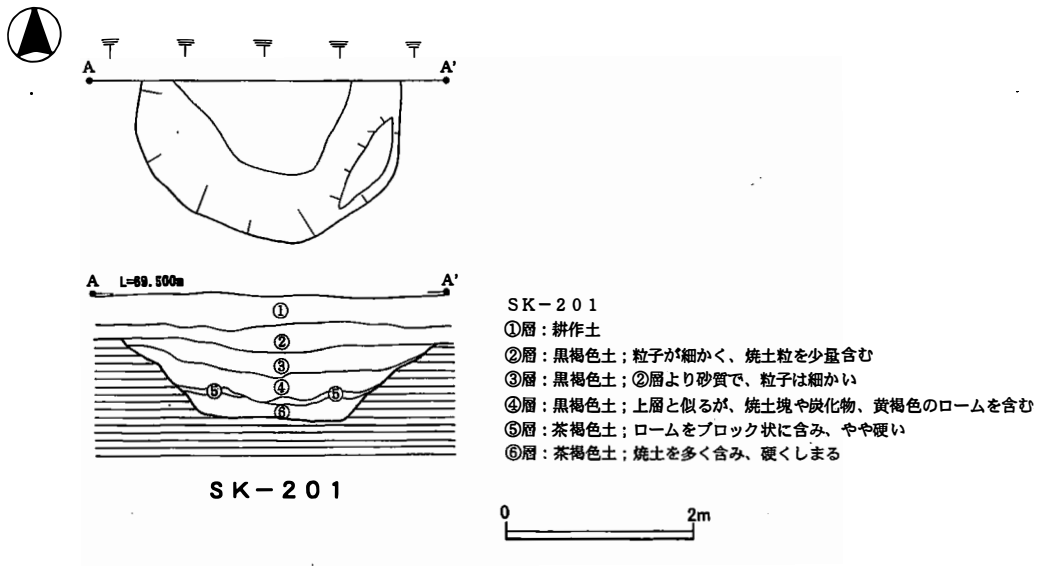
SK－201の規模は幅が2.72mで、壁までの長さ1.84m、遺構確認面からの深さが0.8mを計る。遺構内の埋土は4層に分けられる。図の土層断面図は表土層などを併せて記録している。

遺構の埋土として第66図の土層断面図の③層以下を想定している。①層は耕作土である。②層は暗褐色土であり、基本層序のⅡa層に当たる。

③層は黒褐色を呈しており、Ⅱa層と同じではあろうがやや砂質層である。この面がくぼみとなっていた時期があり、そこが水たまりを形成したことで砂粒の集中があったと推定される。④層は焼土と炭化物を含み、黄褐色のロームも一部に含まれる。⑤層は黄色のロームをブロック状に含み、茶褐色を呈するやや締まった層である。⑥層は焼土と炭化物を一番多く含む層である。ここはかなり締まっており、この面で火を焚いたようである。形態的には中世にみられる溝状遺構の状況によく似ている。埋土の状況から考えると、近世以前のものという可能性がある。



第65図　Ⅱ区全体遺構配置図


A
A'
A L=69.500m A'
①
②
③
④
⑤
⑤
⑥
ＳＫ－２０１
ＳＫ－２０１
①層：耕作土
②層：黒褐色土；粒子が細かく、焼土粒を少量含む
③層：黒褐色土；②層より砂質で、粒子は細かい
④層：黒褐色土；上層と似るが、焼土塊や炭化物、黄褐色のロームを含む
⑤層：茶褐色土；ロームをブロック状に含み、やや硬い
⑥層：茶褐色土；焼土を多く含み、硬くしまる
0
2m

第66図　土坑実測図

第Ⅵ章　調査のまとめ

第１節　遺構について

１　竪穴遺構

竪穴遺構は第Ⅰ調査区の方でのみ出土した。それらの遺構は住居跡と考えられるものと単に落ち込みとしての土坑の二つに分けられよう。竪穴住居跡として認定したものは19軒である。SI－14を除けば、全体的に平面形は円形を呈する。SI－14のみがやや変形した方形のものである。遺構の規模はやや分布域による差があり、大小の２タイプに分けられる。ただ、切り合いが多く、確実に大きさを判断できないものもある。

大型のものは調査区の西側でのまとまりである。ただ、この住居跡はかなり削平を受けており、正確に輪郭を確定できたとはいえないものもあるので、この想定したものが確実ではない。

一般的なものは、調査区の中心部で検出したものでかなり多くまとまっていた。やや小型のものもあり、中心の東側にかたよっているもので数は少ない。

炉はあるものとないものがあり、一概にいえない状況がある。炉のあるものは単純な掘り込みによるものだけで、特に石組みを配したものはなかった。規模としては径が40㎝、深さも20～40㎝ほどのものがほとんどであった。

２　土坑

竪穴住居跡についで多く出土したのが土坑である。その総数は13基である。これらの形態は様々であるが、住居跡と切り合うものの中には、住居跡が含まれている可能性が大きい。かなり定型的に円形に形作られたものが多いためで、それを住居跡とするには難があったものを土坑としたためである。

３　道路状遺構・溝状遺構

本調査区では１区のうちＡ・Ｂ－３区において確認したもので、北東～南西方向に二本併行する状態で出土した。SR－02、03としたが、SR－02がよりはっきりと硬化面が残り、小道として利用されたものであろう。遺物の出土がなかったので時期は不明であるが、埋土や周囲の層序などから考えて、平安時代以降で近代よりも以前と考えられる。

溝状遺構は現在の畑地の区画割りに沿っており、この地の畑地が形成されるようになってきた近代以降のものと思われる。

４　焼土坑

多くの焼土坑が住居跡との関連で捉えられたが、住居跡から離れた地点から検出されたものもある。これらは時期が不確実であった。Ｃ・Ｄ－９グリッド付近に集中し、意図的な掘り込みかどうかはっきりしないものもあった。

なかでもSX－42は、その中に入っていた炭化物の量が非常に多く、ここで火をたき、そのまま押し込んだもののようである。C14年代測定により、縄文後・晩期とされよう。

第２節　遺物について

１　土器

この遺跡で出土した土器は縄文時代のものが大半である。早期の塞の神式土器、押型文土器、後期の三万田式土器、太郎迫式土器、御領式土器、晩期初頭の天城式土器などである。このうち中心になるのは御領式土器である。竪穴遺構のほとんどがこの時期のものである。

後期末から晩期初頭の土器の器種は深鉢形、浅鉢形が中心であるが、注口形土器もある。深鉢形土器は口縁部に文様を持つものと、いくつかの土器には赤色の顔料で彩色したと思われる痕跡が認められるものもあ

る。また、小型の浅鉢というよりミニチュアともいうべき土器片には、内部に明らかに赤色顔料の痕跡があり、塗布されたというよりもこの中に顔料を納めていた可能性がある。他に赤色顔料をすりつぶしたと思われる磨石も出土しており、この遺跡内で土器などを赤彩したのであろうか。

２　石器

生活用具としての石器には打製石斧、磨製石斧、石鏃、石匙などがある。使用痕のある石器もその中に入ろう。石器は遺構内から出土したものも多く、その遺構に伴うのではないかと思われるものもあったが、かなりのものが流れ込みや廃棄によって遺構内に入ったものであろう。

３　特殊遺物

・土偶

本遺跡からは３個体の土偶が出土した。頭部のみのものが１体、首のない土偶が１体、胴体の半分のものが１体である。時期的に特定はできないものの形態的にはばらつきがある。頭部の１点は遺構内から、そのほかは包含層やイモ穴中から出土した。

・石棒

石棒としてはかなりしっかりした作りのものである。本来はもっと長かったものが、欠損した際に刃部を付け加えることで別の形態に変化させたようである。竪穴遺構であるSI－14からの出土である。横に倒れた状態で出土した。

・注口土器

注口土器は１点のみであったが、ほぼ完形品が出土した。単独出土であるためその性格はいまのところ不明確である。祭祀的な行為に使用されたものであろうか。

・双刃石斧

この形の石斧は２点出土した。２点とも遺構内から出土したものである。１点は非常に丁寧な研磨を全体に加えて作られ、特別な使用が想定される。もう１点は打製石斧の刃部だけを研磨したもので、先のものとは性格が異なるのかもしれない。

４　赤色顔料

この遺跡からは、赤色顔料を塗布したと思われる土器がわずかながら出土している。また、赤色顔料を蓄えたと思われる小型の椀形土器も出土している。内部に顔料の付着したこの土器は、外器面に顔料は付着せず、内器面の一定の範囲のみに限られ、この容器が顔料の貯蔵に使用されていた可能性が高い。

また、この遺跡で出土した石器の中に、明らかに赤色顔料を粉状にすりつぶす際に使用されたと考えられる磨石がある。当然これに見合う石皿もしくは台石があってよいが、この調査では確認できなかった。

第Ⅶ章　考　　察

第１節　遺構と遺物について

今回調査した鶴羽田遺跡の特徴として、竪穴住居跡を含めた竪穴遺構が多く検出されたことがまずあげられる。竪穴遺構のうち竪穴住居跡と確認したものは19軒で、切り合い関係にあるものが数軒ある。他の竪穴遺構のなかにも住居跡と思われるものが含まれている。出土した遺物として、旧石器時代から古墳時代まで幅広く出土しているが、その大部分は縄文時代後期末から晩期初頭に比定される御領式土器、天城式土器とよばれる土器である。さらにその時期の特殊遺物として取り上げた土偶、石棒、双刃石斧などがある。

ここではそれらのうち遺構と土器との関係についてまず述べてみたい。

御領式土器は縄文時代の後期末に位置するものという坪井清足氏の見解が広く支持されている。亀ヶ岡式土器の影響を受ける土器である滋賀里系土器が古閑式土器に伴っており、亀ヶ岡式土器を晩期初頭に位置づけたことによって相対的に決められたものである。一方、磨消縄文手法を後期の特徴であるとし、すでにこの技法の消失する時期から晩期とするという考えをとり、御領式土器を晩期初頭に位置づけるべきであるという見解もある。ただ、御領式土器の概念規定は研究者により微妙に異なるような状況もあり、一概に扱えない部分のあるのも事実である。いずれにしても御領式土器は縄文時代後期末から晩期初頭の境界に位置すると考えられる。

天城式土器はこの御領式土器の系統に位置するのは間違いない。ただ、その系統の位置づけをどうするかについては今のところ型式学的な方法によるところが大きいようである。層位学的に御領式から天城式土器への変化の過程をとらえるのは先の土器の概念規定とも関係し、かなり困難である。ただ、熊本市周辺の縄文時代後期末から晩期初頭にかけての遺跡相互の土器の出土状況を型式学的にみると、御領式→天城式の流れを追えそうである。

ここで、出土した土器をもとに竪穴住居跡の時期を大まかに分けると、御領式段階の住居跡としてSI－07、10、11、12、14、17、26、27、41が充てられる。天城式段階にはSI－16、19、21、29、40が充てられる。その他の住居跡は、出土遺物の数量や取り上げ方によって時期が不確定である。また、同一遺構内に御領式土器と天城式土器が存在している場合も多い。その場合はその出土状態を勘案して時期を決めた。

一方遺構の切り合い関係で遺構の新旧をみると、SI－06、07の後に08が続き、SK－09→SI－10→SI－11とし、SI－41→SI－40となっている。また、SI－17→SI－16の順もある。このことは遺物から判断した前後関係にそう矛盾しない。ただ、先にも述べたように両型式の土器の混在に対して、一部恣意的に出土土器を扱った場合もあり、確実にこのとおりであるか疑問は残る。

次に、他遺跡における縄文時代後晩期の各時期の住居跡についてみながら本遺跡の住居跡の位置づけを考えてみる。

熊本県内で後晩期の住居跡が確認されるようになってそう長い年月が流れていない。この時期の最初の住居跡の調査例は菊池郡泗水町三万田東原遺跡である。この遺跡では楕円気味の２基の住居跡が出土した。屋内には地床炉をもっている。この遺跡は三万田式段階のものとされている。その後、1978年には熊本市五丁中原遺跡の調査がある。この調査では5.70m×5.65mの円形住居跡が出土している。屋内に地床炉をもち、南側には一段高い入口と想定できる部分があり、壁際に柱穴が巡っている。出土土器より天城式段階のものとされている。その後調査例は増え、菊池郡旭志村伊坂上原遺跡、熊本市上南部遺跡、菊池市天城遺跡、菊池郡大津町ワクド石遺跡、七城町大久保遺跡、熊本市石の本遺跡、人吉市中堂遺跡などで住居跡が次々と確認されてきた。近年圃場整備事業に伴う調査で熊本市太郎迫遺跡や山海道遺跡が調査され住居跡が検出されている。

これらの後晩期の住居跡を土器型式を基にした段階別にみていくと、まず太郎迫式段階の住居跡として、ワクド石遺跡の円形に並ぶ柱穴14本を検出した10号住居跡がある。壁はないものの住居跡と認定されている。

三万田式段階の遺跡として菊池郡泗水町三万田東原遺跡がある。ワクド石遺跡の置鉢を持つ６本柱の３号住居跡もこの段階に入れられている。壁は確認されず、地床炉を持っている。

鳥井原式段階では菊池郡旭志村伊坂上原遺跡で検出された、壁際に８本柱穴が並び、地床炉を持つ円形の竪穴住居跡がある。

御領式段階の竪穴住居跡としてはあまり報告されていないが、ワクド石から出土した６号住居跡も柱跡のみであるが、置鉢からこの段階の遺構とされている。同じく１号住居跡もこの段階から天城式段階にかけての遺構とされている。この遺構は５本の柱穴とその中心の石囲炉、硬化面からなるもので、壁は確認されていない。

天城式段階では検出例が多く、熊本市五丁中原遺跡の円形住居跡を始め、伊坂上原遺跡の5.0ｍ×4.7ｍを測り地床炉を持つ円形住居跡、埋鉢炉を持つ熊本市上ノ原遺跡のもの、３基の円形住居跡を検出した熊本市上南部遺跡などがある。上南部遺跡のものは地床炉や石囲炉をもち、壁際に柱穴が巡るものである。規模は3.5ｍ～４ｍの径を測る。４基が石囲炉を持ち、１基が地床炉を持つ。また、七城町大久保遺跡でも４基の円形住居跡と１基の楕円形住居跡を検出している。そのうち３基には床面中央部には地床炉がある[注1]。国体会場として調査された熊本市石原町の石の本遺跡からは、50基以上のこの時期の竪穴住居跡が出土している。大部分が円形の竪穴住居跡であった。

古閑式段階の竪穴住居跡は、上益城郡益城町古閑北遺跡のものがある。円形の住居跡である。また、熊本県人吉市中堂遺跡で出土したものは、この頃から黒川式段階にかけての63基が報告されている。方形は８基で大半は円形系統である。

このように熊本県内の住居跡の調査状況をみてくると、後晩期の住居跡は概ね円形もしくは楕円形を呈している。例外的に方形のものが検出される場合もある。晩期の半ば過ぎから方形のものの出土が徐々に増加するようである。鶴羽田遺跡で出土した竪穴住居跡は、例外はあるがいずれも円形もしくは楕円形を呈するものである。時期では御領式から天城式段階にかけてのもので、特にこれまでの調査例と齟齬するところはない。

次に住居跡の規模をみてみよう。熊本県内で検出された縄文時代後晩期の住居跡の規模としては、６ｍ近いものと５ｍ前後のものと４ｍ前後のものに分けられそうである。鶴羽田遺跡出土の住居跡を類別すると、４ｍ前後の径をもつもの（１類)、５ｍ前後の径を持つもの（２類)、６ｍほどの径を持つもの（３類）の大きく３類に分けられよう。ただ、最後のものは掘り方の確認がしにくかったSI－08、10であるため、この類はここでははずした方がよいと思われる。したがって、大きく２類の存在があるものと考えられる。この場合、特殊な形態を示すSI－14もはずしておきたい。１類に含まれるものは、SI－12、17、19、21、26、27、29、41などである。２類に含まれるものは、SI－06、07、11、13、16、40（ただし２基と考えると１類か）などである。

この類別できそうな大きさの違いは何を意味しているのであろうか。居住者の人数の差、または時期差という見方もできる。床面積を具体的に割り出して、民族例などを参考にして居住人数の推定を行った研究があるが、この遺跡で出土した遺構に直接当てはめるにはやや調査者として不安がある。時期差としてみた場合、一応先に記したように御領式段階、天城式段階の遺構と分類したものと比較してみても必ずしも一致しない。ただ、遺物を十分詳細に検討したとは言い難いので、一概に否定はできない。

さらにこの住居跡としたものの中には屋内に炉を持つものと持たないものがあり、持たないものが居住跡ではないともいえない。SI－21、29は明らかに硬化面が形成され、柱穴も確実なものが確認できている。

このように鶴羽田遺跡の調査区内で出土した住居跡を巡って、様々な解釈が可能である。縄文時代後晩期の住居跡の検出は今後もより一層綿密になされていくことであろう。その中で、多くの課題が解き明かされていくことを期待したい。

第２節　特殊遺物について

鶴羽田遺跡から出土した特殊遺物として、土偶が胴体２個体と頭部１個体の計３個体、石棒が１本、双刃石斧が２本（１本は疑わしい）ある。これらの遺物は点数としては少ないが、この遺跡の一つの特徴を示す遺物と考えられる。

１　土偶について

熊本県は九州島内でも土偶の出土数の多いところである。中でも熊本平野北部は一大集中地域といえる。近年大分県などで出土数が増加しているが、熊本の出土数には遥かに及ばない。熊本県内でもその出土する地域は限定されているといえよう。特に出土数が集中するのは熊本平野から北部の台地である。例えば、熊本市上南部遺跡（108個）、七城町大久保遺跡（26点）、三万田遺跡（50個以上）などがあり、今後もその数は増加するものと思われる。富田紘一氏は土偶の出土地を菊池川流域から熊本市の託麻原台地までの間に限定されるとした。ただ、これには近年例外的な地域での出土もみられている。また、この地域の縄文後期末～晩期前半の黒色磨研土器が展開していく時期に異常に多くの大規模遺跡が台地上や河岸段丘など平坦な面が連続する地形に形成されている。多くは広域台地上にあり、幅狭台地および河岸段丘がそれに次ぐという。この時期の、集落が依存する水を全体的に考えると、少量の水でも一定量が継続的に求められれば生活が確保できる状況があったと推測されている。

また、土偶が出土する遺跡とそれ以外の遺跡との関連を、密集地の一つである白川中流域で求められている。その結果、地域において核となる土偶出土遺跡と、その周辺で継続的な生活が営まれない小規模遺跡とが存在すると結論づけられている。

鶴羽田遺跡はもちろん植木台地の縁辺部に位置し、水の供給源は近くの川もしくは湧水点が確保される地点である。そこに近接した時期の20軒近い住居跡の存在は、集落として大きい方と考えてもよいのかもしれない。しかし、その数は多い方であるが、ある一定時期に集落形成が集中する短期的な集落といえる。出土した土偶もわずか３点である。遺物としてはかなり長い時期の遺物は存在しているので、周辺にさらに遺跡が広がる可能性はある。その中には富田氏のいう核的な集落の存在も予想される。そこに多くの土偶が出土するのであろう。今のところこの周辺にそれらしい遺跡は確認されていないが、もう少し目を広げれば、谷を挟んだ京町台地の四方寄遺跡などもあり、何らかのつながりも予想される。

土偶は祭祀に使用されたとするのが定説である。しかも壊れている状態で出土することが多く、意図的な破壊があったと従来から言われている。鶴羽田遺跡で出土した土偶もすべて破損している。１号土偶は首から上がなく、両手は欠損し、片足も折りとられている。この土偶に近接して同一のものと思われる腕が１点出土したにもかかわらず、接合しなかった。これなども単に破損した以上のことが考えられる。２号土偶は頭部のみで接合する胴体のかけらもこの遺跡内では見つかっていない。ただ、土偶は壊れた状態で出土することが多く、この壊れた土偶が必ずしも意図的な破壊によるものであるとはいえないのも確かである。

１号土偶を観察する限りにおいては、壊れやすい首には土器片が挟み込まれ、足の付け根などには粘土の張り付けが見られる。これは弱い部分を補強したとも考えられる。一方腕は打ち壊したかのような破壊の跡が観察でき、意図的な破壊も考えられる。この破壊が何らかの祭祀行為の結果かどうかは不明である。

土偶を使用した祭祀行為がどのようなものであったにしろ、最終的に土偶は廃棄されるようである。祭祀

行為の判断は発掘者の問題意識と関係するし、遺跡の状況にも影響されよう。今後さらに丹念な調査が必要であろう。

２号土偶は頭部のみであるが、これによく似たものが上南部遺跡で出土している。耳の表現などやや異なる部分もあるが、非常によく類似している。ただ、時期差はある。富田氏によれば、乾原遺跡にも同類のものが出土しているという。これは何を意味するのであろうか。やはり同じ文様構成のみならず、うり二つとまで類似するのは人の交流を通じた情報の交換があったのであろう。それは祭祀行為の共通性とまでいいうるのかもしれない。

土偶を巡ってはさらに多くの興味深い問題が山積し、様々に論議されている。この鶴羽田遺跡で出土した土偶がその議論に何らかの寄与をするものと考えられる。

２　石棒について

石棒は石剣、石刀などとともに珍品として注目されてきた。熊本県内各地の遺跡調査に際し出土したもののほか、偶然に発見されたものなど多くの例がある。この遺跡では住居跡と想定したSI－14から出土したが、この遺構に伴うものとは限らない。儀礼行為が終了し、廃棄されたものかもしれないからである。ただ、この遺構自体も唯一方形に近い形を示し、掘り込みが深く、土偶も出土するというかなり特殊なあり方をしている。詳細は報文に譲るとして、まず石棒・石剣・石刀についてどのようにこれまで定義されてきたのかみてみよう。

石棒などの特殊な遺物については早くから着目され、特別に取り上げられることが多かった。しかし、それは散発的に採り上げられるに過ぎなかった。昭和初期に至って、八幡一郎氏による『北佐久郡の考古学的調査』において「石棒は形の大小を問わず体部断面が正円乃至これに近い楕円形をなし、原則としては一端又は他端に頭部を有する。石剣は一般石棒に比較すれば短小、断面楕円形、菱形又は扁平にして、概ね頭部を有し、他端鋭く尖るか、体両側縁が刃のように薄くなりて利器に適する。体は多く真直である。石刀は石剣と略同大、体断面は卵円形又は扁平にして一側縁が刃となり、刀の如き利器と見做し得るもの。体は彎曲する場合が少なくない。」と定義された。この定義が今日にも大枠で捉えられている。

この定義にしたがって改めて本遺跡出土の資料をみてみると、頭部は確かに男根を象ったかのような形に造りだしている。下部に目を移せば、体部はやや偏平がかった楕円形である。途中から両側面が剥落したような状態であるが、意図的に剥落させており、刃を頭部と逆の方につけている。この刃部は明らかに石斧の形状をしており、あたかも細長い磨製石斧のような形である。刃部自体は尖っておらず、５㎜ほどの平らな部分を残している。丁度皮鞣しでも行ったかのようである。したがって全体の形状としては、男根状の頭部を持つ粗作りの磨製石斧のようなものである。この石器を石棒と呼ぶべきか、石剣、石刀の変形と呼ぶべきか、意見の分かれるところではあるが、通称的に使ってきた石棒の名称で呼ぶ。

熊本県で最初の石刀に関する記事としては、菊池郡旭志村御願所馬糞塚付近出土とされるものが昭和11年（1936年）に三宅宗悦氏によって紹介されている。この石刀はその頭部に陰刻による装飾がみられ、断面はほぼ卵形を呈している。その後、各地で石棒が偶然もしくは調査によって出土してきている。ただ、調査によって出土状態が特定されたものは少ないようである。熊本市教育委員会が調査した健軍神社遺跡で出土した石棒は、祭祀行為が推定できるような状態で出土した希有な例であろう。

石棒はその形状から土偶との関連で説かれることが多い。本遺跡の石棒も２号土偶とともにSI－14から出土している。ただ、それが何か意味するとはいえない状態ではあった。たまたま同じ遺構に廃棄されたと考える方が自然であるのかもしれない。

鶴羽田遺跡で出土した石棒は広義の石棒であろう。今後類例が出土するかどうかわからないが、石棒の一

つのあり方として祭祀行為の想定には何らかの意味をもつと思われる。

3　双刃磨製石斧について

この遺跡からは2点の両刃のある磨製石斧が出土している。1点は非常に薄手で幅は広く、丁寧な研磨が施されて造作してある。石材として安山岩が使用されているが、この遺跡で一般的にみられた打製石斧などに使用された菊池郡西合志町の二子山石器製作跡で得られる石材とは明らかに異なる。多孔質でやや硬質のものが使われている。

両方に同じ刃をつける石斧の出土例として佐原真氏が著書で紹介されているのが、新潟県三仏生遺跡（縄文時代後期）から出土した石斧である。この石斧は長さ23.2㎝を測る双刃のもので、黒及び赤漆の結縛塗痕が認められる蛇文岩製のものという。漆は装飾と考えられ、柄を付けない祭りの道具と想定されている。ヨーロッパの新石器時代・青銅器時代の双刃斧は柄穴を持ち、戦いの道具であり、祭りの斧であるという。他の民族事例でも、双刃の石斧はどうも特殊な使用法があったようである。

他に類例があまりない現状では、この石斧について詳細に述べることはできないが、この石斧も何らかの祭祀行為に使用された可能性があるということを指摘するにとどめたい。

注

1．熊本県文化財報告第143集　『大久保遺跡』(1994）において、遺構に関して記載事項の誤りがあるので、補足・訂正しておく。

第8図、第11図～第15図、第139図～第144図におけるスケールは2ｍスケールではなく、4ｍスケールである。

本文Ｐ．3～Ｐ.26における住居跡401号、802号、1201号、1302号、1303号、1304号、1305号、P.215における住居跡501号、801号、1301号についての記述のうち、遺構規模などの数値はすべて2倍する必要がある。

参考文献

磯前順一　1994　『土偶と仮面・縄文社会の宗教構造』　校倉書房

井上繭子　1993　「西日本の土偶」『古文化談叢』第29集

植木町史編纂委員会編　1981　『植木町史』　植木町

金田一精　1994　「健軍上ノ原遺跡の祭祀遺物」肥後考古学会第205回例会レジュメ

木村幾多郎　1981　「九州地方における縄文時代集落研究の現状」『異貌』9　共同体研究会

木下亀城・小川留太郎　1967　『岩石鉱物』標準原色図鑑全集6　保育社

甲元眞之　1997　「朝鮮先史時代の土偶と石偶」『宗教と考古学』　金関恕先生の古稀をお祝いする会

小林達雄　1997　「縄文土偶の観念技術」『土偶研究の地平　「土偶とその情報」研究論集(1)』　勉誠社

佐原　真　1994　『斧の文化史』　東京大学出版会

新熊本市史編纂委員会編　1996　『新熊本市史　資料編　第一巻　考古資料』　熊本市

高橋信武　1998　「縄文晩期の方形竪穴住居跡について」『列島の考古学』　渡辺誠先生還暦記念論集刊行会

「土偶とその情報」研究会編　1997　『西日本をとりまく土偶』　「土偶とその情報」研究会

「土偶とその情報」研究会編　1997　『土偶研究の地平　「土偶とその情報」研究論集(1)』　勉誠社

富田紘一　1977　『鳥井原遺跡発掘調査報告書』　熊本市教育委員会

富田紘一　1981　『上南部遺跡発掘調査報告書』　熊本市教育委員会

富田紘一　1990　「中九州縄文後晩期の遺跡　－土偶から見た集落間の交流－」『九州上代文化研究論集』
乙益重隆先生古希記念論文集刊行会

富田紘一　1992　「九州の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告　土偶とその情報』第37集
国立歴史民俗博物館

西合志町史編纂協議会編　1992　『西合志町史』　西合志町

浜野美代子　1992　「土偶の破損」『研究紀要』第9号　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

春成秀爾　1996　「性象徴の考古学」『国立歴史民俗博物館研究報告』第66集　国立歴史民俗博物館

古森政次　1994　『ワクド石遺跡』熊本県文化財調査報告第144集　熊本県教育委員会

北部町史編纂委員会　1985　『北部町史』　北部町

町田勝則　1996　「石器の研究法　－報告文作成に伴う観察・記録法①－」『長野県の考古学』㈶長野県埋蔵
文化財センター

八重樫純樹・小林達雄・野口正一　1984　「縄文時代土偶の情報構造に関する基礎的考察」『国立歴史民俗
博物館研究報告』第3集　国立歴史民俗博物館

表 3　土器観察表

図番号	遺物番号	遺構・グリッド	取上番号	器種	部位	口径	底径	高さ(残存)	色調（内）	色調（外）	調整（内）	調整（外）	胎土	焼成	備考
22	P－001	SI－40	3623	深鉢	胴			8.5	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	－	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
22	P－002		攪乱一括	深鉢	胴			3.1	にぶい赤褐	暗赤褐	ミガキ	－	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
22	P－003		3層上面一括	深鉢	□				淡黄褐	淡黄褐	ナデ	－	角閃石、石英	良	
22	P－004	SK－32	2876	深鉢	□			3.5	灰黄褐	にぶい黄橙	ミガキ	－	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
22	P－005		4165	深鉢	□			4.3	黒褐	にぶい黄橙	ナデ	－	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
22	P－006		攪乱一括	深鉢	胴				褐	明褐	ナデ	－	角閃石、石英、砂粒	良	
22	P－007	B－2	3095	－	胴				橙褐	黒褐	ナデ	－	角閃石、石英、長石	良	
22	P－008	B－3	3176・4306・4065	深鉢	胴			3.6	にぶい赤褐	赤褐	ナデ	－	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
22	P－009	D－1	4482	深鉢	胴			6	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	－	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
22	P－010	B－3	3A層一括	深鉢	胴			3.2	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	－	角閃石、石英、砂粒	良	
22	P－011	B－1	一括	深鉢	胴			3.6	灰黄褐	にぶい黄橙	ナデ	－	角閃石、長石、砂粒	良	
22	P－012	B－3	3A層・4062・3層上面一括	深鉢	胴				橙褐	褐	ナデ	ナデ	角閃石、石英	良	
22	P－013		3A層一括	深鉢	□				暗褐	橙褐	ナデ	－	角閃石、石英、砂粒	良	
22	P－014		3層上面一括	深鉢	胴			3.2	褐灰	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
22	P－015	SI－21	4036	深鉢	胴			4.5	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	－	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
22	P－016	B－3	4309	深鉢	□			5.7	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
22	P－017	SI－40	一括	深鉢	胴			3.6	にぶい赤褐	にぶい赤褐	－	－	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
22	P－018	B－1	4447	深鉢	胴			5	にぶい黄橙	にぶい橙	－	剥離	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
22	P－019	C－3	4543	深鉢	胴				淡黄褐	淡黄褐	ナデ	－	長石、砂粒	良	
22	P－020	B－3	攪乱一括	深鉢	胴				浅橙褐	浅橙褐	ナデ	ナデ	砂粒	良	
22	P－021	C－4	攪乱一括	深鉢	胴			2.8	黒	にぶい橙	－	ナデ	角閃石、石英、砂粒	良	
22	P－022	SI－12	305	深鉢	胴			2	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデ	－	長石、砂粒	良	
22	P－023	B－1	4435	－	胴			3.8	褐灰	にぶい赤褐	－	－	角閃石、石英、砂粒	良	
22	P－024	B－1	3004	－	胴				淡褐	橙褐	ナデ	ナデ	石英、雲母	良	
22	P－025		34層上面一括	深鉢	□				明褐	明灰褐	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
22	P－026	C－5	3A層一括	－	胴			4.4	灰黄褐	黄橙	ナデ	－	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
22	P－027	B－1	4444	－	胴			3.9	灰黄褐	にぶい黄橙	ナデ	－	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
22	P－028	C－2	3A層一括	－	胴			2	黒褐	黒褐	－	－	角閃石、石英、砂粒	良	
22	P－029		攪乱一括	－	□			2	にぶい赤褐	黒	ナデ	－	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
22	P－030	E－10	一括	深鉢	□			6.3	赤褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
23	P－031	SI－05	101	深鉢	□			3.9	灰黄褐	褐	ミガキ	ミガキ	長石、雲母、砂粒	良	
23	P－032		3層上面一括	浅鉢	□			3.7	にぶい褐	にぶい赤褐	ナデ	ミガキ	角閃石、長石、砂粒	良	
23	P－033	C－1	4466・104	深鉢	□	32.6		7.8	にぶい黄橙	橙	ミガキ	ナデ	角閃石、石英、砂粒	良	
23	P－034	B－2	3A層一括	浅鉢	□			1.8	にぶい黄褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	波状口縁
23	P－035	C－1	一括	浅鉢	□			2.3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	波状口縁
23	P－036		攪乱一括	浅鉢	□			3.2	灰黄	黒褐	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	波状口縁
23	P－037	C－14	一括	浅鉢	□			3.7	にぶい黄橙	黒褐	ナデ	ナデ	石英、長石、砂粒	良	波状口縁
23	P－038		攪乱一括	浅鉢	□				黄灰	灰褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英	良	波状口縁
23	P－039		攪乱一括	浅鉢	□			2.4	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	波状口縁
23	P－040	SI－05	95	浅鉢	□			2.5	黒褐	にぶい橙	はけ目	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	波状口縁
23	P－041	B－1	84	浅鉢	胴			3.7	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	角閃石、石英、砂粒	良	
23	P－042		攪乱一括	深鉢	胴			3.5	にぶい黄橙	灰黄褐	ナデ	－	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
23	P－043	SI－5	103	深鉢	胴			3.1	にぶい橙	にぶい赤褐	ナデ	－	角閃石、長石、砂粒	良	
23	P－044		攪乱一括	深鉢	胴			3.2	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	－	角閃石、長石、石英、砂粒	良	
23	P－045	SI－21	一層一括	深鉢	胴				淡黄褐	淡黄褐	ナデ	－	角閃石、石英	良	
23	P－046		3層上面一括	深鉢	胴			4.5	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	－	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
23	P－047		攪乱一括	深鉢	胴			4	灰黄褐	黒褐	ナデ	－	角閃石、石英、長石	良	
23	P－048	B－1	一括	深鉢	胴				褐	黒褐	ミガキ	－	角閃石、石英	良	
23	P－049	Z－6.7	3A層一括	深鉢	胴			3.7	黒褐	黒褐	－	－	角閃石、石英、長石	良	
23	P－050		攪乱一括	深鉢	胴				褐	暗褐	ナデ	－	角閃石、石英	良	
23	P－051	C－1	一括	深鉢	胴			5.7	にぶい黄褐	褐灰	ナデ	－	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
23	P－052		3層上面一括	深鉢	胴				浅黄褐	橙褐	ナデ	ミガキ	角閃石、石英	良	
23	P－053		3A層一括	深鉢	胴			2.8	にぶい黄橙	灰黄褐		－	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
23	P－054	C－2	一括	深鉢	胴			2.1	にぶい褐	にぶい橙	ナデ	－	角閃石、長石、砂粒	良	
23	P－055		攪乱一括	浅鉢	□			1.5	灰黄褐	褐灰	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	波状口縁

図番号	遺物番号	遺構・グリッド	取上番号	器種	部位	口径	底径	高さ(残存)	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	胎土	焼成	備考
23	P－056	B－2	75	深鉢	胴			8.6	にぶい黄褐	黒褐	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石	良	
23	P－057	B－2	73・74・攪乱一括	深鉢	胴				灰褐	暗褐	ナデ	ナデ	角閃石、石英、砂粒	良	
24	P－058	SI－14	1102・1181	深鉢	□	21.2			橙暗褐	橙褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、砂粒	良	
24	P－059	SI－29	2491	深鉢	□	23.4			淡褐	褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、長石	良	
24	P－060	SK－32	3319	深鉢	□			5.1	灰黄褐	灰黄褐	－	－	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
24	P－061	SI－16	3356・3357	深鉢	□	27.2		6.6	褐灰	褐灰	ナデ	ミガキ	角閃石、長石、砂粒	良	
24	P－062	SI－21	1468・2392・2141	深鉢	□	26.4		6.6	褐灰	褐灰	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	煤付着
24	P－063	SI－14	937・938・1078	深鉢	□	35.8		17.6	灰褐	橙褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	煤付着
25	P－064	B－6	2B層一括	深鉢	□			4.4	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
25	P－065	B－2	2969	深鉢	□				灰褐	灰褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英	良	カーボン付着
25	P－066	C－6	4352	深鉢	□	48.1		4.1	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ミガキ	角閃石、長石、砂粒	良	
25	P－067	A－7	2B層一括	深鉢	□				灰褐	灰褐	ミガキ、ナデ	ミガキ	角柱石、石英	良	波状口縁
25	P－068	D－5	1935	鉢	□			6.9	にぶい黄褐	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
25	P－069	B－5	3A層一括	深鉢	□			6.3	黒	暗灰黄	ナデ	ミガキ	石英、長石、砂粒	良	
25	P－070	A－6	1264	深鉢	□	22.5			暗灰褐	灰褐	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、砂粒	良	
25	P－071	B－2	38・44	深鉢	□	30.5			灰褐	橙褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、小石	良	
25	P－072		3層上面一括	深鉢	□	30.4			黄褐	褐	ナデ	ナデ	角閃石、石英、赤褐色粒、砂粒	良	
26	P－073	SI－13	一層一括	深鉢	□			3.7	黒褐	灰黄褐	ナデ	ミガキ	長石、赤色粒子	良	波状口縁
26	P－074	SK－45	4225	深鉢	□				灰褐	褐	ミガキ	－	角閃石、石英、小石	良	波状口縁
26	P－075	SK－38	3812	深鉢	□			7.6	黄褐	にぶい黄褐	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
26	P－076	SK－37	4556	深鉢	□			3.8	灰黄	黒褐	ナデ	ミガキ	角閃石、長石、砂粒	良	
26	P－077	SI－08	一括	深鉢	□			3.5	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ミガキ	角閃石、長石、砂粒	良	
26	P－078	SK－45	4533	深鉢	□			3.7	黒	黒褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、長石、砂粒	良	
26	P－079	SK－30	2535	深鉢	□			6.7	にぶい黄橙	灰黄褐	ナデ	ミガキ	角閃石、長石、砂粒	良	
26	P－080	SI－21	1439	深鉢	□			4	にぶい褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	
26	P－081	SI－11	1922	深鉢	□			3.6	黒褐	黒褐	ナデ	ミガキ	角閃石、長石、砂粒	良	
26	P－082	SI－11	一括	深鉢	□			4.2	橙	橙	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石	良	
26	P－083	SK－32	3308	深鉢	□			7.9	灰黄褐	灰黄褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、長石、砂粒	良	
26	P－084	SI－07	200	深鉢	□			5.5	橙	橙	ミガキ	ミガキ	角閃石、長石、砂粒	良	
26	P－085	SI－14	978	深鉢	□			5.4	橙	橙	ナデ	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	
26	P－086	SI－16	1961	深鉢	□			4.6	にぶい橙	にぶい橙	剥離	－	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
26	P－087	SI－21	一層一括	深鉢	□			6.6	灰黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
26	P－088	SI－10	256・257	深鉢	□			5	黒褐	黄褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、長石、砂粒	良	
26	P－089	SI－29	PIT2	深鉢	□				浅灰褐	浅灰褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、砂粒	良	
26	P－090	SI－13	一層一括	深鉢	□			4.7	黒褐	黒	ナデ	ミガキ	長石、赤色粒子	良	
26	P－091	SI－13床	577	深鉢	□			4.3	橙	にぶい橙	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
26	P－092	SI－13床		深鉢	□			6.1	灰褐	黒褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
26	P－093	SI－21	1405	深鉢	□			10.2	にぶい黄橙	灰黄褐	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
26	P－094	SI－06	116	深鉢	□			5.9	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、砂粒	良	
26	P－095	SI－26	1574	深鉢	□			7	灰黄	黄灰	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
26	P－096	SK－35	2886	深鉢	□			7.2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
26	P－097	SI－13	一層一括	深鉢	□			6.3	灰黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	
26	P－098	SI－19	一括	深鉢	□			4.5	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
26	P－099	SI－21床	2044	深鉢	□			5.3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
26	P－100	D－6	3層上面一括	深鉢	□			2.9	褐灰	褐灰	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
27	P－101	SX－01	北一括	深鉢	□・胴	15		17.8	にぶい橙	黒褐	ナデ	ミガキ	角閃石、長石、砂粒	良	
27	P－102	SI－13	"719一括"	深鉢	□	22.4		4.6	黒褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
27	P－103	SI－21	2392・2083	深鉢	□			7.9	灰褐	黒褐	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
27	P－104	SK－45	4343	深鉢	□			8.1	灰黄褐	灰黄褐	ミガキ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
27	P－105	SI－29	2903	深鉢	□			14.9	にぶい橙	橙	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
27	P－106	SI－14	899	深鉢	□			5	橙	橙	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
27	P－107	SI－27	1642	深鉢	□			4.6	にぶい黄橙	褐灰	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
27	P－108	SI－40	一括	深鉢	□			4.3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	角閃石、石英、砂粒	良	
27	P－109	SI－40	3624	深鉢	□			5.8	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、砂粒	良	
27	P－110	SI－29	2903	深鉢	□				浅黄褐	褐	ナデ、ミガキ	削り後ミガキ	角閃石、石英、小石	良	
27	P－111	SI－14・B－7	3層3238・3A層一括	深鉢	□	19.2		7.2	黒褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	
27	P－112	SI－13	735	深鉢	□	29.6		15.9	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	

図番号	遺物番号	遺構・グリッド	取上番号	器種	部位	口径	底径	高さ(残存)	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	胎土	焼成	備考
27	P－113	SI－21	2390・2391	深鉢	□			21	浅黄	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
28	P－114	SI－29	2182	鉢	□	39.6			黄褐	浅橙褐	ナデ	ナデ	角閃石、長石、石英、砂粒	良	
28	P－115	SI－29	一括	深鉢	胴			(22.4)	黒褐	灰黄褐	ナデ	ミガキ	角閃石、長石、石英、砂粒	良	
28	P－116	SI－26	2033	深鉢	胴	44.8		25	にぶい黄橙	灰黄褐	ナデ	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	
29	P－117	B－2	3038・343	深鉢	□	28		10.2	にぶい黄褐	にぶい褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
29	P－118	B－3	攪乱一括	深鉢	□				灰褐	灰褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、砂粒	良	
29	P－119	B－2	382	深鉢	□	22.8	12		褐灰	黒	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
29	P－120	C－2	攪乱一括	深鉢	□			4.2	灰黄褐	褐灰	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
29	P－121		攪乱一括	深鉢	□			2.7	暗褐	黒褐	ナデ	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	
29	P－122	SI－16	1966	深鉢	胴			4.8	灰黄褐	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
29	P－123	SI－26	一括	深鉢	□			4.7	灰黄褐	黒褐	剥離	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
29	P－124	C－6	1774	深鉢	□			4.7	黒	黒褐	ナデ	ミガキ	長石、赤褐粒子、砂粒	良	
29	P－125	B－6	2B層一括	深鉢	□			8.8	灰黄褐	褐灰	ミガキ	ミガキ	角閃石、長石、砂粒	良	
29	P－126	SI－31	3328	深鉢	□			4.5	にぶい黄橙	浅黄	ナデ	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	
29	P－127	SK－32	一括	深鉢	□			4.9	灰黄褐	灰黄褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
29	P－128	SK－30	2549	深鉢	□			6.7	にぶい黄橙	橙	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
29	P－129	SI－07	206	深鉢	□			5.8	にぶい黄褐	黒褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
29	P－130	SI－13	一括	深鉢	□			3.8	黄灰	黒褐	ナデ	ナデ	長石、赤色砂粒	良	
29	P－131	SK－33	3665	深鉢	胴			6.2	黄灰	黄灰	ー	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
29	P－132	SI－29	2490	深鉢	胴				浅灰褐	黄灰	ミガキ	ミガキ	角閃石、砂粒	良	
29	P－133	SI－16	一括	深鉢	胴				明灰褐	褐	ミガキ、剥離	ミガキ	角閃石、石英、黒曜石	良	
29	P－134	SK－47	4257	深鉢	胴			7.7	にぶい黄橙	灰黄褐	剥離	ナデ	角閃石、石英、長石	良	
29	P－135	SI－13	一層一括	深鉢	胴			6	にぶい黄橙	にぶい褐	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
29	P－136	SI－14	837	深鉢	胴				明褐	明黄褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、赤褐粒子	良	
29	P－137	SI－13	一層一括	深鉢	胴				黄橙	浅黄褐	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、砂粒	良	
29	P－138	SX－25	一括	深鉢	胴・底		7	14	褐灰	にぶい赤褐	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
29	P－139	SX－25	一括	深鉢	胴・底		7.2	17.5	褐灰	にぶい黄橙	ナデ	ミガキ	角閃石、長石、砂粒	良	
30	P－140	SK－38	3541	深鉢	□	34		7.9	にぶい黄橙	明黄褐	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
30	P－141	SI－14	993・948・1120	深鉢	□	25.4		10.6	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	煤付着
30	P－142	SI－39	焼土坑内	深鉢	□・胴	29.2		17.7	黄橙	橙	ナデ	ナデ	角閃石、石英、砂粒	良	煤付着
30	P－143	SI－14	1201・3260・ベルト2層一括	深鉢	□・胴	31.8		17	明褐	にぶい黄橙	ミガキ	丹念なミガキ	石英、長石、砂粒	良	
31	P－144	SI－14	2560	深鉢	□	41		9.8	にぶい黄橙	明黄褐	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、雲母、砂粒	良	
31	P－145	SI－14	931	深鉢	□	34.4		8	にぶい赤褐	黒褐	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
31	P－146	SI－14	1133	深鉢	□	28.8		4.5	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	
31	P－147	SI－39	4686・4664	深鉢	□			13.3	褐灰	褐灰	ナデ	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	
31	P－148	SI－07	158	深鉢	□			6.2	灰黄褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	
31	P－149	SI－13	595	深鉢	□			6.5	にぶい黄橙	灰黄褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
31	P－150	SI－10	3513・3515・3517	深鉢	□			5.8	黒褐	暗赤褐	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、砂粒	良	
31	P－151	SI－10	282・380・B層一括	深鉢	□			7	黒褐	にぶい黄橙	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
31	P－152	SI－14	1232	深鉢	□			6.9	灰黄	黒褐	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
31	P－153	SK－32	一括	深鉢	□			9.3	灰褐	灰褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
31	P－154	SI－39	3751	深鉢	□				明黄褐	明黄褐	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
31	P－155	SK－28	一括	深鉢	□			2.2	にぶい黄橙	褐灰	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
31	P－156	SI－13	732・736	深鉢	□			4.9	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、長石	良	
31	P－157	SI－21	1471	深鉢	□			6.1	褐灰	にぶい黄褐	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
31	P－158	SI－14	1117	深鉢	□			7.2	明黄	灰黄	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石	良	
31	P－159	SI－14	1071	深鉢	□			7.5	にぶい褐	にぶい褐	ハケ	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	
31	P－160	SI－13	630	深鉢	□				褐	濃褐	ー	ケズリ後ミガキ	角閃石、石英	良	
31	P－161	SI－41	4042	深鉢	□			3	褐灰	褐灰	ナデ	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	
31	P－162	SK－45	4609	深鉢	□			3.7	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
31	P－163	SI－21	一層一括	深鉢	□			6.3	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ミガキ	角閃石、長石、砂粒	良	
31	P－164	SI－07	165・207	深鉢	□			6.8	褐灰	にぶい黄橙	ナデ、剥離	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	
31	P－165	SI－29	2495	深鉢	□				浅橙褐	橙褐	ミガキ、ナデ	ナデ、ミガキ	角閃石、石英	良	
31	P－166	SI－27	1634	深鉢	□			6	黄灰	灰黄褐	ナデ	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	
31	P－167	SI－17	2695	深鉢	□			6.5	黒褐	にぶい黄	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、長石、赤色粒、砂粒	良	
31	P－168	SI－13	床	深鉢	□			5.7	褐灰	黒褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、長石、砂粒	良	
31	P－169	SI－11	1900	深鉢	□			6.4	灰黄	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	煤付着

図番号	遺物番号	遺構・グリッド	取上番号	器種	部位	口径	底径	高さ(残存)	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	胎土	焼成	備考
31	P－170	SI－39	焼土坑内	深鉢	□			13.3	黄橙	黄橙	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
31	P－171	SI－21・D－5	1層一括・3a層一括	深鉢	□			11.8	灰黄	にぶい黄褐	剥離	ミガキ	角閃石、長石、赤色粒、砂粒	良	
32	P－172	SI－39	4671・3686・一括	深鉢	底		6.2		灰褐	白黄褐	ナデ	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	
32	P－173	SI－14	3194	深鉢	底		6.9	6.5	にぶい黄橙	橙	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、雲母、砂粒	良	
32	P－174	SI－21	2399・2400	深鉢	底		7.8	18.7	黒褐	明赤褐	ナデ、剥離	ミガキ	長石、砂粒、黒雲母	良	
32	P－175	SI－13	590・一層一括	深鉢	底		6.2		褐	橙	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、赤褐色粒	良	
32	P－176	SI－14	1073	深鉢	底		6.7		灰褐	白橙	ナデ	ナデ	角閃石、赤褐色粒	良	
32	P－177	SI－14	2600	深鉢	底				灰褐	灰橙	ミガキ	ミガキ	砂粒	良	
32	P－178	SK－32	3320	深鉢	底		9	6.2	灰黄褐	にぶい黄橙	－	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	煤付着
32	P－179	*SI－27SI－35	1639・2908・2905・一括	深鉢	底		6.5		黒褐	橙褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、長石	良	
32	P－180	SI－29	2184	深鉢	底		8		灰褐	浅橙褐	ミガキ	ナデ	角閃石、石英、砂粒	良	
32	P－181	SI－13	710	深鉢	底		8	3.4	にぶい黄橙	明黄褐	－	－	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
32	P－182	SI－29	2232	深鉢	底		6.5		褐	浅橙褐	ナデ	ナデ	角閃石、砂粒	やや良	
32	P－183	SI－13	631・一括	深鉢	底		8	4	灰黄褐	橙	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
32	P－184	SI－14	3249	深鉢	底		5.9	7.3	明黄褐	明黄褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
32	P－185	SI－13・B－6	932・1332	深鉢	底		8	6.2	にぶい褐	にぶい褐	－	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
33	P－186	C－1	3145・3146	浅鉢	底		7.6	5.8	にぶい黄橙	橙	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
33	P－187		攪乱一括	浅鉢	底		7.2	6.3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒、黒曜石	良	
33	P－188	B－8	4640	浅鉢	底		7.4		橙褐	橙褐	ナデ	ナデ	角閃石、石英、小石	良	
33	P－189		3A層一括	浅鉢	底			3.2	黒褐	にぶい赤褐	ナデ	剥離	角閃石、長石、石英	良	
33	P－190	B－6	1311	浅鉢	底		6	2.2	灰黄褐	黄橙	－	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
33	P－191	B－2	42	浅鉢	底		6.6	6	褐灰	にぶい黄橙	－	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	
33	P－192		3層上面一括	浅鉢	底		6		浅灰褐	浅橙褐	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
33	P－193	B－1	一括	浅鉢	底		6.7		浅黄	黄灰	ナデ	ナデ	角閃石、石英、小石	良	
33	P－194	B－2	358	浅鉢	底		7.2		灰褐	橙褐	ナデ	ミガキ	角閃石、石英	良	
33	P－195	D－5	3470	浅鉢	底		7.6	4.7	灰黄褐	にぶい黄褐	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
33	P－196	C－3	3A層・71	浅鉢	底			4.1	灰黄褐	鈍い黄橙	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
33	P－197	C－6	1861	浅鉢	底			2.3	にぶい黄橙	にぶい橙	なで	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
33	P－198	C－5	3465	浅鉢	底				黄褐	橙褐	ミガキ、摩耗	ミガキ、摩耗	角閃石	良	
33	P－199	B－2	3055	浅鉢	底		5.4		橙	黄褐	ナデ	ナデ	角閃石、石英、赤褐粒砂粒	良	
33	P－200	B－6	2B層一括	浅鉢	底		7		にぶい黄橙	浅黄	－	－	角閃石、長石、砂粒	良	
33	P－201	C－5	2B層一括	浅鉢	底		6.2	2.4	褐灰	にぶい橙	－	－	角閃石、長石、砂粒	良	
33	P－202	B－6	4133	浅鉢	底		4.7		灰黄	明黄褐	ナデ	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	
33	P－203	B－3	攪乱一括	浅鉢	底			2.4	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－	－	角閃石、長石	良	
33	P－204	SI－07	1517・一括	浅鉢	底		6.8		黄褐	白橙	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
34	P－205	SI－21	1392	浅鉢	□			4	灰黄褐	黄灰	ナデ	－	*角閃石、石英、長石、砂粒*	良	波状口縁
34	P－206	SI－19	一層一括	浅鉢	□			3.6	灰黄褐	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	角閃石、長石、砂粒	良	波状口縁
34	P－207	SK－32	一括	浅鉢	□			3.8	褐灰	褐灰	ナデ	ナデ	角閃石、長石, 砂粒	良	波状口縁
34	P－208	SK－18	2742	浅鉢	□			4	にぶい褐	にぶい黄橙		ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	波状口縁
34	P－209	SI－11	一括	浅鉢	□			4.8	黒褐	灰褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	波状口縁
34	P－210	SI－14	1228	浅鉢	□			3.6	灰黄褐	黒褐		ミガキ	長石、砂粒	良	
34	P－211	C－5	4592	浅鉢	□				暗灰褐	暗灰褐	ミガキ	ミガキ	角閃石	良	波状口縁
34	P－212	SI－21		浅鉢	□				茶褐	茶褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、赤色粒、砂粒	良	
34	P－213	SI－21	一括	浅鉢	□			2.8	黒褐	褐灰	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
34	P－214	SK－18	一括	浅鉢	□			2.8	灰褐	にぶい橙	ミガキ	ミガキ	長石、石英、砂粒	良	
34	P－215	SI－12	1891	浅鉢	□			2.8	褐灰	にぶい黄褐	ミガキ	ミガキ	石英、長石、砂粒	良	
34	P－216	SI－21	一括	浅鉢	□			3.3	灰黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
34	P－217	B－6	1372	浅鉢	□			3	黒褐	黄灰	ナデ	ミガキ	角閃石、長石、砂粒	良	
34	P－218	SI－39	一括	浅鉢	□			3.4	茶褐	灰褐	ナデ	ナデ	長石、砂粒	良	
34	P－219	SI－13	543・545	浅鉢	□			3.7	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	
34	P－220	SI－14	901	浅鉢	□				白橙	灰褐	ミガキ	ミガキ	角閃石	良	
34	P－221	SI－26	26	浅鉢	□			3.5	灰黄褐	灰黄褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
34	P－222	SI－27	一括	浅鉢	□			2.2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	角閃石、石英、砂粒	良	
34	P－223	SI－13	705・3層一括	浅鉢	□			4.2	灰褐	黒褐	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
34	P－224	SK－17	2681	浅鉢	□			2.1	浅黄	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
34	P－225	SI－21	1412・1494・一層一括	浅鉢	□			4.9	暗褐	灰褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
34	P－226	B－5	3A層一括	浅鉢	□			5.1	黄灰	灰黄	ナデ	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	

図番号	遺物番号	P－遺構・グリッ	取上番号	器種	部位	口径	底径	高さ(残存)	色調（内）	色調（外）	調整（内）	調整（外）	胎土	焼成	備考
34	P－227	SI－19	一括	浅鉢	□			1.9	にぶい黄橙	灰黄褐	ミガキ	ミガキ	長石、砂粒	良	
34	P－228	SI－39	3792・3885	浅鉢	□	34.8			灰褐	褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、赤色粒、雲母	良	
34	P－229	SI－39	3689	浅鉢	□			2.9	褐灰	褐灰	ナデ	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	
34	P－230	SI－14	2588・1221	浅鉢	胴・底		6.2	10.8	浅黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
34	P－231	SK－36	3368	浅鉢	□			2.6	にぶい黄橙	明赤褐	ナデ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
34	P－232	SI－07	509	浅鉢	□			3.1	褐灰	黒褐	ナデ	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	
35	P－233	SI－14	2614	浅鉢	□	19.6		4.8	灰褐	灰褐	ナデ	ナデ	長石、砂粒	良	
35	P－234	SK－18	一括	浅鉢	□	20.2		3.5	にぶい黄橙	灰黄褐	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
35	P－235	SK－03	2918	浅鉢	□	25.2		5.2	黒褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	
35	P－236	SI－14	1057	浅鉢	□	30		4	黒褐	黒褐	ナデ	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	
35	P－237	SI－29	2190	浅鉢	□	36.4		6	褐灰	明黄褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
35	P－238	SI－14	912	浅鉢	□			4.3	灰黄褐	黒褐	ナデ	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	
35	P－239	SK－45	4329	浅鉢	□			4.8	灰褐	橙褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、砂粒	良	
35	P－240	SK－30	2550	浅鉢	□			6.2	灰黄	明黄褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
35	P－241	SK－33	3664	浅鉢	□			3.7	暗褐	にぶい橙	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
35	P－242	SI－14	一層一括	浅鉢	□			3.9	暗褐	暗褐	ナデ	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	
35	P－243	SI－14	2590・3276・3925	浅鉢	□			2.5	にぶい赤褐	暗赤褐	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
35	P－244	SI－14	861	浅鉢	□			4.1	灰黄	にぶい橙	ナデ	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	
35	P－245	SI－14	2597	浅鉢	□				淡灰褐	暗褐	ミガキ	ミガキ	角閃石	良	
35	P－246	SI－14	1192	浅鉢	□			4.2	黒褐	黒褐	ナデ	ナデ	長石、砂粒	良	
35	P－247	B－5	3層上面一括	浅鉢	□				浅橙褐	暗褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英	良	
35	P－248	SI－39	4544	浅鉢	□			2.4	褐灰	にぶい黄褐	ナデ	ミガキ	角閃石、長石、砂粒	良	
35	P－249	SI－14	3103	浅鉢	□				褐	灰黄	ミガキ	ナデ	角閃石、石英、雲母	良	
36	P－250	SI－07	401・403・1518	浅鉢	□			6.5	灰黄	橙褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、砂粒	良	
36	P－251	C－6	1723	浅鉢	□			2.9	オリーブ黒	黄灰	ミガキ	ミガキ	角閃石、長石、砂粒	良	
36	P－252	SI－27	1632	浅鉢	□			2.5	黄灰	黒褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、長石、砂粒	良	
36	P－253	SK－25	一括	浅鉢	□			2.8	褐灰	にぶい黄橙	ナデ	ミガキ	角閃石、長石、砂粒	良	
36	P－254	SK－37	3672	浅鉢	□			2.4	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ミガキ	角閃石、長石、砂粒	良	
36	P－255	SK－32	一括	浅鉢	□			2.7	褐灰	灰黄褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、長石、砂粒	良	
36	P－256		3層上面一括	鉢	□				黄灰	灰褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英	良	
36	P－257	SI－41	3649	浅鉢	□			7.1	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ミガキ	沈線、ミガキ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
36	P－258	SI－10	3500・一括	浅鉢	□			5.6	暗灰黄	黄灰	ミガキ	沈線、ミガキ	角閃石、長石、砂粒	良	
36	P－259	SX－47	4264	鉢	□			6.1	灰黄褐	にぶい黄橙	ナデ	剥離	角閃石、長石、砂粒	良	
36	P－260	SI－16	1178	椀	□			6.3	灰黄褐	にぶい黄橙	剥離	ナデ	角閃石、砂粒	良	
36	P－261	D－2	撹乱一括	－	□			2.6	褐灰	褐灰	－	沈線、ミガキ	角閃石、長石、砂粒	良	
36	P－262	SI－14	1091	浅鉢	□			3.8	灰黄	灰黄	ナデ	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	
36	P－263	C－4	4571	浅鉢	□			3.5	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	－	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
36	P－264		撹乱一括	浅鉢	□			2.3	にぶい黄橙	暗灰黄	ナデ	ナデ	角閃石、石英、砂粒	良	
36	P－265		撹乱一括	浅鉢	胴			4.8	にぶい黄橙	褐灰	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
36	P－266	SI－14	1159・1095	浅鉢	□・胴	18		8	黒褐	褐灰	ナデ	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	
36	P－267	SI－21	一括	深鉢	□			6.9	褐灰	黒褐	ミガキ	－	角閃石、長石、雲母	良	
37	P－268	SI－39	4645・4653	深鉢	底		7	2.3	黒褐	にぶい橙	－	ミガキ	角閃石、長石、砂粒	良	
37	P－269	SI－13	773	深鉢	底		5.4	2.1	にぶい黄橙	にぶい橙	－	－	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
37	P－270	SI－27	2011	深鉢	底			2.3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	－	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
37	P－271	SI－11	1915	深鉢	底		6		にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
37	P－272	SI－14	2576	深鉢	底		5.8	2.7	浅黄橙	にぶい黄橙	－	－	角閃石、長石、砂粒	良	
37	P－273	SK－18	一括	深鉢	底		6.2	2.5	灰黄	橙褐	－	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
37	P－274	SI－39	3690	深鉢	底		7	2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－	－	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
37	P－275	SI－07	408・419	深鉢	底		5.1		褐	灰褐	ナデ	ナデ	角閃石	良	
37	P－276	SI－31	2799・2800	深鉢	底		6.3	2.7	灰黄褐	灰黄褐	－	－	角閃石、長石、砂粒	良	煤付着
37	P－277	SI－14	1176・237	深鉢	底		4.8		茶褐	橙褐	ナデ	ナデ	角閃石、石英	良	
37	P－278	SI－14	2621	深鉢	底		6.3		黒褐	浅橙褐	ナデ	ナデ	赤色粒子、雲母	良	
37	P－279	SI－14	877・881	深鉢	底		6		灰褐	橙褐	ミガキ	ミガキ	角閃石、石英、砂粒	良	
37	P－280	SI－21	3AB一括	鉢	底		5.2	2.1	にぶい橙	にぶい赤褐	ナデ	ケズリ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
37	P－281	SI－29	2903	鉢	底		4.5		暗褐	橙褐	ナデ	ミガキ	角閃石、石英	良	
37	P－282	SK－30	2548	深鉢	底		4.3	2.8	にぶい黄褐	灰黄褐	－	－	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
37	P－283	SI－14	1124	深鉢	底		7.5		灰褐	灰橙	ナデ	ミガキ	角閃石、赤色粒子、砂粒	良	

図番号	遺物番号	遺構・グリッド	取上番号	器種	部位	口径	底径	高さ(残存)	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	胎土	焼成	備考
37	P−284	SK−38	3553	深鉢	底		5.4	1.7	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
37	P−285	SI−29	4685	深鉢	底		4.2	1.5	にぶい橙	にぶい橙	−	−	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
37	P−286	SI−40	一括	深鉢	底		13.5		黄灰	にぶい橙	ナデ	−	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
37	P−287	SI−31	2788・一括	深鉢	底		6.5	1.4	灰黄	にぶい橙	−	−	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
37	P−288	SI−13	1層一括	深鉢	底		5.4	2.1	灰黄褐	にぶい黄橙	ミガキ	ハケ	長石、砂粒	良	
37	P−289	SI−13	1層一括	深鉢	底		7	3.3	灰黄褐	にぶい黄橙	−	ハケ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
37	P−290	SI−13		深鉢	底		5.9		濃褐	橙褐	ナデ	ナデ	角閃石、石英	やや良	
37	P−291	SK−35	一括	深鉢	底		3.9	1.5	にぶい黄	橙褐	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
37	P−292	SI−19	251・一括	深鉢	底			2.4	灰黄	にぶい橙	−	−	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
37	P−293	SI−21	1478	浅鉢	底		4.8	1.7	にぶい黄橙	橙褐	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
37	P−294	SI−13	781	椀	底		10	1.9	灰黄褐	橙褐	−	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
37	P−295	SI−26	2444	浅鉢	底			1.5	褐灰	暗灰黄	ナデ	ミガキ	長石、砂粒	良	
37	P−296	SI−40	3607	浅鉢	底			1.6	灰黄褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、雲母	良	
37	P−297	SI−10	3492	−	底			2.6	灰黄褐	にぶい黄橙	ナデ	−	石英、長石、砂粒	良	
37	P−298	SI−08	2930	−	底				黒褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	角閃石、石英、砂粒	良	
37	P−299	SK−32	2819	−	底			2.8	灰黄	にぶい黄橙	−	−	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
37	P−300	SI−30	2802・一括	−	底			3	黄灰	灰褐	−	−	角閃石、石英、長石、砂粒	良	
37	P−301	SI−41	一括	−	底			3.2	灰黄褐	にぶい橙	−	−	角閃石、砂粒	良	
37	P−302	SI−07	199	−	底			2.7	黄灰	にぶい橙	ナデ	ナデ	角閃石、長石、砂粒	良	
37	P−303	SI−19	一括	−	底			3.8	褐灰	にぶい褐	−	−	角閃石、石英、長石、砂粒、雲母	良	
37	P−304	SI−26	1577	浅鉢	底			4.6	褐灰	にぶい褐	ナデ	ナデ	角閃石、石英、長石、砂粒、雲母	良	
38	P−305	SK−09		注口	完形	8.8	胴：12.0	9.45	黒褐色	黒褐色	ミガキ	ミガキ	角閃石、長石、細砂粒	良	
38	P−306	SI−39		深鉢	完形	11.3	2.5	10.05	浅黄橙	黒褐色	ミガキ	ナデ	雲母、砂粒	良	
38	P−307	SI−14	3240	椀	口・胴	7.6		(4.1)	褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ	角閃石、雲母	良	

図番号	遺物番号	遺構・グリッド	取上番号	時代	器種	部位	口径	底径	高さ(残存)	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	胎土	焼成	備考
64	P−308	撹乱一括		弥生	高坏	口縁	−	−	−	橙褐	橙褐	ナデ	ナデ	雲母、砂粒	良	
64	P−309	3層上面一括		古墳	甕	口縁	−	−	−	褐	黒褐	ナデ	ナデ	長石、砂粒	良	スス付着
64	P−310	1区排土中		古墳	須恵器	蓋	−	−	−	灰	灰	ミガキ	ミガキ	良好	良	

表4　石器観察表

図番号	遺物番号	器種	遺構	No	グリッド	一括	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚み（cm）	重量（g）	備考
5	S－001	ナイフ型石器		4073	C－2		流紋岩質安山岩	4.6	1.7	1.1	6.2	
5	S－002	石刃			B－2		黒曜石	2.05	1.25	0.4	1	
39	S－003	石鏃		3215	B－3		黒曜石	1.3	1.45	0.35	0.4	
39	S－004	石鏃		4401	B－1		安山岩	(1.55)	1.4	0.4	0.5	
39	S－005	石鏃	SI－39	4683			黒曜石	1.95	(1.1)	0.3	0.3	
39	S－006	石鏃		3214	B－6		黒曜石	1.95	(1.35)	0.4	0.8	
39	S－007	石鏃	SI－10	4097			安山岩	2	1.25	0.35	0.6	
39	S－008	石鏃	SK－37			○	黒曜石	2.5	1.65	0.3	0.8	
39	S－009	石鏃	SI－08	2946			安山岩（サヌカイト）	(2.75)	1.45	0.35	1	
39	S－010	石鏃		4408	B－1		黒曜石	2.05	1.8	0.5	1.2	
39	S－011	石鏃	SI－18			○	黒曜石	1.85	1.35	0.4	0.5	
39	S－012	石鏃	SI－06			○	安山岩	2.4	1.4	0.5	0.9	
39	S－013	石鏃	SI－29	1710			チャート	2.35	1.55	0.4	0.9	
39	S－014	石鏃	SK－40	3745			チャート	2.95	(1.75)	0.45	1.5	
39	S－015	石鏃	SI－13	2314	B－6		安山岩	2	1.75	0.45	1	
39	S－016	石鏃	SX－43			○	黒曜石	3	1.95	0.5	2.1	
40	S－017	石匙			B－4		安山岩（サヌカイト）	7.35	3.3	1.45	30	
40	S－018	石匙				○	安山岩（サヌカイト）	6.5	3.25	1	15	
40	S－019	石匙				○	頁岩	4.8	5.7	0.85	16	
41	S－020	調整痕石器	SK－46	4287			頁岩	3.6	6.5	0.9	20.7	
41	S－021	調整痕石器		3928	B－4		安山岩（サヌカイト）	6.8	8.15	1.4	60	
41	S－022	調整痕石器	SI－14	1191			安山岩（サヌカイト）	8.9	6.15	1.4	70	
42	S－023	削器		1693	C－6		安山岩（サヌカイト）	5.2	7.45	2.2	100	
42	S－024	削器			B－2		安山岩（サヌカイト）	3.15	5.25	1.4	20	
42	S－025	石核	SI－13	1655	B－6		黒曜石	5	5.25	2.9	50	
43	S－026	十字形石器	SI－41	4049			玄武岩質安山岩	5.4	4.6	1.0	13.5	
43	S－027	十字形石器				○	緑色片岩	6.4	8.6	1.1	43.3	
43	S－028	十字形石器				○	緑色片岩	8.45	10.2	1.0	101.2	
44	S－029	磨製石斧		8	B－3		蛇紋岩	10.4	4	1.4	70	
44	S－030	磨製石斧	SI－10	3529			緑泥片岩	8.0	4.65	1.5	74.7	
44	S－031	磨製石斧		3016	B－2		粘板岩?	9	4.1	1.45	77	
44	S－032	磨製石斧	SI－10	3530			蛇紋岩	10.8	3.3	1.6	91.1	
44	S－033	磨製石斧	SI－26				緑色片岩	12.0	14.1	1.0	82.9	
44	S－034	磨製石斧		2147			緑色片岩	15.2	5.5	2.8	411.8	
44	S－035	磨製石斧	SI－41	3637			頁岩？	17.0	5.4	4.0	520.0	
44	S－036	磨製石斧	SI－26	2019			雲母片岩？	15.1	5.65	3.3	388.1	
45	S－037	磨製石斧			D－6	○	玄武岩質安山岩	(9.4)	(5.1)	(2)	100	
45	S－038	磨製石斧	SI－14		B－7	○	玄武岩質安山岩	(9.4)	6.0	1.5	115.0	
45	S－039	磨製石斧				○	角閃石安山岩	13.8	7.8	1.8	227.7	
45	S－040	磨製石斧				○	玄武岩質安山岩	6.7	6.9	1.25	79.4	
45	S－041	磨製石斧	SI－14	827			玄武岩質安山岩	(9.6)	9.1	1.6	166.2	
45	S－042	磨製石斧				○	角閃石安山岩	18.2	7.25	1.9	265.8	
45	S－043	局部磨製石斧		4070	B－3		玄武岩質安山岩	16.8	9.15	2.8	420	
46	S－044	打製石斧				○	玄武岩質安山岩	12.1	5.45	1.4	105.4	
46	S－045	打製石斧	SI－13	594			角閃石安山岩	(12.6)	6.4	2.3	230	
46	S－046	打製石斧				○	安山岩（サヌカイト）	(10.45)	7.1	3.1	220	
46	S－047	打製石斧			C－4	○	玄武岩質安山岩	(13.9)	6.2	2.3	220	
46	S－048	打製石斧			B－3	○	玄武岩質安山岩	17.35	6.05	2.3	310	
46	S－049	打製石斧	SI－07	172			角閃石安山岩	15.3	5.9	2	230	
47	S－050	打製石斧	SI－40	3629			角閃石安山岩	(13.6)	7.4	1.85	230	
47	S－051	打製石斧	SI－08	2929			角閃石安山岩	15.6	8.2	2.1	370	
47	S－052	打製石斧	SI－07	425			角閃石安山岩	10.25	7.4	1.5	150	
47	S－053	打製石斧	SI－26	2022			角閃石安山岩	11.8	6.6	1.9	170	
47	S－054	打製石斧	SI－07	470			角閃石安山岩	18.7	8.1	2	320	
47	S－055	打製石斧	SI－06	482			安山岩（サヌカイト）	13.4	6.2	2.2	180	

図番号	遺物番号	器種	遺構	No	グリッド	一括	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚み（cm）	重量（g）	備考
48	S－056	打製石斧	SK－17	2653			玄武岩質安山岩	(11.2)	6.95	1.5	120	煤付着
48	S－057	打製石斧	SI－07	157			玄武岩質安山岩	(12.6)	6.75	1.4	160	
48	S－058	打製石斧	SI－11	2880	B－3		玄武岩質安山岩	13.7	6.6	2.1	220	
48	S－059	打製石斧	SI－11	1905			角閃石安山岩	14.1	8.15	1.9	320	
48	S－060	打製石斧				○	玄武岩質安山岩	17.3	7.7	2.45	336.0	
48	S－061	打製石斧				○	玄武岩質安山岩	14.4	7.7	1.8	207.2	
49	S－062	打製石斧	SI－16	2649			角閃石安山岩	7.6	6.3	2	130	
49	S－062	打製石斧	SI－26	1573			角閃石安山岩	13.9	6.85	2	200	
49	S－064	円盤状石器？	SI－27	1631			緑色片岩	6.8	6.15	2.0	108.8	
49	S－065	打製石斧	SI－21	1462	C・D－4・5		玄武岩質安山岩	9.5	7.75	1.8	157.0	
49	S－066	小型打製石斧	SI－18		C－6	○	角閃石安山岩	8.2	5.7	1.9	124.2	
49	S－067	円盤状石器	SI－27	1638			角閃石安山岩	9.4	8	2.4	200	
49	S－068	小型打製石斧		1279	A－6		玄武岩質安山岩	9.2	6.0	1.95	145.0	
49	S－069	打製石斧	SI－07	431			角閃石安山岩	15.3	9.9	2	390	
49	S－070	打製石斧				○	角閃石安山岩	(9.4)	6.7	2.6	179.6	
50	S－071	円盤状石器	SI－40	3632			石英雲母片岩	8.1	7.35	1.7	150	
50	S－072	円盤状石器	SI－14	2557	B－7		石英安山岩	10.6	9.5	1.9	224.9	
50	S－073	円盤状石器	SI－26	2025			角閃石安山岩	7.85	6.95	1.35	100	
50	S－074	円盤状石器					流紋岩質安山岩	10.6	9.75	2.2	368.8	
50	S－075	円盤状石器	SI－21	1480			角閃石安山岩	9.25	8.2	2.3	230	
50	S－076	円盤状石器		1951	D－5		角閃石安山岩	6.8	8.8	3.4	259.8	
50	S－077	円盤状石器	SI－07	143			玄武岩質安山岩	10.4	9.1	2.3	300	
50	S－078	円盤状石器	SI－07	146			石英安山岩	9.6	8	2.65	230	
51	S－079	円盤状石器	SI－14	2579	B－7		砂岩	7.65	7.4	2.2	135.0	
51	S－080	円盤状石器	SK－35	2896			玄武岩質安山岩	7.7	7.8	2	150	
51	S－081	円盤状石器	SK－32	2851			角閃石安山岩	7.7	7.35	1.7	130	
51	S－082	円盤状石器	SI－14	858			玄武岩質安山岩	8.85	9	1.4	130	
51	S－083	円盤状石器	SI－29	2179			緑色片岩	10	9.7	1	150	
51	S－084	円盤状石器	SI－11	1911			角閃石安山岩	8.4	8.35	1.05	100	
51	S－085	円盤状石器	SI－17	2716			安山岩？	11.5	10.7	1.1	160.5	
51	S－086	円盤状石器	SI－08	2940			砂岩	7	6.85	1.15	70	
52	S－087	敲石			C－5	○	砂岩	11.4	5.45	2.8	200	
52	S－088	敲石	SK－37	3674			緑色片岩	12.4	4.35	1.5	125.3	
52	S－089	敲石	SI－19	2110			蛇紋岩	13	4.2	2.55	210	
52	S－090	敲石	SI－13	1546			角閃石安山岩	(6.4)	(5.3)	(2.9)	120	破損後火を受ける
52	S－091	敲石		1707	C－6		砂岩	9.65	3.45	2.85	110	
52	S－092	敲石			B－7	○	輝石安山岩	(8.9)	(6)	(5.35)	350	赤色顔料付着
52	S－093	敲石	SK－40	3591			角閃石安山岩	13.2	7.1	4.6	630	
52	S－094	凹石		3452	C－5		角閃石安山岩	9.75	8	6.8	650	
52	S－095	礫器		4052	B－4		凝灰岩	11.5	13.5	3.25	630	火を受け赤変
53	S－096	敲石		3938	B－4		砂岩	8.1	5.4	3.35	210	
53	S－097	磨石	SI－26	2031			凝灰岩？	(8.3)	7.8	3.05	260	火を受け赤変
53	S－098	磨石	SK－35	2910			砂岩	6.9	6.1	1.65	110	
53	S－099	磨石	SI－26	1571			角閃石安山岩	7.5	5.45	3.55	190.3	
53	S－100	磨石	SI－27	1995			角閃石安山岩	6.75	6.6	3.35	230	
53	S－101	磨石	SI－39	3773			角閃石安山岩	11.05	5.75	2.3	220	
53	S－102	磨石	SK－35	3832			角閃石安山岩	5.5	4.6	2.95	110	黒色の付着物（煤？）
53	S－103	磨石	SI－10	3475			玄武岩質安山岩	6.45	5.3	1.7	80	
53	S－104	磨石		1952	D－5		砂岩	10.25	9.3	5.3	760	
54	S－105	磨石			C－1	○	角閃石安山岩	10.3	8.95	5	690	
54	S－106	磨石	SI－06	121	C－4		砂岩	11.7	(5.5)	6.3	470	破損後火を受ける
54	S－107	磨石			D－5	○	凝灰岩	9.85	(6.8)	6.45	530	
54	S－108	磨石	SI－39	3764			角閃石安山岩	13.5	11.1	5.05	1240	
55	S－109	磨石	SI－08	2964			角閃石安山岩	11.6	7.2	4.8	720	
55	S－110	磨石	SK－33	2631			角閃石安山岩	10.45	(6.8)	7.2	790	
55	S－111	磨石	SI－07	417			輝石安山岩	12.2	(9.7)	8	1340	破損後火を受ける
56	S－112	磨石	SD－15				輝石安山岩	10.1	7.25	6.3	770	
56	S－113	磨石	SI－07	148	C－5		角閃石安山岩	16.5	12.5	8.6	2650	

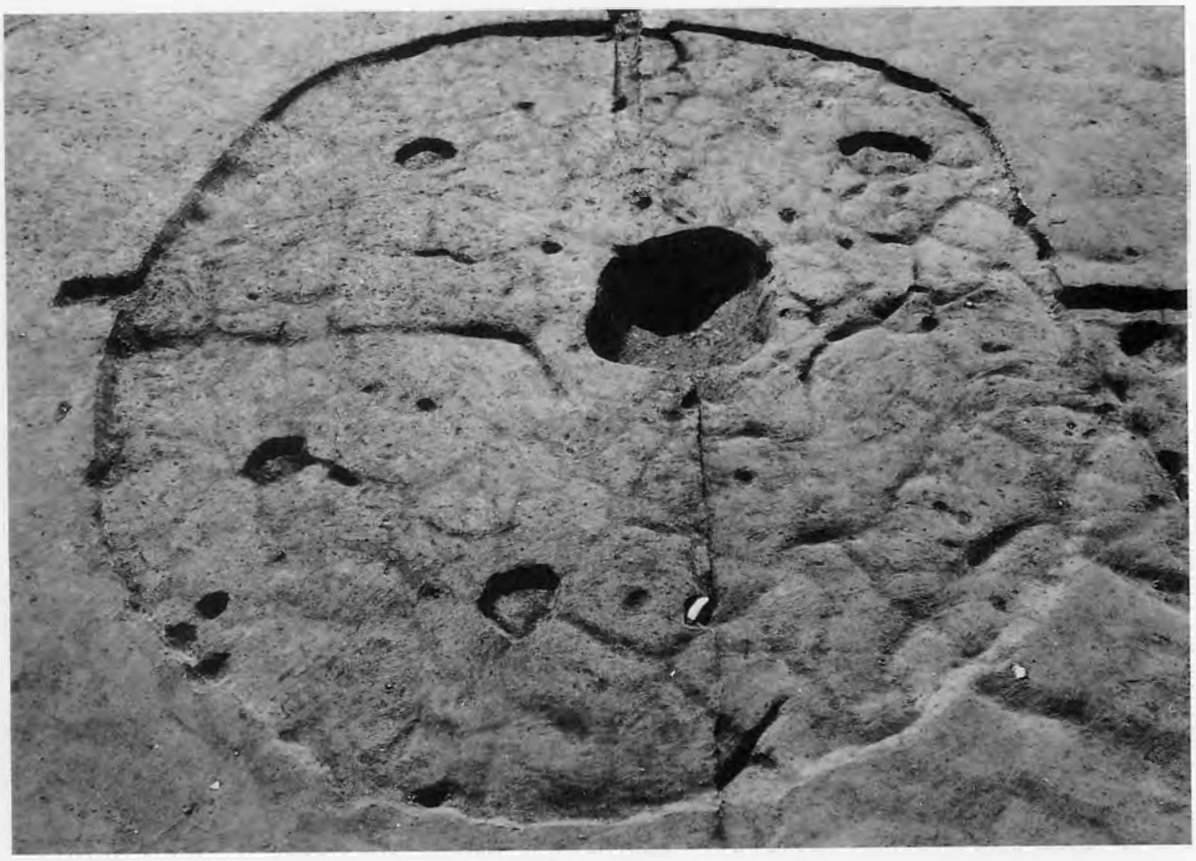
図番号	遺物番号	器種	遺構	No	グリッド	一括	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚み（cm）	重量（g）	備考
57	S－114	石皿	SK－32	3301			玄武岩質安山岩	(11.15)	(11.05)	(3.5)	790	
57	S－115	石皿		3150	G－1		凝灰岩	(16.1)	(14.9)	(3.8)	1310	
57	S－116	砥石				○	輝石安山岩	(18.4)	(7.3)	(4.5)	750	
57	S－117	石皿	SI－13	767			輝石安山岩	(21.7)	(15.5)	(3.7)	2000	
58	S－118	石皿	SI－13	1957			安山岩	31.8	24.5	14	12830	火を受けている
58	S－119	石皿	SI－26	2020			砂岩	19.55	19.2	6.35	3760	
59	S－120	双刃局部磨製石斧	SI－27	1985			角閃石安山岩	18.8	7.4	1.9	319.2	赤色顔料付着
59	S－121	双刃磨製石斧	SI－19	2087	C－6		流紋岩質安山岩	17.4	7.3	1.7	319.8	
59	S－122	石棒	SI－14	2146	B－7		頁岩	29.0	4.25	2.4	371.6	先端部赤変、下線部以下褐色化

図　　版

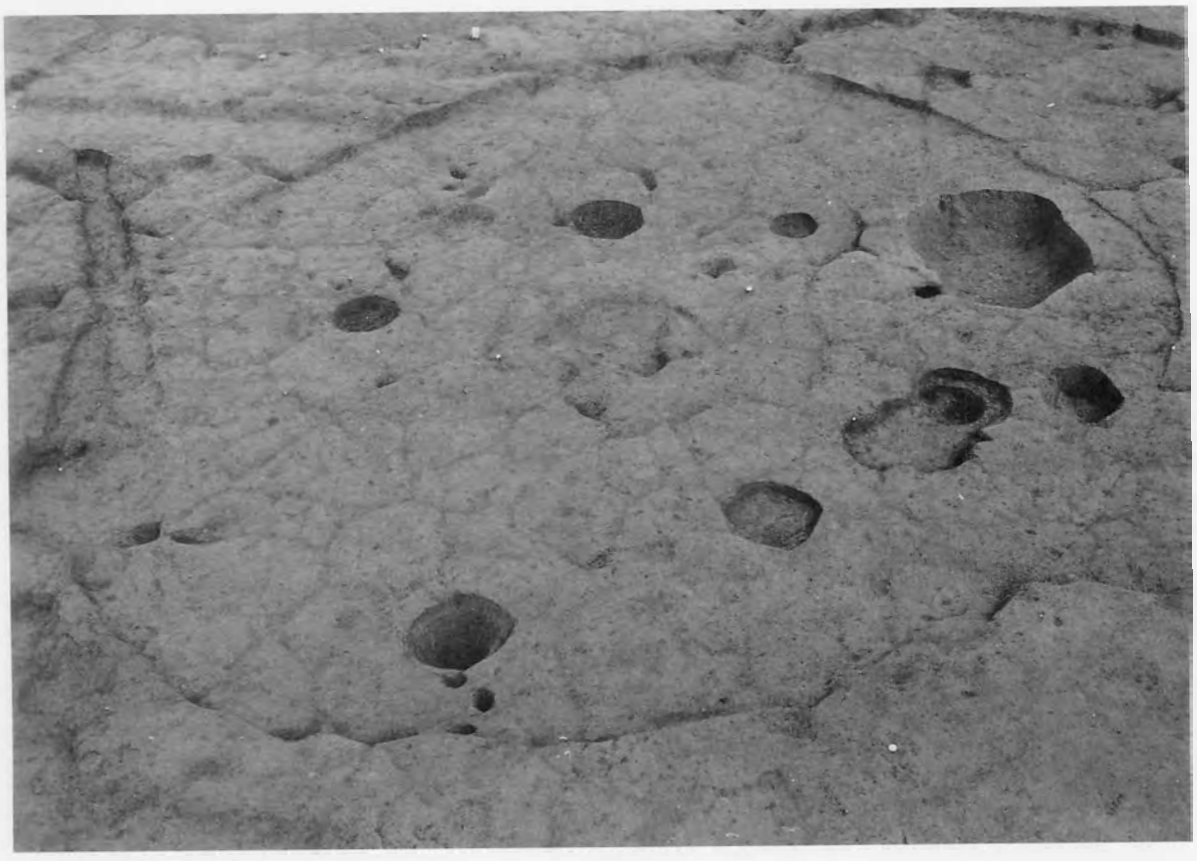
作業風景

調査風景

図版 2



SI－07　完掘状況（北東より）

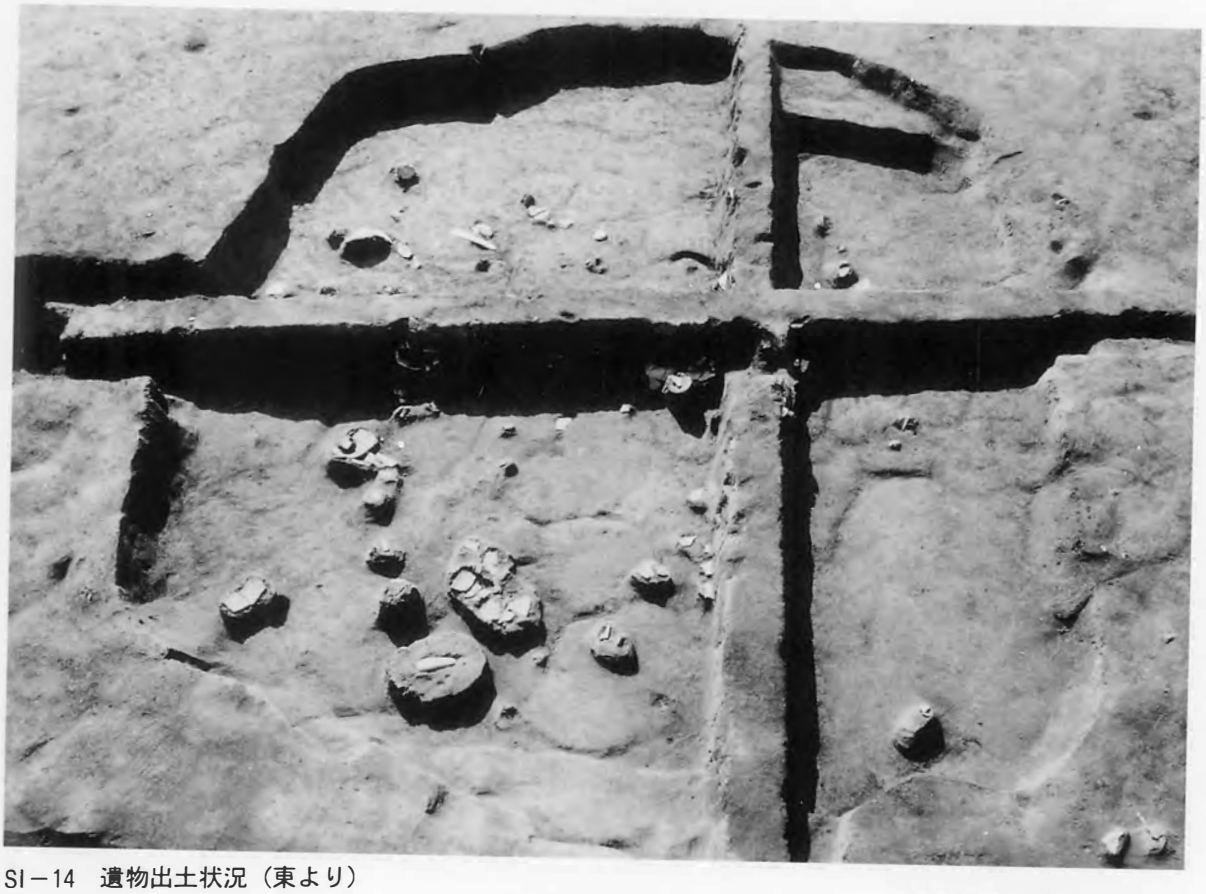


SI－08　完掘状況（南より）

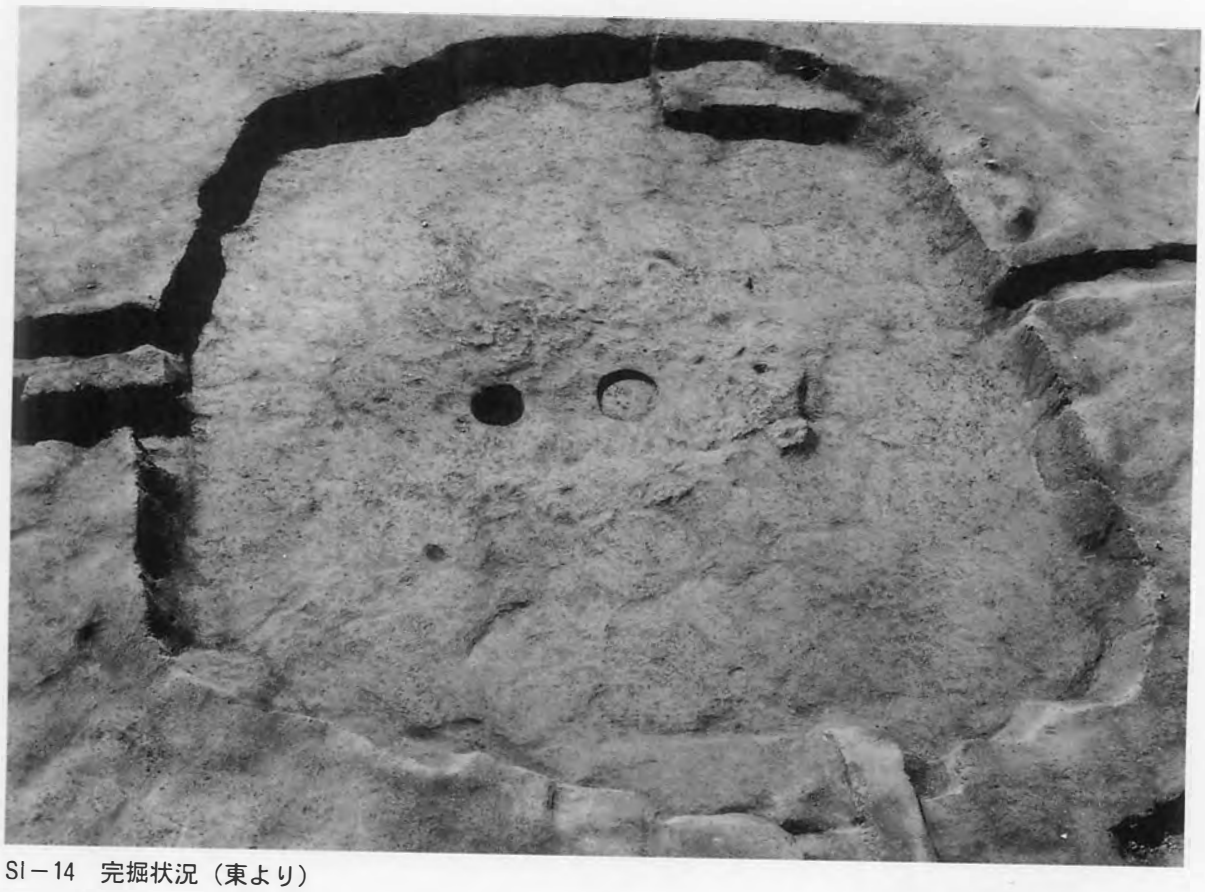
SI－10　完掘状況（北より）

SI－14　遺物出土状況（南より）

図版 4



SI－14　遺物出土状況（東より）



SI－14　完掘状況（東より）

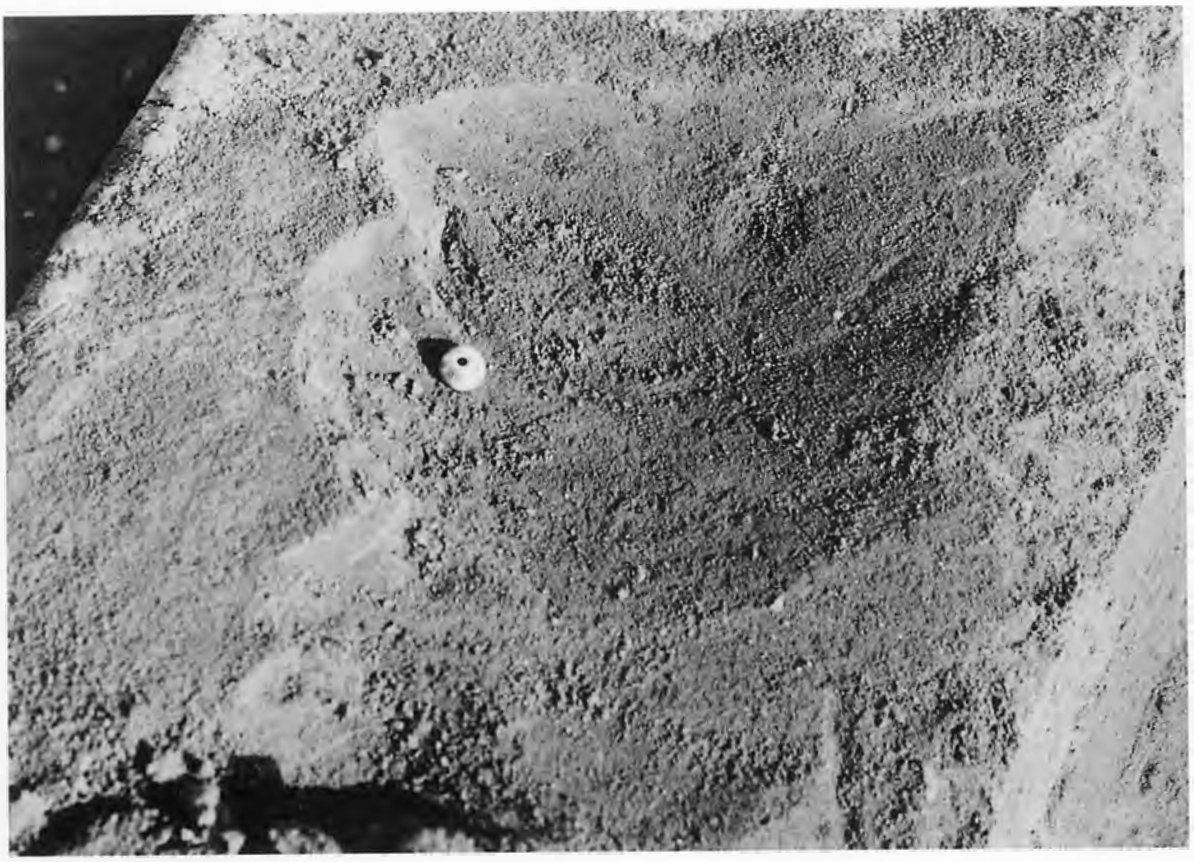
SI－17　完掘状況（東より）

SK－18・28　完掘状況（東より）

図版 6

SK－18　完掘状況（東より）

SI－19　完掘状況（南より）

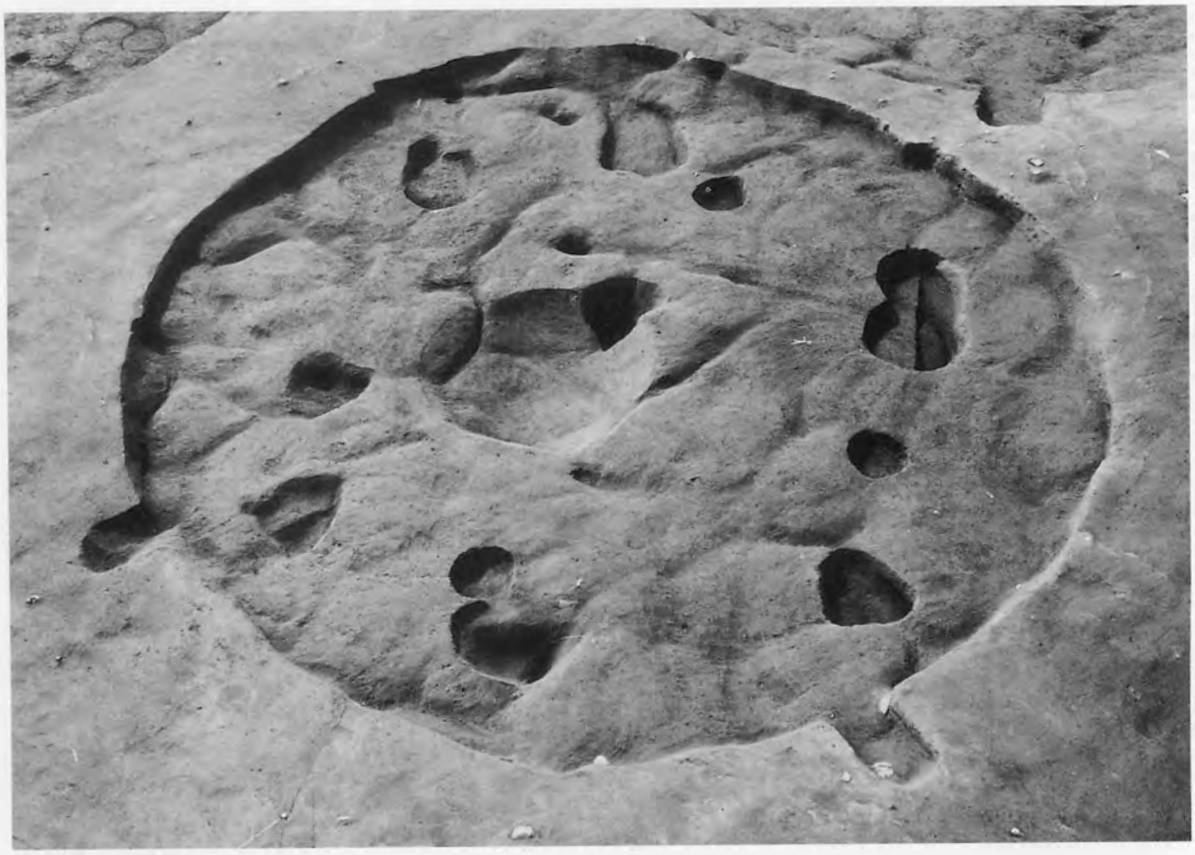


SI－19　丸玉出土状況（北西より）

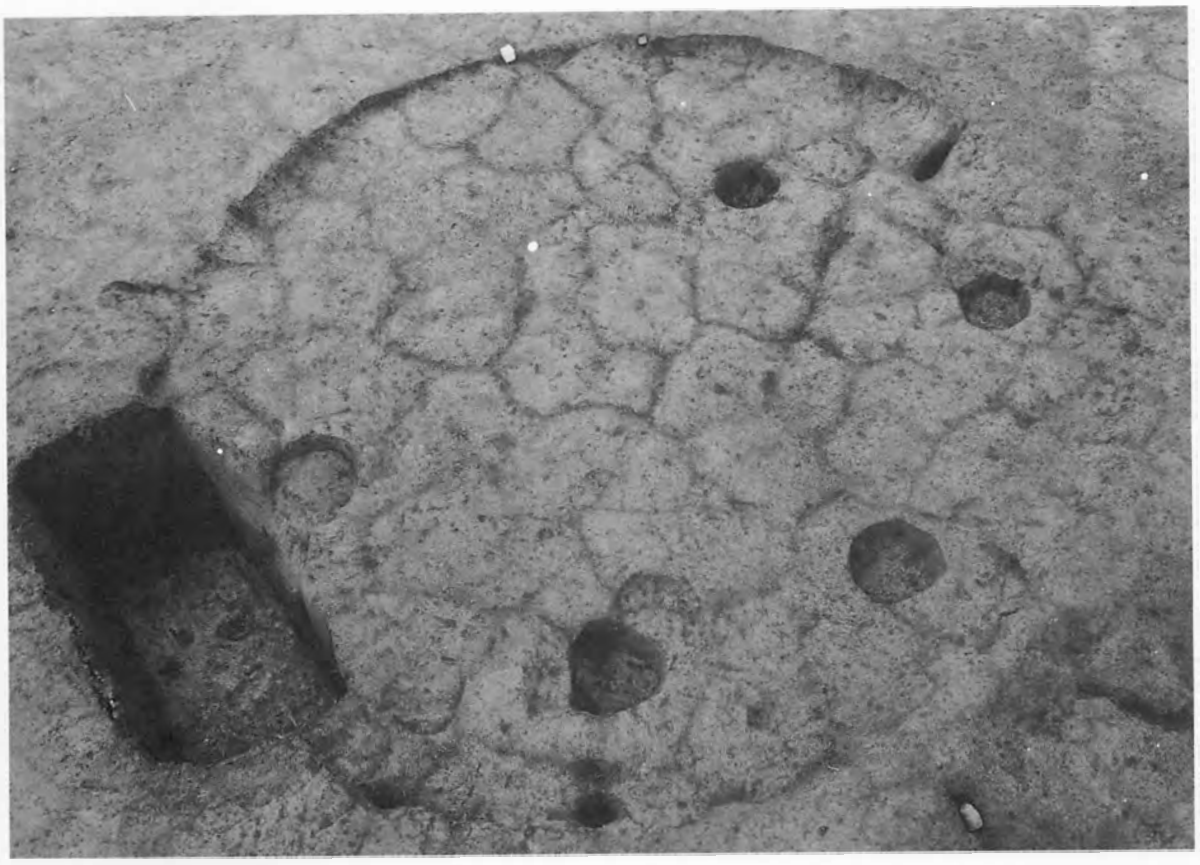
SI－21　完掘状況（北より）

図版 8

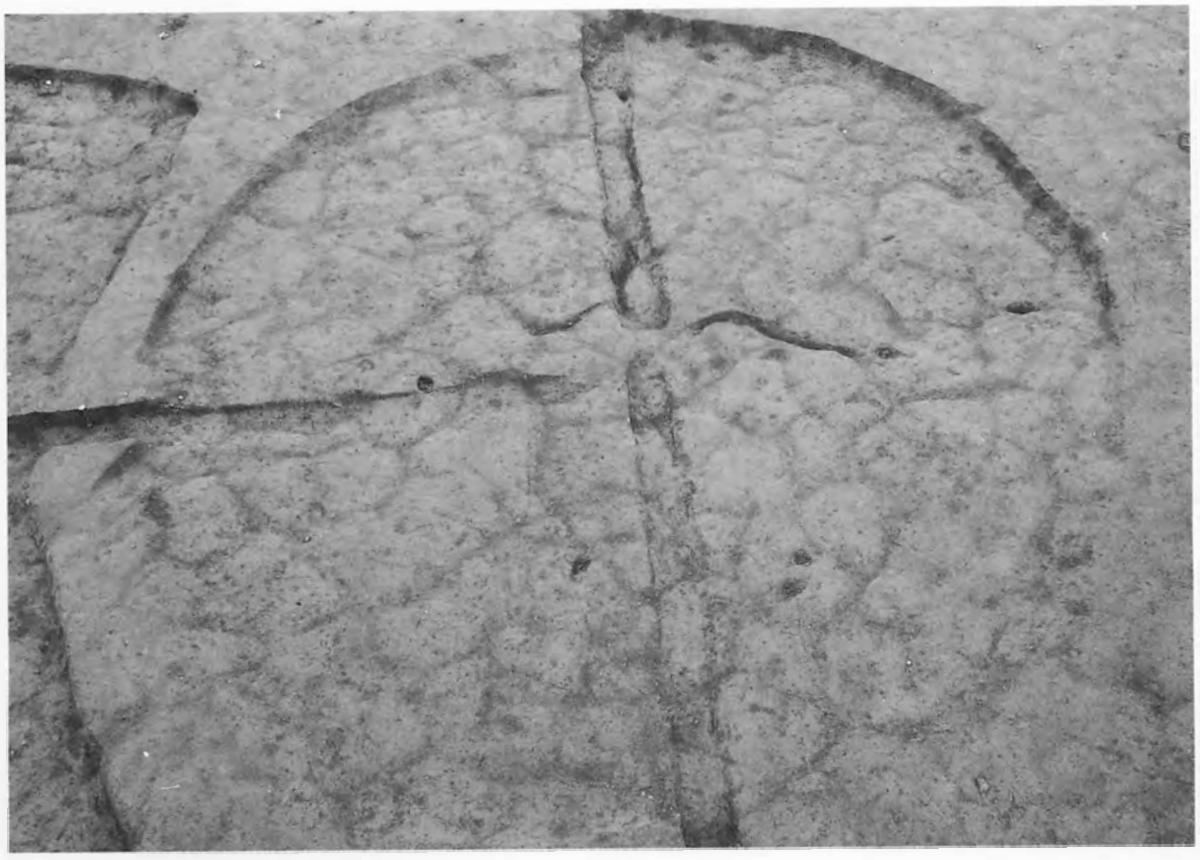
SI－26　完掘状況（南より）



SI－27　完掘状況（東より）



SI－29　完掘状況（北西より）

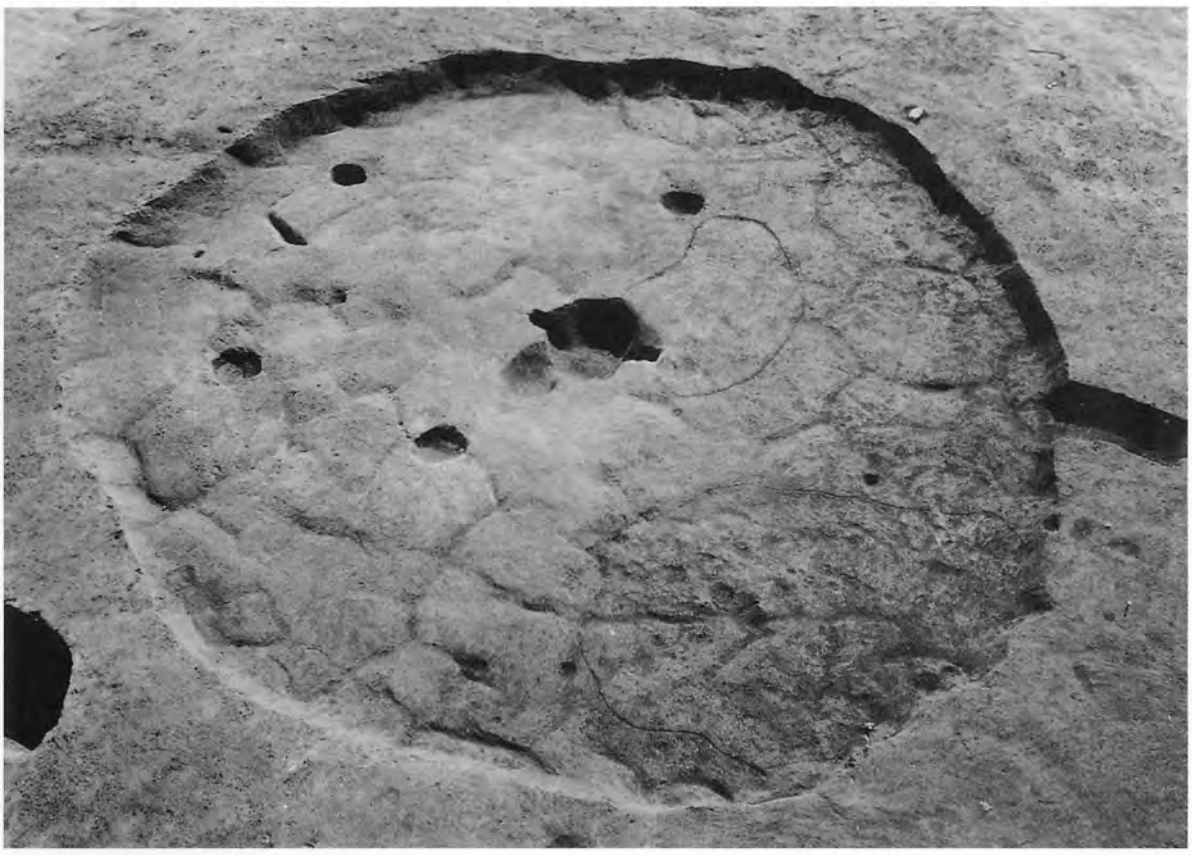


SK－30　完掘状況（南東より）

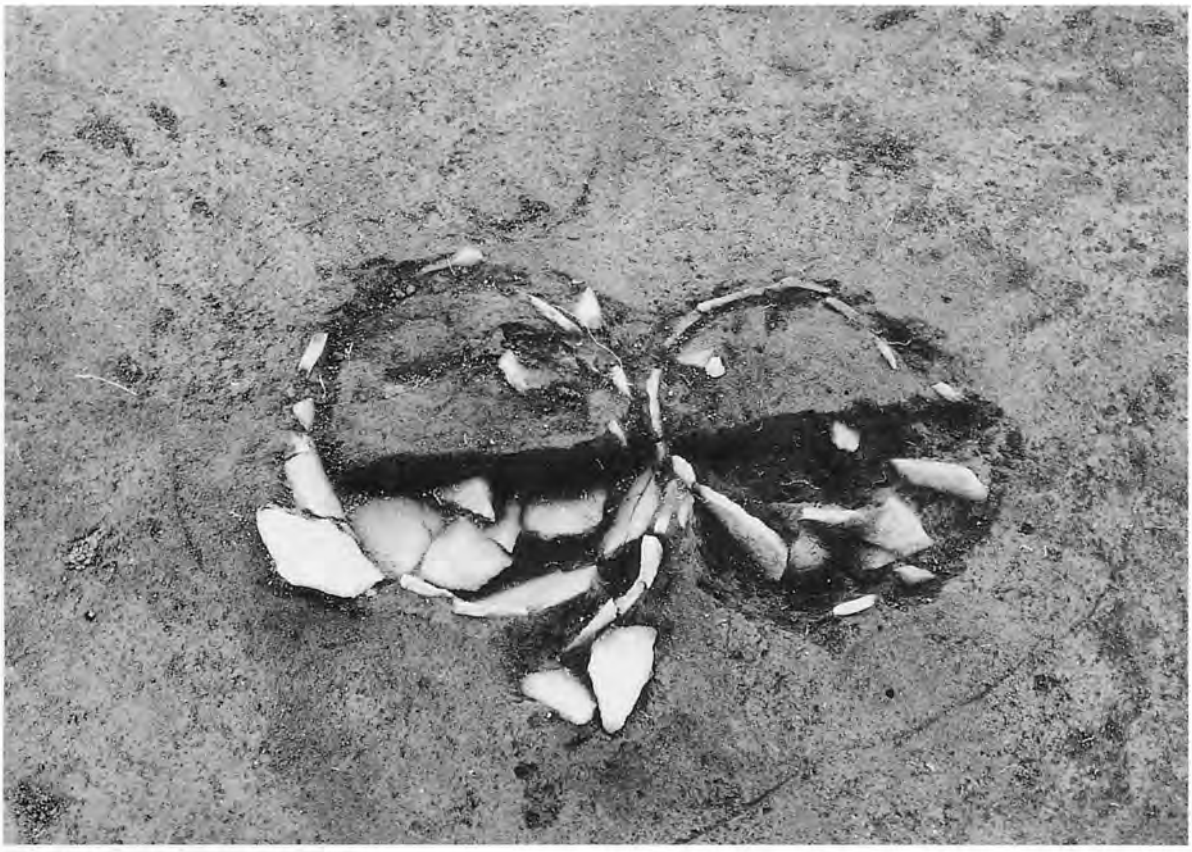
図版10

SI－31　完掘状況（南より）

SK－32　完掘状況（南より）



SI－39　完掘状況（西より）

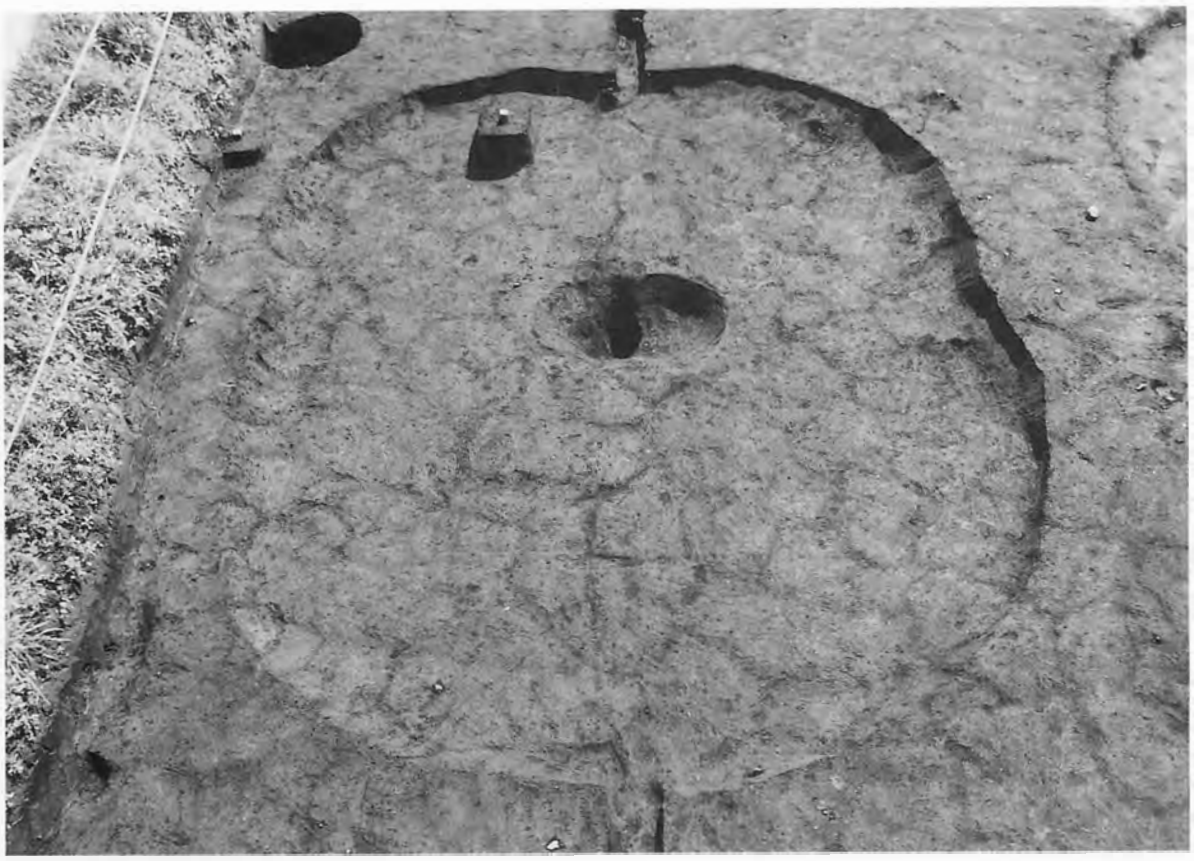


SI－39内　土器出土状況（東より）

図版12

SI－39内　小型深鉢形土器出土状況（東より）

SI－39内　焼土集中（東より）

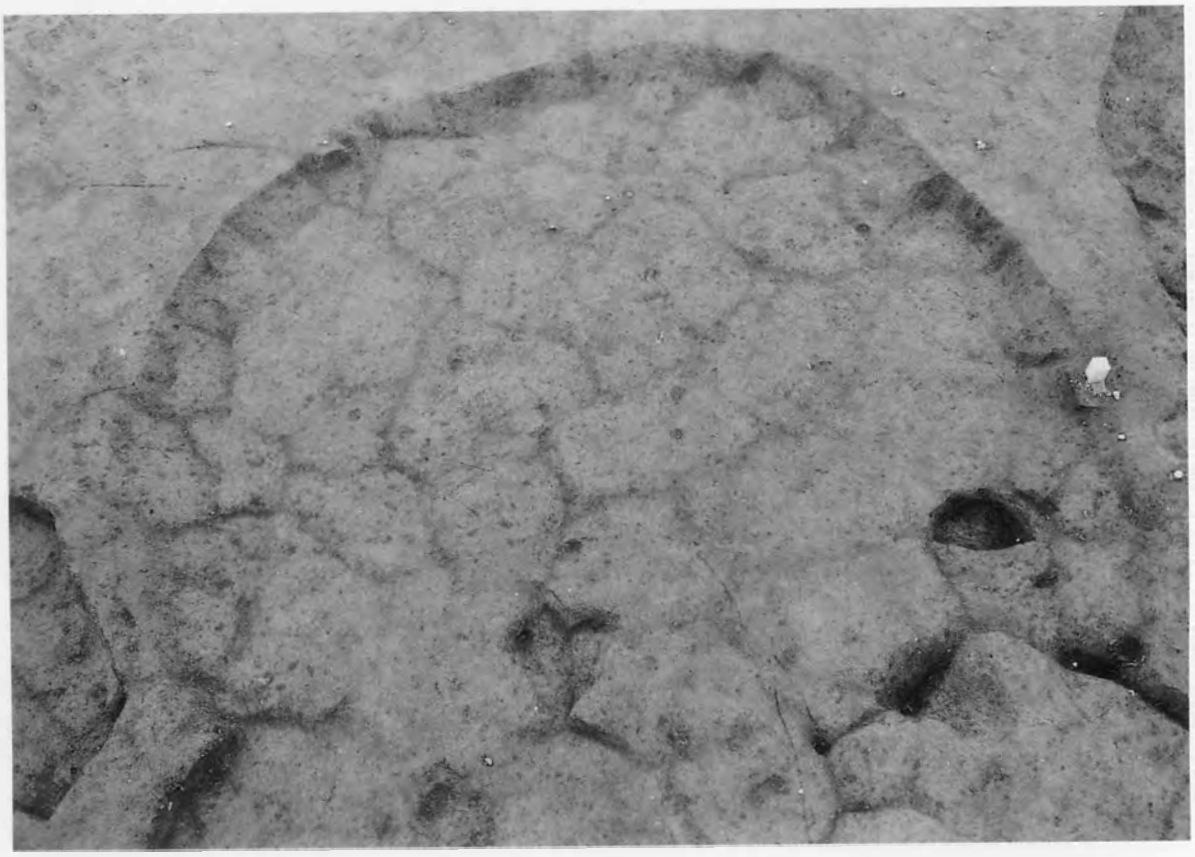


SI－40　完掘状況（西より）

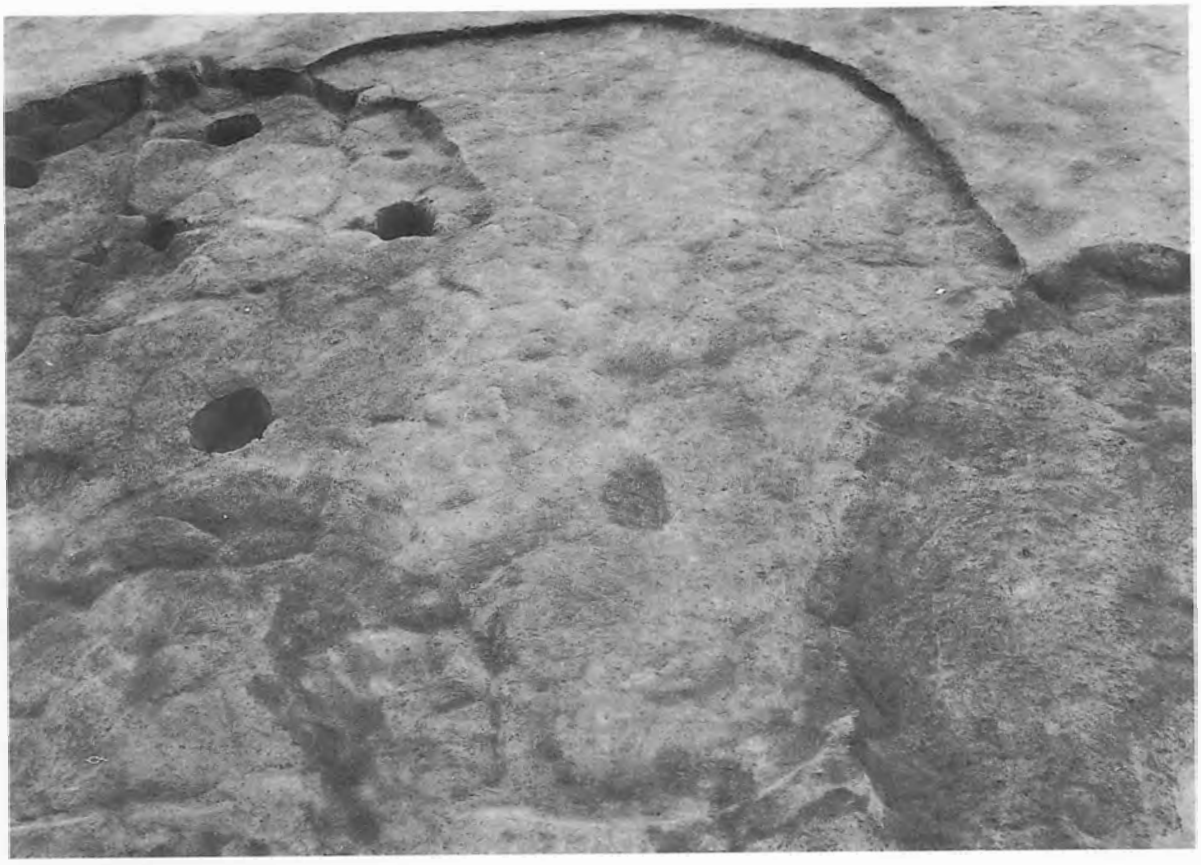
SI－41　完掘状況（北東より）

図版14

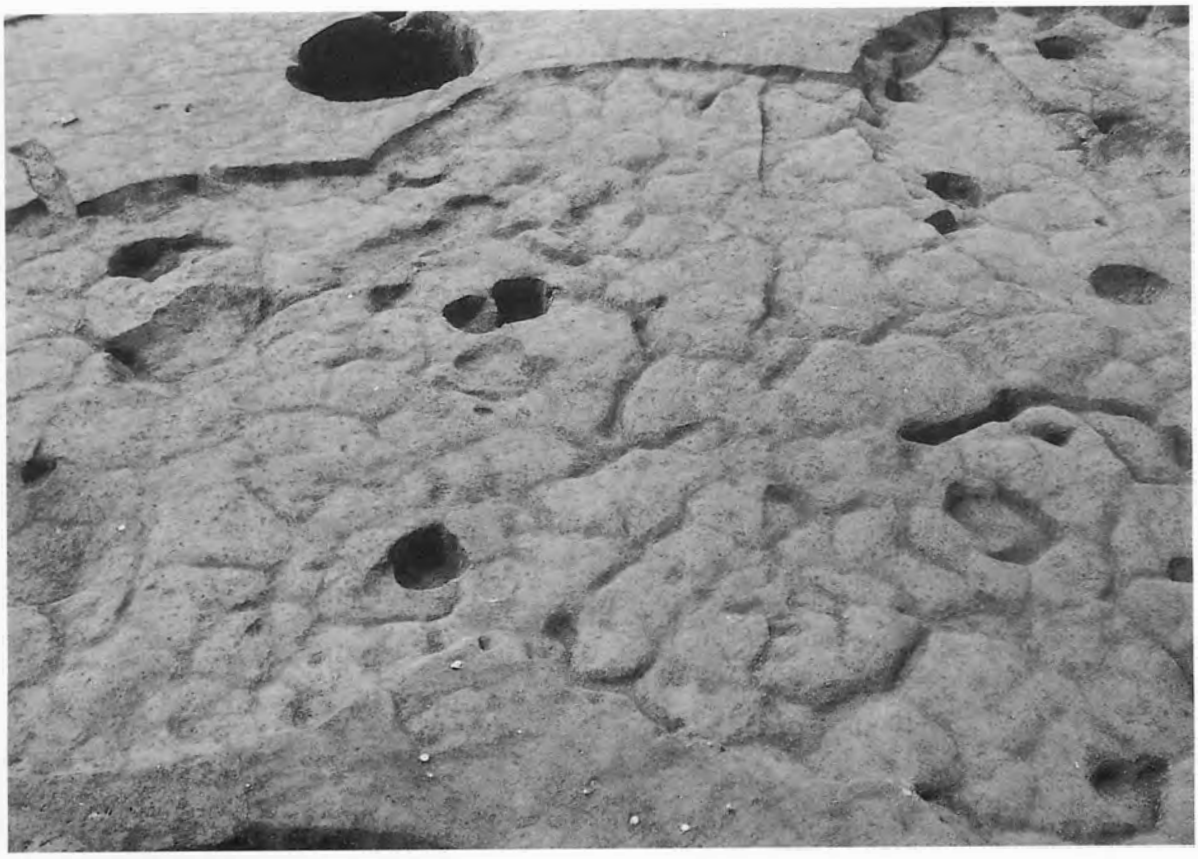
SK－33　完掘状況（東より）



SK－35　完掘状況（南西より）



SK－37　完掘状況（東より）



SK－38　完掘状況（東より）

図版16

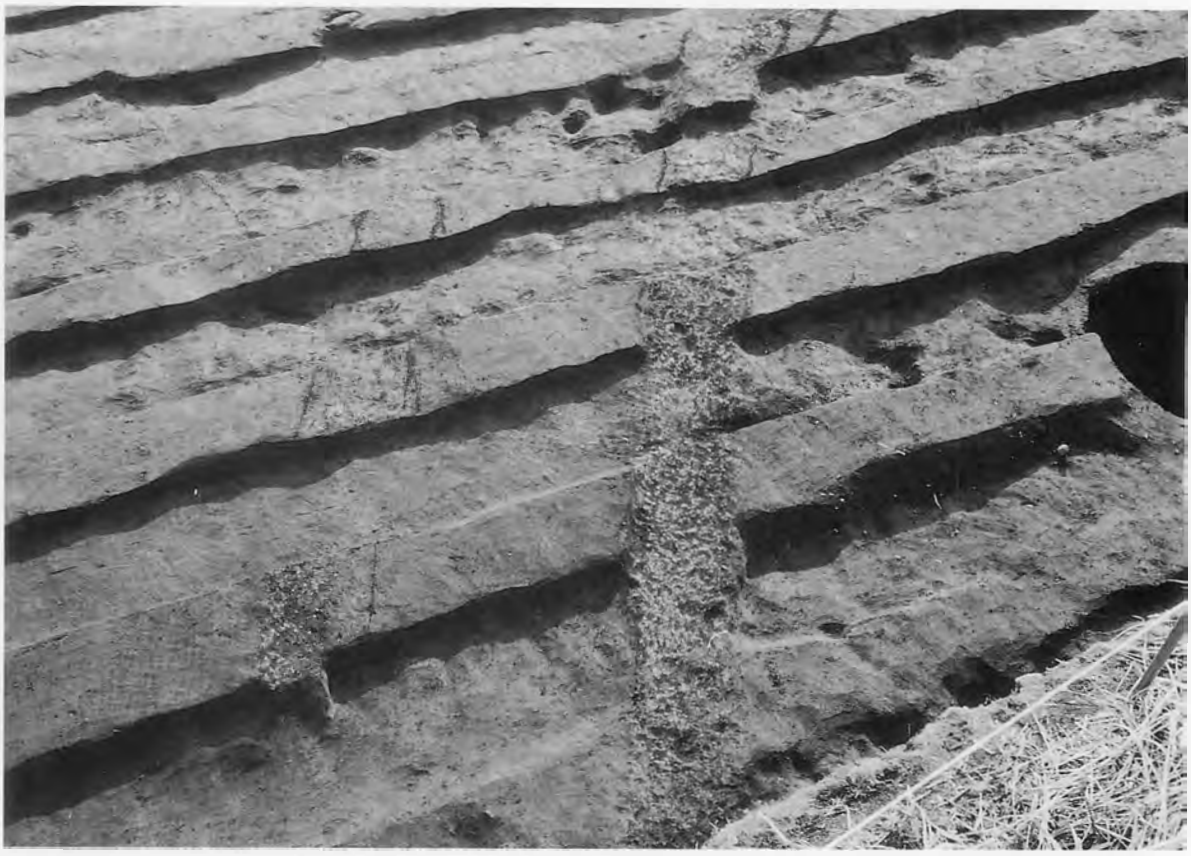
SX－42　完掘状況（西より）

SX－43　完掘状況（東より）

SK－45　完掘状況（南より）

SK－46　完掘状況（西より）

図版18



SR－02・03　完掘状況（北より）

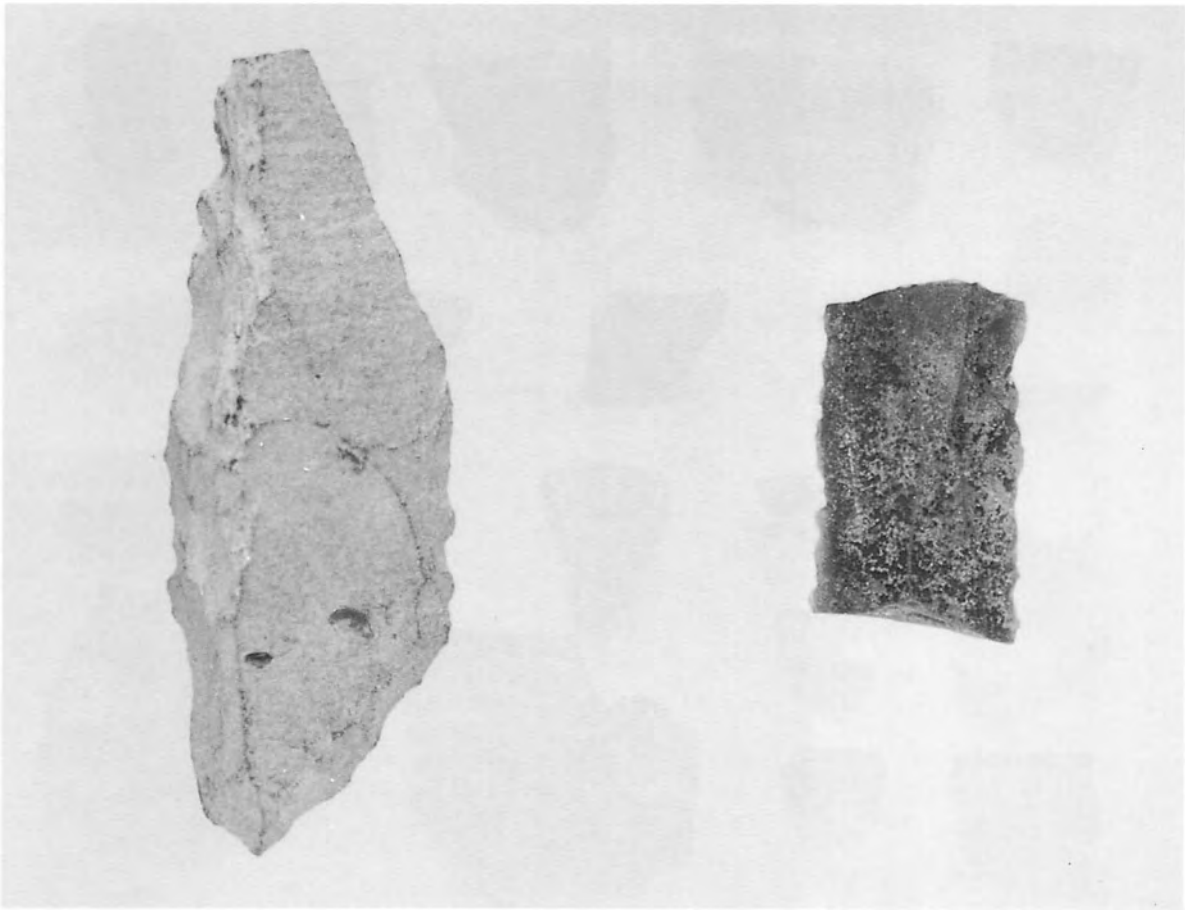
Ⅰ区　完掘状況（西より）

Ⅰ区　完掘状況（東より）

Ⅱ区　完掘状況（北より）

Ⅱ区　SK－201　検出状況（南より）

Ⅱ区　SK－201　完掘状況（南より）



ナイフ形石器・細石器

縄文土器

図版22

縄文土器

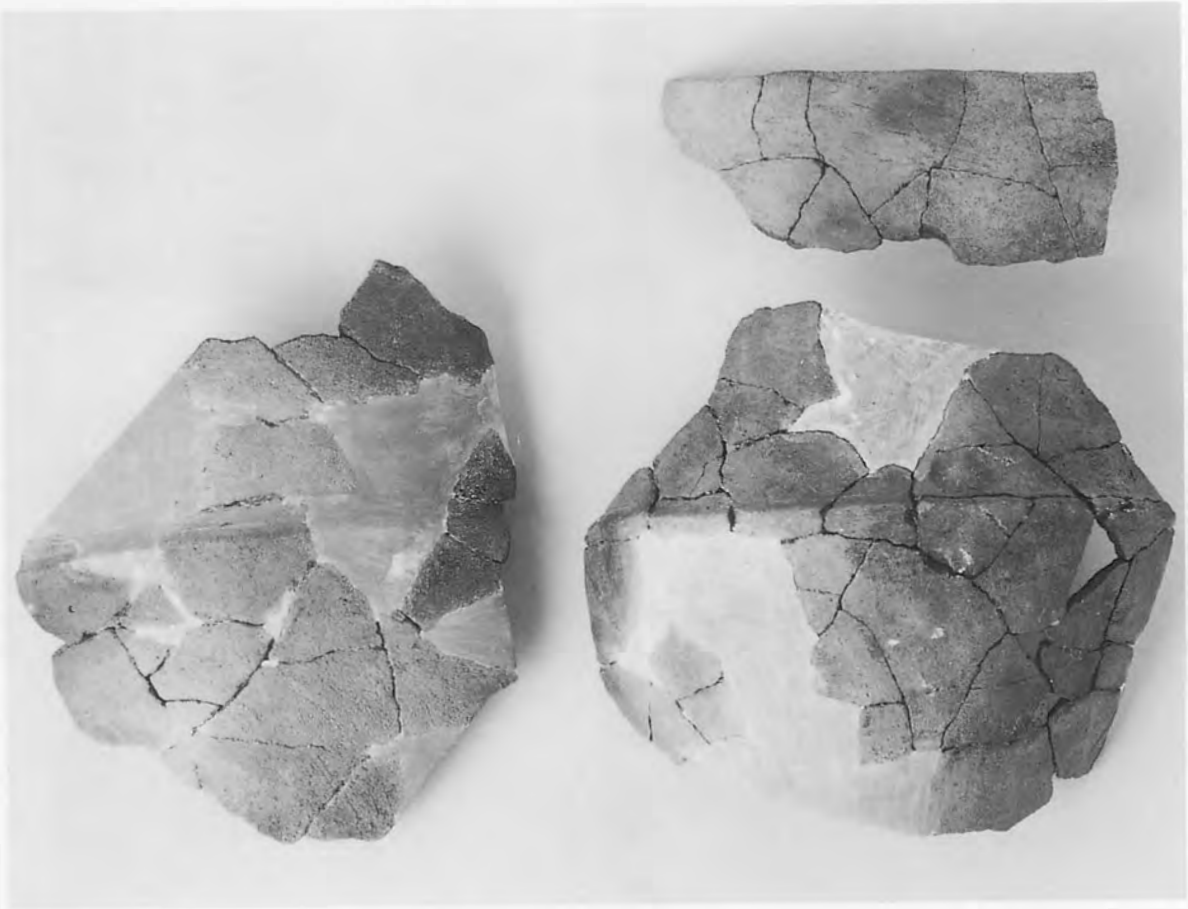
縄文土器

縄文土器

縄文土器

図版24

縄文土器

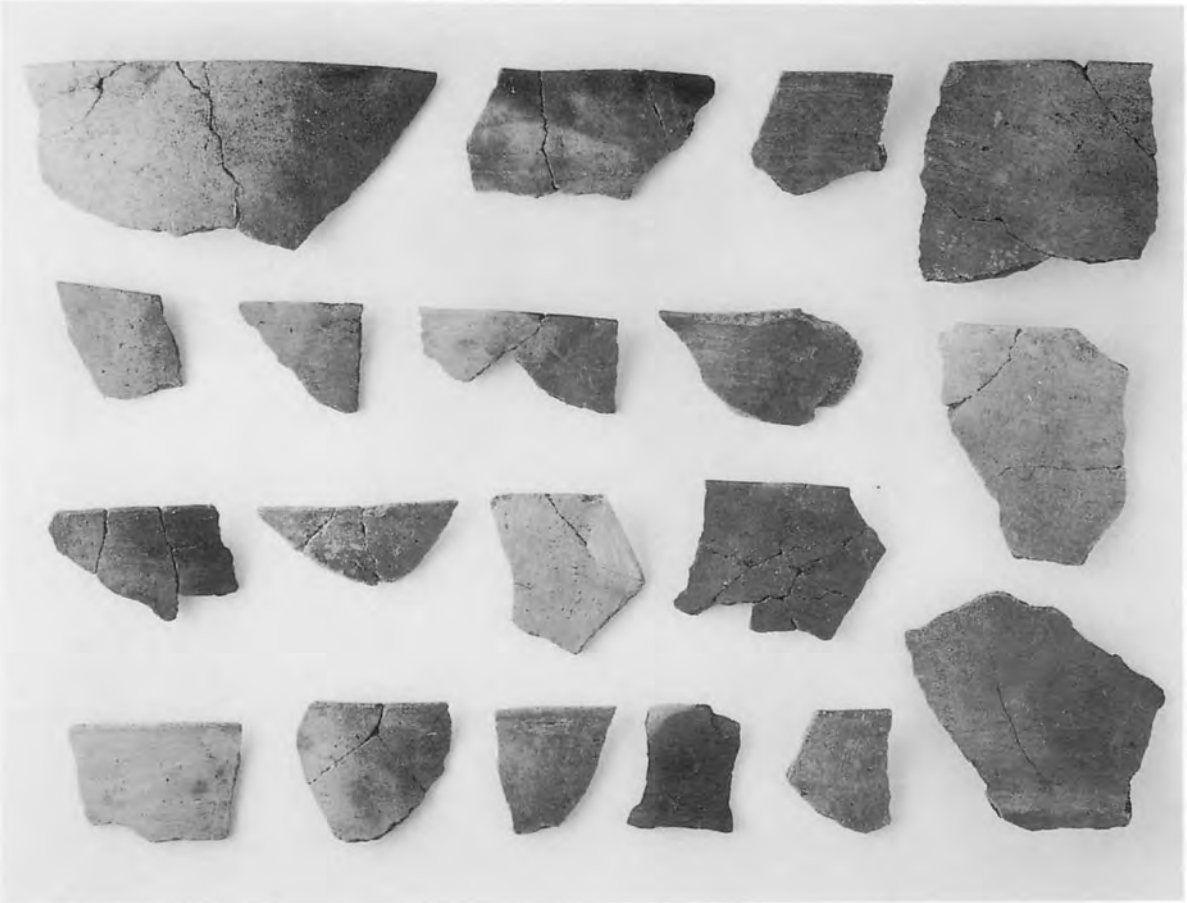


縄文土器

縄文土器

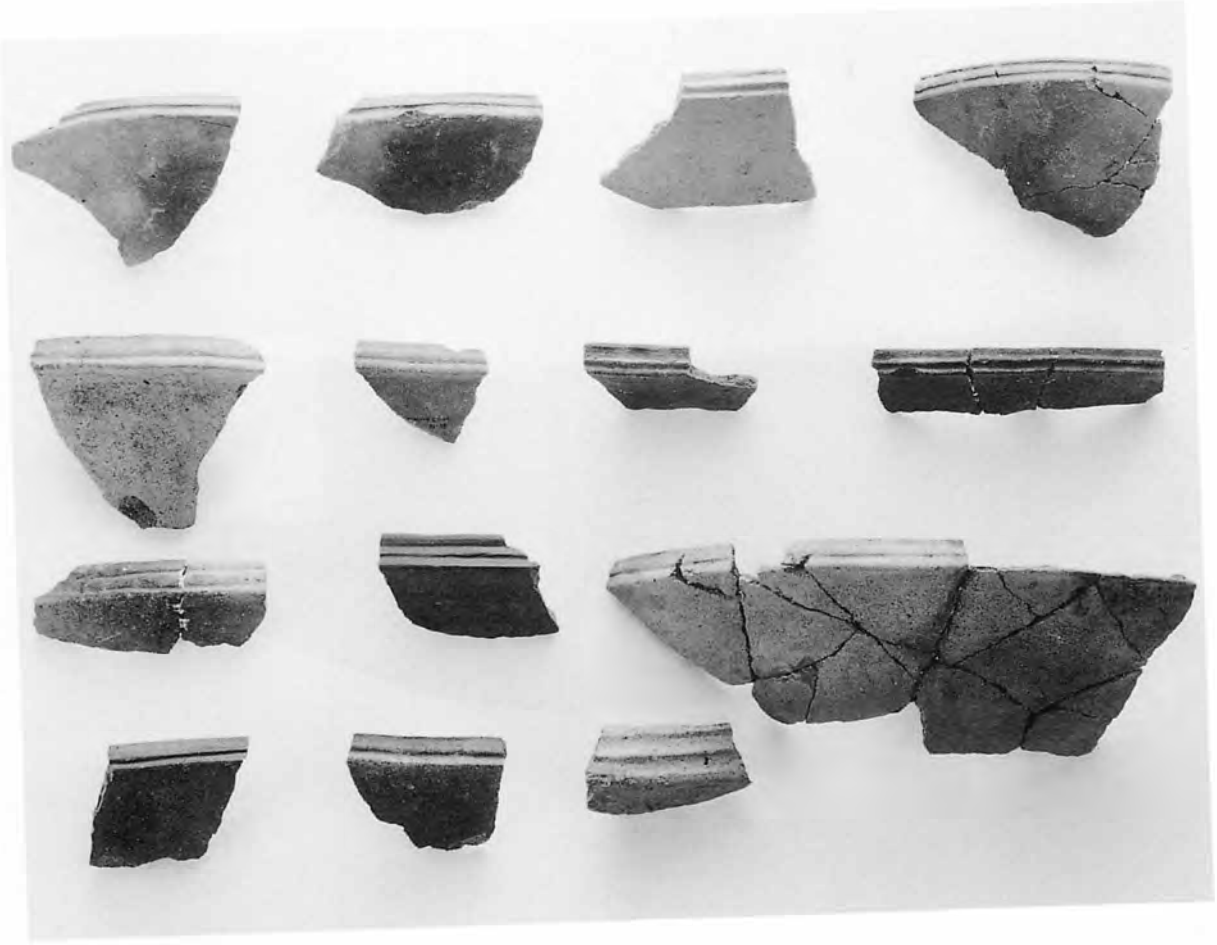
縄文土器

図版26

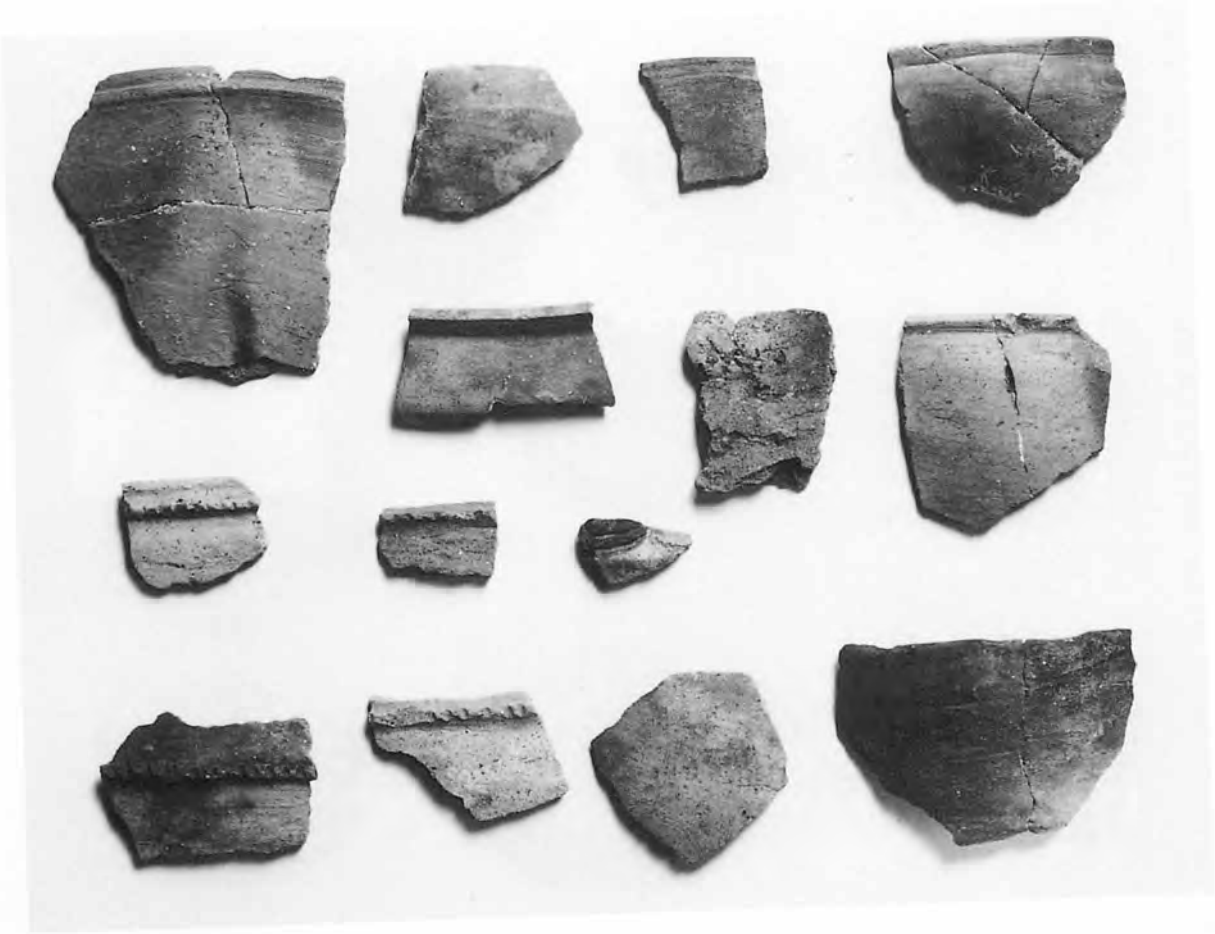


縄文土器

縄文土器



縄文土器



縄文土器

図版28

縄文土器

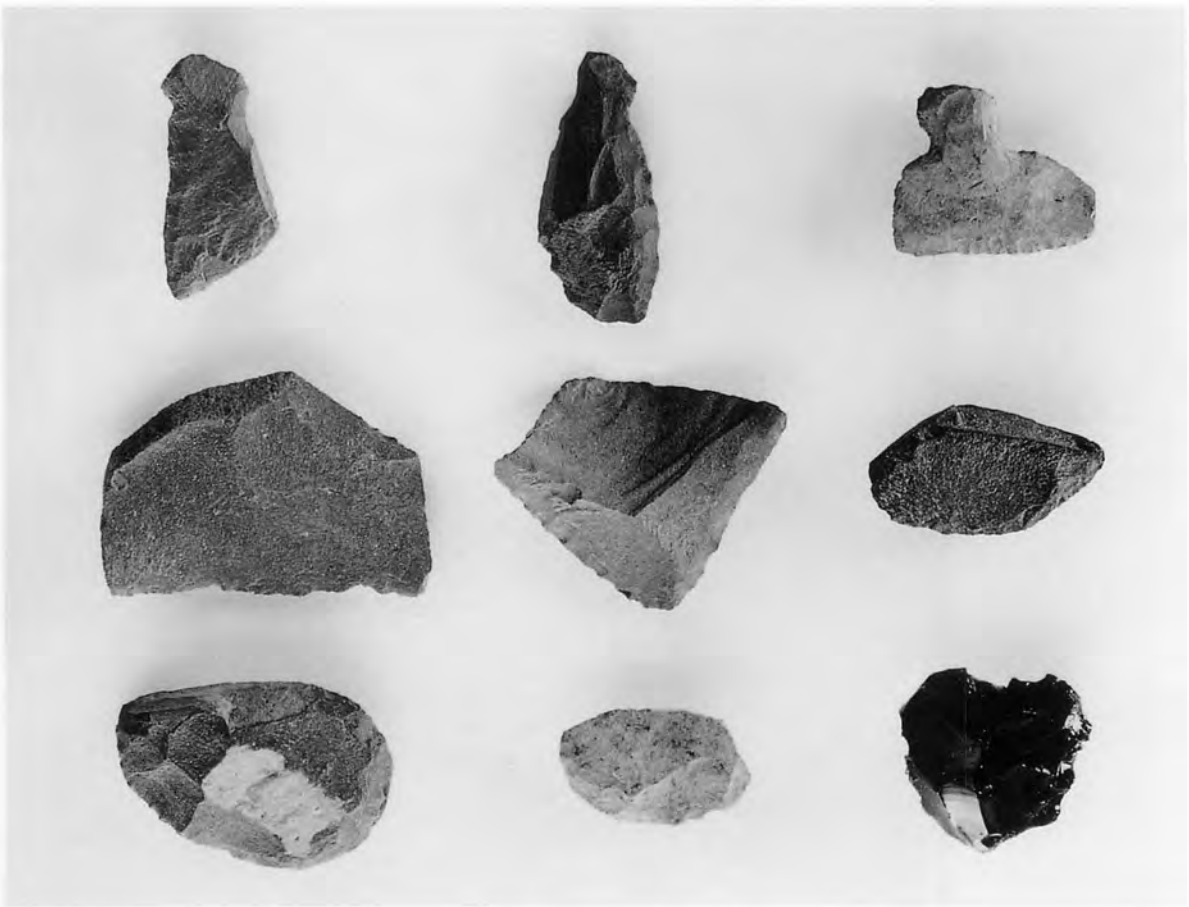
縄文土器

縄文土器

縄文土器

図版30

石　鏃



石匙・調整痕石器・削器・石核

十字形石器

磨製石斧

図版32

磨製石斧・打製石斧

打製石斧

打製石斧・小型打製石斧

小型打製石斧・円盤状石器

図版34

円盤状石器

磨石・凹石・礫器

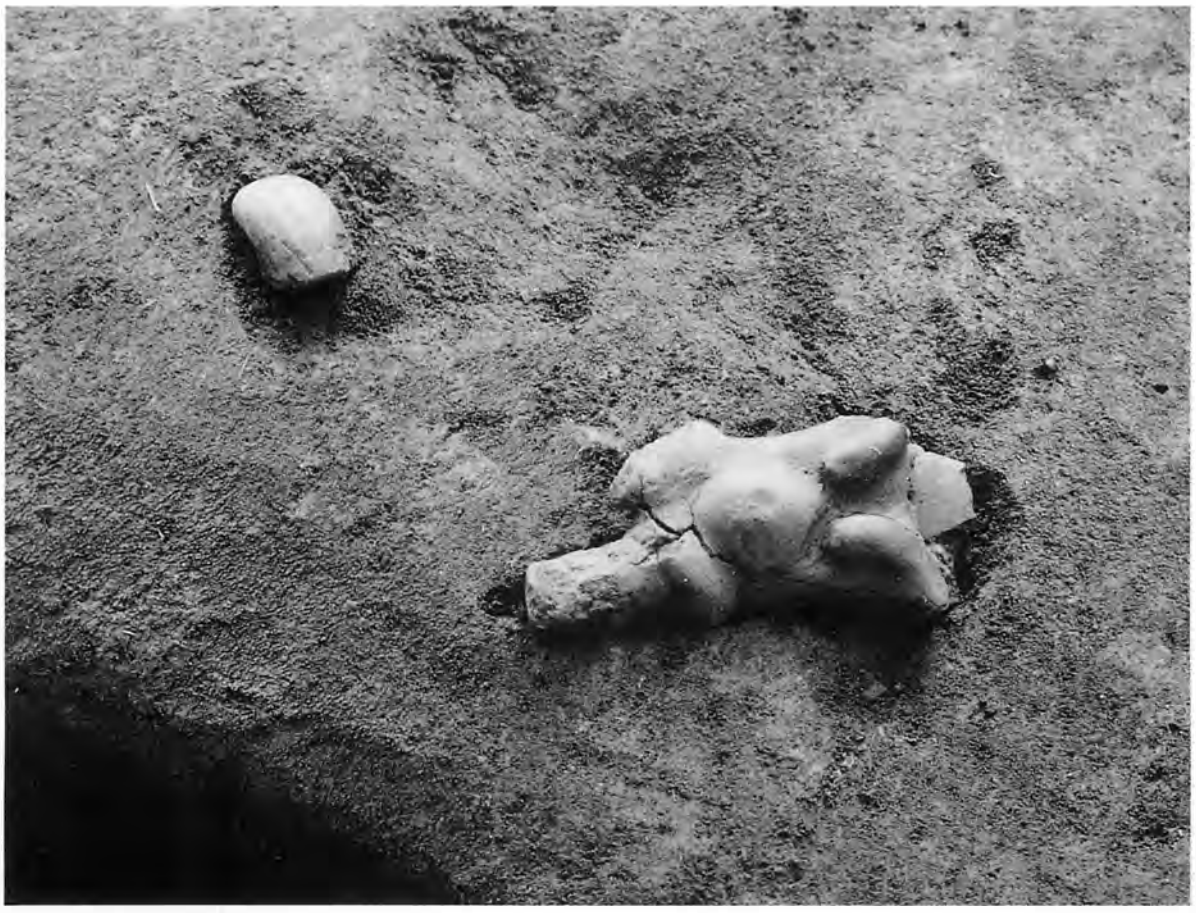
敲石・磨石

磨石

石皿・砥石

土　偶

2号土偶出土状況（北東より）

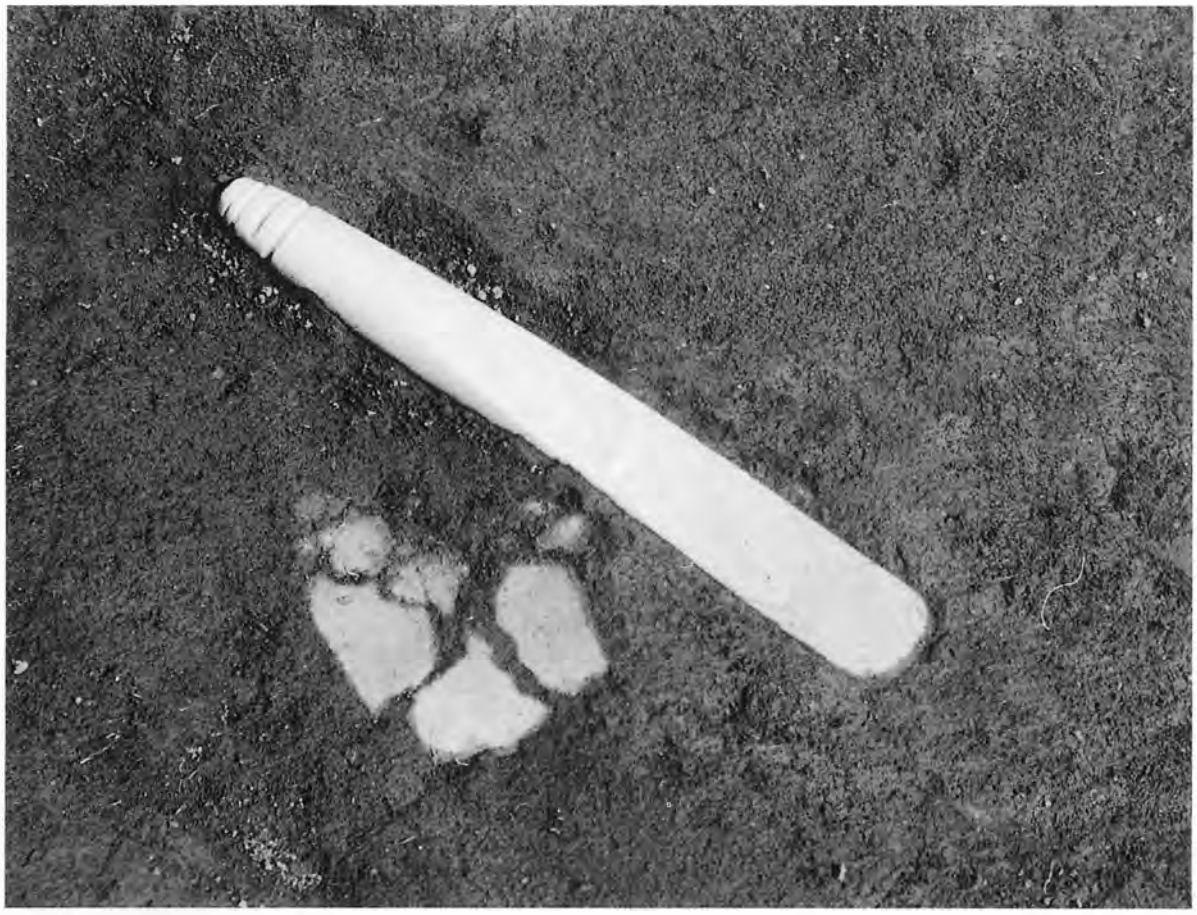


1号土偶出土状況（北より）

図版38

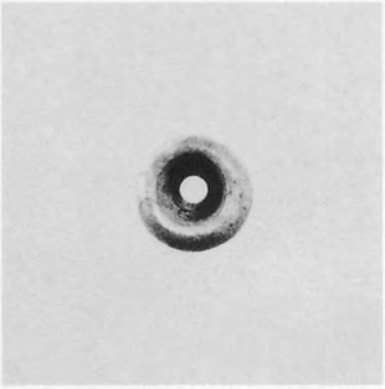
注口土器出土状況（東より）

注口土器



石棒出土状況（西より）

石棒・双刃磨製石斧・双刃局部磨製石斧



丸玉（上面）

丸玉（下面）

小型深鉢形土器

粘土塊

弥生時代以降の土器

報 告 書 抄 録

ふりがな	つるはたいせき
書名	鶴羽田遺跡
副書名	（仮称）梶尾ニュータウン造成工事に伴う埋蔵文化財調査
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ号	第168集
編集者名	坂田和弘
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862－0011　熊本市水前寺６丁目18番１号
発行年月日	1998年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号			
鶴羽田遺跡	熊本市梶尾町 字鶴の原	43201		199611－ 199704	2,000㎡	宅地造成

主な時代	種別	主な遺構	主な遺物	特記事項
縄文時代 後晩期	集落	竪穴住居跡13基 土坑10基 焼土坑３基	縄文土器 土偶 石棒 玉	縄文時代早期から遺物出土 中心は縄文時代後晩期の集落跡 土偶、石棒、注口土器などが出土 炭化材の年代測定実施

熊本県文化財調査報告　第168集

鶴羽田遺跡

平成10年3月31日

編集
発行　熊本県教育委員会
〒862－0011　熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷　白木印刷株式会社
〒862－1976　熊本市九品寺5丁目9－35

09 教委　教文
② 005

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 168 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：鶴羽田遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/